京都府遺跡調査概報

第 9 冊

1. 青　野　西　遺　跡
2. 長　岡　宮　跡　第134次
3. 長岡京跡右京第83・105次
4. 長岡京跡右京第127次
5. 長岡京跡左京第103次

1984

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく３年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和58年度は46件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは，調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は，遺跡の重要性を理解していただくために，また，たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。昭和58年度は，第９冊，第10冊，第11冊の３冊にまとめることにしましたが，この第９冊には綾部市青野西遺跡ほか４件を収録しました。これらのうち，長岡京跡右京第83次・第105次の調査は，昭和56，57の両年度に実施したものであります。これらの調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに，炎暑の下，極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は，

　　1．青野西遺跡　　2．長岡宮跡第134次　　3．長岡京跡右京第83・105次

　　4．長岡京跡右京第127次　　5．長岡京跡左京第103次

を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 青野西遺跡	綾部市青野町	昭58. 4. 25 〜 昭58. 9. 2	建設省福知山工事事務所	小山　雅人
2. 長岡宮跡第134次	向日市上植野町南開	昭58. 6. 6 〜 昭58. 6. 24	京都府警察本部	長谷川　達
3. 長岡京跡右京第83・105次	長岡京市今里蓮ケ糸・西ノ口・藤ノ木・舞塚	昭56. 10. 26 〜 昭57. 3. 31 昭57. 7. 11 〜 昭58. 1. 26	長岡京市	山口　博
4. 長岡京跡右京第127次	長岡京市下海印寺西明寺 乙訓郡大山崎町円明寺鳥居前	昭58. 3. 4 〜 昭58. 3. 31 昭58. 4. 4 〜 昭58. 8. 22	京都府教育委員会	山下　正
5. 長岡京跡左京第103次	長岡京市神足柳田・大田	昭58. 8. 3 〜 昭58. 8. 20	建設省京都国道工事事務所	長谷川　達

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1.　青野西遺跡発掘調査概要…… 1

2.　長岡宮跡第 134 次発掘調査概要……19

3.　長岡京跡右京第 83・105 次発掘調査概要……23

4.　長岡京跡右京第 127 次発掘調査概要…… 127

5.　長岡京跡左京第 103 次発掘調査概要…… 137

挿図・付表目次

青野西遺跡

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　遺構平面実測図…… 3
第 3 図　7号住居跡平面実測図…… 6
第 4 図　土器実測図(1)……10
第 5 図　土器実測図(2)……11
第 6 図　土器実測図(3)……12
第 7 図　土器実測図(4)……13
第 8 図　土器実測図(5)……14
付 表 1　遺構編年試案……15

長岡宮跡第134次

第 9 図　調査地位置図……19
第 10 図　調査地及び周辺の調査……20
第 11 図　調査地土層断面図……21

長岡京跡右京第83・105次

第 12 図　調査地位置図……24
第 13 図　蓮ケ糸地区調査図……26
第 14 図　Bトレンチ（83次）検出遺構実測図……28
第 15 図　SK 8320 実測図 ……29
第 16 図　SD 8315 他出土遺物実測図 ……30
第 17 図　西ノ口地区調査図(1)……34
第 18 図　西ノ口地区調査図(2)……35
第 19 図　Dトレンチ（83次）検出遺構実測図……36
第 20 図　Eトレンチ（83次）検出遺構実測図……38
第 21 図　SB 8330・8345 実測図 ……39
第 22 図　SB 8339・8348 実測図 ……40
第 23 図　SE 8332 実測図 ……41
第 24 図　SB 8357・8358 実測図 ……42

第 25 図　Fトレンチ（83次）検出遺構実測図……43
第 26 図　SB 8351・8353 実測図 ……45
第 27 図　Gトレンチ（83次）検出遺構実測図……48
第 28 図　Hトレンチ（83次）検出遺構実測図……49
第 29 図　SD 8375 土層図 ……50
第 30 図　A・Bトレンチ（105次）検出遺構実測図 ……51
第 31 図　SE 10521 実測図……53
第 32 図　Dトレンチ（105次）検出遺構実測図 ……54
第 33 図　SX 10529 実測図……55
第 34 図　SK 8379・8380 出土土器実測図 ……56
第 35 図　SE 8332 出土遺物実測図 ……57
第 36 図　SK 8338 出土土器実測図 ……59
第 37 図　SK 8354 出土遺物実測図 ……60
第 38 図　SK 8340 他出土土器実測図 ……61
第 39 図　D・E・Fトレンチ（83次）包含層出土土器実測図……62
第 40 図　SD 8375 他出土遺物実測図 ……63
第 41 図　SE 10521 出土土器実測図……65
第 42 図　SE 10521 出土木器実測図……66
第 43 図　SK 10511 他出土土器実測図……67
第 44 図　SX 10529 他出土土器実測図(1)……68
第 45 図　SX 10529 出土土器実測図(2)……69
付 表 2　SX 10529 出土土器器種分類表……69
第 46 図　SK 10535 他出土土器実測図……71
第 47 図　西ノ口地区出土石器実測図……72
付 表 3　西ノ口地区検出遺構編年表……73
第 48 図　藤ノ木地区調査図……75
第 49 図　Eトレンチ（105次）検出遺構実測図 ……76
第 50 図　SB 10547 実測図……78
第 51 図　SB 10548 実測図……80
第 52 図　Iトレンチ（83次）検出遺構実測図……81
第 53 図　Jトレンチ（83次）検出遺構実測図……82

第 54 図　SB 8381・8382 実測図 ……83
第 55 図　Kトレンチ（83次）検出遺構実測図……84
第 56 図　SD 8395 土層図 ……85
第 57 図　SD 8395 出土土器実測図(1) ……86
第 58 図　SD 8395 出土土器実測図(2) ……87
第 59 図　SK 8399・83107 出土埴輪実測図……89
第 60 図　SB 83107 他出土遺物実測図……90
付 表 4　SD 10550 出土土器器種分類表……91
第 61 図　SD 10550 出土土器実測図(1)……92
第 62 図　SD 10550 出土土器実測図(2)……93
第 63 図　SD 105115 他出土土器実測図 ……94
第 64 図　藤ノ木地区出土石器実測図……94
第 65 図　Eトレンチ（105次）出土軒瓦実測図 ……95
第 66 図　舞塚地区調査図……97
第 67 図　舞塚地区検出遺構図……98
第 68 図　SD 10565（舞塚古墳周濠）等実測図 ……99
第 69 図　SD 10565 土層図……101
第 70 図　SD 10568 土層図……102
第 71 図　SD 10570（舞塚２号墳周濠）実測図 ……102
第 72 図　SD 10570 土器出土状況図……103
第 73 図　Iトレンチ（105次）検出遺構実測図 ……104
第 74 図　SD 10577 出土弥生土器実測図……105
第 75 図　SD 10565 出土埴輪実測図(1)……106
第 76 図　SD 10565 出土埴輪実測図(2)……107
第 77 図　SK 10560・SD 10570 出土土器実測図 ……108
第 78 図　SD 10571・SK 10572 出土土器実測図 ……109
第 79 図　舞塚地区出土石器実測図……110
付 表 5　花粉分析表……113
付 表 6　瓦器椀比較表……121
付 表 7　掘立柱建物跡・柵列一覧表……124

長岡京跡右京第 127 次

第 80 図　調査地位置図…… 127
第 81 図　トレンチ配置図…… 129
第 82 図　A-7トレンチ平面図…… 131
第 83 図　A-21トレンチ平面図 …… 132
第 84 図　集石遺構（A-21トレンチ）実測図 …… 133
第 85 図　出土遺物実測図…… 134
付 表 8　各トレンチの概要…… 134

長岡京跡左京第 103 次

第 86 図　調査地位置図…… 137
第 87 図　トレンチ配置図…… 138
第 88 図　第 1 トレンチ検出溝平面図…… 138
第 89 図　土層断面概略図…… 138
第 90 図　出土遺物実測図…… 140

図 版 目 次

青野西遺跡

図版第１　青野西遺跡全景（航空写真）

図版第２　(1)１号住居跡（北西から）　(2)３号住居跡（南東から）

図版第３　(1)４号住居跡（南東から）　(2)13・14・15号住居跡（北西から）

図版第４　(1)５号住居跡（南から）　(2)５号住居跡　特殊ピット（南から）

図版第５　(1)６号住居跡（南から）　(2)６号住居跡　北東柱穴付近（東から）

図版第６　(1)７号住居跡（北西から）　(2)７号住居跡　特殊ピット（南東から）

図版第７　(1)９号住居跡（南西から）　(2)10・11号住居跡（西から）

図版第８　(1)12号住居跡（北西から）　(2)溝３（SD 8302）（北から）

図版第９　出土土器(1)

図版第10　出土土器(2)

長岡宮跡第134次

図版第11　(1)調査地および周辺（南から）　(2)調査地全景（北から）

図版第12　(1)西壁土層断面（北側部分）　(2)西壁土層断面（南側部分）

長岡京跡右京第83・105次

図版第13　(1)西ノ口地区調査地　(2)藤ノ木地区調査地

図版第14　(1)調査地近景（北西から）　(2)Aトレンチ（83次）全景（北から）
　(3)Bトレンチ（83次）全景（北から）

図版第15　(1)拡張後Bトレンチ（83次）全景（北から）
　(2)Cトレンチ（83次）全景（南から）　(3) SD 8315（南から）

図版第16　(1)Dトレンチ（83次）全景（北から）
　(2)Eトレンチ（83次）全景（南から）

図版第17　(1)Fトレンチ（83次）全景（北から）
　(2)Gトレンチ（83次）全景（西から）

図版第18　(1)Hトレンチ（83次）全景（南から）
　(2)Aトレンチ（105次）全景（北から）

図版第19　(1)Bトレンチ（105次）全景（北から）
　(2)Dトレンチ（105次）全景（北から）

図版第20　(1) SB 8358・SD 8355 等（東から）　(2) SE 8332（西から）
図版第21　(1) SE 8332 井戸枠細部（南から）　(2) SB 8325・8326（南から）
(3) SK 8354（西から）　(4) SK 8379 土器出土状況（北東から）
図版第22　(1) SE 10521（南から）　(2) SE 10521 石積み（西から）
(3) SX 10529（北から）
図版第23　(1)Eトレンチ（105次）全景（南から）
(2)Iトレンチ（83次）全景（北から）
図版第24　(1)Jトレンチ（83次）全景（北から）
(2)Kトレンチ（83次）全景（北から）
図版第25　(1) SD 10550（東から）　(2) SB 10547（南から）
(3) SB 8381（南から）　(4) SD 8395 遺物出土状況
図版第26　(1)Fトレンチ（105次）全景（南から）
(2)Fトレンチ（105次）全景（北から）
図版第27　(1) SD 10565 後円部側（西から）　(2) SD 10565 前方部側（南から）
図版第28　(1) SD 10565 前方部周濠埴輪出土状況（西から）
(2)人物埴輪出土状況（南東から）
図版第29　(1)Hトレンチ（105次）全景（西から）
(2)Iトレンチ（105次）全景（南から）
図版第30　西ノ口・蓮ケ糸地区　出土遺物(1)
図版第31　西ノ口・蓮ケ糸地区　出土遺物(2)
図版第32　SD 10550　出土遺物
図版第33　SX 10529等　出土遺物
図版第34　SD 8395　出土遺物
図版第35　SK 10560等　出土遺物
図版第36　SD 10577等　出土遺物
図版第37　(1)舞塚古墳出土円筒埴輪　(2)舞塚古墳出土人物埴輪
図版第38　舞塚古墳出土円筒埴輪
図版第39　花粉の顕微鏡写真(1)
図版第40　花粉の顕微鏡写真(2)

長岡京跡右京第 127 次

図版第41　(1)調査地遠景（西から）　(2)調査地近景（西から）

図版第42　(1)A-2トレンチ（北から）　(2)A-5トレンチ（西から）
図版第43　(1)A-7トレンチ（西から）　(2)A-18トレンチ（北から）
図版第44　(1)A-21トレンチ（北から）　(2)集石遺構（A-21トレンチ）（南から）
図版第45　(1)出土遺物　(2)出土遺物

長岡京跡左京第103次

図版第46　(1)調査地遠景（西から）　(2)第4・5トレンチ全景
図版第47　(1)第1トレンチ全景　(2)第1トレンチ　溝検出状況
図版第48　(1)出土遺物（第1トレンチ溝内）　(2)出土遺物（各トレンチ）

1. 青野西遺跡発掘調査概要

1. はじめに

綾部市青野町には，弥生時代から中世に至る遺跡が密集している。昨年度、建設省近畿地方建設局の由良川改修工事の事前調査として，青野町北西部由良川南岸の小字西吉美前・同上フケにおいて実施された青野遺跡第８次発掘調査（試掘）については，先に報告した通りであるが，(注1) その成果は以下の３点にまとめられる。

(1) 調査地の中央部分は，従来から推定されていた由良川旧河道によって占められ，河底から出土した土器から，由良川は９世紀までここを流れていたことが確認された。

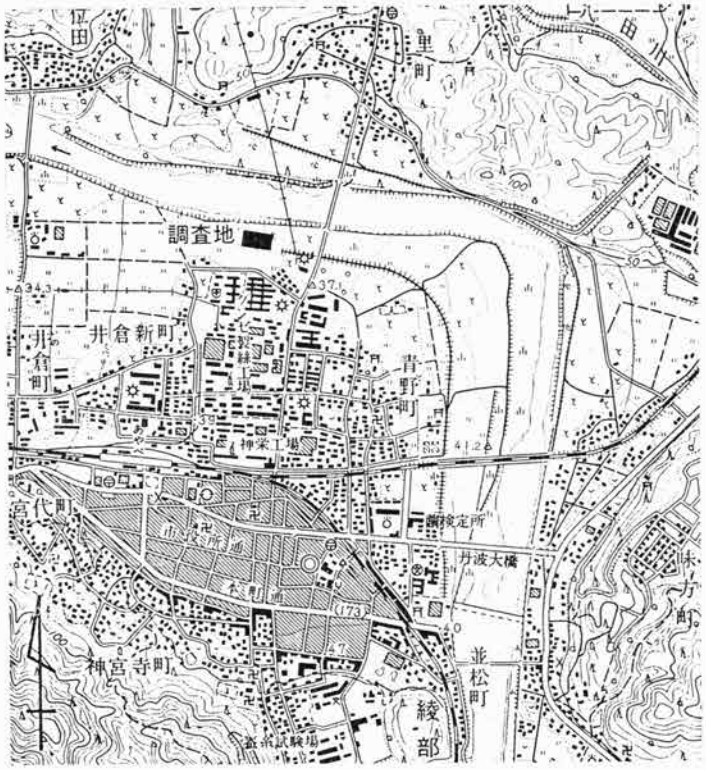
(2) 旧河道右岸(東)には，顕著な遺構・遺物が少なく，青野遺跡の西限と考えられる。

(3) 旧河道左岸(西)には，竪穴式住居跡が試掘トレンチに５基認められ，集落跡の存在が新たに知られた。

今回の調査は，この新発見の集落を「青野西遺跡」と命名し，由良川改修工事によって堤防の下になる予定の 2,800 m² を発掘したものである。工事用道路や排土用地の分を差し引くと，実際に全面発掘を実施したのは約 2,000 m² であった。

現地調査は，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課主任調査員辻本和美と調査員小山雅人が担当し，昭和58年４月25日から９月２日まで行った。

なお現地説明会を８月



第１図　調査地位置図 (1/25,000)

10日に実施した。

遺物整理については，現地調査終了後，引き続き現地事務所で行っている。

発掘調査・整理作業には各大学の学生諸君・地元の方がたが参加された。(注2)

また，調査にあたって各方面での御尽力をいただいた近畿地方建設局を始め，中丹教育局・綾部市教育委員会・綾部史談会・青野町自治会の諸氏に感謝の意を表します。

2. 調　査　経　過

昨年度の試掘調査での経験から，調査にあたっては，草刈りの後，調査地の周囲に排水溝を掘って，遺構面の冠水に備えた。調査地の大部分については，水田耕土を15～20cm下げれば，遺構面に達することが判っていたので，人力によってこの旧耕土を除去した。

遺構面は，水田の床土であり，相当の酸化が認められ，遺構検出のためにはこれを数cm削平する必要があった。これによって，昨年度検出していた5基の竪穴式住居跡を再確認すると共に，新たに数か所同様の土色の変化を認め，現地説明会においては11基の住居跡を報告したのであるが，その後，2か所において4基の住居跡を追加確認し，合計15基になった。

竪穴式住居の遺構は，いずれもかなり残りがよく，30cm以上の深さをもつものも少なくない。昨年度中に完掘していた8号住居跡(SB 8205)を含め，全形を明らかにした住居跡は6基である。溝や土坑で一部切られたものが3基，旧河道で半分以上消滅したものが3基，残る3基は調査範囲外へ広がっており，一部を調査したにとどまった。

住居跡以外の遺構は，土坑6基，溝3条，掘立柱建物跡1棟分を含むピット群があるが，後述する平安前期の南北溝と1基の土坑を除けば，いずれも住居跡と同時代のものである。中・近世以降の遺構ないし攪乱は，ごく少なく，図版第1の航空写真に見られるように，かなりすっきりした遺構の残存状態と言える。

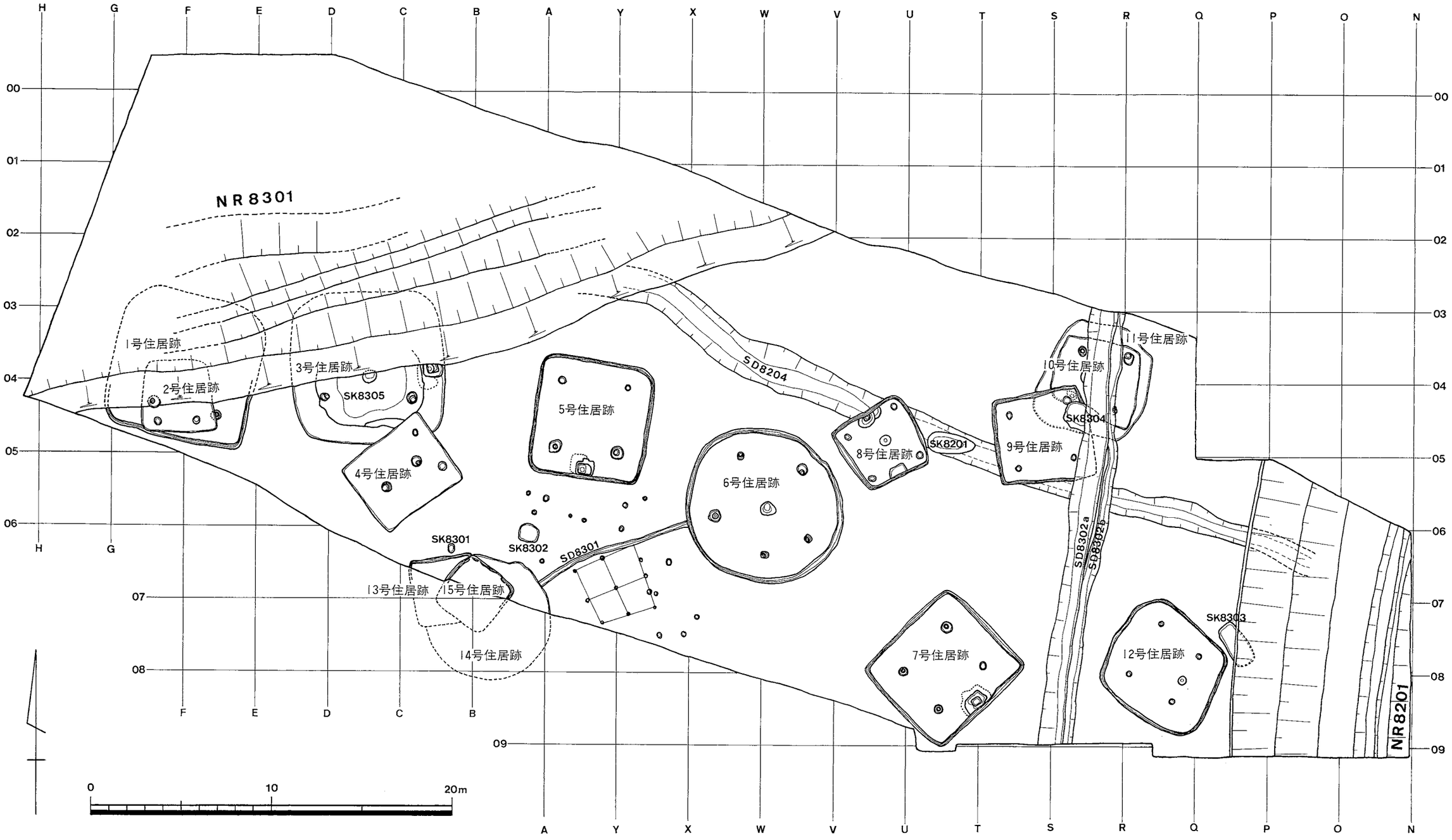
調査地の北西部を東北東から西南西へ流れる水路を境にして，北西部は低湿地である。この部分については，水田耕作土が数層を成しており，途中から重機を導入して掘削を行った。水田耕土の下層は，トレンチを数本入れて，土層の観察を行ったところ，旧河道であると判断された。この河道は，古墳時代初頭の竪穴式住居跡を切っており，それ以降に生じたものである。

調査地の東端部は，昨年度検出した旧河道NR 8201であり，遠浅の様相を呈している。

調査終了後，遺構は人力によって丁寧に埋め戻し，堤防の下に保存されている。

〔遺構の呼称について〕

この遺跡の調査は2年度にまたがるものであり，各遺構は検出された年次（西暦）を付して，例えばSB 8203というように下2桁でその年次での通し番号を付した構成になっている。


NR8301
NR8201
1号住居跡
2号住居跡
3号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
7号住居跡
8号住居跡
9号住居跡
10号住居跡
11号住居跡
12号住居跡
13号住居跡
14号住居跡
15号住居跡
SK8305
SK8301
SK8302
SK8201
SK8304
SK8303
SD8204
SD8301
SD8302a
SD8302b
0
10
20m

第2図　遺　構　平　面　実　測　図

これは，綾部市教育委員会の方法に従ったものであり，正式名称として，出土遺物にもこれをマークしている。しかしながら，殆どの遺構は今年度に完掘したことでもあり，煩雑さを避けるために，現地説明会の資料作成時に，西から順に「1号～11号住居跡」等とした。現地説明会以降に検出した遺構も含め，この概要報告においても，この呼称法に従うことにする。なお，正式名称も必要に応じ括弧に入れて並記する。

3. 検出遺構

8号住居跡 (SB 8205) と土坑1 (SK 8201) は，昨年度検出し，完掘したものである。

3号・4号・5号・6号住居跡・溝1 (SD 8204) は，昨年度検出し，今年度に完掘した。

1号・2号・7号・9号～15号住居跡と南北溝 (SD 8302) 等は，今年度に検出・完掘した遺構である。

以下，各遺構について，その概要を報告する。

(1) 竪穴式住居跡

1号住居跡 (SB 8301)

調査地西端部で検出した大形の隅丸方形住居跡である。南の一部を除いて、大半は旧河道 (NR 8301) とセメント水路の掘形によって消滅している。東西約 7.6 m を測る。周壁溝をもち，柱穴は2個検出された。

2号住居跡 (SB 8302)

小形の方形住居で，1号住居跡の埋土を切り込んでいる。1号と同様，北半分が消滅している。東西 4.2 m を測る。周壁溝は検出できなかったが，柱穴を2か所で認めた。

3号住居跡 (SB 8202)

大形の隅丸方形住居で，北半分は1号・2号住居と同様に消滅している。東西 8.4 m を測る。柱穴は2か所で検出しているが，周壁溝は確認できなかった。床面ほぼ中央に，皿形に掘り凹めた炉跡があり，灰・炭・若干の焼土が見られた。東辺中央に3段掘りの特殊ピットがある。方形であるが，最下段は円形を呈する。後述の5号・7号住居例と同様に，ピット周辺に砂礫を敷きつめている。

4号住居跡 (SB 8203)

5.3 m×4.4 m を測るやや長方形の住居跡である。周壁溝は認められなかった。中央東西に2か所のやや大きい柱穴があり，東辺に沿って2か所小さなピットがある。しかし，これに対応すると思われる西半部にはピットを検出できなかった。南辺東に沿ってベッド状遺構と思われる高床部がある。

5号住居跡 (SB 8204)

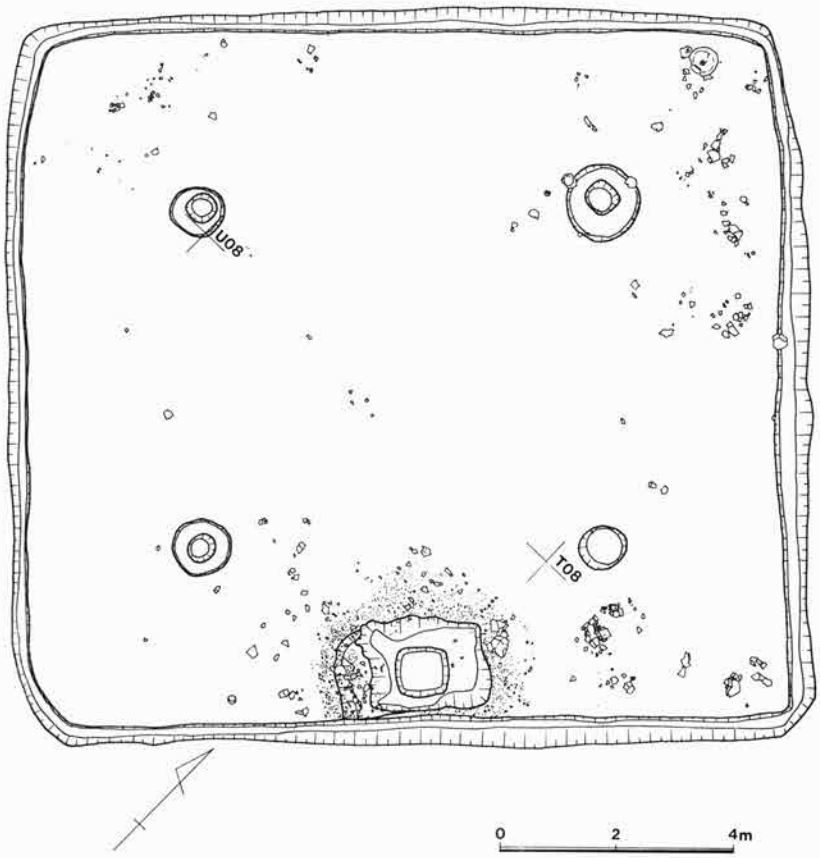
東西6.5m・南北6.5mを測る大形の隅丸方形住居跡である。周壁溝と4か所の柱穴を検出したが，炉跡はなかった。南辺中央に3段掘りの特殊ピットがあり，その周囲北と西には小礫を敷いている。石器の出土が目立つ。

6号住居跡　(SB 8206)

直径約8.6mの円形住居跡である。周壁溝が巡り，柱穴は五角形に5か所検出された。北東の柱穴掘形には，甕（第6図23）が1点完形で入っていたが，柱を立てた時に掘形に埋納したと判断される。他に竪穴中央に深いピットがある。そのやや西方に床面が焼け赤色を呈した部分があり，掘り込みはないが，炉跡と思われる。この住居跡は，焼失したと考えられ，全面，特に東半部に炭化した板材を始め，炭や焼土塊が散乱している。この住居跡からは，土錘の出土が目立つが，1か所に10個余り集中していたところもある。

7号住居跡　(SB 8303　第3図)

東西6.8m・南北6.3mを測る大形住居跡で，5号住居跡とほぼ同規模であるが，隅丸で



第3図　7号住居跡平面実測図

はなく方形を呈する。周壁溝を巡らせ，4か所に柱穴があり，南辺（東南辺）に3号・5号と同様の特殊ピットがある。これも周囲に砂礫を敷いたベルト状部分がある。ピットは二段掘りである。

8号住居跡　(SB 8205)

前年度に完掘した小形の方形住居跡で，報告済である。(注3)

9号住居跡　(SB 8304)

東西 5.3m・南北 5.0m を測る方形の住居跡である。周溝を巡らせ，4か所に柱穴をもつ。一部土坑や溝で切られているが，炉跡はなかったようである。

10号住居跡　(SB 8305)

いびつな方形住居跡で，東西 4.9m・南北平均 4.5m を測る。中央を南北に溝 SD 8302 によって切られている。

11号住居跡　(SB 8306)

東西・南北とも6.0mを測る隅丸方形住居跡で，4辺が膨らんだ形を呈する。中央の殆どの部分を，より深い10号住居によって切られており，柱穴等は検出できなかった。周壁溝も検出できなかった。

9号～11号住居は，2条の溝と共に互いに切り合っているが，その新古関係は次の通りである(古→新)。

溝 SD 8204――(？)――11号住居跡→10号住居跡→9号住居跡→土坑 SK8304→溝 SD 8302

12号住居跡　(SB 8307)

調査の最終段階になってようやく検出し得た住居跡で，地山と埋土の差異が殆どなく，これは東西溝 SD 8204 とよく似た状況である。やや平行四辺形を呈するが，東西 6.4m・南北6.1mを測る隅丸方形住居跡である。4か所に柱穴を有し，周壁溝を巡らせる。東側の両ピット間に炉跡が検出された。浅いくぼみの内部と周辺に炭が認められた。

13号住居跡　(SB 8308)

5号住居跡の南で，切り合った3基の住居跡のひとつである。15号より確実に古いが，14号との関係は明らかではない。周壁溝を有するが，柱穴は未検出である。

14号住居跡　(SB 8309)

円形，あるいは多角形と考えられる住居跡である。周壁溝も柱穴も未検出に終った。

15号住居跡　(SB 8310)

13号と14号の両者を切って作られた方形の住居跡で，検出面から床面まで80cmと非常に

深い（他の住居跡では，深いもので30 cmを測る程度である）。周壁溝は，数か所で途切れている。柱穴は検出できなかったが，浅い掘り込みやそれを連結するかの如き溝状のものが見られる。床面上に大きな礫（径30～40 cm）が1個置かれていた。このように普通の住居跡とは異なり，何らかの特殊な用途の考えられる竪穴である。

以上の13号～15号住居跡は，南半がいずれも調査地域外へ広がっており，遺構の全容は明らかにできなかった。

(2) 土　　坑

土坑1　(SK 8201)

前年度報告[注4]済。

土坑2　(SK 8301)

ピット状の小土坑である。南北 42 cm・東西 34 cm を測り，中に手焙り形土器（第8図56）が1点正置されていた。

土坑3　(SK 8302)

径 105 cm を測る円形の浅い土坑で，炭や焼土が混じり，戸外の煮炊き用の施設の跡と考えられる。

土坑4　(SK 8303)

12号住居跡の東にある長楕円の土坑で，埋土の質は12号住居や，溝1のそれと類似している。若干の土器片が伴っていた。

土坑5　(SK 8304)

9号住居跡を切る土坑で，東部を溝3によって切られている。若干の土器片と不詳の磨石片が出土した。

土坑6　(SK 8305)

3号住居跡の床面下層の大土坑である。埋土の上面が住居跡の床面であり，炉跡もこの埋土を切って作られているので，住居跡に伴う遺構ではなく，これに先行するものと考えた。伴出遺物として土器片が多いが，接合できるものは殆どないところから，破損した土器の廃棄場所と考えられる。

(3) 溝

溝1　(SD 8204)

幅約1 m・深さ約50～70 cmを測るU字溝で，遺物の出土は殆どなかったが，溝底の土器片の出土と切り合い関係から，この集落のかなり古い時期の遺構と推察される。流水の痕跡が認められた。

溝2 (SD 8301)

6号住居跡と14号住居跡を結ぶような浅い溝である。6号住居跡の周壁溝と連結していたと考えられるが，14号との関係は，土層が明確でなく明らかではない。

溝3 (SD 8302)

調査地東部を南北に走る溝である。先ず溝3a を掘った後，やや東に溝3b を掘り直している。出土土器には須恵器・黒色土器に混じって，緑釉土器が1片ある。溝 3a・b 共に平安時代前期頃の遺構と思われる。

(4) 掘立柱建物跡 (SB 8311)

5号住居跡の南にピットが集中しているが，掘立柱建物を復原できるのは1棟のみである。2間×2間で，高床式の倉庫と考えられる。

(5) 自然流路

自然流路1 (NR 8201)

調査地東端の南北の流路である。昨年度機械掘りによるトレンチで断面検出したもので，今回は，遠浅になった西岸を面的に検出した。由良川旧河道である。

自然流路2 (NR 8301)

調査地北西部を占める流路で，これも旧河道と考えられる。時期は明らかではないが，この流路によって，1号～3号住居の北半部が消滅しており，古墳時代前期以後に生じたものである。

4. 出土遺物

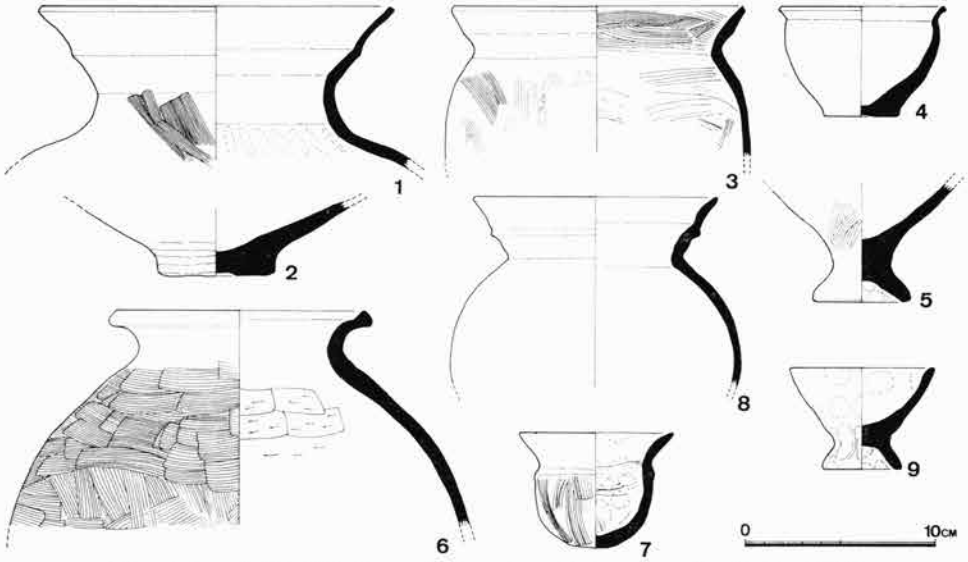
遺物の大多数は土器類であり，他に土錘・石製品・玉類がある。

(1) 土器（第4～8図）

土器は本遺跡の主要な遺構である竪穴式住居の床面上及び埋土中から出土したものが大半を占める。溝3 (SD 8302) から出土した平安前期の土器（須恵器・黒色土器・土師器等）を別にすれば，殆どが弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けられる土器である。整理が完了していないため，本項では後者の弥生土器と古式土師器について，特に住居跡の床面資料を中心に概要を述べるにとどめざるを得ない。

1号住居跡の二重口縁壺(1)は，底部(2)と同一個体と思われる。なでで仕上げているが，先行する刷毛目が一部に残っている。

3号住居跡の甕(3)は，くの字状に広がる口縁をもつが，この住居に伴う甕の多くは，15号住居に見られるような擬凹線を施す複合口縁をもつものが多い。小型の鉢(4)は，西側柱穴から出土したものであるが，平底で口縁をくの字状に短く広げたものである。

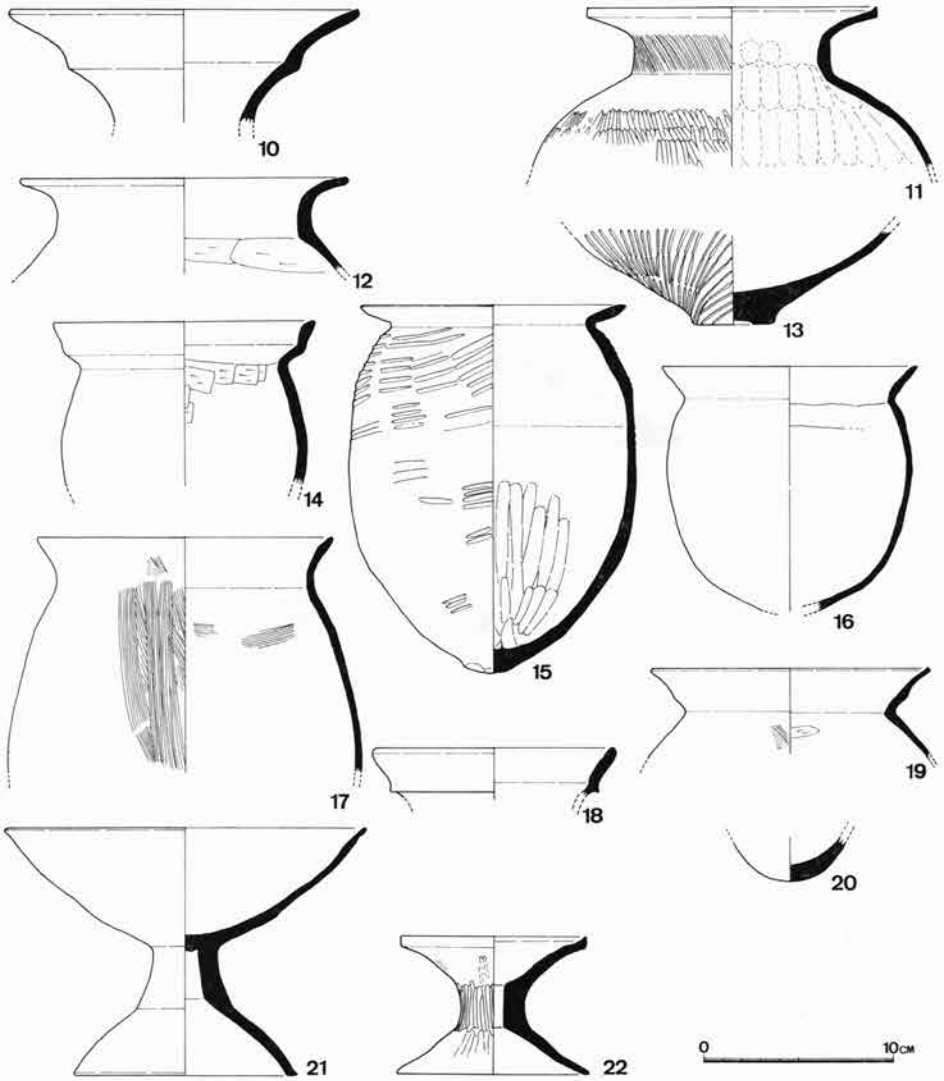


第 4 図　土器実測図(1)　1号（1・2）・3号（3～5）・4号（6～9）住居跡

4号住居跡出土の土器は，布留式であり，9号住居と共に，本遺跡では最も時代の下るものである。なお，SB 8203 出土土器として前年度報告した小型丸底壺と高杯もこの住居の下層から出土したものである。

5号住居跡は，切り合いや攪乱もなく全容を調査できたのみならず，床面まで約 30cm 残っていたこともあり，出土遺物はかなり多い。床面出土の土器で実測できたものは，第5図10～22に示した通りである（ただし後述する19は中層から出土）。壺には二重口縁の壺（10）と広口壺（11）がある。甕では擬凹線を失った丹後系の複合口縁（14），くの字状に広がる口縁で体部外面に粗い叩き目を残す畿内第Ⅴ様式に近いもの（15），同様の口縁で体部外面を刷毛ないしなでで調整するもの（16・17）が，主流を占めていると思われる。他に山陰の土器の形態に近いもの（18）もある。明らかに搬入品として，床面資料ではないが，庄内式甕（19）が挙げられる。胎土から見て河内産と考えられる。高杯には（21）の外に篦磨きで仕上げた精製土器もある。小型器台（22）も篦磨きとなでで仕上げた精製品である。小型器台には他に脚部がやや発達したものもある。

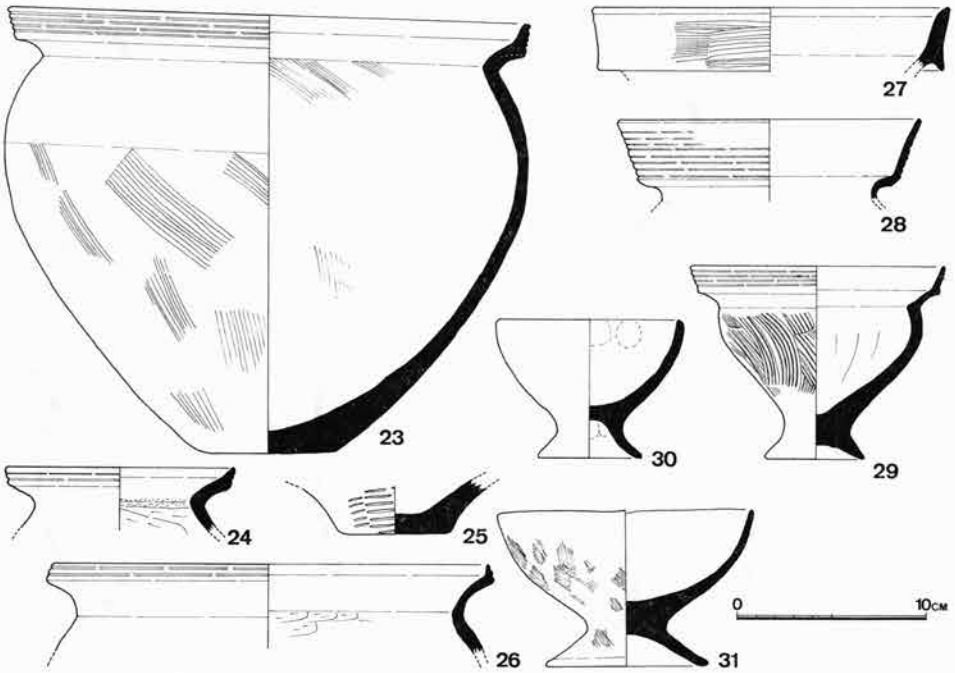
6号円形住居跡は，竪穴が浅かったこともあり，良好な資料は比較的少ない。甕（23）は複合口縁に擬凹線を施した丹後地方と共通するものである。叩き目を残す甕も散見される(25)。甕（26）は，口縁をくの字状に外反させた後，端部をつまみ上げ，擬凹線を2条施したものであるが，この形状を呈しながら擬凹線を持たない甕が他の住居跡（5号・10号）に散見される。甕には他に外来系の形態をもつものに山陰系の（27），北陸系の（28）があり，埋土上層の資料であるが，搬入品と思われる胎土で作られた近江系の甕がある。この住居跡



第 5 図　土器実測図(2)　5号住居跡（10～22）

は，比較的残りの良い鉢形土器の出土が目立っている。いずれも台付きで，(30・31) は直口であるが，(29) は複合口縁に擬凹線を施している。

7号住居跡は，5号住居と共に最も多くの遺物が出土している。しかしながら，壺や甕に良好な資料は少ない。壺は，底部がいくつか床面から出土しているのみである。甕も現段階では，擬凹線を失った複合口縁の甕（32・33・34）が主流を占め，単純口縁の甕（35）がこれに加わると推察される。なお，叩き目を残した破片は見当たらなかった。高杯は，床面資料では（38）のみである。脚部の可能性も考えたが，一応2段の屈曲をもつ杯部としておく。



第 6 図　土器実測図(3)　6号住居跡（23～31）

器台（40）は，胎土・調整共に精製品であり，非常にシャープな土器である。（41）は口縁が外反する大型の鉢である。（42・43・44）は，突出する平底を有する小型の鉢で，いずれも精製品である。（45）はミニチュア風の坩で，外面に櫛描文，口縁部に列点文を施した異様な土器である。底部は凹み底であるが，全体は布留式の坩ないし小型丸底壺を意識した形態であろう。細かい篦磨きとなでで調整した蓋（46）は，精選した胎土を使用し，成形も丁寧である。なお，整理の現段階で，蓋形土器と見られるのはこの1点に限られる。

9号住居跡の土器は，4号と同じく小型丸底壺を伴う布留式のものである。小型丸底壺(49)と直口壺（47）は共に南西辺周壁溝から出土した。

10号・11号住居跡の土器については未整理分が多く，今回報告できたものは少ない。

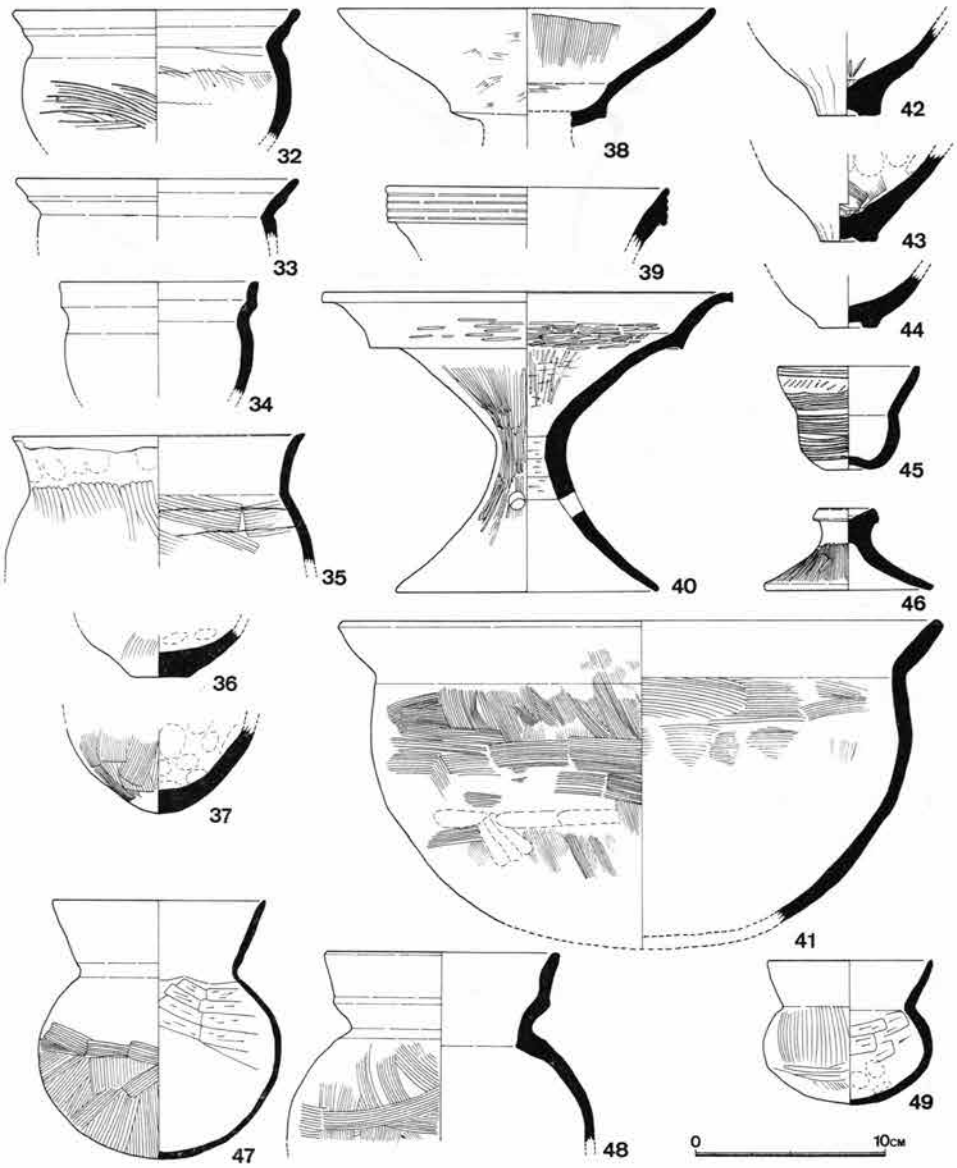
12号住居跡の土器は，床面・覆土中を問わずごく少なく，炉跡から出土の長頸壺（51）以外は微細片である。この長頸壺は口頸部のみであるが，外面を篦磨き，内面を刷毛，口縁部をなでで調整し，口頸部の上から4分の1の所に，波状の記号文を施しており，非常に畿内的な点が特記される。

大半が調査地区外に広がる14号住居跡床面の鉢（52）も，この住居跡の殆ど唯一の土器である。非常に細かい刷毛で全面を調整している。

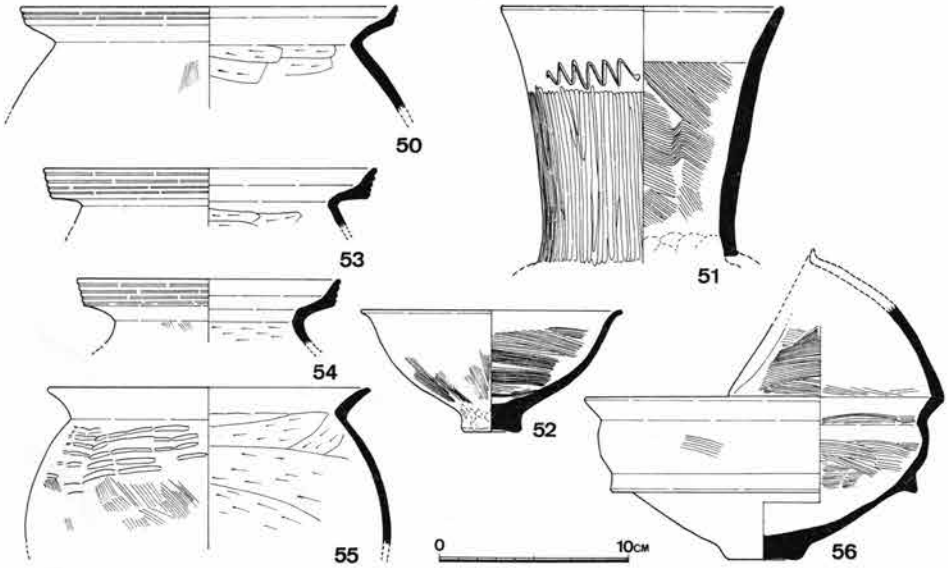
14号住居跡の土器は細片が多く，今回の報告には間に合わなかった。

15号住居跡は，遺構も深く，土器はかなり多い。しかし，中・下層から出土したものが殆どで，床面に接していたものはごく少量に過ぎず，これら中・下層の土器がこの住居跡に伴うものか現段階では判断し難い。第8図に代表的な甕を3点（53・54・55）示しておいたように，擬凹線の甕と叩きを残す甕が主体である。

手焙形土器（56）は，土坑2（SK 8301）から出土したもので，刷毛を主体に調整している。貼り付け突帯は無文である。底部はやや小さな平底であるが，土器はかろうじて自立する。



第 7 図　土器実測図（4）　7号（32～46）・9号（47～49）住居跡



第 8 図　土器実測図(5)　10号（50）・12号（51）・14号（52）・15号（53～55）
住居跡，土坑1（56）

3号住居跡床面下層の土坑6（SK8305）からは，多くの土器が出土したが未整理である。珍しい土器として装飾器台がある。丹後，特に古殿遺跡(注5)からは多く出土しているが，丹波には少なく，中丹では初めての出土である。この土坑での主要な器形は，甕で言えば擬凹線を施す複合口縁のものである。

(2) 土　製　品

図示していないが，本遺跡からはかなりの数の土錘が出土している。特に6号住居跡では17点を数え，内11点は床面の1か所に集中して検出された。他に，5号に3点，3号・10号・15号に各1点ある。

(3) 石　製　品

用途や性格不明のものも含めて8点ある。石鏃が5号と7号住居跡に各1点，太型蛤刃石斧が1号と5号に各1点，扁平片刃石斧が5号住居の西南柱穴掘形中に1点，不詳の未成石製品が5号住居跡に1点，磨石あるいは砥石が土坑5（SK 8304），そして砥石が1点6号住居跡から出土している。最後に記した砥石にはおそらく鉄器と思われる利器を砥いだ痕跡が見られ注目される。

(4) 玉　　類

5号住居跡から硬質の碧玉製管玉が1点出土した。上下2か所を欠損している。表面は風化して淡緑色であるが，断面中心部は濃緑色を呈する。

12号住居跡からガラス製小玉が1点出土している。半透明で，コバルトブルーの色を呈する。

5. ま　と　め

以上，概要を報告したが，青野西遺跡の調査は，昨年度の試掘結果から寄せられていた期待を裏切ることなく，弥生時代から古墳時代へという非常に興味深い時期の集落（のおそらく一部）の15基の竪穴式住居跡等の検出という成果をもたらした。これは当地域における集落・住居・土器・石器等々の研究するに当って，10年間8次にわたって調査の行われてきた隣接する青野遺跡からの資料に，貴重な知見を加えるものである。しかしながら，本調査の成果は，調査終了後日も浅く，到底この概要報告でまとめられるものではない。以下，青野西遺跡が提起した諸問題のいくつかを，箇条書きに挙げておきたい。

(1)　昨年度と今年度にわたって検出した由良川旧河道と青野・綾中及び久田山地区の諸遺跡との関係。

付表1　遺構編年試案

時期	遺構	褒の特徴	畿内との対応
I	? 12号		弥生後期中葉
II	土坑6　14号 13号	擬凹線	弥生後期後半
III	3号　15号　溝1　6号　11号	タタキ目	庄内式(古)か
IV	1号　2号　5号　8号　10号	無擬凹線	庄内式(新)
V	7号		布留式(古)か
VI	4号　9号　土坑5	布留式	布留式(中)
	NR8301	古墳時代中・後期	
	?　溝3	奈良時代 平安時代前期	
	NR8301・NR8201埋没し終る	平安末・鎌倉時代	

(2)　土器の問題。青野西遺跡の調査がもたらした最大の成果のひとつは，各住居に伴う土器群を編年することを可能にした点である。従来の資料と比較検討すれば，当地域の当該時期の土器の変遷の少なくとも骨格はできると思われる。付表1に示すのは，現段階での青野西遺跡の諸遺構の編年試案である。矢印は切り合いによる新旧関係を示す。

(3)　青野西遺跡にも見られる搬入土器あるいは外来系土器の存在は，この時期全国的に知られているが，当地方の地域性と共に他との交流関係も重要な課題である。

(4)　住居(注6)に関しては，様々な問題が挙げられる。土器が編年されれば，それによって住居の様々な変化が追える。例えば，青野西遺跡の住居は大きく2期に分かれ，古くは円形か隅丸方形であったのが，後半にはすべて方形に変わり，この遺跡の最終段階になると長方形のもの（4号）も見られるのである。

本概要で特殊ピットと呼んだ住居内の遺構の性格や，柱穴中に埋納された土器の意味も，今後類例を比較検討していかねばならない。

(5)　本遺跡では石器が庄内式併行期ないし布留式古段階にまで残っていたらしい。同時に，砥石の観察から鉄器の使用も間接的に推測できる。

(6)　玉類に関しても，碧玉管玉やガラス小玉は，当時期には全国的に出土しているものの決してありふれた遺物ではなく，特に墳墓からの出土が多いのに対し，住居跡から出土した点は特筆できよう。

(7)　最後に，青野西遺跡集落の開始と終末について述べておくと，この遺跡の最古の土器は弥生時代後期中頃の長頸壺（51）である。現地調査中から整理の現段階までに目にし得た限り，1点のみ古式の擬凹線を施す甕の口縁の小片があったが，これとて上記の長頸壺とほぼ同時期としてよいようである。この時期から布留式中段階（4号と9号住居）まで，ざっと200年間であろうか，集落が営まれたが，その後空白がある。1号～3号住居が旧河道によって半壊しているように，自然的原因で集落が消滅した可能性が考えられる。

平安前期の溝3から，かなりの土器が出土したが，奈良時代末あるいは平安時代前期の土器に混じって，7世紀前半の須恵器が1点ある。この土器の様相は，青野西遺跡の東の旧河道底から出土した土器に近く，溝3の埋没開始は，旧河道NR 8201と時を同じくしていると思われる。旧河道の埋土上層から出土した瓦器によれば，この河道の埋没が終ったのは中世の始め頃ということになる。

以上，思いつくままに今後の研究の展望を述べたに過ぎない。今回の調査結果によれば，青野西遺跡の最盛期は，畿内の庄内式に併行する時期である。この時期は研究者によって，弥生終末とも古墳前期初頭とも言われるように，日本各地の共同体が大きな変化を遂げよう

としていた時期である。この変化が全国一斉に起ったのではないとすれば，やはり各地域でこの時期何が起り，何が変化したのかを見極めることから出発せねばなるまい。(注7) そのような意味においても，青野西遺跡は綾部市域あるいは中丹という地域の古代史研究に貴重な資料をもたらしたと言えよう。　　（小山　雅人）

注1　小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注2　（調査補助員）　福井　朗・友次雅子・大西光弘・萩生田憲昭・吹田　浩・楠昌一郎・池場　稔・中村博光・大嶋直樹・高橋孝次郎・高間正年・森　一九・日榮正二・堀田太士・朝子道男・松永厚典・桑島　淳・恵美寿彦・長谷川法明・安田喜一・堀　雅之

（作業員）　大島昭二郎・太田綱雄・大槻幸作・片山勇雄・四方悠治郎・角山利一・西川勇夫・朝子きぬ江・村上マチ子・由良はつ枝・塩見金男・井田隆雄・山下潔巳・森本　薫・藤原　透・大槻章夫

（整理員）　石原美鈴・出口貴志野・荻野典子・小山裕美・藤井理絵・団村　香・雲出美智子・加藤由美・東山結花・中村みはる・仙波陽子・福井　朗・森　一九・堀田太士

注3　注1と同じ

注4　注1と同じ

注5　現在，当調査研究センターにて整理中。

注6　小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983.9 および引用文献参照。

注7　注6と同じ

2. 長岡宮跡第134次発掘調査概要

（7AN15E-8地区）

1. はじめに

この調査は，京都府向日市上植野町南開15-1において計画された，向日町警察署上植野警察官派出所建設工事に先だち，京都府警察本部の依頼を受けて行った発掘調査である。

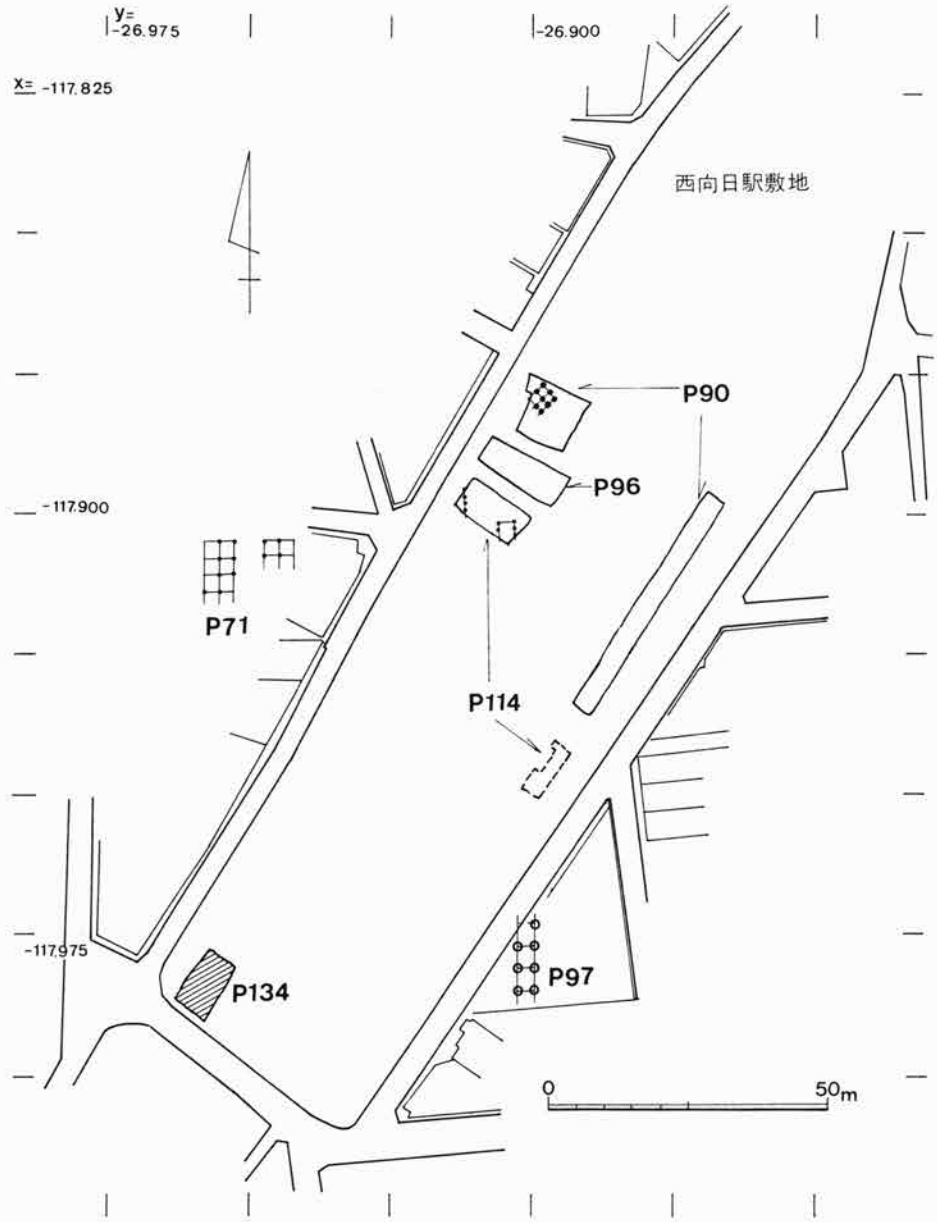
調査は，財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり，同センター調査課主任調査員 長谷川 達が現地調査を担当した。調査期間は昭和58年6月6日から6月24日までである。調査に際し，数々の便宜を図っていただいた阪急電鉄株式会社の西向日駅および京都線保線課の方々，河内誠光氏，また，酷暑の中，作業に参加していただいた方々[注1]には，重ねてお礼を申し上げる次第である。

第9図　調査地位置図（1/25,000）

2. 周辺環境

調査地は向日丘陵から南東方向にのびる標高約30mの低位段丘上に立地するが，その縁辺に近く，南西60m付近からは小畑川によって浸食された段丘崖となり，沖積地との比高差は約5mを測る。現在は阪急電鉄西向日駅の敷地となり，付近一帯は宅地化され，平坦となっている。

ここは，長岡宮跡の一画にあたり，既に発掘調査によっても確認されている大極殿から南へ450m，朝堂院から約200m



第10図　調査地及び周辺の調査(注2)（P：宮内調査次数略号）

の位置にあたる。宮内における朝堂院南方の様相は必ずしも明確ではないが，近年の調査によっていくつかの成果があがっている。調査地から東へ約60mの地点(注3)では，朝堂院の堂宇にも匹敵する礎石の建物跡の一部が確認され，北へ70mの地点では，南北棟の掘立柱建物跡が2棟(注4)発見されている。また当駅構内でも数次にわたる調査(第10図参照)が行われ，長岡京期

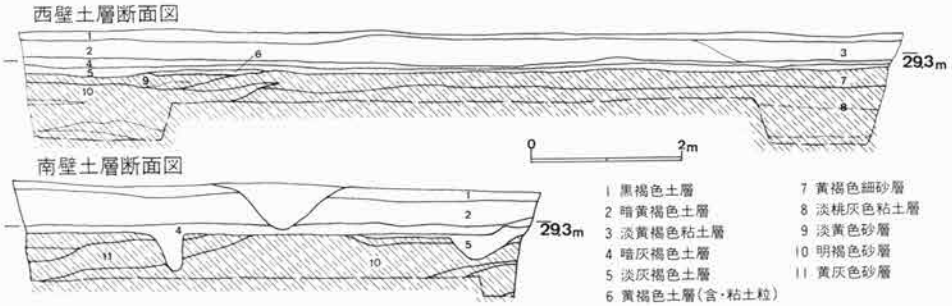
の建物跡や溝，それ以前，以後の遺構・遺物が検出されるとともに，この段丘上にかつて存在した開析谷が，都の造営等に際して埋め立てられ，整地されていることも判明している。さらに付近からは，弥生時代・古墳時代に関するものも出土しており，この段丘上が立地条件の良好なことから，古代より現代に至るまで営々と利用され，遺跡の密集地とでもいえる場所であることがわかっていた。(注5)

3. 調 査 概 要

調査は敷地内の樹木の伐採・移植から開始し，表土は重機によって除去した。地表下約40 cm の間は，極めて新しい盛土であり，その下に比較的安定した2層（第11図土層番号4・5）の堆積が見られた。それぞれ，よく締まり，一時期の地表面を形成していたものであると考えられたが，それぞれの層に含まれる陶磁器片等から，近代以降に堆積したものであることが確認された。それらを除去すると比較的平坦な段丘層(地山)の面となる。地山は調査地の北西部分では粘土が主体となるが，南東方向にかけて徐々に砂質化し，南半では砂礫の入り混じった地層となっている。一部では地表下1.5m まで掘り下げ，下層の状況の確認を行ったが，やはり前記の様子が下部にまで続き，細砂・粗砂・小礫・粘土を主体とする各層が水平に，あるいはレンズ状に互層となっていた。

表土直下よりいくつかの溝・土坑等も検出したが，それらは表土中から掘り込まれた攪乱坑であったり，動物を埋めたもの，また植樹に際してのものか重機の爪跡を残すものなどであり，溝も幅25 cm で深さ30 cm，ほぼ垂直に切り込まれていたが，第4層から現われ阪急電車軌道と平行するなど，すべて阪急電鉄施設以降のものであった。

出土遺物には，土師器・須恵器・瓦・陶磁器・銭貨（寛永通寶）等があるが，いずれも小片であり図化の対象となるものはない。土師器・須恵器類も，表土層および第4・5層から出土したものであり，近・現代のものと混在して出土したものである。



第11図　調 査 地 土 層 断 面 図

調査の結果，当調査地からは近・現代に形成されたもののほか，長岡京期，あるいは他の時代の遺構は存在しなかった。そして，近くでは，第96次調査等で確認されている調査地北側を北西から南東に続くと考えられる開析谷も，ここまでは及ばず，ここが古くより段丘縁辺に沿った丘陵地形であったことがわかる。土層を見ると，旧耕作土または腐植土層等は存在せず，近代層からすぐに地山となることから，当地域が丘陵稜線上に近い点，また，昭和初年より鉄道軌道施設・宅地造成等，開発の進んだことから，ある程度後世の削平を受けていることが考えられる。しかし，周辺の調査（P-90・96・97 次調査等）によって，長岡京期の遺構が標高 29.0m前後から検出され，当調査地の地山面が標高約29.1mであることから考えると，この地点には本来，長岡京期の遺構が存在せず，構築物の空白地帯であった可能性も高い。また逆に長岡京造営時にも，多少とも削平されることによって整地された場所であったことも考えられる。

（長谷川　達）

注1　調査補助員　吉野治雄・立川正明・宮本佐和子

注2　山中　章「長岡宮跡第90次・第96次（7N15E-Ⅲ，7AN15E-Ⅴ地区）発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集　向日市教育委員会）1980より転載（一部改変）

注3　石尾政信「長岡宮跡第97次（7AN15F地区）発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集　向日市教育委員会）1980

注4　高橋美久二「長岡京跡昭和52年度発掘調査概要　宮内71次（7AN15D地区）」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）1978

注5　石尾政信「長岡宮跡第96次（7AN15E-5 地区）～朝堂院南方官衙～発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集　向日市教育委員会）1981

3. 長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要

(7ANINC-2・3, IHT, IFK, IMK 地区)

1. はじめに

長岡京市では，都市計画街路石見・淀線の道路改良工事計画があり，当該地が長岡京跡の一部に当っているところから，長岡京市都市計画課と長岡京市教育委員会・京都府教育委員会が協議を行い，当調査研究センターに発掘調査を依頼した。

調査地は，長岡京市今里蓮ケ糸・西ノ口・藤ノ木・舞塚等の地区にまたがる延長約 1 km に及ぶ地域で，長岡京市井ノ内から大山崎町下植野に至る比高数mの河岸段丘上に位置し，長岡京跡の右京二条三坊十三町，三条二坊十三・十四・十五・十六町及び四条三坊九・十・十六町に当っている。またその間，長岡京の二条大路から，四条条間小路までの各大路・小路や，西三坊坊間小路，西三坊第 1 小路，西三坊大路の推定地を横断する。その他，弥生時代から平安時代までの集落跡である今里遺跡に当っており，調査地の東約 500m 離れた都市計画街路外環状線の街路改良工事に伴う調査で，長岡京跡の西二坊大路や三条条間小路の道路側溝の他，平安時代中期の集落跡と弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を検出している。(注1) また北方には，弥生土器等の散布する井ノ内遺跡が近接して存在し，最近の調査で，弥生時代の竪穴式住居跡(注2)や，溝等(注3)が検出され，また古墳時代の集落跡が検出されている。(注4) さらに，調査地の東には，白鳳時代（奈良時代前期）の古瓦を出土する乙訓寺(注5)が存在している。そして，調査地の南端部分に当る舞塚地区では，都市計画街路予定地内における下水道幹線埋設の立坑掘削に伴う立会調査で埴輪片が採集され，地名等から古墳の存在が言われている。(注6) また，この舞塚地区の南西約 300mのところには，乙訓地方屈指の横穴式石室を有する今里大塚古墳が存在する。

調査は，長岡京市都市計画課と長岡京市教育委員会・京都府教育委員会が協議を行った結果，昭和56・57年度の 2 年に分け，昭和56年度は今里西ノ口と藤ノ木及び今里蓮ケ糸の地区を対象とし，昭和57年度に今里西ノ口の南半部分及び藤ノ木の一部，そして今里舞塚の地区を対象として行った。そして昭和58年度に全体の整理を行った。

昭和56年度の調査は，昭和56年10月26日から開始し昭和57年 3 月25日まで行い，その後各トレンチの埋め戻しを行い 3 月31日に終了した。昭和57年度の調査は，昭和57年 7 月11日から実施し，その後舞塚地区で古墳の周濠を検出し，長岡京市都市計画課・長岡京市教育委員

第12図　調査地位置図(1/5,000)

会と協議し，追加調査を行い，昭和58年1月26日に終了した。この間，昭和56年度の調査は，当センター調査課主任調査員長谷川 達，同調査員小山雅人・竹井治雄・山口　博が担当し，調査員石尾政信の助力を得た。昭和57年度の調査は，主任調査員長谷川 達・調査員山口　博が担当し，調査員黒坪一樹，山下　正の助力を得た。

2年に亘る現地調査及び今年度の整理には，調査補助員・整理員として多数の方々の参加を得た。(注7) また，向日市・長岡京市の有志の方々に(注8)作業員として労力を賜わり，他に明輝建設に作業の協力を得た。そして，所長の中山修一先生を始め，長岡京跡発掘調査研究所，(財)長岡京市埋蔵文化財センター等の方々には協力・指導を受け，長岡京市教育委員会，長岡京市都市計画課からは，調査の便宜を図っていただいた。また，奈良国立文化財研究所の鬼頭清明氏・今泉隆雄氏・佐藤　信氏や向日市教育委員会の山中　章・清水みき両氏，高槻市教育委員会の橋本久和氏からは，調査・整理に当って御指摘，御助言を得た。記して謝意を表したい。

調査は，2か年に亘り，長岡京市今里蓮ケ糸・西ノ口・彦林・藤ノ木・5丁目・地内・舞塚，長岡3丁目の長大な地域に及ぶ為，第12図にあるように蓮ケ糸地区・西ノ口地区・藤ノ木地区・舞塚地区の4地区に分け，それぞれ報告する。なお一部は，京都府遺跡調査概報の第3冊，第8冊で概略報告を行っている。

地区割りは，3m 方眼を最小単位とし，中区画・大区画と設定し行ったが，今回の報告では，国土座標値を用いて表現した。遺物のうち，奈良・平安時代の土器の器種分類については，平城宮跡の調査での分類に(注9)準拠した。

この報告の執筆は，6章「花粉分析」を伊辻忠司，2章第3節「出土遺物」及び各「出土遺物」の石器の項，そして7章「おわりに」のうち中世集落の項を肥後弘幸が，他を山口が執筆した。

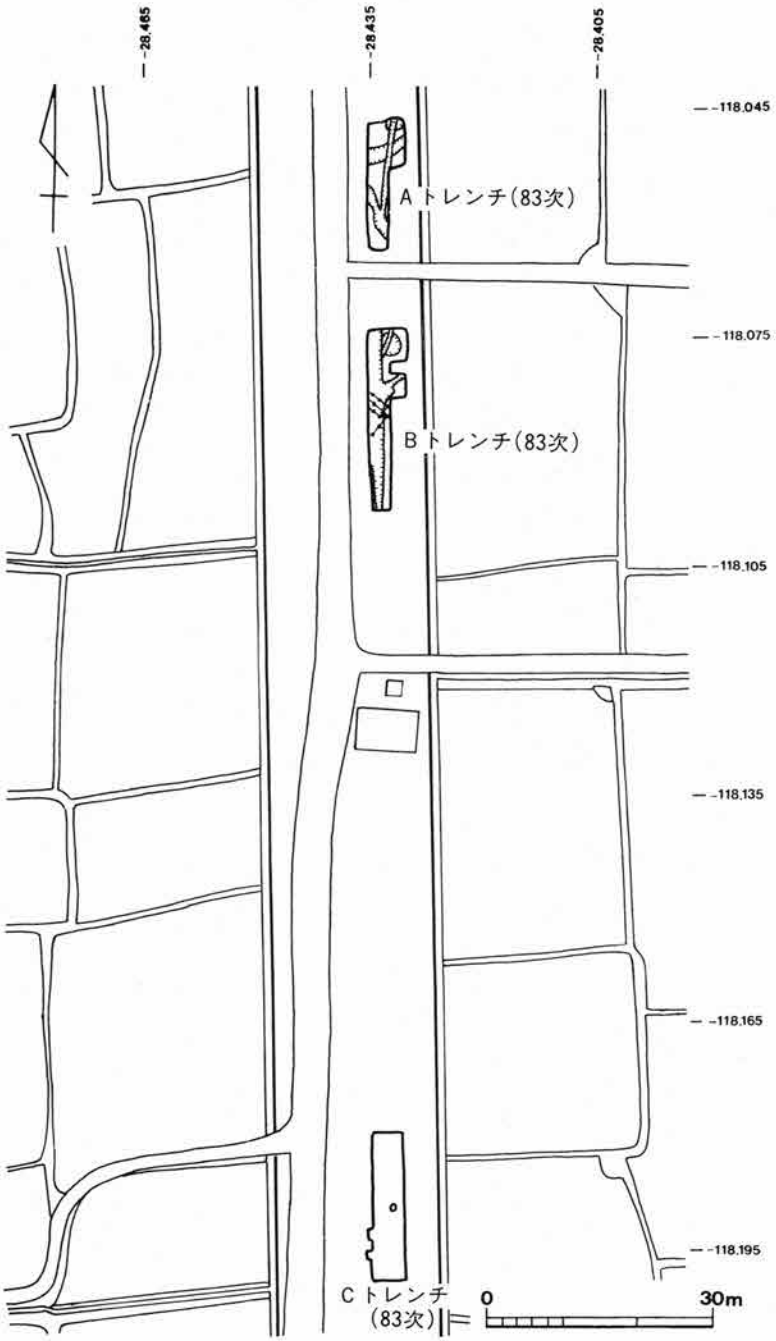
2. 蓮ケ糸地区の調査

この調査地は，西三坊大路と二条大路，三条第1小路の交差する地点について調査の依頼があり，計3本のトレンチを入れた。

この地区は，西三坊大路の推定地であるとともに，北方に井ノ内遺跡が近接し，右京第26次調査では弥生時代の溝を(注10)，右京第78次調査では古墳時代の竪穴住居跡を(注11)それぞれ検出しており，これらと関連するものが検出される可能性の高い地域である。

(1) 調査の経過

調査は，右京第83次調査として昭和56年10月26日から開始し，まず草苅りとA・B・Cの各トレンチを設定し11月2日から重機を入れて，盛土・耕作土・床土を除去し，以後人力で



第13図　蓮ケ糸地区調査図

掘削にはいった。

A・B・Cトレンチとも，床土直下で黄色粘土層の地山となった。Aトレンチでは，南北方向に流れる中世の溝や須恵器の小片を含んだ東西方向の溝(SD 8301)を検出した。Bトレンチでは，中世の浅い溝の他，濃褐色粘質土で埋積された奈良時代の土器片を含む溝(SD8315)や古墳時代の土坑(SK 8318)等を検出した。その後長岡京市都市計画課と協議の後，Aトレンチの北端部分とBトレンチの北端部及び中央部の一部を東へ拡張した。この結果，SD 8301は，東北方へ曲がって流れていることが判明し，Bトレンチでは，SK 8318全体とSD 8315に流れ込むSD 8316を検出した。またSD 8315の下層からは，柱穴群を検出し，掘立柱建物跡2棟(SB 8319・8393)を検出した。Cトレンチでは，径約0.5m，深さ約0.3mを測る小土坑(SK 8320)を検出した。このトレンチでは，SK 8320の他は，柱穴を少数確認したにとどまった。

この蓮ケ糸地区については，昭和56年度に1月から工事が予定されており，各トレンチの図面作製・写真撮影の後，昭和56年に12月22日に関係者説明会を行い，A・CトレンチとBトレンチの一部については，12月27日に，残りの部分は，前述した拡張部分の調査を行い昭和57年1月30日に調査を終了した。

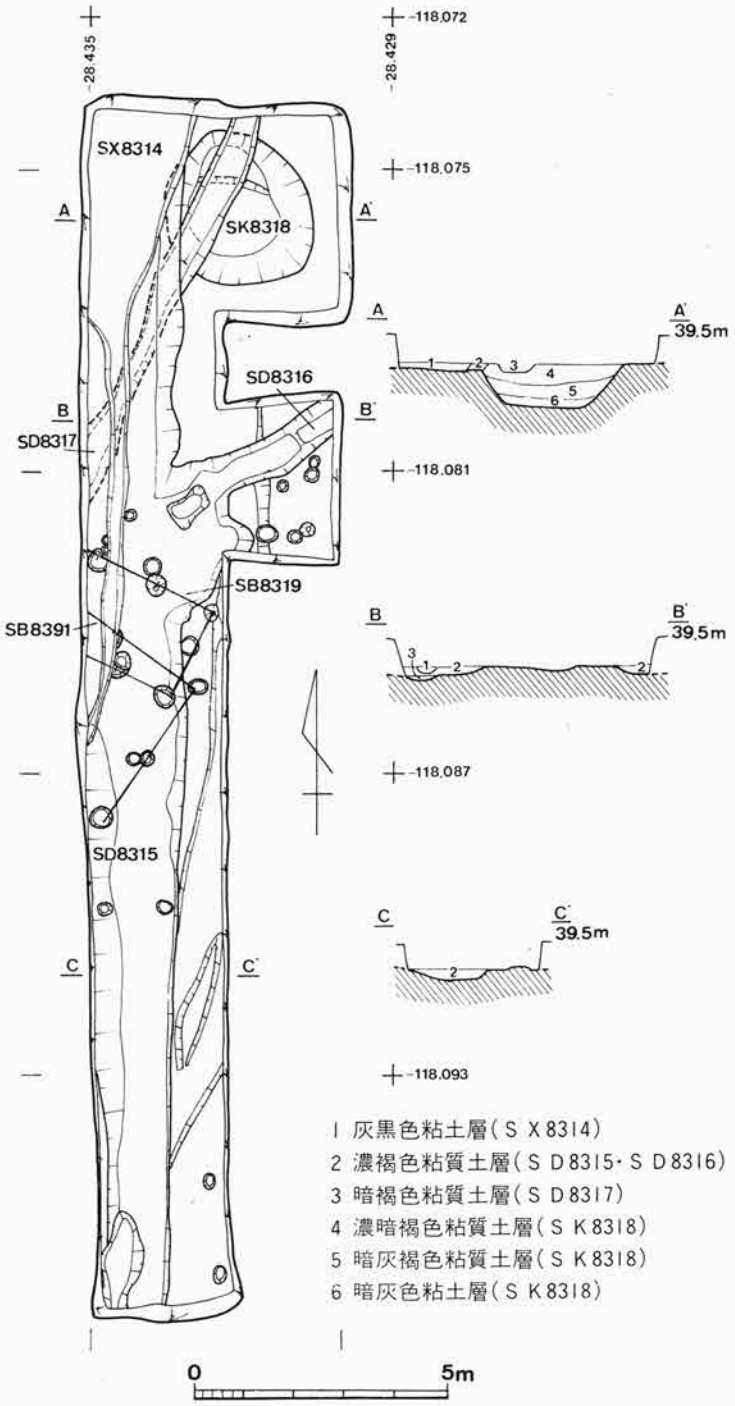
(2) 検出遺構

この調査地区では，中世の流路や，奈良時代の溝・土坑・建物跡，古墳時代の土坑等を検出した。これらのうち，Bトレンチ検出の溝(SD 8315・8316・8317)・土坑(SK 8318)・建物跡(SB 8319・8391)及びCトレンチ検出の土坑(SK 8326)について以下に述べる。

SD 8315 ほぼ真北に延びる溝で，トレンチの北端部は後世の湿地状堆積(SX 8314)によって削平されている。北から南へ幅を狭めて延びており，北半部では西側の肩はトレンチ外になる。幅は，南端部付近で約1.2m，中央部付近では約1.8m以上を測る。深さは，約0.15～0.2mを測り，溝底からは柱穴が検出され，掘立柱建物跡を削っている。埋土中からは，奈良時代後半～末の須恵器・土師器や土馬が出土した。トレンチ中央部で，東北方向からSD 8316が流入している。西三坊大路の側溝である可能性が強いが，北のAトレンチでは検出されておらず，また斜めに流れ込むSD 8316がある等若干問題を残す。

SD 8316 トレンチ中央部でSD 8315に東北方から流れ込む溝で，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。

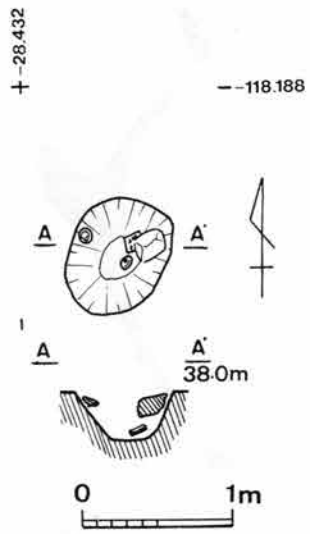
SD 8317 トレンチの北端部で検出した溝で，北から南西に延びる。SD 8315に一部削られている。幅約0.3～0.6m，深さ約0.3mを測る。溝中からは，古墳時代末の須恵器が出土している。



第14図　Bトレンチ(83次)検出遺構実測図

SK 8318　トレンチの東北部で検出した円形土坑で，径約2.8m，深さ約0.8mを測り，北側に幅約0.4mの段を坑底から約0.2mの高さに有している。SD8317がこの土坑が埋った後流れていた。埋土は3層に分かれ，最下層は暗褐色粘土で水が貯っていた形跡があり，坑底も黄色粘土で砂層には達っしていないが，調査中極く微量ではあるが壁から水が染み出しており，井戸として使用されていた可能性がある。坑内からは，古墳時代後期の須恵器・土師器が出土している。

SB 8319・8391　トレンチ中央部で検出した掘立柱建物跡で，SD 8315



第 15 図　SK 8320 実 測 図

によって柱穴が削られており，SD 8315 に先行する。SB 8319 は，南北1間・東西2間分を検出しているが，東西方向はトレンチ外に延びている可能性もある。規模は，南北方向（梁行）約1.8m，東西方向（桁行）約2.4mを測る。SB 8391 は，南北2間・東西1間分を検出しているが，東西方向はさらにトレンチの西へ延びる。南北2間・東西3間の建物跡になると思われる。規模は，南北方向（梁行）が約2.4m を測り，東西方向（桁行）は柱間が約1.5m である。

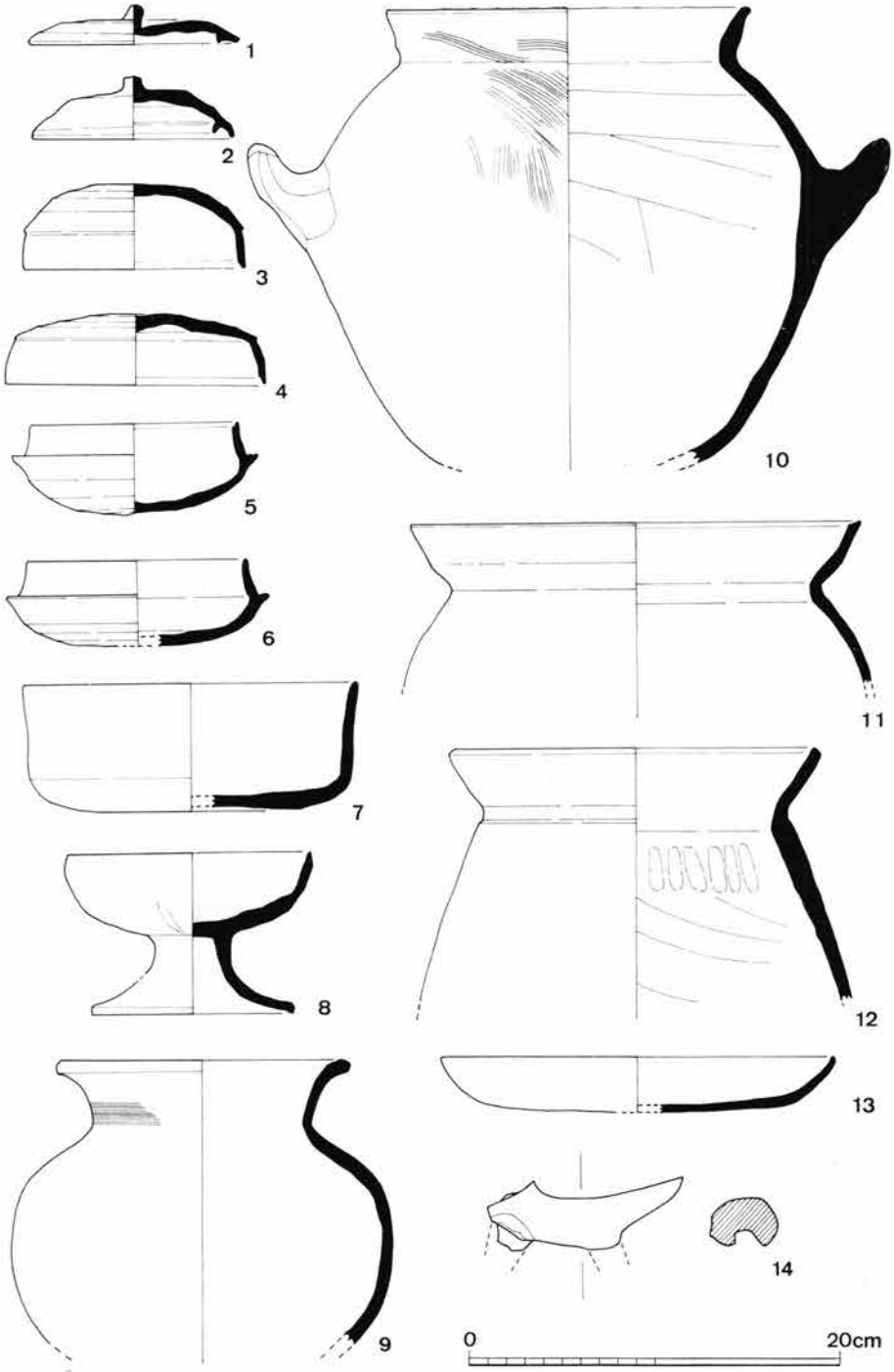
SK 8320　Cトレンチの中央部で検出した小土坑で，すり鉢状を呈し，径約0.8m，深さ約0.6m を測る。坑内からは，返りを有する須恵器の蓋等が出土している。

(3)　出土遺物

この調査地区では，古墳時代や奈良時代の須恵器・土師器・土馬，中世の瓦器・土師器等が出土したが，遺物量は少なく，また小片が多い。ただ SK 8318 からは，比較的まとまって出土している。以下遺構別に出土遺物の主だったものを述べたい。

SK 8318 出土遺物（第16図）　須恵器の杯蓋（3・4），杯身（5・6），壺（9）や土師器の甕（10～12）が出土した。3・4は，丸味を帯びた天井部を持ち，体部と天井部の境に稜を有する。口縁部は，やや外方に延び外傾する端面を持つ。口径は，3が12cm，4が13.8cm を測る。5・6は，丸底の底部を有し，口縁部は内傾して鋭く立ち上がる。5は，口縁端部は内傾する面をなす。口径は，11cm と11.8cm を測る。9は，球形の胴部に彎曲して外反する口縁部を持ち，口縁端部はやや肥厚させ丸く終わる。摩滅が著しく調整は判然としないが，頸部にカキ目を施している。土師器の甕のうち，10は，長円形の胴部に，短く外上方に延びる口縁部を持ち，把手を附している。胴部外面及び口縁部外面の一部に刷毛目を施し，胴部内面は，斜め方向の箆削りを行っている。11・12は，体部下半を欠失しており，11は，丸味を帯びた胴部から内彎気味に外上方へ立ち上がる口縁部を持ち，やや内傾する口縁端面を有する。12は，頸部から外下方に直に延びており，長胴の体部を持つと思われる。口縁部は，短く外上方に延びる。肩部内面は指でなで上げ，胴部内面は箆削りを行っている。須恵器からみて6世紀前半～中葉に位置づけられる。

SD 8317 出土遺物（第16図）　須恵器の杯A（7），高杯（8）等が出土している。7は，平底の底部から直立して立ち上がる口縁部を持ち，口径に比し深い器高を有する。8は，丸



第16図　SD8315 他出土遺物実測図
1～9：須恵器，10～13：土師器，14：土馬
13・14：SD8315，7・8：SD8317，3～6，9～12：SK8318，1・2：SK8320

味を帯びた杯部と，やや短いラッパ状に広がる脚部を有する。脚部の透しは有していない。7世紀前半に位置づけられる。

SK 8320 出土遺物（第16図）　須恵器の蓋（1・2）や甕の破片が出土した。1・2は，やや小型で内面の返りを有し，宝珠つまみを有する。内面の返りは，1が口縁端部と同レベルに，2がやや内方に附されている。7世紀中葉に位置づけられる。

SD 8315 出土遺物（第16図）　この溝からは，須恵器の杯A・杯B・蓋，土師器の杯A・皿A（13），甕や土馬（14）が出土している。小片が多く図化できたものは，13・14のみである。13は，口径 20.8 cm を測り，底部から丸味を帯びてゆるやかに立ち上がり，口縁端部は内側に肥厚させている。口縁部外面には横なでを施し，底部外面は篦削りを行っている。土馬（14）は，尾部及び頭部を欠失し，体部のみの破片である。その他の遺物では，須恵器の杯片等では，体・底部の境のやや内側に高台を附すものが多い。土師器は，状態が悪く調整不明のものが多いが，口縁部外面に横なでを施したものの他，外面篦削りを施したものもある程度認められる。こうしたことから，時期は古い様相を持つ遺物も含まれるが，奈良時代末を下限とすると言えよう。

(4) 小　　結

この調査地区では，古墳時代から奈良時代の土坑や溝，掘立柱建物跡を検出した。SK 8318からは6世紀前半～中葉の遺物がまとまって出土しており，この時期の集落がここに営まれていたことが窺われる。近辺には，右京第76次調査で検出した古墳時代の住居跡群[注12]があり，その集落の一画がここまで及んでいたことを示すものであろう。

SD 8315は，前回報告時には，当初遺物にやや古い様相のものが目立っていたことと，斜めに流れ込む SD 8316 の関係から，西三坊大路の側溝としては保留していたが，前述した様に，遺物を子細に検討してみると，奈良時代末期の特徴を備えていることが判明した。また SD 8315 の国土座標値[注13]は Y＝－28,434.0 を測り，朝堂院中軸から1尺 29.54 cm として模式的に割り付けた西三坊大路中軸は，国土座標の Y座標が －28,435.5 となり，ほぼ推定中軸線近くに SD 8315 は位置する。しかし近年の調査では，西一坊大路[注14]のように割り付け心ちかくに道路側溝が位置するものが発見されている。こうしたことから SD 8315 については，西三坊大路東側溝の可能性も充分存在する。ただ，SD 8315 に SD 8316 が斜めに流れ込んでいることや，SD 8315 が北のAトレンチで検出されていないなど若干の問題を残す。今後の周辺の調査に期待したい。

この他，SD 8315 に削平を受けた掘立柱建物跡や溝が存在する。建物跡については，遺物

が小片で時期決定に決め手を欠くが，SD 8315 の出土遺物のなかに奈良時代のものがあるので，この時代の建物跡と考えておきたい。溝 (SD 8317) は遺物から7世紀前半に位置づけられ，この地に7世紀から8世紀にかけての集落が存在していたことが判明した。この集落は，右京第26次調査[注15]からみて北へ及んでいたものとみられる。また東方の右京第143次調査でも7世紀以降の掘立柱建物跡が検出されており[注16]その関連も考えられる。

3.　西ノ口地区の調査

この地区は，長岡京跡の右京三条三坊十三・十四町に当り，西三坊大路や三条第2小路，三条大路の推定地でもある。また東方約400mには乙訓寺が存在し，さらにこの乙訓寺近辺から東へかけては，弥生時代から古墳時代にかけての集落が検出されている[注17]。

この地区の調査は，北半部を右京第83次調査として昭和56年度に，南半部を右京第105次調査として昭和57年度に実施した。

(1)　調査の経過

昭和56年度の調査は，D～Hの5つのトレンチを入れ昭和56年11月5日からD・Eトレンチ部分に人力で試掘トレンチを入れ，層位を確認した後，11月10日から重機を入れ，盛土・耕作土・床土を除去し，以後人力で遺構検出作業にはいった。F～Hトレンチについても，11月15日から重機にて盛土等の除去を行い，以後遺構検出作業にはいった。

D・Eトレンチは，厚さ0.4～0.6mの盛土・耕作土・床土を除去すると，部分的に暗褐色粘質土の包含層が存在するが黄色粘土層の地山となり，この面で奈良・平安時代の掘立柱建物跡や井戸，溝，土坑を検出した。

F～Hトレンチでは，約0.6～1.0mの盛土・耕作土・床土を除去すると，灰褐色粘質土の土器包含層が約0.1～0.3mの厚さで存在する。この層には，中世の遺物が含まれ，奈良・平安時代の遺物も混じって出土する。この層を除去した段階で，黄色粘土乃至黄褐色粘質土の地山となり，この面で種々の遺構を検出した。Fトレンチでは，地山上に暗褐色粘質土の土器包含層が部分的に存在する。

F～Hトレンチでは，まず東西乃至南北方向に縦横に走る深さ約0.5～0.15m，幅約0.2～0.3mの素掘り溝群を検出した。この素掘り溝群は，埋土が灰褐色粘質土と褐色粘質土のものがあり，前者が後者を削っている。この溝群は，Fトレンチで顕著に認められた。Fトレンチでは，トレンチ中央で南北方向の灰褐色粘質土で埋った幅約3.5mの素掘溝を当初検出したが，これは掘り下げた結果，幅約0.3mの素掘り溝が数次に亘り掘り込まれたもので

あることが判明した。またトレンチ南端から約三分の一のところに東西方向の素掘り溝があり，これより南へは，素掘り溝は及んではおらず，下層で長岡京の三条第２小路の北側溝である SD 8355 を検出した。これらの素掘り溝を掘り下げ，奈良・平安時代の掘立柱建物跡や溝，土坑等を検出した。Hトレンチでは他に，東西方向に流れる中世の大溝や，弥生・古墳時代の溝・土坑を検出した。

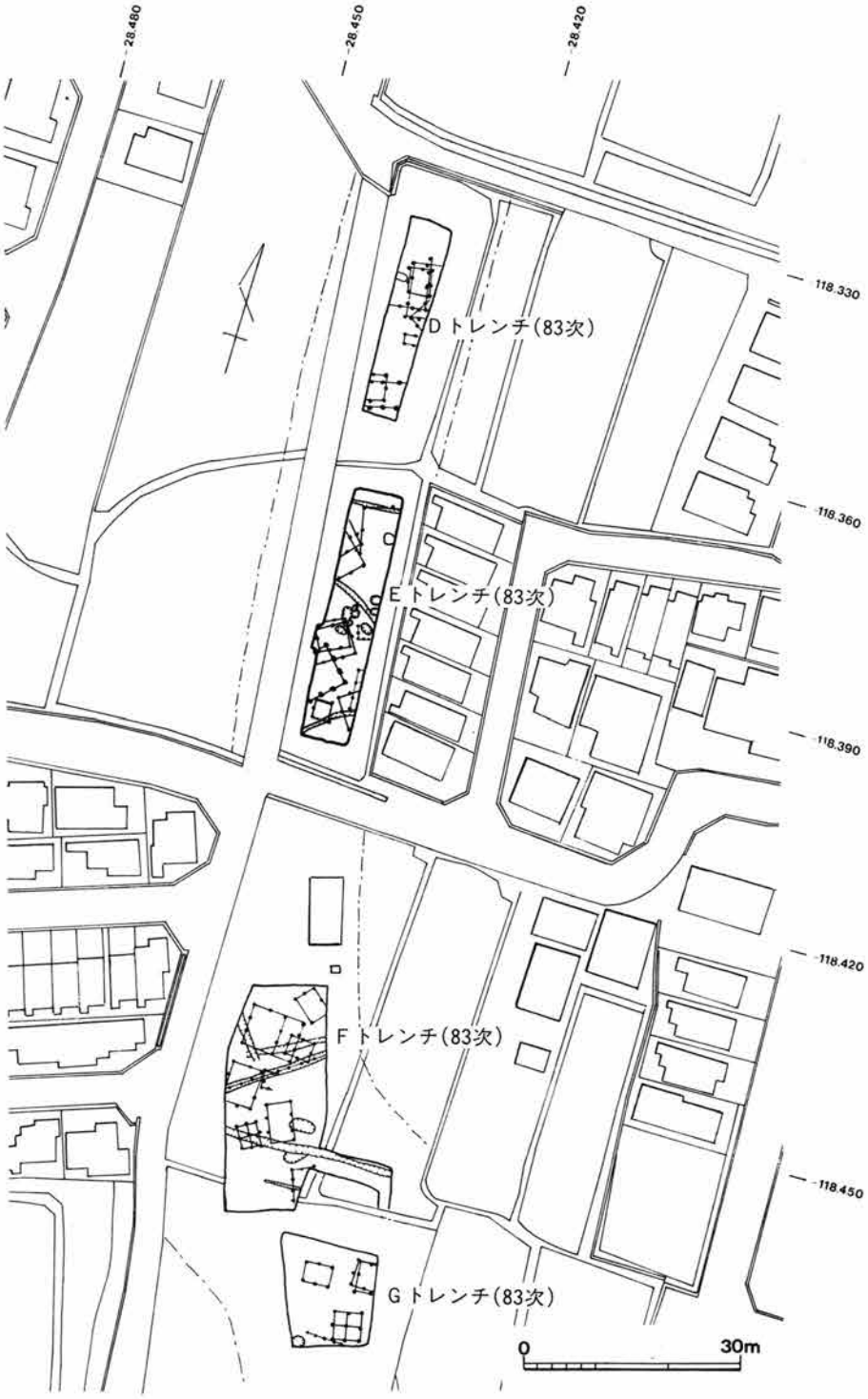
これらの各トレンチのうち，E・Fトレンチの一部を長岡京市都市計画課の許可を得て拡張し，その後写真撮影及び図面作製作業を行い，昭和57年３月17日に藤ノ木地区と併わせて現地説明会を実施し，３月25日から現地の埋め戻しを行い，３月29日に終了した。

昭和57年度の調査は，前年度調査地の南に当り，A～Dの４つのトレンチを設定した。調査は昭和57年７月11日から測量を開始し，７月16日から重機を入れて盛土・耕作土・床土を除去し，以後人力で遺構検出作業にはいった。ただ，この地区に入れた４つのトレンチのうちCトレンチは，遺構・遺物は存在せず盛土直下で近現代の物を含んだ暗灰色粘土の堆積があるのみで，トレンチの壁の崩落も著しく危険であるため，写真撮影と土層図を作製して，即日埋め戻した。

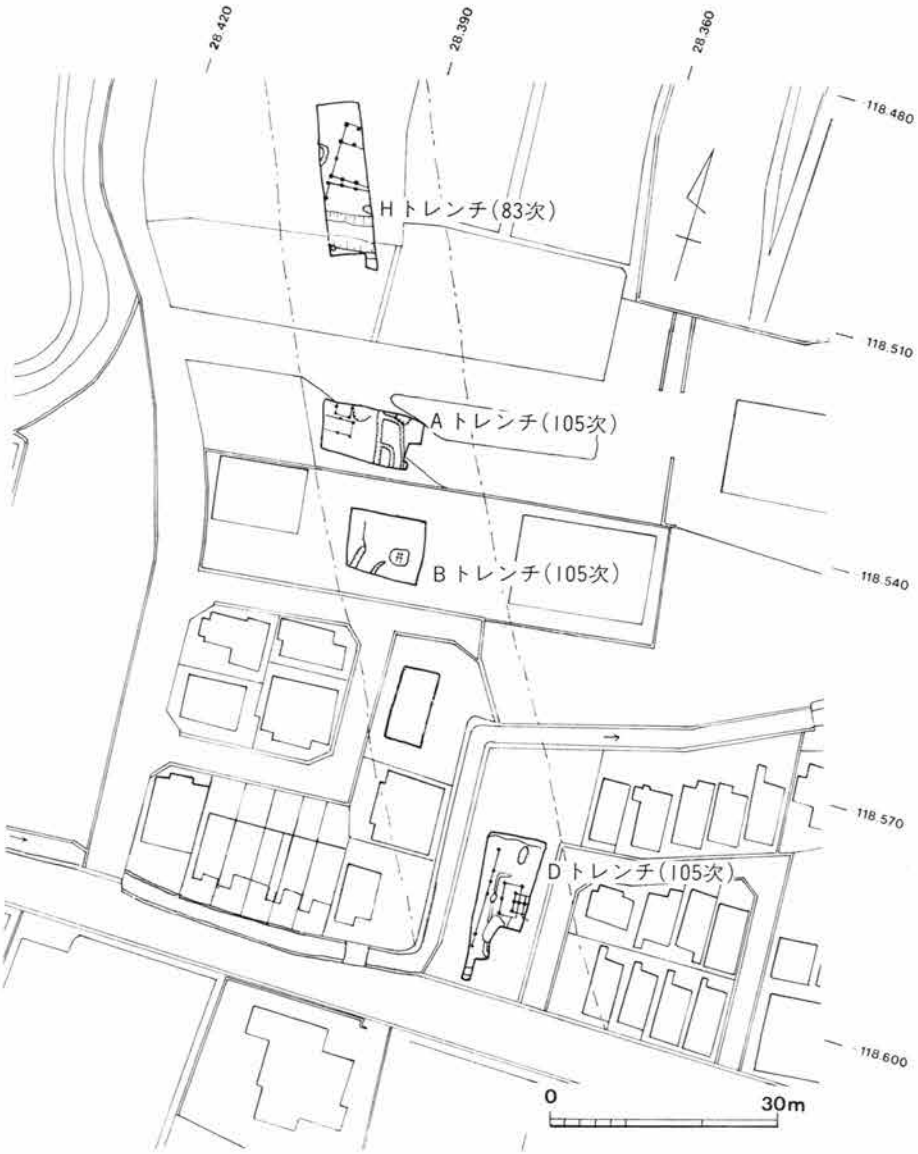
Aトレンチでは，床土の下に厚さ約0.2～0.4mの中世遺物を含む灰褐色粘土層が存在し，これを除去したところで黄褐色粘質土層の地山となる。この面で中世の掘立柱建物跡や溝・土坑等を検出した。このAトレンチでは，南北に延びる溝 (SD 10506) を境として地山面が西側で低くなり，西側には柱穴が集中的に見られた。Bトレンチでは，床土直下で黄褐色粘土の地山となり，中世の石組み井戸や溝等を検出した。

Dトレンチは，約 0.2～0.3m の盛土を除去すると，褐色砂質土層の土器包含層が薄く約0.1m 存し，この下に褐色粘質土乃至黄褐色粘質土層があり，この上面で中世の土坑や溝・柱穴・土器溜り等を検出した。このトレンチでは黄褐色粘質土の地山は，トレンチ南半部では遺構面をなしているが，北半部では砂礫層等によって削られ北に向って下がっており，その上に褐色粘質土層が堆積し遺構面となっている。褐色粘質土層からは，少量の中世の遺物が出土し，集落を形成する段階での積土であろう。また，Dトレンチを一部南へ拡張し，南端部で東西方向の溝 (SD 10541) を検出したが，この溝から南は，遺構面が一段低くなっている。

この地区では，奈良・平安時代や古墳時代の遺物も出土しているが，遺構としては中世のものを検出したのみである。写真撮影・平面図作製後断ち割りを行い，下層遺構の無いこと

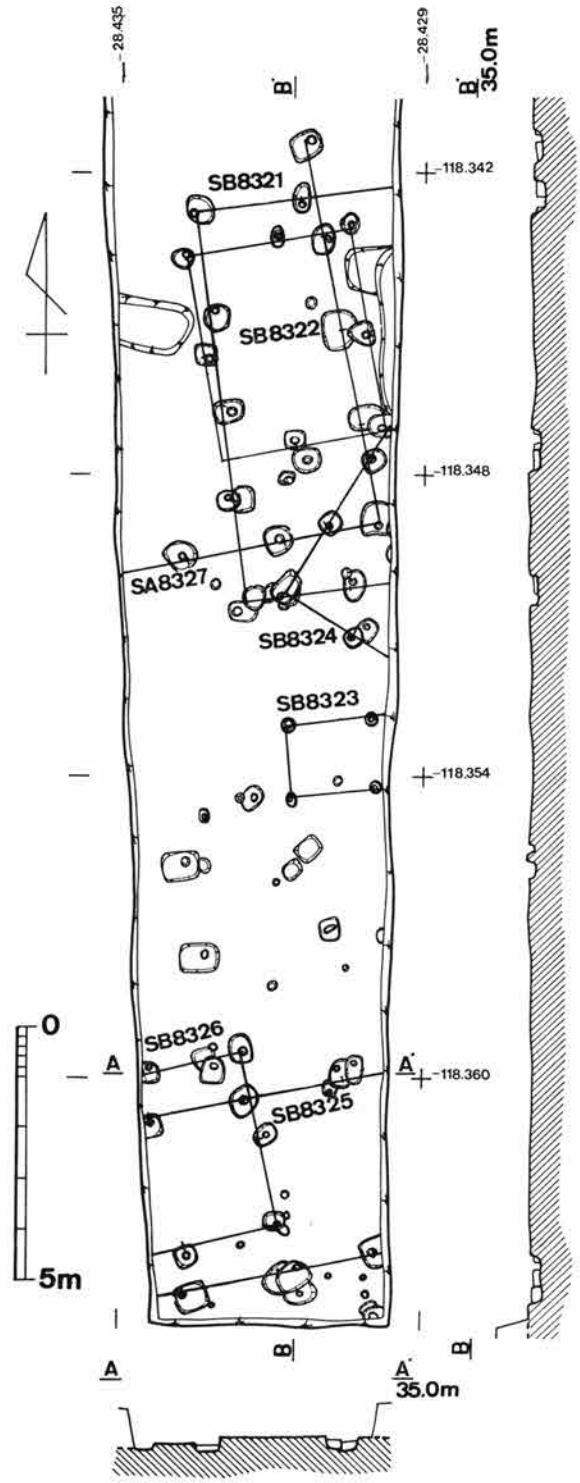


第17図　西ノ口地区調査図(1)



第18図　西ノ口地区調査図(2)

を確認し，昭和57年9月15日に藤ノ木地区のEトレンチとともに関係者説明会を行い，9月30日にBトレンチの井戸を除き埋め戻し，10月15日にはBトレンチの井戸も埋め戻し，現地調査を終了した。



第19図　Dトレンチ（83次）検出遺構実測図

(2) 検出遺構

この地区では，奈良・平安時代の掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝の他，弥生・古墳時代の土坑・溝・中世の掘立柱建物跡，土坑，溝等を検出した。このうち昭和56年度調査地では，奈良～平安時代にかけての掘立柱建物跡，溝，土坑等を検出し，他にHトレンチでは，弥生・古墳時代の土坑，溝等を検出した。この他各トレンチにおいて素掘り溝群を検出している。57年度調査では，中世の掘立柱建物跡や井戸・土坑・溝等を検出した。

これらの遺構を以下に各トレンチごとに述べたい。

Dトレンチ（83次調査）　奈良・平安時代の掘立柱建物跡6棟・柵列1を検出した。建物跡は，トレンチの北半部と南半部に分かれて存在する。

SB 8321・8322・8324　トレンチの北半部で検出した建物群で，重複して存在し，SB 8321は，南北4間・東西1間以上を有する南北棟（N7°W）で，東側の側柱列はトレンチ外に存在し，東西方向の規模は不明であるが，2間×4間の建物と推定される。柱穴は，1辺約0.4～0.6mの方形の掘形

を有し，柱間は，南北方向（桁行）約1.95m，東西方向（梁行）約2.1mを計る。SB 8322は，南西隅の柱穴を検出していないが，南北2間東西2間の南北棟（N8°W）で，規模は，南北約4.2m東西約3.6mを有する。柱間寸法は，南北方向（桁行）約2.1m，東西方向（梁行）は南側の柱列が約1.8m等間，北側は不揃いで，約1.5mと約2.1mを測る。SB 8324は，南北2間分，東西1間分を検出しているが，それぞれトレンチ外に延び，東西2間以上，南北3間以上の規模を有する南北棟（N23°E）になると思われる。柱間は南北約2.1m，東西約19.5mを測る。

SA 8327　トレンチの北半部で検出したL字形に曲がる柵列である。南北方向に4間東西方向に2間以上の規模を有する。掘形は，1辺約0.5～0.8mと比較的大きく，また南北方向の柵列のうち南から3つの柱穴は，他の柱穴に比べ大きな掘形を有している。建物跡の可能性もあるが，西側に対応する柱穴が検出されていないことなどから，一応柵列とした。柱間は，南北方向約2.1m，東西方向約1.8mを測り，トレンチ西方にこの柵列に囲まれた建物跡が想定される。方位は，N7°Wを測り，SB 8321やSB 8325とほぼ同じである。SB 8322の柱穴を削っている。

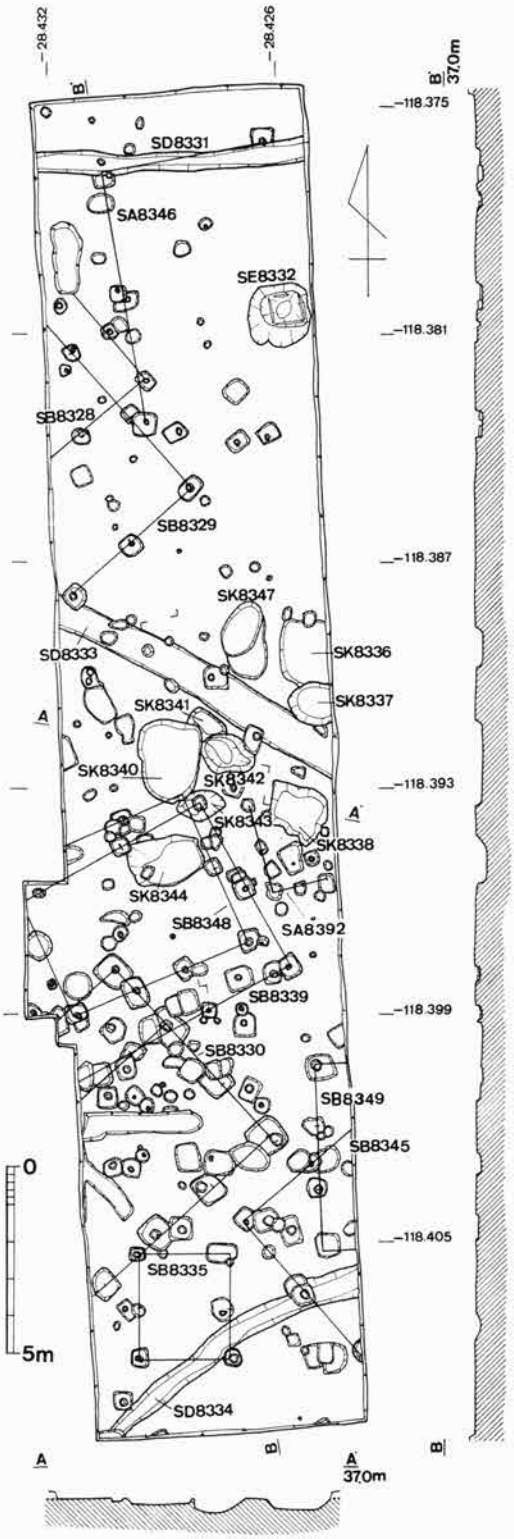
SB 8323　SB 8321等の南側で検出した建物跡で，南北1間，東西1間以上の東西棟（N4°W）である。柱間は，南北方向（桁行）約1.35m，南北方向（梁行）約1.95mを測る。

SB 8325・8326　トレンチの南半部で検出した建物跡である。SB 8325は，東西方向に2間分を確認し，東西の妻はトレンチ外に存在する。南北2間，東西4間以上の東西棟(N10°W）である。柱間は，南北方向（梁行）約1.8m，東西方向（桁行）約1.95mを測る。柱穴は，1辺が約0.4～0.6mを測るやや隅丸長方形の掘形を有する。また，この建物を削ってつくられた柱穴が在る。SB 8326は，SB 8325と重複し，南北2間，東西1間分を検出し，西側の妻はトレンチ西方に存在し，南北2間，東西2間以上の東西棟（N11°W）である。柱間は，SB 8325と等しくSB 8325・8326はほぼ同方位・同規模で建て替えられている。ただ，柱掘形は，1辺約0.3～0.5mとSB 8326が一回り小さい。

Eトレンチ（83次調査）

このトレンチでは，奈良・平安時代の掘立柱建物跡8棟・柵列2・井戸1基・溝3条・土坑10基等を検出した。

SB 8328・8329　トレンチ北端部で検出したもので，ともに方位はN42°Wを測る。SB 8328は，南北方向柱列の柱穴が予想されるところに攪乱があり東西・南北方向とも1間

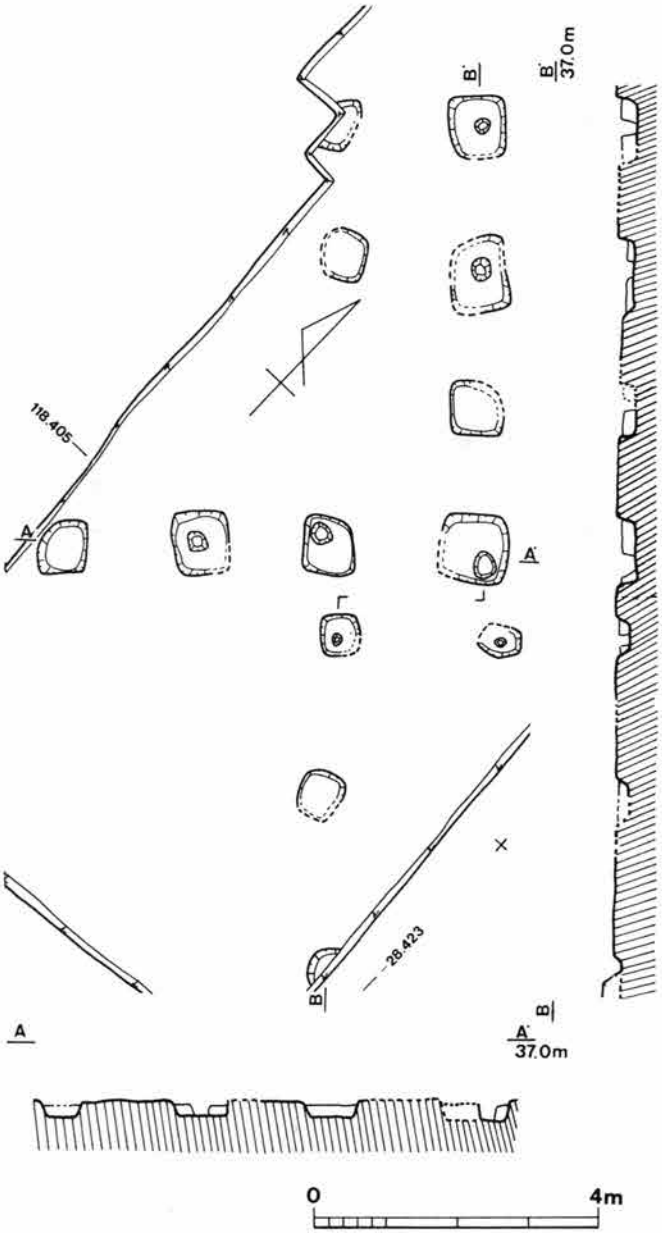


分を検出したのみである。SB 8329は，東西・南北方向とも2間分を検出している。SB 8332は，柵列 SA 8346の柱穴によって削られている。また棟方向は，SB 8330とほぼ同方位である。

SB 8335・8349　トレンチ南半部で検出した建物跡で，SB 8335は N 0°，SB 8349は N2°Wとほぼ真南北方向に建てられている。SB 8325は，東西1間南北2間の南北棟で，東西（梁行）約2.4m，南北（桁行）約4.2mの規模を有する。柱穴の掘形は1辺約0.3～0.4mと他のものに比べやや小さい。SB 8349は，南北3間の規模を有し，トレンチ東側へ延びる。柱間は，約1.95mを測り，柱掘形は，南北両端の柱穴が1辺約0.4～0.5mと中央の2個の柱穴より一回り大きい。

SB 8330・8345　トレンチ南半部で検出した同方位の建物跡である。SB 8330は，南北3間東西3間以上の東西棟（N42°）で，北側に廂を有する。このSB8330の柱掘方の規模は，藤ノ木地区のSB 8381・8382がややずれており問題を若干残す。とともにこの調査で検出した掘立柱建物群中最大であり1辺約0.7～0.9mを測る。柱穴の1つは，SB 8348

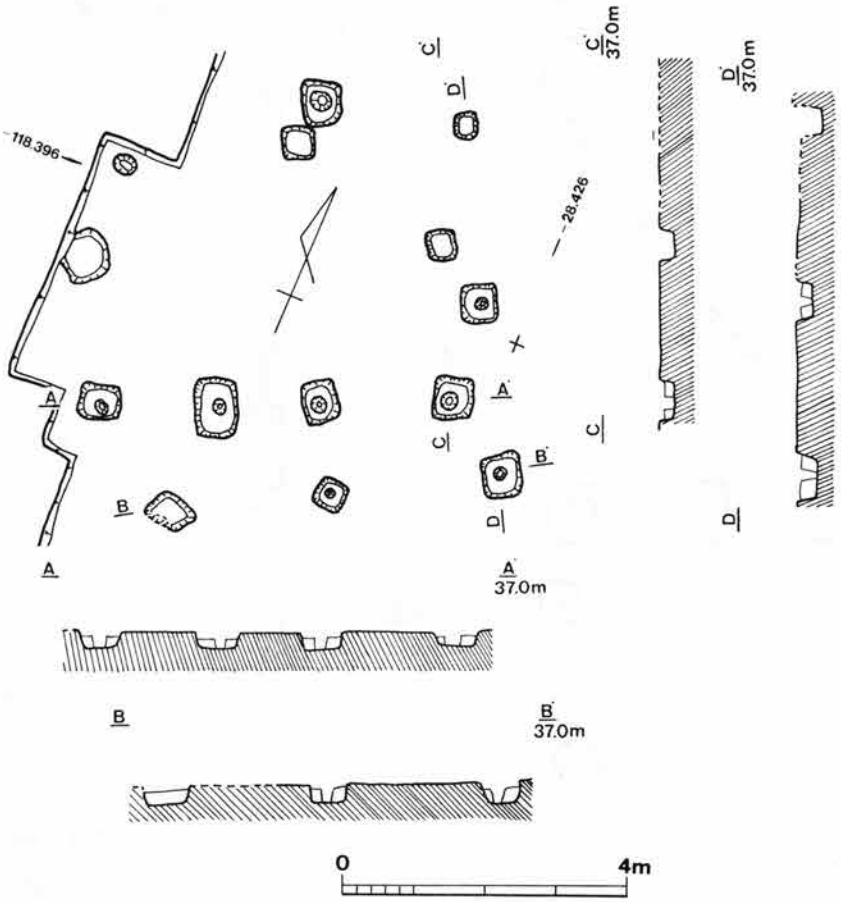
第20図　Eトレンチ(83次)検出遺構実測図



第 21 図　SB8330・8345 実 測 図

の柱穴によって削られ，柱間は，東西方向(桁行)約1.95m南北方向(梁行)約2.1mを測る。SB 8345は，南北2間以上，東西1間以上の建物跡で，トレンチ東方へ延びる。柱間は，東西・南北方向とも約2.4mを測る。柱掘形は1辺約0.3～0.5mを有し，西側の南北方向の柱列が，SB 8330と柱筋を揃えている。ただ，SB 8330と同時に存在したと考えるには，柱心々で約1.2mと近接しており，軒の出などを考えると問題が残る。

SB 8339・8348　SB 8330の北側で検出した建物跡である。SB 8339は南北2間，東西2間以上の東西棟（N29°W）で，SB 8348も南北2間，東西3間の東西棟(N24°W)である。柱間は，前者が東西方向(桁行)約2.4m，南北方向（梁行）約2.55m，後者が東西方向（桁行）約1.95m，南北方向（梁行）約2.1mを測る。SB 8348はSB 8330の柱穴を削っており，SB 8330より後出するものである。SB 8339・8348の前後の関係については，わずかに掘形が接するのみで不明である。また両者の北東隅の柱穴は，長岡京



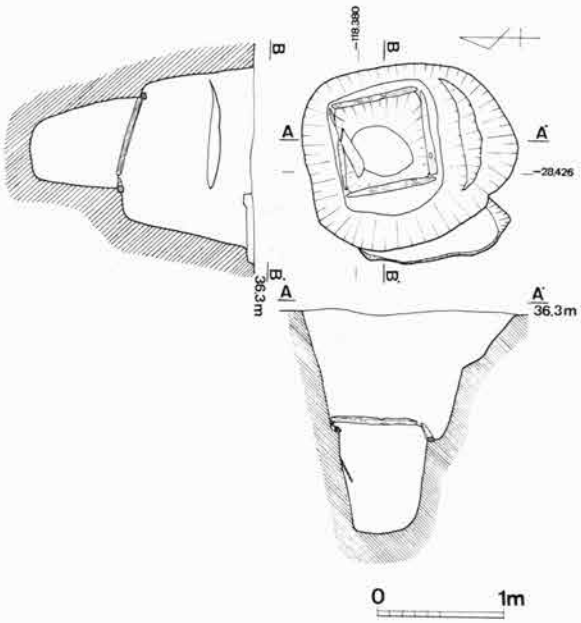
第 22 図　SB8339・8348 実 測 図

期前後の遺物を出土する SK 8343・8340 によってそれぞれ削られ，SB 8339の柱穴は，わずかに底部を確認したにとどまる。

SA 8346・8397　SA 8346 は，トレンチ北部で検出した柵列で，井戸 SE 8332 をL字状に囲んでいる。南北2間，東西2間以上の規模で，SD 8331 により削られ，東西方向の柱穴の1つは消滅している。SB 8328 の柱穴の1つを削り，これより後出するものである。柱間は，南北方向約3.3m，東西方向約2.1mを測る。SB 8332 の井戸枠やDトレンチで検出した SB 8321 や SB 8325 とほぼ同方位を示している。SA 8397 は，トレンチ中央東端で検出したL字形に屈曲する柵列である。南北2間，東西2間分を検出した。柱間は，南北方向約1.2m，

東西方向約0.75mを測る。対応する柱穴が検出されなかったので柵列としたが，建物跡であった可能性もある。

SE 8332　トレンチ北部で検出したもので，掘方の1辺約1.6m，深さ約1.8mを測る。井戸枠の最下部の横木が残存しており，それぞれ柄穴を有している。井戸枠は，1辺約0.7mを測り，井戸内には板材が落ち込んでいる。井戸を廃棄したおりに上部は破壊され，最下部のみが残ったものであろう。井戸内からは，奈良時代後半から末期の遺物が出土し，奈良時代末期の特徴を示す遺物は井戸を埋め込んだ土から出土している。このことから，この井戸は奈良時代後半に築造され，長岡京造営に伴い廃棄されたものであろう。



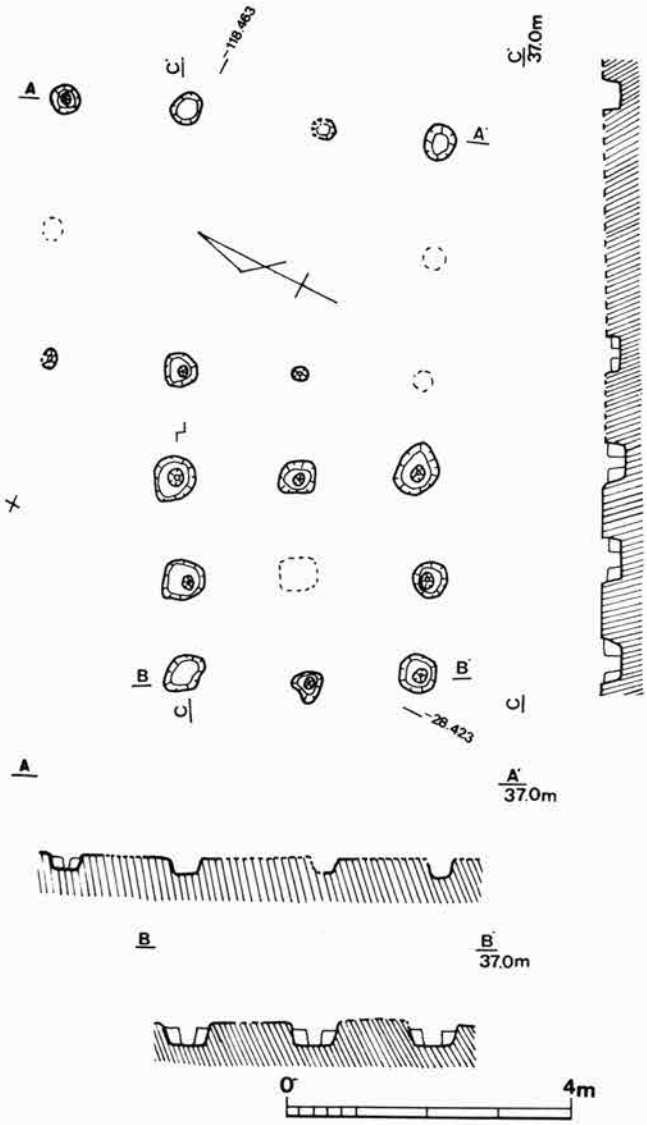
第23図　SE8332 実測図

SD 8331・8333・8334　SD 8331は，トレンチ北端部で検出した溝で，幅約0.6m，深さ約0.1mを測る。ほぼ真東西方向に延び，SA 8397の柱穴を削っている。褐色の砂質土で埋まり，土師器の小片が出土したのみで時期判定に苦しむが，奈良時代の遺構を削り，真東西方向に延びていることから長岡京期のものと考えられる。また，この溝は，三条条間小路の推定心から1町の約四分の一のところに位置する。町内の宅地割りの溝の可能性がある。

SD 8333・8334は，トレンチ中央と南端部で検出した溝で，SD 8333は北西から南東へ延び幅約1.2m，深さ約0.1mを測り，SD 8334は南西から北東へ彎曲しながら延び幅約0.6～0.8m，深さ約0.15mを測る。両者ともSB 8329やSB 8345等の掘立柱建物に削られており，SB 8345等より先行する時期のものである。遺物は小片で，明確な時期決定はできないが，古墳時代の遺物は含まれておらず，奈良時代に納まるものであろう。また埋土は褐色粘質土で，水が常時流れていた形跡はなく，集落内の地境溝的性格を有するものであろう。

その他の遺構　トレンチ中央でSK 8336以下9基の土坑を検出した。SK 8336は，南北長約1.8m深さ約0.2m，SK 8337は，南北長約1.1m深さ約0.3m，SK 8338は，南北長約

1.3m東西長約1.4m，深さ約0.3mを測り，奈良時代の遺物が出土した。SK 8340は，南北長約2.1m東西長約1.3m深さ約0.15mを測る長円形の土坑で，埋土に炭が混じっている。SK 8341・8342・8343を削り，奈良時代末期の遺物を出土する。SK 8341・8342・8343は，SK 8340に削られた不定形土坑で，SK 8341が東西長約1.2m深さ約0.3m，SK 8342が東西長約1.5m深さ約0.3m，SK 8343が東西長約1.5m深さ約0.3mを測る。SK 8344は，南北長約1.2m東西長約1.8m深さ約0.2mを測る。SK 8347は，南北長約1.5m東西表約0.9m，深さ約0.1mを測る。各土坑の時期は，出土遺物等から，SK 8340・8347を除き奈良時代に位置づけられる。

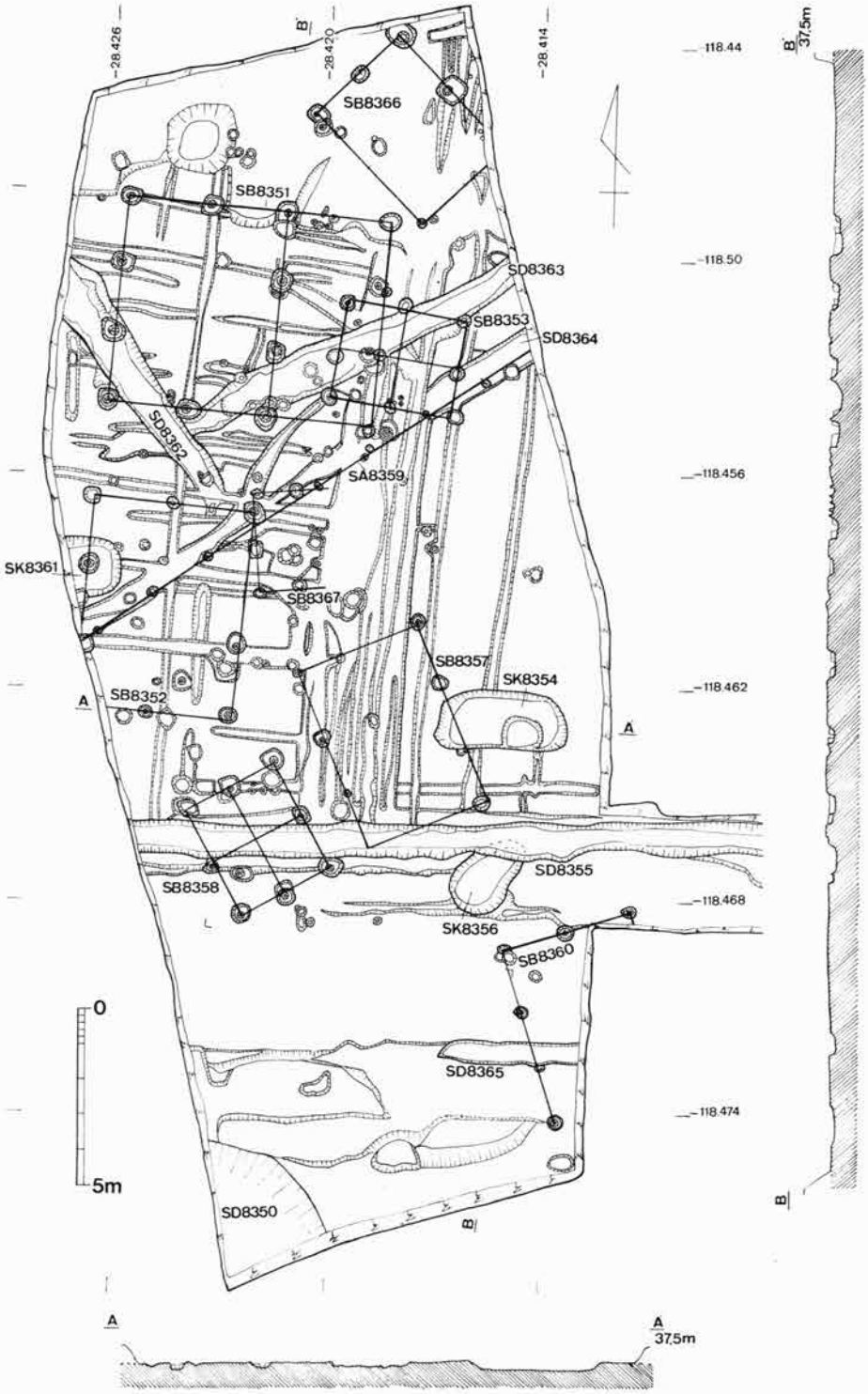


第24図　SB8357・8358 実測図

Fトレンチ（83次調査）

このトレンチでは，奈良・平安時代の掘立柱建物跡8棟・柵列1・溝2・土坑3の他，古墳時代末期の土坑や中世等の素掘り溝群等を検出した。

SB 8357・8358　SB 8357は，南北方向(桁行)約5.4m東西方向(梁行)約3.6mの規模を有する南北棟（N 22°W)である。桁行は3間を有し，梁行は，間柱が素掘り溝の為削平を受けているが，柱間距離から2間を数えるものであろう。またSK 8354や三条第2小路北側溝であるSD 8355も柱穴を削平している。



第25図　Fトレンチ(83次)検出遺構実測図

SB 8358 は，SB 8357 の西で検出した南北2間東西2間の建物である。SD 8355 によって削平を受け，中央の柱穴は消滅しているが，総柱の建物であったと思われる。南北方向約3.6m東西方向約3mの規模を有し，方位は N28°W を測る。両者は SA 8359 によって，北の建物と区切られ，SB 8360 とともに1グループをなしている。SD 8355 等に先行する奈良時代の建物である。建物としてはまとまらなかったが，SB 8358 に削平を受けた柱穴が存在し，この建物より先行する建物があったものと思われる。また柱穴は，1辺約0.4～0.6mを測る方形の掘形を有する。

SB 8360　トレンチ南東部で検出した東西2間南北3間以上の南北棟（N16°W）で，柱間は，梁行・桁行とも約1.8mを測る。柱穴は，掘形の1辺が約0.3～0.4mを測る。柱穴の1つが長岡京の三条第2小路南側溝と考えられる SD 8365 によって削られている。また北東隅の柱穴を削って他の柱穴が存在し，ここは三条第2小路の路面内となるので，この建物と三条第2小路の築造時期の間に，他の建物が存在していた時期がある。

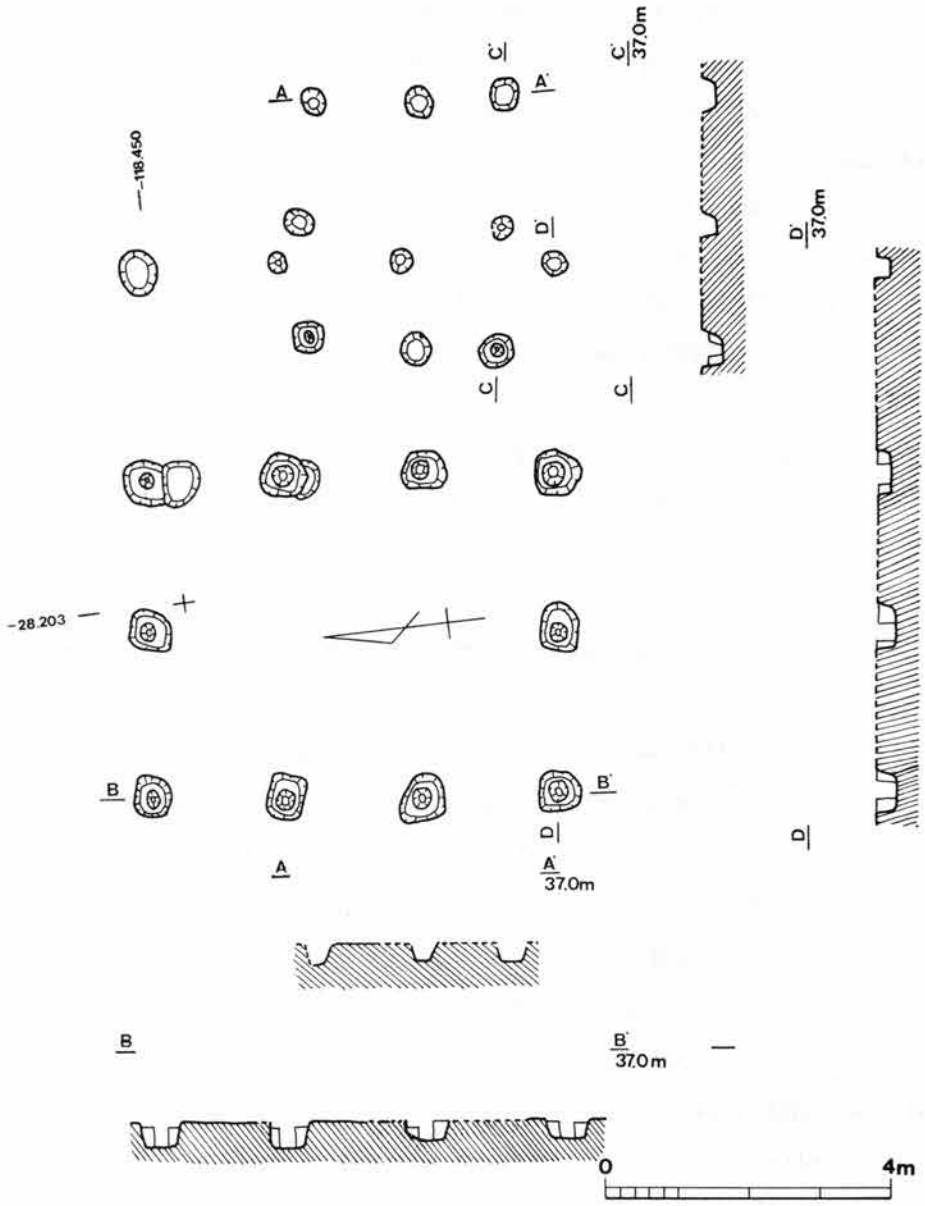
SB 8366　トレンチ東北部で検出した南北2間，東西2間の南北棟（N45°W）である。この近辺は後世の削平の為，遺構面が落ち込み，柱穴も一部欠失している。規模は，南北方向（桁行）約4.2m，東西方向（梁行）約3.3m を測る。今回の調査で検出した掘立柱建物中もっとも西へ傾いている。柱穴は，残りのよい東側の柱列のもので1辺約0.5～0.7m と比較的大きい。

SB 8367　トレンチ中央で検出した南北2間，東西1間以上の建物である。東側の柱穴は削平を受け消滅しているが，さらに東へ延び東西棟（N6°W）になるかと思われる。柱間は，南北方向（梁行）約1.5m，東西方向（桁行）約1.2mを測る。SB 8352 や SA 8359 と重複し，SD 8364 が埋った後築造されている。

SB 8351・8352・8353　SB 8351 は，南北3間東西3間の南北棟（N5°E）で，東に廂を有する。規模は，南北方向（桁行）約5.85m，東西方向（梁行）約7.5mを有し，柱間は，南北方向（桁行）が約1.95m，東西方向（梁行）が身舎部分で約 2.25m，廂部分で約3mを測り，廂の柱間が広い。柱穴は，1辺約0.4～0.6mを測る方形の掘形を有する。

SB 8352 は，SB 8351 と柱筋を揃えた南北3間，東西2間の南北棟（N5°E）である。柱間も SB 8351 と等しく建てられているが，廂は有していない。SB 8351 と同方位・同規模で建てられており，同時期に存在したものであろう。柱穴の掘形は1辺約0.4～0.5mと SB 8351 より一回り小さい。

SB 8353 は，SB 8351 の廂部分と重複しており，東西・南北ともに2間を有する建物であ



第 26 図　SB8351・8353 実 測 図

る。中央の柱穴は検出していないが，後世の削平により失われたものと思われ，総柱の建物と考えている。SB 8351 よりやや東へ傾き，方位はN6°Eを測る。

3棟の建物とも，SD 8362・8363 等の奈良時代の溝を1部削り，柱穴内からは土師器片が少量出土している。また平安時代以降形成された素掘り溝群に柱穴が削平を受けている。建

物の方位もほぼ南北方向であり，位置関係から SD 8355 を意識して築造したと思われるが，SD 8355 の方位が真東西方向を示すのに対し，素掘溝群と同様北に対し東へ 5° 前後振っており，長岡京期の SD 8355 より，やや時期の下がるものと考えたい。

SA 8359　トレンチ中央を南西から北東へ延びる柵列で，東に対し 57° 北へ振っている。トレンチ内では7間分を検出し，さらにトレンチ外へ延びると思われる。柱間は約 1.8m を測るが，東から3間目の1間分のみ約 2.1m を測り，ここが出入口となっていた可能性がある。この柵列は，SD 8364 が埋った後に作られ，方向もほぼ揃っている。この柵列は，SB 8357 等の建物群と北方建物群を画するものであり，SB 8357 等と時期を同じくするものであろう。

SD 8355・8365　トレンチの南半部で検出した東西方向の溝で，出土遺物・検出位置から三条第2小路の南北両側溝と推定される。SD 8355 は，幅約 0.8～1 m深さ約 0.3m を測り，真東西方向に延びている。埋土は，上層の暗褐色粘質土と下層の若干砂を含んだ暗灰褐色粘質土に分かれ，溝底にはわずかに砂層の堆積が認められる。水が流れていた形跡を示して，水量はさほど多くなかったものと思われる。SD 8365 は，幅約 0.6 m，深さ約 0.12 m を測り，西へ向って浅くなり消えている。また拡張部の東端を南へ延長したが検出されず，全般に残存状況は良くない。SD 8355・8365 の溝心々間は約 5.8 m を測り，両溝に挟れた路面幅は約 5 m である。共に出土遺物は少なく，須恵器の甕・蓋・杯，土師器の杯・皿等の破片が出土している。両溝の国土座標値は，SD 8355 が X＝－118,466.2，SD 8365 が X＝－118,472.0 である。(注18) なお SD 8355 を踏襲して褐色粘土と灰褐色粘土の2本素掘り溝が掘削されている。この溝位置が，長岡京廃都後も意味を持っていたことが判る。

ただし三条第2小路の南側溝は，左京第2次調査や右京第32次調査で検出されている(注19)が，それらに比べ約 3 m北で SD 8365 を検出した。

SD 8362・8363・8364　トレンチ中央部で検出した溝で，SD 8363・8364 は南南西から東北東へ延び，SD 8362 は南東から北西へ延びる。SD 8362 は，幅約 0.8～1.4m 深さ約 0.25 mを測る。SD 8363 を削り南へ向って浅くなり，SD 8364 の直前で消える。SD 8363 は，幅約 0.8～1.4m 深さ約 0.3m を測り，西へ向って浅くなり消える。SD 8364 は，幅約 0.8～0.9m 深さ約 0.2m を測り，途中幅約 0.4m の細い溝が分枝している。分枝した溝は，SD 8363 の直前で浅くなり消え，関係は不明である。

溝中からは，奈良時代の遺物が出土する。SD 8363・8364 は，方位がほぼ同じである。いずれの溝も水が常時流れていた形跡はなく，また SA 8359 が，SD 8364 の位置を踏襲してい

ることから，集落内の住居群を画する地境溝であろう。SD 8363・8364 の出土遺物は，後者がやや古い傾向を示す。

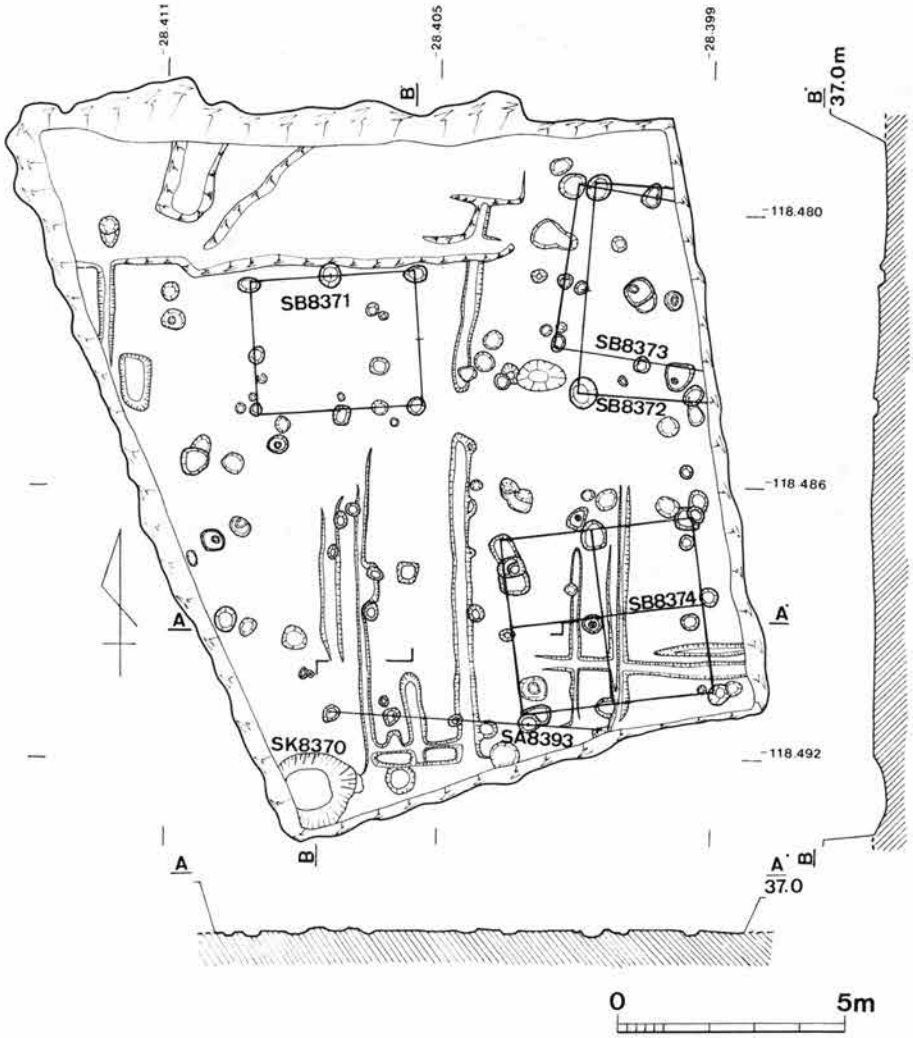
SK 8354・8356・8361 SK 8354 は，SD 8355 の北約2mで検出した，長軸を東西方向に持つ長円形の土坑である。長径約3.8m，短径約1.6m，深さ約0.3mを測り，SB 8357 の柱穴を削っている。土坑内からは奈良時代末期～平安時代初期の土師器・須恵器・瓦が出土した。SB 8351 等に伴うものか。SK 8356 は，SD 8355 によって北半部を削られ，現存長約1.8m幅約1.6m深さ約0.3m を測る卵形をした土坑である。長軸は，南西から北東を向き，SB 8360 等と同様の方位を示す。奈良時代の須恵器片・土師器片が出土する。SK 8361 は，トレンチ中央西端で検出した南北長約1.6m，深さ約0.25mを測る円形の土坑である。口縁の立ち上がりがまったく退化した古墳時代末期の須恵器の杯が出土した。

素掘り溝群 他のトレンチにおいても検出しているが，このトレンチでは，東西・南北方向に縦横に走る素掘りの溝群を特に顕著に検出した。素掘り溝は，灰褐色粘質土で埋った溝群と，これに削られた褐色粘質土で埋った溝群がある。前者は，おおむね南北方向に，後者は東西方向に走る。灰色粘質土で埋った溝群からは瓦器片が出土し，褐色粘質土で埋った溝群は瓦器片を含まず，須恵器・土師器の小片が出土する。このことから，前者は鎌倉時代以降のものであり，後者は平安時代まで逆上る可能性が強い。また前者は，－28.916ラインから－28.920ラインにかけて集中的に何回にもわたり掘り返されている。このラインが中世の土地地割りにおいて何んらかの基準線として意味を有していたものであろう。この素掘り溝は，約5°前後北に対し東へ振れており，右京域における条里痕跡の振れと一致する。(注20) また SD8355 をほぼ踏襲して，両者の溝が存在し，これより南へ及んでいないことは，長岡京廃都後も，条坊側溝の位置が土地地割りに一定の影響力を持っていたことを示している。この溝の性格については，後述する花粉分析等の結果から，水田耕作に伴うものと考えている。

G トレンチ（83次調査）

このトレンチでは，奈良・平安時代の掘立柱建物跡4棟・柵列1・土坑1の他素掘り溝を検出した。北西部は，土地を埋めた際の攪乱で壊されていた。

SB 8371・8374 SB 8371 は，トレンチ西北部で検出した南北2間，東西2間の東西棟（N2°W）で，東西方向（桁行）約3.6m，南北方向（梁行）約3mの規模を測る。SB8374 は，トレンチ南東部で検出した東西・南北方向ともに2間の総柱の建物である。N3°W と SB 8371 と同様の方位を示す。東西方向（桁行）約4.2m，南北方向（梁行）約3.9m の規模を有し，桁行の柱間が不揃いで約1.95mと約2.25mを測る。SA 8393 によって柱穴の一部を削られている。方位が北に対しやや西へ振れており長岡京期直前と考えたい。



第27図　Gトレンチ(83次)検出遺構実測図

SB 8372・8373　トレンチ北半東端部で検出した建物で，重複しており両者とも南北2間，東西1間以上を有し，トレンチ東側へ延びていく。SB 8373 は，東西・南北方向とも柱間約2.4mを測る。SB 8373 の柱間は南北方向約1.5mと約2.1m，東西方向約1.8mを有する。方位は，前者が N2°E，後者が N5°E を測る。SB 8373 は，SA 8393 と同じ方位を示し，同時期のものと考えている。出土遺物は小片で時期は決し難いが，方位や SK 8370 の出土遺物等から平安時代初期～前期に位置づけたい。

SA 8393　トレンチ南端部で検出した東西方向の柵列で，方位は，E5°S を測り，柱間は

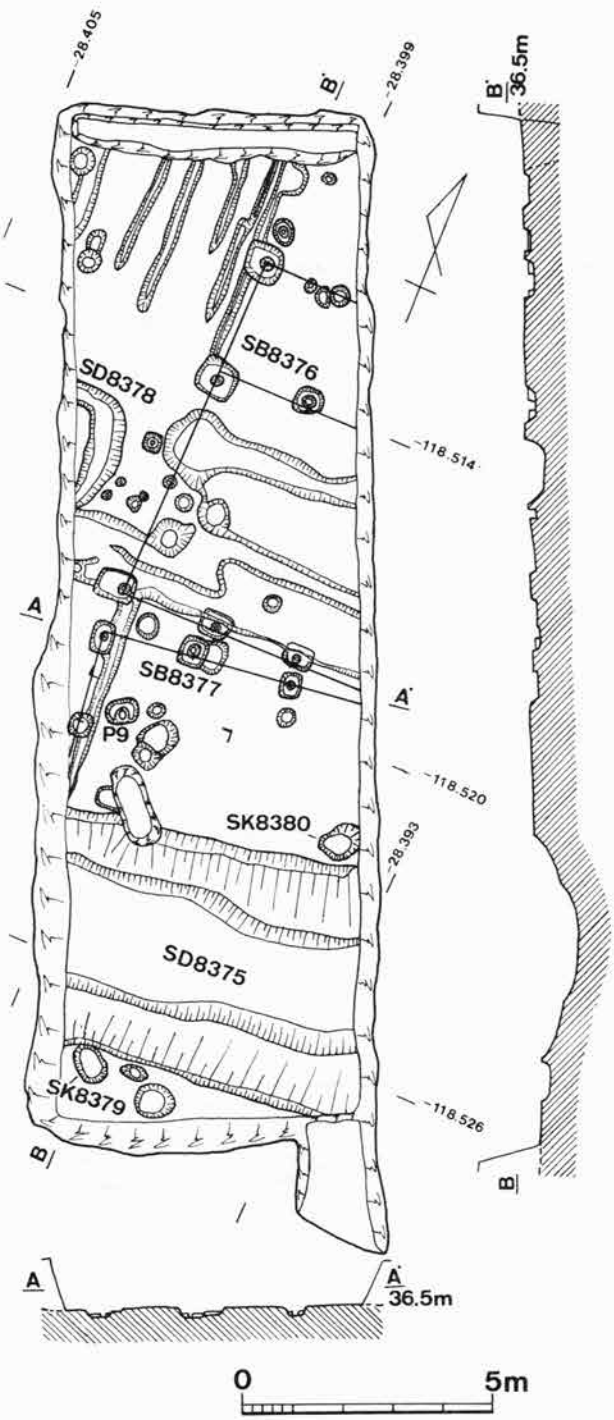
約1.5mを測る。トレンチ内で4間分を検出しており，さらに東へ延びる可能性がある。方位からSB8372と同時期のものであろう。

SK 8370　トレンチの南西部で検出した南北長約1.7m，深さ約0.4mを測る円形をした土坑で，ゆるやかなすり鉢状を呈する。平安時代前期の特徴を示す須恵器の杯や土師器片が出土している。

Hトレンチ（83次調査）

このトレンチでは奈良・平安時代の掘立柱建物跡2棟の他，弥生・古墳時代の土坑2・溝1・中世の大溝を検出した。

SB 8376　SB 8376は，トレンチ北半部で検出した南北3間東西2間以上の東西棟で，北側に廂を持つ。柱間は，南北方向（梁行）が身舎・廂部分とも約1.8mを測る。柱穴は，1辺約0.5～0.7mを測る方形の比較的大きな掘形を持つが，一部の柱穴は掘形を検出できなかった。方位はN0°で，遺物も奈良時代末期の特徴を示し，長岡京期のものであろう。



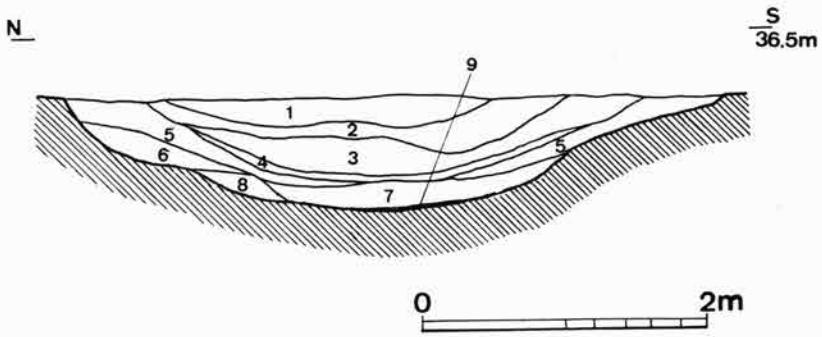
第28図　Hトレンチ（83次）検出遺構実測図

SB 8377　SB 8376 の南で検出した南北2間以上東西3間以上の規模を有する東西棟（N 9°W）南側は中世の大溝 SD 8375 によって削られている。柱間は，東西・南北方向とも約1.8m を測り，柱穴は，1辺約 0.3～0.5m の掘形を持つ。SB 8376 の柱穴とは掘形が接しているのみで前後関係は不明であるが，他の建物の方位例から奈良時代のものと考えている。

SK 8379・8389　トレンチ南半部で検出した弥生時代と古墳時代の土坑である。SK 8379は，SD 8375 の南側で検出した長さ約0.8m，幅約0.4m，深さ約0.25mを測る長円形をした土坑で，布留式の土器が出土した。SD 8375 により一部削平を受けている。SK 8380 はSD 8375 の北で検出した長さ約0.9m，幅約0.6m，深さ約0.3mを測る不定形土坑である。弥生時代中期後半の土器が出土している。

SD 8378　トレンチ西端中央付近で検出した，西から南へL字状に曲がる溝である。幅約0.7m 深さ約0.3m を測り，古墳時代の須恵器が出土した。また近辺の包含層中からは，埴輪が出土しており，規模が小さく古墳の周濠とは考え難いが，何らかの関連を持つものであろうか。

SD 8375　東西方向に延びる大溝で，幅約3m，深さ約0.6mを測る。南北の両肩からゆるやかに下がり，中央部がまた一段下がる。溝底には極めて薄く砂の堆積があり，水は流れていた形跡を示すが，その上に灰色粘土の厚い堆積があり，流れはゆるやかであった模様である。また埋土は，全体に砂質土であるが灰色粘土の薄い堆積が途中の層に見られる。溝中

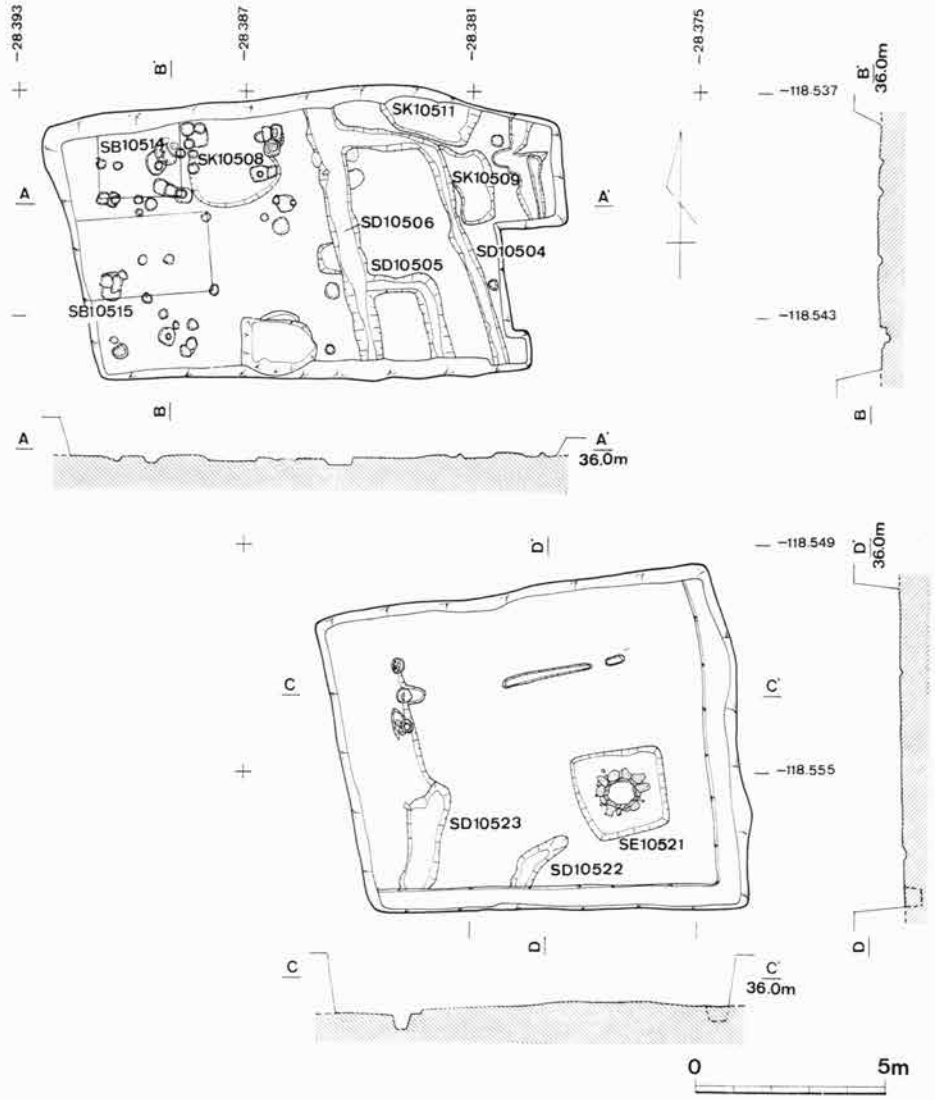


第 29 図　SD8375 土 層 図（28，399 ラ イ ン）

1. 褐灰色粘質土層　2. 暗褐色砂質土層　3. 灰褐色砂質土層　4. 灰色粘土層　5. 混礫暗黄褐色砂質土層　6. 淡灰褐色砂質土層　7. 明青灰色粘土層　8. 混礫黄褐色砂質土層　9. 灰色砂層

から，鎌倉時代後半から室町時代にかけての遺物が出土している。現在，南に風呂川と呼ばれる幅3m程の小河川があり，今回の調査で検出した中世集落の中を貫流している。この時期には，このSD 8375がその小河川であった可能性が強い。

この溝から南では，右京第105次調査で検出した鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡や溝，井戸等が存在するが，北方では，中世の遺構は素掘り溝群のみである。この自



第30図　A・Bトレンチ（105次）検出遺構実測図

然流路が中世集落の北の限りを成していたものであろう。またこの溝の南には土塁や柵列等の存在も考えられるが，検出されなかった。

A トレンチ（105次調査）

このトレンチでは，中世の掘立柱建物跡2棟や溝3・土坑4を検出した。SD 10506 を境に，西半部で集中的に建物跡や柱穴が検出されている。

SB 10514・10515　トレンチ西半部で検出した建物跡である。SB 10514 は，東西2間南北1間以上の規模を有し，トレンチの北へ延びている。南北棟になるかと思われる。柱間は，東西方向（梁行）約1.05m南北方向（桁行）約1.2mを測る。柱穴は，径約0.3mと小さく，他の柱穴や SK 10508 を削っている。SB 10515 は，南北1間東西1間以上の東西棟で，トレンチの西へ延びるものと思われる。柱間は，東西方向（桁行）約1.8m 南北方向（梁行）約2.1mを測る。両者とも約3～5°北に対し西へ振れている。

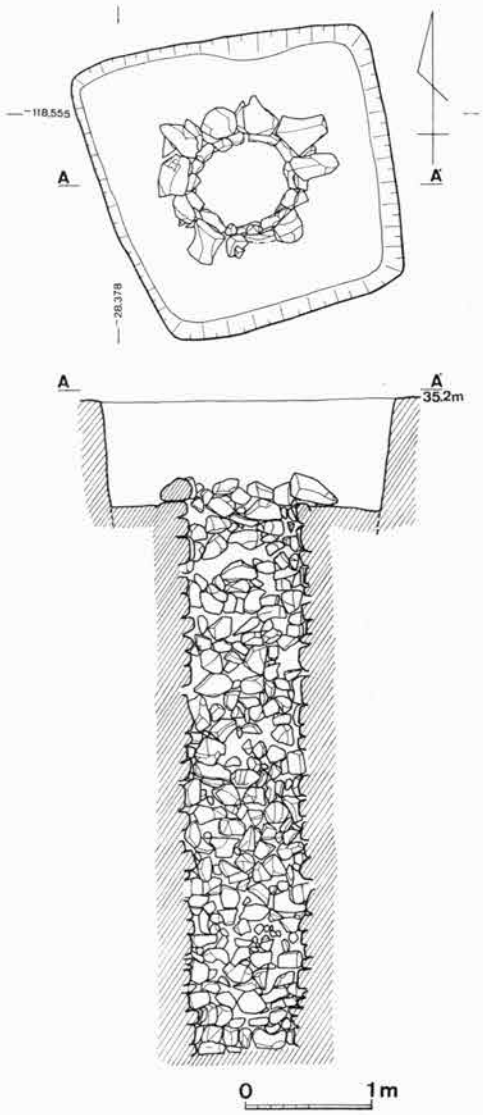
SD 10504・10505・10506　トレンチの東半部で検出した溝で，SD 10504・10505は，SD 10506 から分れ，平行するように東へ向かった後，南へ曲って延びる溝である。前者は，幅約0.4m，深さ約0.1～0.2m，後者は，幅約0.6m，深さ約0.2～0.3m を測る。SD 10506 は，北から南へ，やや東へ振れながら延びる溝で，幅約0.6～0.8m，深さ約0.3mを測る。この溝を境に遺構面が東に比べ西が約0.1m 下がり，溝の西側に建物跡や柱穴が集中的に認められ，集落内の地境溝と思われる。SD 10504・10505 については，両溝の間が道路的役割りを果していた可能性が考えられる。溝中からは，鎌倉時代後半の土師器が出土している。

これらの溝の南への延長は，Bトレンチが A トレンチに比べ後世の削平のためか約0.5m低くなっており検出されていない。ただ，Bトレンチにおいても SD 10506 のほぼ延長上に段差があり，西が約0.1m 低くなる。

SK 10508・10509・10511　SK 10508 は，トレンチ西半部で検出した浅い長円形の土坑で，長さ約2.4m深さ約0.15mを測る。この土坑に削られて柱穴が存在する。出土遺物から鎌倉時代末期のものであろう。SK 10509 は，南北長約1.8m深さ約0.15mを測り，土坑中に集石が認められた。鎌倉時代後半の遺物を出土する。SK 10511 は，トレンチ北端で検出し，トレンチの北へ続く。現存で東西長約2.7m 深さ約0.4m を測る。出土遺物から室町時代前期のものと思われる。

B トレンチ（105次調査）

このトレンチでは，中世の石積み井戸1基の他，溝2と柱穴を若干検出したが，井戸の他，



第31図　SE10521 実測図

遺構の存在は希薄である。またこのトレンチは，床土直下で遺構面となりAトレンチと比べ約0.5m低い。旧水田面も北に比べ低く，後世の削平を受けているであろうが，SD 10522の残存状況から，当時もいくらか段差があったものと思われる。

SE 10521　トレンチ南東部で検出した石積みの井戸で，1辺が約2.2mを測るいびつな方形の掘形を有し，石積みは内径で約0.8mを測る。深さは，検出遺構面から約5.4mを測り，石積み部分は，上部を欠失し約4.3m現存する。石積みは乱石積みで，最下部の三段は内径が径約0.6mと1廻り小さく積んでいる。井戸底は，湧水層である砂層に達している。また石積みの途中からの湧水も微量であるが見られる。埋土は，上層の褐色粘質土層，中層の褐色土混じり黄色粘質土層，下層の暗灰色粘土層の3層に分かれ，上層が厚さ約0.8m，中層が約3.9m，下層が約0.6m堆積している。中層の埋土から，地山の土を使用してこの井戸を一気に人為的に埋めたことが窺われる。出土遺物から鎌倉時代後半のものである。

SD 10522・10523　SD 10522は，SE 10521の西側で検出した東から南へゆるやかに屈曲して延びる溝である。幅約0.5m深さ約0.2mを測り，SE 10521に向って浅くなる。SE 10521に伴う排水用の溝であろう。SD 10523は，南北方向の溝状遺構で，幅約0.8m深さ約0.2mを測る。室町時代中期の遺物が出土している。トレンチ半ばで浅くなり消える。SD 10506の延長上に位置する。

Dトレンチ（105次調査）

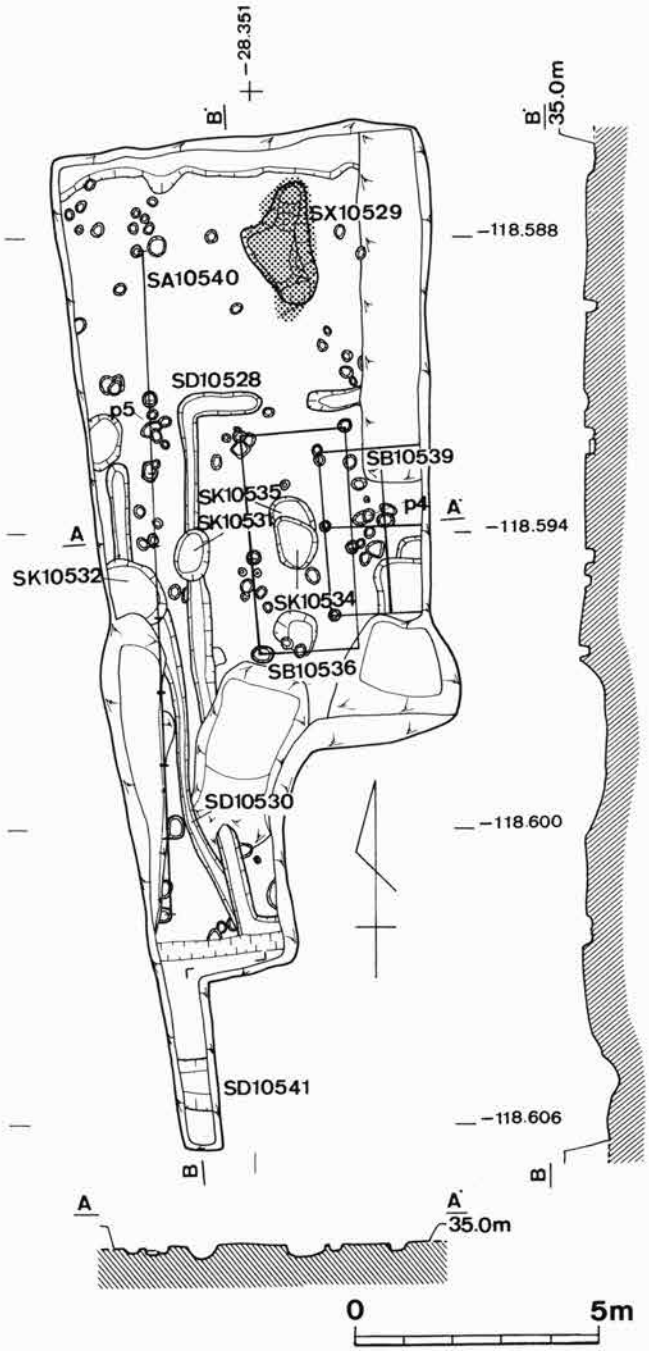
このトレンチでは，中世の掘立柱建物跡2棟や溝3・土器溜り1・柵列1・土坑等を検出

した。また下層に時期不明の礫層で埋った自然流路がある。

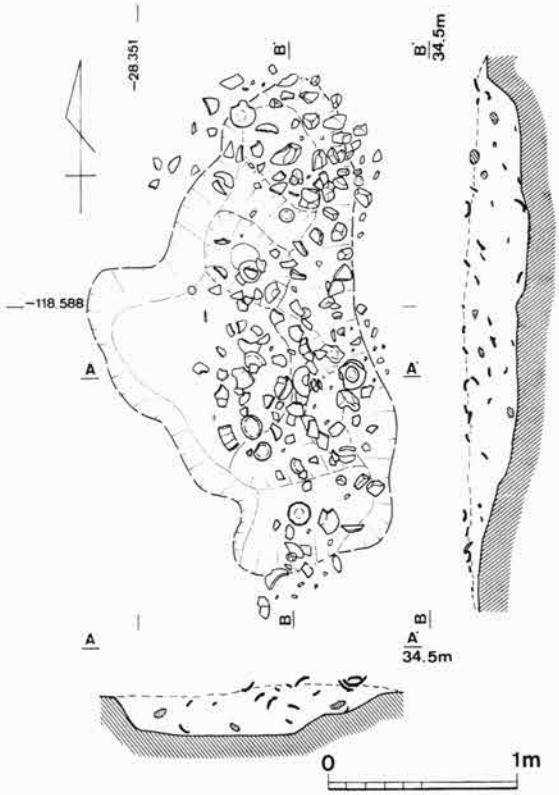
SB 10536・10539　SB 10536は，南北2間，東西1間で，南北方向（桁行）約4.5m東西方向（梁行）約2.1mの規模を有する。トレンチの東へ延びる可能性もある。SB 10539は，南北2間東西1間以上で南北方向(桁行)約3.3mの規模を有する。おそらく2間×2間の総柱の建物であろう。両者は，SD 10528によって囲まれ，SA 10540によって西側と画されている。出土遺物から鎌倉時代後半のものである。方位はN4～5°Wを測る。

SA 10540　SD 10528の西側で検出した南北方向の柵列で，全長約13.5m，柱間は約1.5mを測る。宅地を区画する柵である。方位はN2°Wを測り，SB 10539やSD 10526と同時期と考えられる。

SD 10528　SB 10536等をコの字状に囲み，さらに



第32図　Dトレンチ（105次）検出遺構実測図



第33図　SX10529 実測図

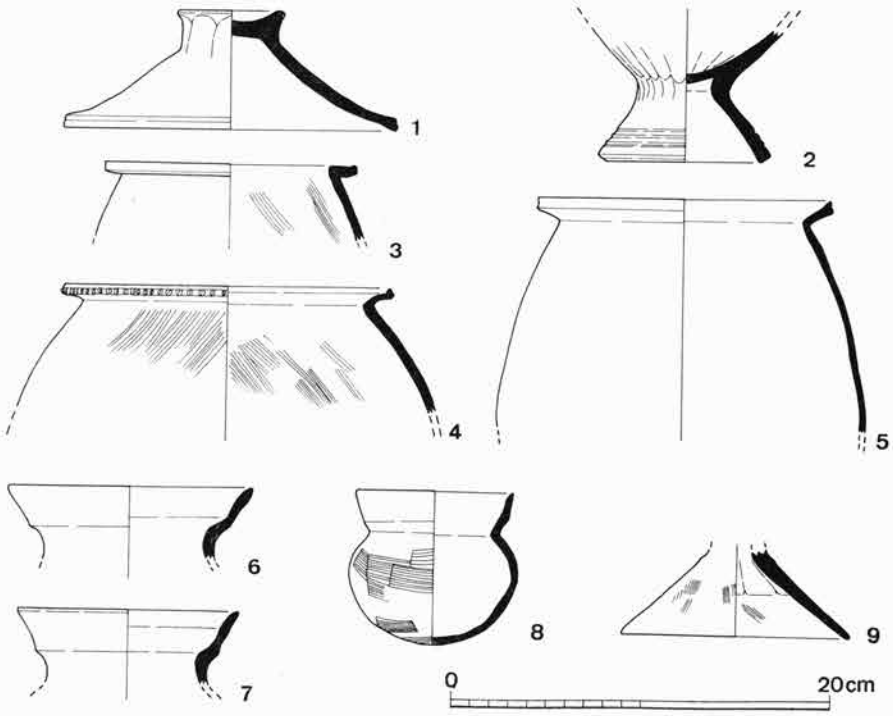
トレンチの東へ延びる。幅約0.4m深さ約0.1～0.3mを測る。宅地内を区画していた溝と考えられ，北側で一部途切れている部分があり，出入口となっていたものであろう。この北側にはSX 10529が位置する。南北長は約15mを測る。室町時代初期の遺物を出土する土坑によって削られており，この時期には廃絶している。遺物等から鎌倉時代後半に位置づけられる。

SD 10541　トレンチを南へ一部拡張して検出した東西方向の溝である。幅約1.2m深さ約0.4mを測り，この溝を境に遺構面が南へ一段低くなる。水が流れていた形跡はない。この溝から南では，A・B・Dトレンチで検出した鎌倉時代以降の集落は検出していない。この溝が集落の南の限りとなっていたものであろう。北の限りであるSD 8375とは，約90mの距離を測る。また，三条大路の推定地に当り，三条大路の側溝を踏襲していた可能性もある。鎌倉時代後半の遺物を出土している。

SX 10529　トレンチ北端部で検出した土器溜りで多量の土師小皿と瓦器椀が出土した。深さ約0.2mの不定形の土坑に拳大の石や瓦器椀，土師器皿等が投棄されたもので，上面は遺構面よりやや高く土坑の外側にまで一部広がっている。この土器溜りは，一時に土器等が投棄されて形成されたものではなく，一定期間に亘り順次土器が投棄されて形成されたものである。出土遺物にも少し時期幅がある。

SX 10529の南には，SD 10528に囲まれた掘立柱建物があり，西はSA 10540によって画されている。SD 10528の途切れた場所の北に位置し，SB 10528等の建物に伴うものと判断される。時期は，出土遺物から鎌倉時代後半のものである。

その他の遺構　上記の遺構の他，SK 10535・10534等の土坑や多数の柱穴を確認している。柱穴中には，鎌倉時代前半まで逆上る遺物が出土するものもあり，鎌倉時代前半からこの地



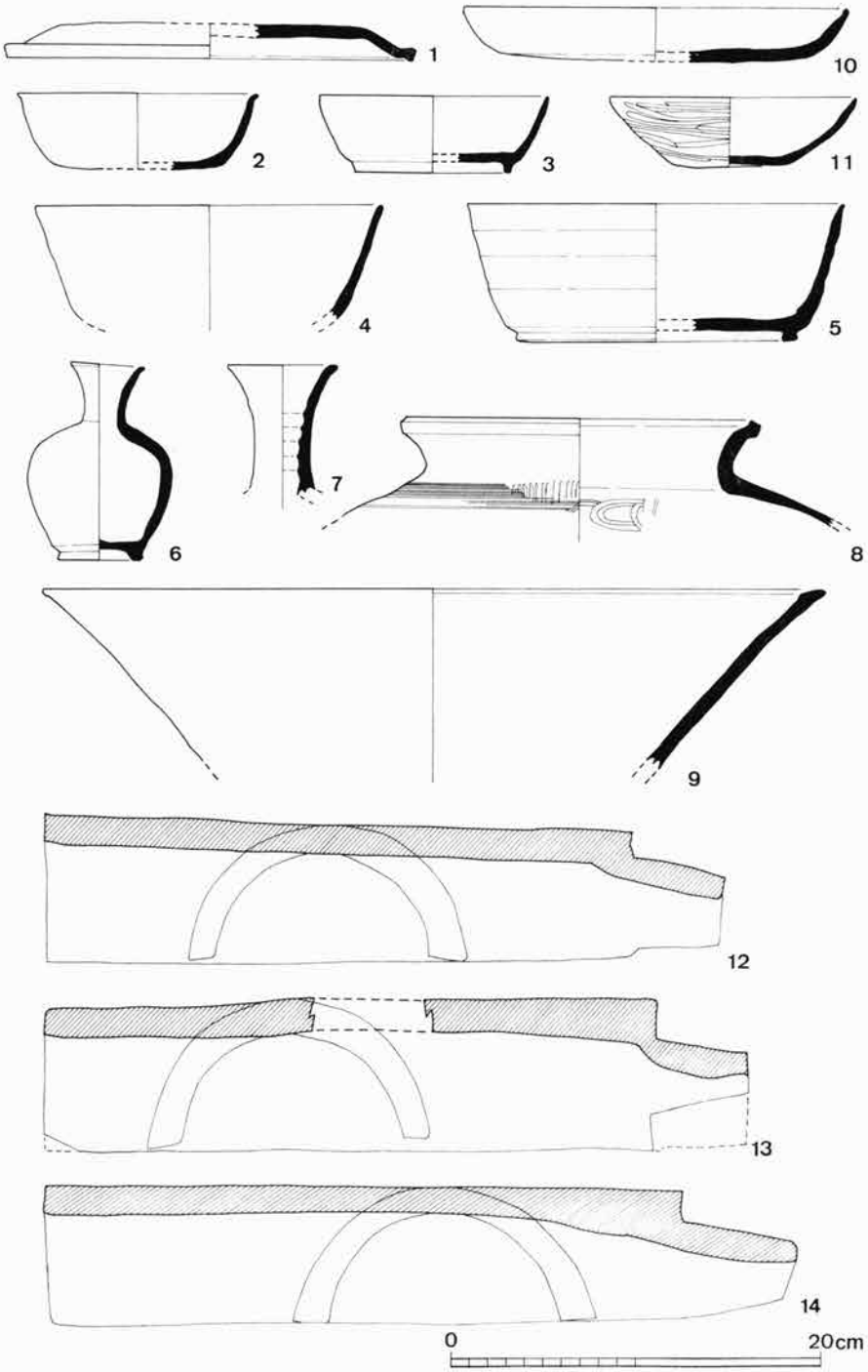
第 34 図　SK8379・8380 出 土 土 器 実 測 図
1～5：弥生土器，6～9：土師器，1～5：SK8380，6～9：SK8379

に建物が存在したことが判る。また SD 10528 や SA 10540 によって削られた南北方向の溝(SD 10590) や柱穴があり，鎌倉時代後半に宅地割りが施工し直されている模様である。

(3) 出土遺物

この調査地では，奈良・平安時代の土師器・須恵器の他，弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器，鎌倉・室町時代の土師器・瓦器・陶器などが出土している。また混入品ではあるが，石鏃等も出土している。以下検出遺構別に述べる。

SK 8380出土土器（第34図）　83次調査のHトレンチで検出した土坑から出土した弥生土器で，蓋（1）台付鉢（2）甕（3～5）等がある。1は口縁端部を下方に肥厚させ，口径17.4 cm を測る。2は，丸底状を呈する甕に外下方に広がる脚部を有し，脚部下半に凹線を三条めぐらす。脚端部は外傾する面を有し，脚部と底部にかけて縦方向の箆削りを施す。3は，水平に延びる口縁部を有し，口縁端部をわずかに上方へ肥厚させている。口径 13.2 cm を測り，内面に斜方向の刷毛目を施す。外面も刷毛調整を施していた痕跡が認められる。4は，口縁部がやや上方に彎曲気味に外反し，端部を上方につまみ上げ，端部外面に刻目を施



第 35 図　SE8332 出 土 遺 物 実 測 図
1～9：須恵器，10,11：土師器，12～14：瓦

している。5は，口縁部がやや上方に外反し，端部を上方につまみ上げている。口径は4が17.4cm，5が16cmを測る。いずれも畿内第Ⅳ様式に属する。

SK 8379 出土土器（第34図）　この土坑からは布留式の壺（6・7）小型丸底壺（8）高杯（9）の他，甕の破片等が出土している。6・7は，かなり外傾する二重口縁を有し，口縁端部は丸くおさめている。口径は，6が13cm，7が11.6cmを測る。8は，口径8.2cm，器高8cmを測り，体部最大径は体部中央よりやや上にある。体部外面に横方向の刷毛目を施し，口縁部は横なでを行っている。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。高杯9は，脚部裾の破片で，大きく下方に広がり，端部は丸くおさめている。内面上半部には縦方向の篦削りを施し，内面下半及び外面には縦方向の刷毛目を施した後，粗くなでている。

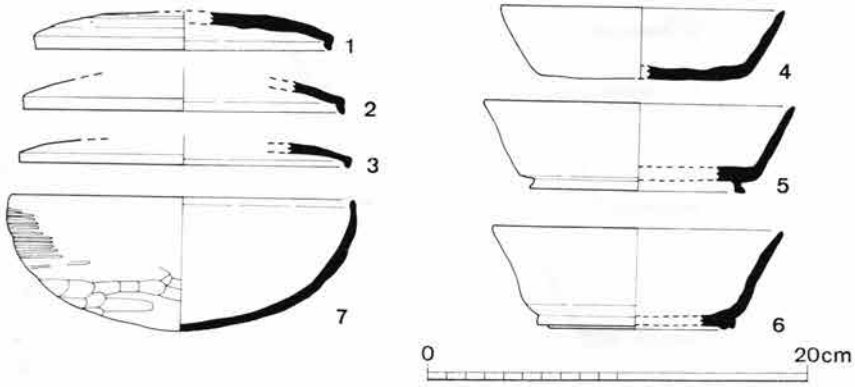
いずれの土器も淡褐色を呈し砂粒を含んでいる。調整も荒く全体に粗雑である。布留式でも新しい段階のものである。

SE 8332 出土土器（第35図）　須恵器の蓋（1）杯A（2）杯B（3～5）壺L（6）壺G（7）盤（9）甕A（8），土師器の杯・皿A（10）椀C（11），丸瓦（12～14）等が出土している。

1は，平坦な天井部から下方へ屈曲する口縁部を持つ。口径21.8cmを測る。2は，底部から彎曲気味に立ち上がり，口縁端部を外反させる。口径13cmを測る。内・外面に回転なでを施す。3～5は，高台を体・底部の境乃至やや内側に附し，口縁端部は丸くおさめる。5は高台内縁部が接地する。口径12.3cmを測る小型のもの（3）と18.6cm及び20.2cmを測る大型のもの（4・5）がある。3・4は，体底部の境の屈曲はゆるやかで，外傾度は小さい。調整は，内外面に回転なでを施す。6は，倒卵形の体部に外反する口頸部を有し，口縁端部を丸くおさめ，底部に静止糸切り痕を残し，貼り付け高台を附す。胴部最大径が体部高をやや上回る。口径3.8cm器高10.7cm胴部最大径7.8cmを測る8は，口径18.4cmを測り，口縁部は外反して端部を外側に肥厚させる。肩部に叩きの後カキ目を施す。9は，直線的に外上方に延び，端部は，両側にわずかに肥厚し，内傾する面を有する。口径42.2cmを測る。

10は，平底から外上方に内彎気味に立ち上がり，口縁端部を内側に肥厚させる。底部外面は篦削りを施し，内面及び口縁部外面は横なでを行っている。11は，平底の底部から彎曲して外方に開く口縁部を持つ。荒い篦磨きを施す。粘土紐の接合痕を残している。口径13.2cmを測る。

丸瓦（12～14）は，全長36.4～40.4cmを測り，凸面は縄叩きの後なで消している。部分的に縄目が残る。



第36図　SK8338 出土土器実測図
1～6：須恵器，7：土師器

井戸を廃棄した際の埋土から7，3等が出土した。

SK 8338 出土遺物（第36図）　須恵器の蓋（1～3）杯A（4）杯B（5・6）壺・甕や土師器の杯A・鉢A（7）等が出土している。

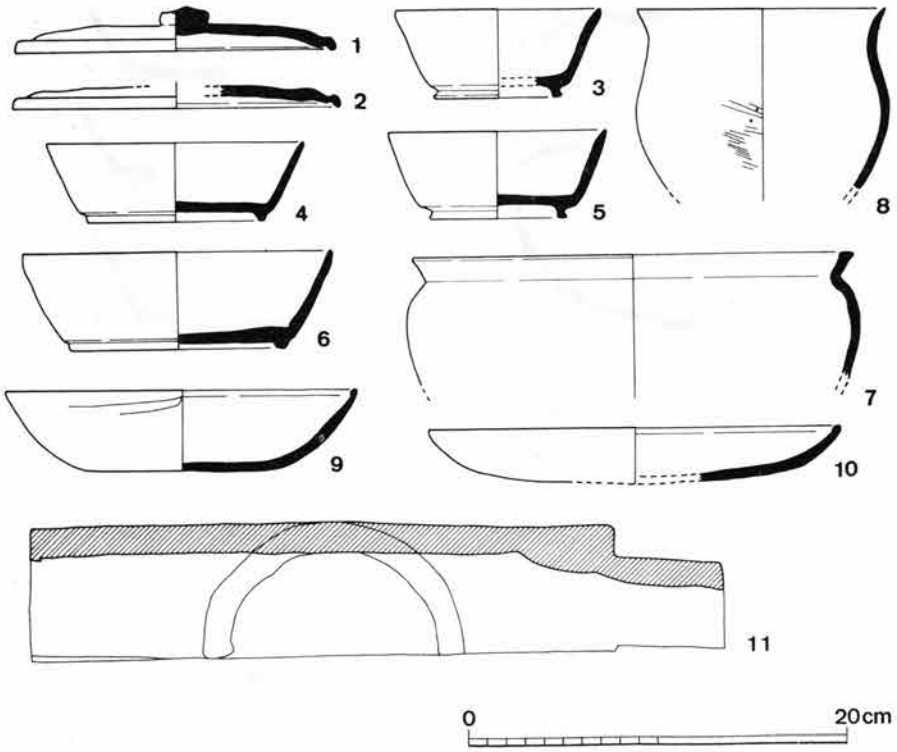
蓋（1～3）は，全体に扁平で，天井部からなだらかに口縁部に続き，端部を垂下させる。口径は15.4～17.2cmを測り，内外面に回転なでを施す。4は，平底から外上方に直線的に立ち上がり，口径14.8cm器高3.8cmを測る。5・6は，高台を体・底部の境より内側に附す。5は，上外方に直線的に立ち上がり，6は，ゆるやかに屈曲して立ち上がり，外反気味に開く口縁部を持つ。5の高台は，接地部が内縁である。口径15.2～16.2cmを測る。

7は，丸底の底部とわずかに内彎する口縁部を持ち，端部を内側に肥厚させる。体部下半から底部にかけて篦削りが施され，口縁部には篦磨きを行っている。口径約18.2cm器高7.2cmを測る。

土師器杯の破片は，底部未調整のものが見られる。時期は，8世紀中葉頃に位置づけられよう。

SK 8354 出土遺物（第37図）　須恵器の蓋（1・2）杯A・杯B（3～6）鉢D（7），土師器の杯A（9）皿A（10）甕A（8）や丸瓦（11）等が出土している。

1・2は，平坦な天井部から屈曲する口縁部を有し，扁平な宝珠つまみを附す。内面及び口縁部外面は回転なでを施す。3～6は，体・底部の境に直立する高台を附すもの（4・6）とやや内側に外方に開き気味の高台を附すもの（3・5）がある。3・4は，口径に比べ器高がやや深い。7は，外方に短く立ち上がる口頸部を持ち，端部はやや肥厚して平坦な面を有する。



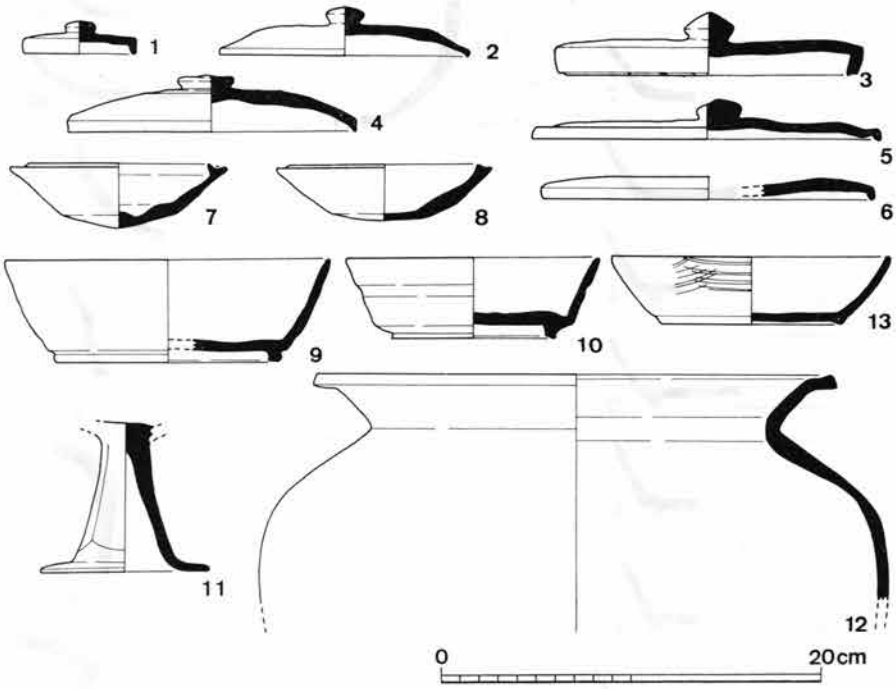
第 37 図　SK8354 出 土 遺 物 実 測 図
1～7：須恵器，8～10：土師器，11：瓦

9は，平底からゆるやかに立ち上がり，口縁端部を内側に肥厚させる。外面に篦削りを施している。口径 18.4 cm を測る。10は，ゆるやかに立ち上がり口縁端部を内側に肥厚させる。口径 10.6 cm を測り，外面篦削りを行っている。8は，口縁部がゆるやかに外反し，体部外面に斜め方向の刷毛目を施す。

11は，全長 36.2 cm を測り，凸面は縄叩きをなで消している。3・5のように，やや古い様相を持つものもあるが，須恵器杯や土師器杯・皿の外傾度が大きいこと，土師器杯・皿に外面篦削りが施されていることなどから，8世紀末から9世紀初頭の特徴を有している。

SK 8340・8341・8342・8347 出土遺物（第38図）　83次調査のEトレンチで検出した土坑から出土した遺物である。須恵器の蓋（1～6）杯A・杯B（9・10）甕A（12），土師器の杯B（13）高杯（11）等が出土している。

SK 8340 は，須恵器蓋（1・5）土師器杯B（13）等が出土し，1は，口径 5.9 cm を測



第38図　SK8340 他出土土器実測図

1～12：須恵器，13・14：土師器，1・5・13：SK8340，10：SK8341，2：SK8342，6：SK8347，3・4・12：SD8355，7・8：SK8361，11：SD8363，9：SD8365

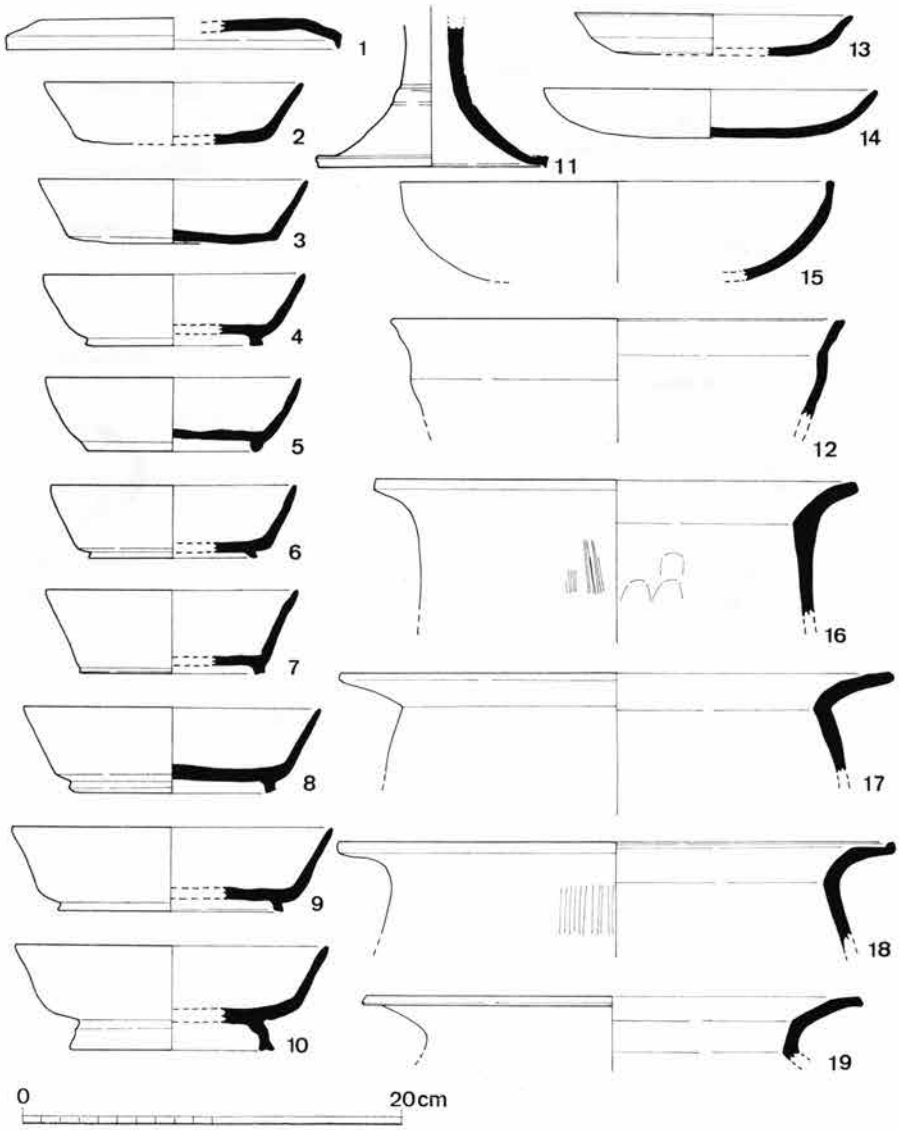
る小型品で，平坦な天井部から垂下する口縁部を有し，小型の壺の蓋になる。5は，全体に扁平で，平坦な天井部から屈曲する口縁部を持つ。口径16.3cmを測る。13は，口径17.2cm器高4.5cmを測り，体部は外方に大きく開く。高台は，体・底部の境に附されて外面に篦磨きを施している。8世紀末の特徴を有している。

SK 8341からは，須恵器の杯B（10）が出土している。体・底部の境の内側に高台を附し，外縁で接地する。口径15.2cm器高4.3cmを測る。

SK 8342からは，須恵器の蓋（2）が出土している。口径14.5cmを測り，平坦な天井部に宝珠つまみを附し，ゆるやかに下がり端部を垂下させる。

SK 8341からは，須恵器の蓋（6）が出土した。口径15.6cmを測る。全体に扁平で口縁部は屈曲せず，端部は垂下させる。

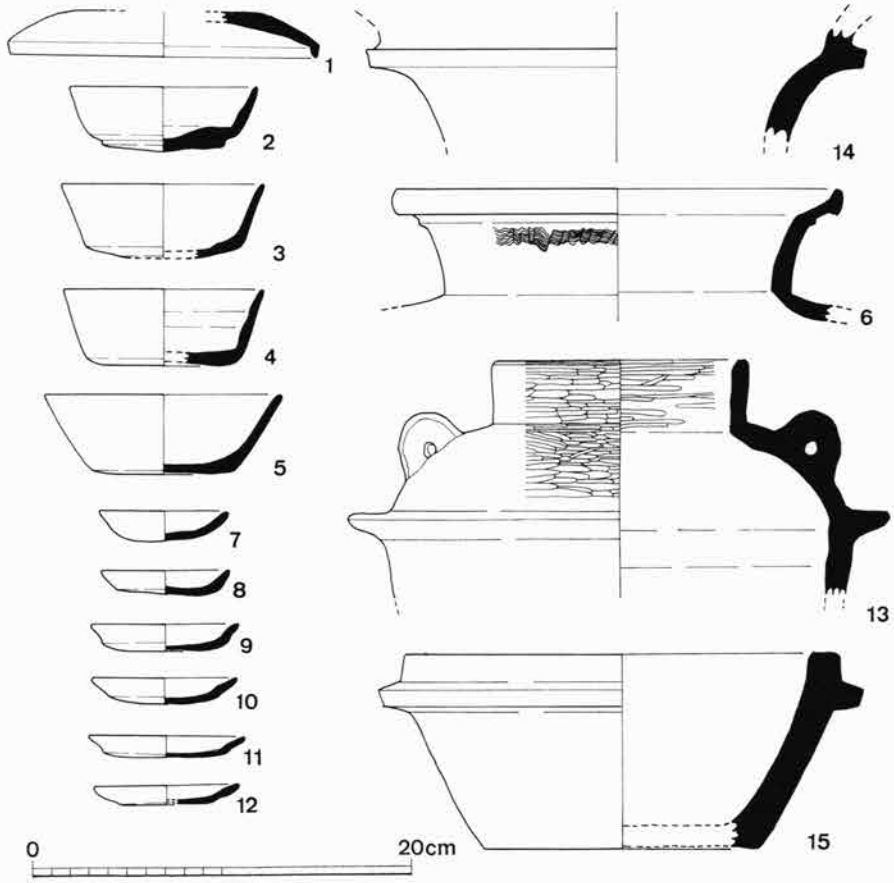
SK 8361 出土土器（第38図）　Fトレンチで検出した土坑で，須恵器の杯（7・8）甕等



第39図　D・E・F トレンチ（83次）包含層出土土器実測図
1～12：須恵器，13～19：土師器，16：Dトレンチ包含層，1・2・4～6・8～10・12・13・15・17～19：Eトレンチ包含層，3・7・11・14：Fトレンチ包含層

が出土している。7・8は，全体に丸味を帯び，口縁部は内側にわずかに立ち上がるのみである。口径・器高は，7が19.6cmと3.4cm，8が19.8cmと2.9cmを測り小型である。7世紀前半のものである。

SD 8355・8363・8365 出土土器（第38図）　Fトレンチで検出した溝から出土した遺物である。



第40図　SD8375 他 出 土 遺 物 実 測 図

1～6：須恵器，7～12：土師器，13：瓦器，14：埴輪，15：石鍋，1：P9，2・3・6～13・15：SD8375，4・14：包含層，5：SK8370

SD 8355 からは，須恵器の蓋（3・4）甕（12），土師器の杯等が出土している。3は，口径16.2cmを測り，平坦な天井部と直下方に短く屈曲する口縁部を有し，宝珠つまみを附す。壺Aの蓋となるものである。4は，笠形を呈し，扁平な宝珠つまみを附す。口径16cmを測る。12は，口径27.1cmを測り，口縁端部に外傾する面を有する。

SD 8363 からは，土師器の杯・高杯(11)，須恵器の杯B等が出土している。11は，筒部が下方に直線的に広がり，裾部は大きく平坦に広がる。筒部には篦削りによる面取りを行い，脚部高7.6cmを測る。脚部裾の暗文は認められない。

SD 8365 は，須恵器の杯A・杯B（9）甕（12）等が出土した。9は口径 17.2cm 器高5.6cmを測り，体・底部の境やや内側に短く直立する高台を附す。

SK 8370 出土土器（第40図）　須恵器杯A（5）甕等が出土した。5は，平底の底部から

外上方に直線的に開き，口径 14.5 cm 器高 4.2 cm を測る。外傾度が強く，平安時代前期のものである。

包含層出土の遺物（第39・40図）　D～Hトレンチの包含層から出土したもので，D～Fトレンチでは須恵器の蓋（1）杯A（2・3）杯B（4～10）高杯（11）鉢（12）土師器の皿A（13・14）鉢B（15）甕（16～19）等が出土している。

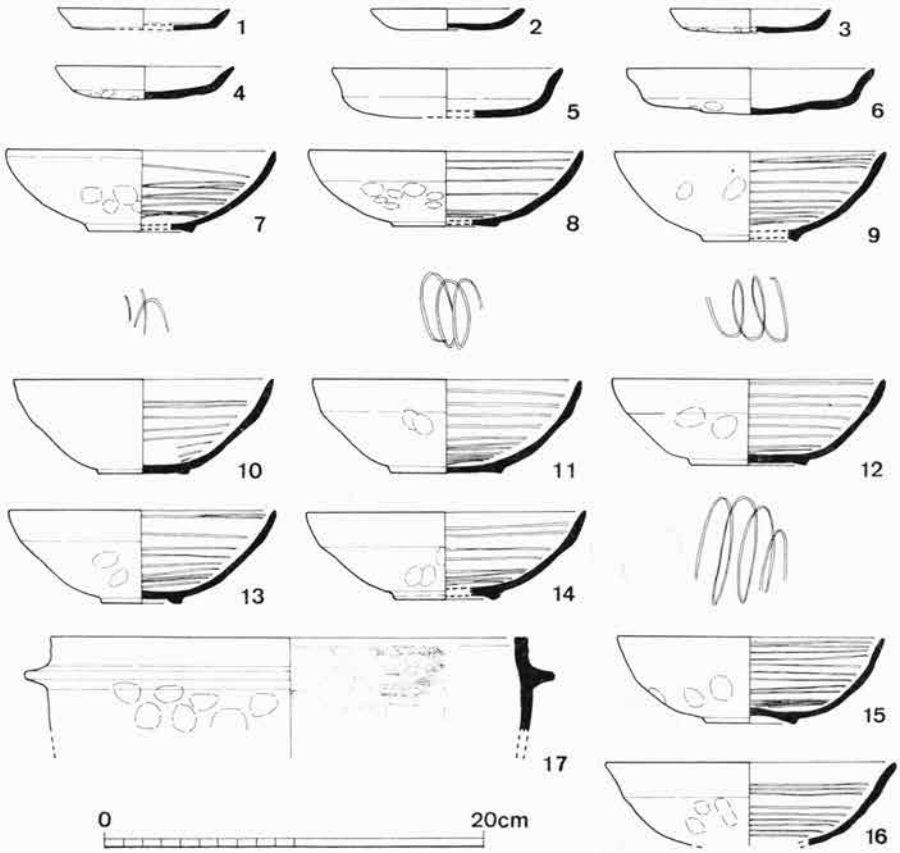
1は，平坦な天井部からゆるやかに下がり端部へ続く。口径 17.6 cm を測る。杯Bは，体・底部の境に高台を附するもの（5・7）とやや内側に外方に広がる高台を有するもの（4・6・8・9）がある。また他に外方へ広がる高い安定した高台を有するもの（10）がある。4・8・9・10は，体・底部の境の稜線が甘く，ゆるやかに屈曲して立ち上がる。口径は12.4～13.3 cm を測る小型のもの（4～7）と15.6～16.5 cm を測るやや大型のもの（8～10）がある。11は，脚部がラッパ状に広がり，筒部と裾部の境に甘い凹線を2条有する。12は，口径23.8 cm を測り，頸部を内側へ屈曲させる。端部に内傾する面を持つ。13・14は，底部からゆるやかに立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。13は，内面及び口縁部に横なでを行い，体・底部外面に篦削りを施す。14は，外面篦削りを行っている。15は，彎曲して立ち上がり，口縁部は直立する，口径23 cm を測る。外面横なでを施す。甕は，甕A（17～19）と甕C（16）が出土している。81を除き端部を丸くおさめる。16～18は，球形の胴部に強く外反する口縁部を有する。

10はやや古い様相を示すが他は8世紀から9世紀にかけての特徴を有する。

G・Hトレンチの包含層からも須恵器の杯A（4）杯B・蓋（1）甕等が出土している。4は，口径 10.4 cm 器高 4 cm を測り，口径に比しやや深く，口縁部の立ち上がりは直線的で外傾度は小さい。1は，口径 16 cm を測り，扁平な笠形を呈する。

他にHトレンチからは朝顔形埴輪（14）が出土している。たがのところで一度屈曲して広がり，淡褐色を呈し，砂粒は含まず胎土は精良である。調整は器表が磨滅しており不明である。

SD 8375 出土土器（第40図）　この溝からは，土師器皿（7～12）瓦器椀，瓦器湯釜(13)陶磁器の摺鉢・皿・甕の他滑石製の石鍋（15）等が出土した。土師器皿は口径 6.5～8 cm を測る皿Ⅱ[注21]で，丸味を帯びた平底から外上方に直線的に立ち上がるもの（7・8），丸味を帯びた平底からゆるやかに立ち上がり途中から外反するもの（9・10），と口縁部と底部の境が鋭く屈曲し口縁部が外反するもの（11），口縁部がやや外反し口縁部途中が肥厚しているもの（12）がある。瓦器湯釜（13）は球状の体部に直立した口縁部を附し，体部には，有孔突起と鍔を有している。口縁内外面及び体部外面の上半部に篦磨きが施されている。口径



第41図　SE10521 出土土器実測図
1～6：土師器，7～16：瓦器，17：瓦質土器

13.2 cm を測る。内外面とも炭素が吸着し銀黒色を呈する。体部外面には煤が付着している。瓦器椀は小片であるが外面の暗文は認められない。他に備前の摺鉢が出土している。

中世の遺物の他，須恵器の杯A（2・3）や甕（6）が出土している。6は口縁部に波状文を施す。

SE 10521 出土遺物（第41・42図）　土師器の皿（1～3・5・6）瓦器の皿（4）椀（7～16）羽釜（17）の他，下駄（4）や呪符（1），曲物（2）等が出土している。

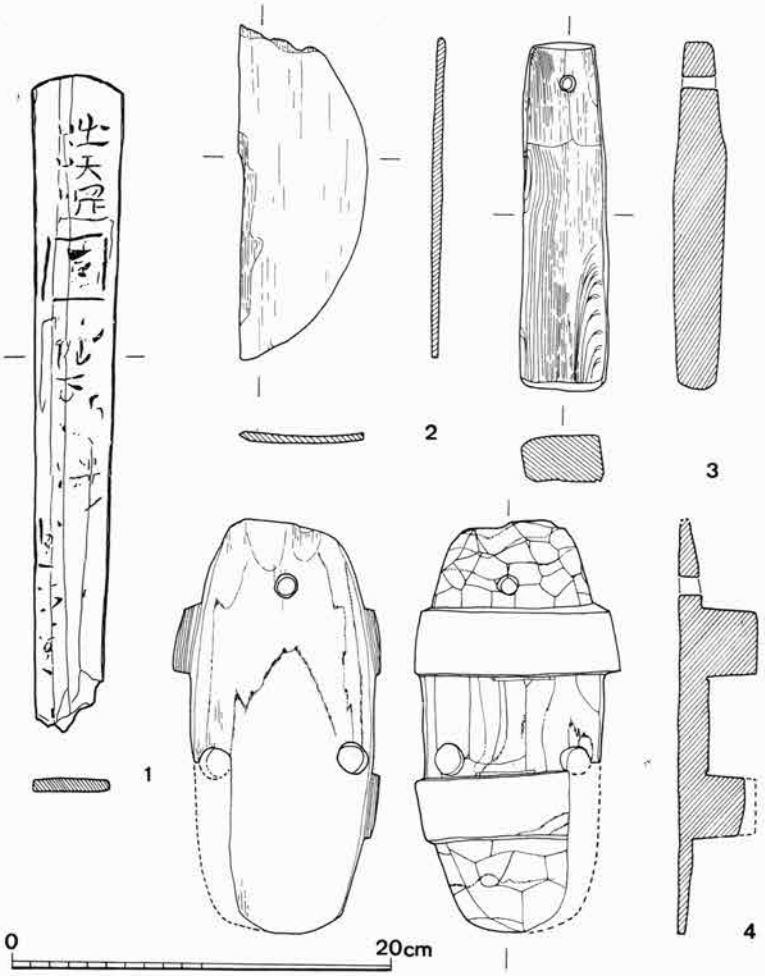
土師器の皿は，口径から 10 cm 以上を測る皿Ⅰ（5・6）と 10 cm 未満の皿Ⅱ（1～3）に分かれる。皿Ⅰ（5・6）は，外反する口縁部を持ち口縁部と底部の境はやや丸味を帯びる。口径は，5が 12 cm，6が 13 cm を測る。皿Ⅱは，口径 8～9 cm を測り，口縁部と底部の境が鋭く屈曲するもの（1）と丸味を帯びるもの（2・3）とがある。土師器皿はいず

れも，内面及び口縁部外面に横なでを施し，底部は未調整で指頭痕を残す。色調は淡褐色を呈し，胎土はやや粗い。

7～16は，外面に暗文は全く施されず，内面の暗文も省略化がすすみ渦巻状になっている。見込みの暗文は，らせん状を呈する。器形は，口縁部が大きく外反せず，退化した断面三角形の高台を附す。口径は13.5～14.5cm，器高は3.8～5cmを測る。12は，口縁端部内面に沈線を有する。外面は指頭痕を残し口縁上部のみ横なでを施す。4は，口径9.3cmを測り，見込みの暗文は有さない。羽釜（17）は，口径 24.4cm を測り，短い直立する口縁部を持つ。口縁部外面には横なでを行い，内面には細かい刷毛目を施していた。

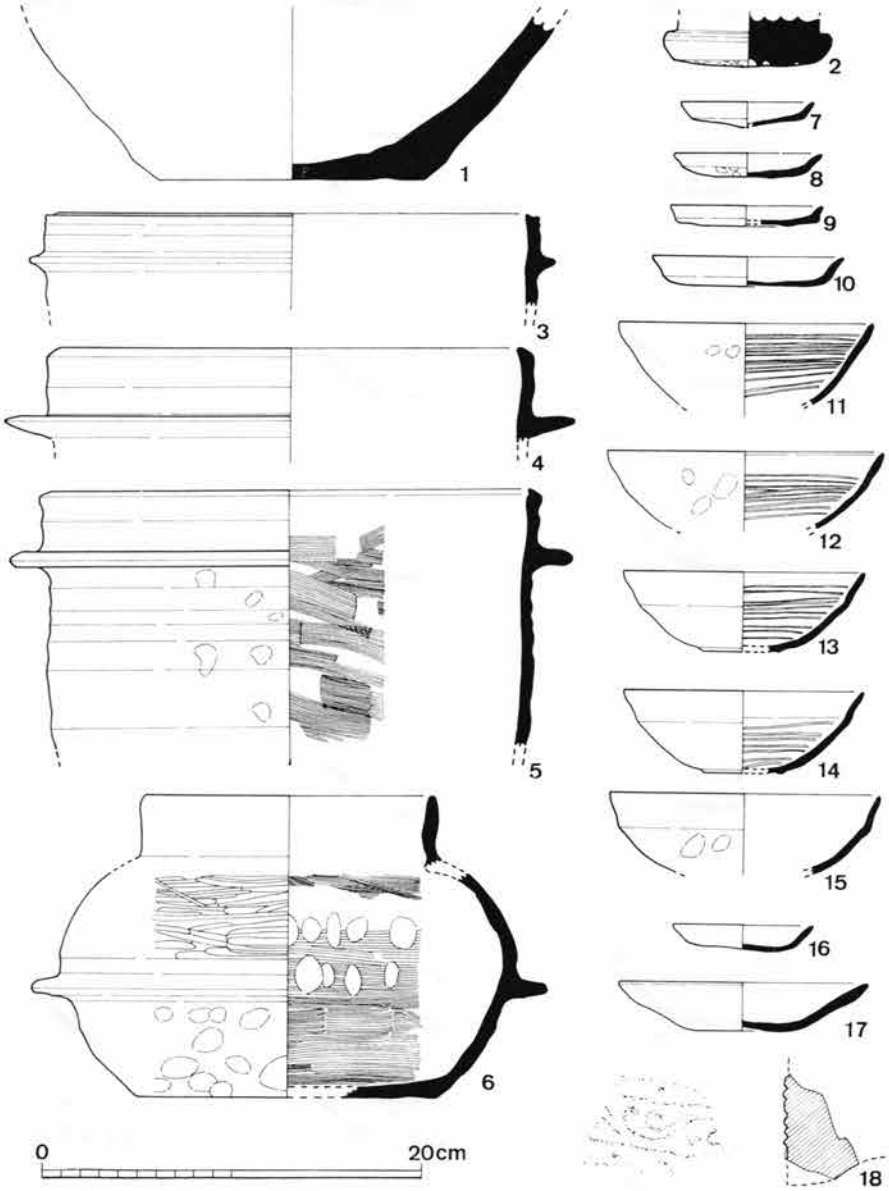
瓦器椀から，時期は13世紀後半に比定される。ただ，瓦器椀を上層出土のもの（7～9）と下層出土のもの(10～16)とで比較すると，器高に多少の差があり，わずかに時期差がある。

4は，連歯下駄で，長円形を呈し長さ 22cm 幅 9.6cm を測る。裏面には整形した際の削り痕を明瞭に残す。2は，曲物の底板で，復元径20cm前後を測る。井戸の最下部に使用してあったものであろう。1は，笏状を呈し，頂部は丸く，幅広である。全



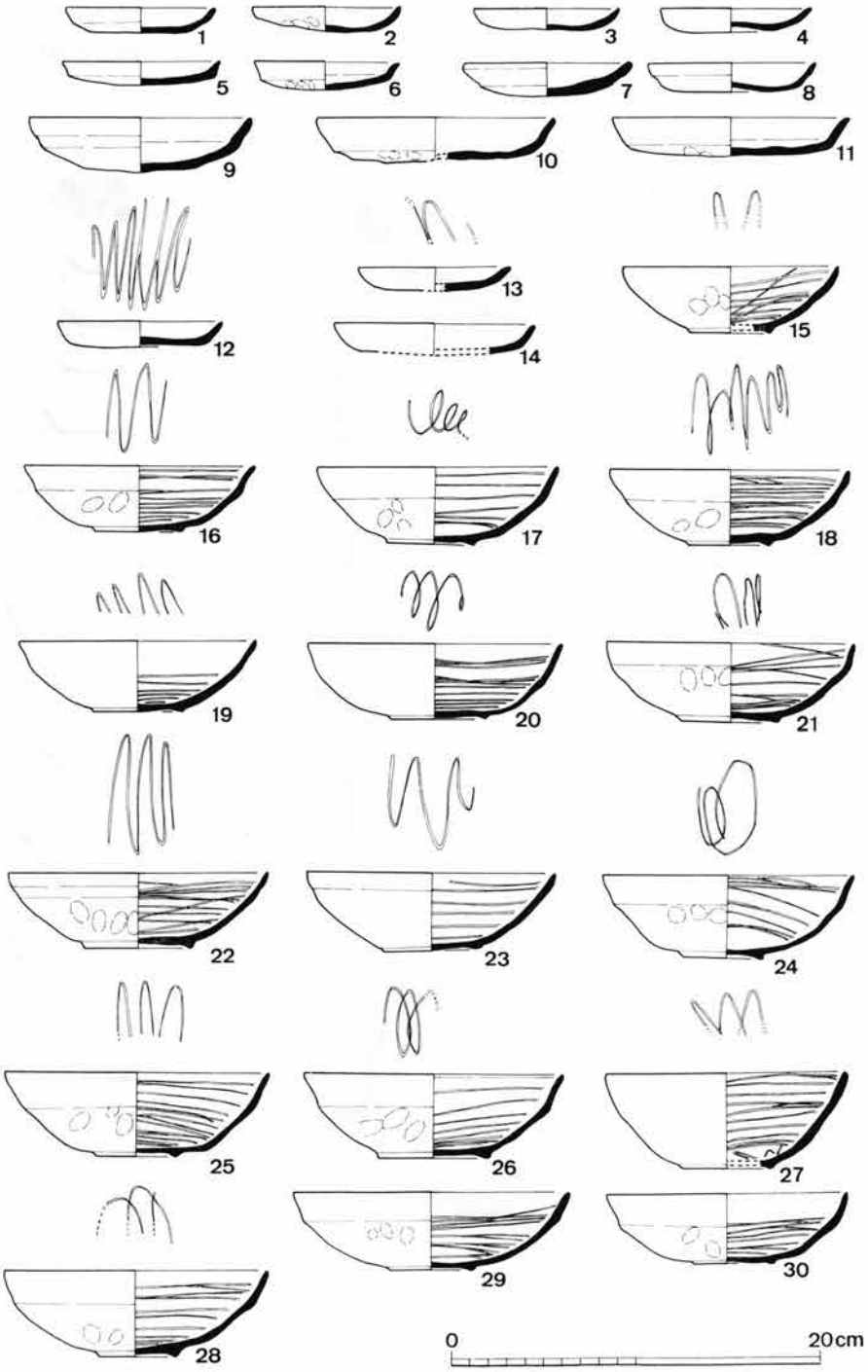
第42図　SE10521 出土木器実測図

長35cm，幅4.5cmを測る。「咄呎礎固□〔物カ〕□□×と記してある。井戸を介して疫病が広がることを防ぐための祭祀に使用したものであろう。広島県の草戸千軒町遺跡に同様の呪文の類例がある(注22)。他に用途不明の木札（3）や墨痕の附着した木切れやハシの破片が出土してい

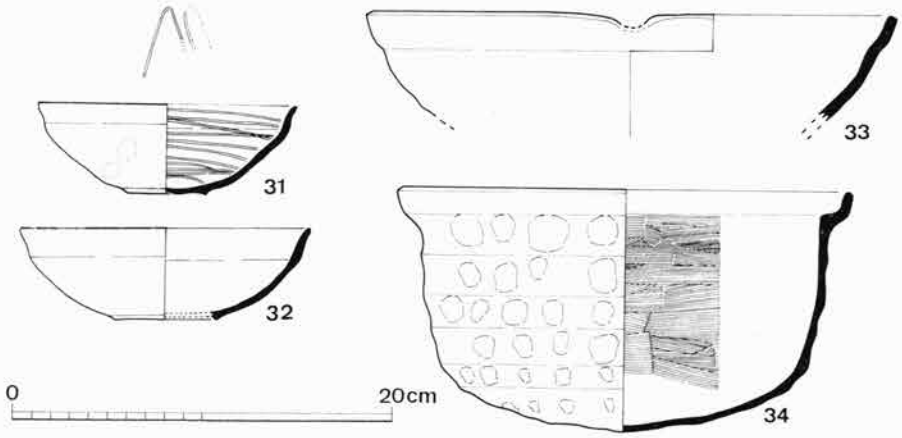


第43図　SK10511 他出土土器実測図

1・2：須恵器，3～6：瓦質土器，7～10・16・19：土師器，11～15：瓦器，18：瓦，1・2・5・6：SK10511，3・4・11・12：SD10506，8・9：SK10508，7・10・13・14・15：SK10509，16・17：SD10522



第44図　SX10529 他出土土器実測図 (1)
1～11：土師器，12～30：瓦器



第45図　SX10529 出土土器実測図 (2)
31～34：瓦器

付表2　SX 10529 出土土器器種分類表（口縁計測法による）

	器種	比率		器種	比率
供膳形態	土師皿 I	3.7%	調理形態	瓦器鍋	0.6%
	〃 II A	38.5%		瓦器羽釜	0.2%
	〃 B	18.2%		瓦器鉢	0.2%
	〃 C	2.8%		須恵器鉢	0.1%
	〃 D	0.9%		小計	1.1%
	瓦器皿 I	0.9%	貯蔵形態	須恵器甕	0.1%
	〃 II	2.8%		陶器甕	0.3%
	瓦器椀	30.7%		小計	0.4%
	小計	98.5%		計	100%

る。3は墨痕はないが，草戸千軒町遺跡で出土している墨書木札の長方体のタイプのもの[(注23)]に形態は類似する。

SD 10506 出土土器（第43図）　瓦器椀（11・12）瓦器羽釜（3・4）土師器皿等が出土している。11・12は，外面に暗文を持たず，内面の暗文も省略化がすすみ渦巻状を呈する。口径は，11が 14.4 cm，12が 13.2 cm を測る。羽釜は，やや短い直立した口縁部を有するもの（3）とやや内彎する口縁部を持つもの（4）が出土している。いずれも口縁部内外面には横なでを施している。口径 25 cm 前後を測る。

13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものとみられる。

SK 10508・10509・10511 出土土器（第43図）　Aトレンチ土坑から出土したもので，土師器皿（7～10）瓦器椀（13～15）瓦器羽釜（5）瓦器湯釜（6），須恵器鉢（1・2）等が出土している。

7～10は，皿Ⅱで口径7～8cmを測り，やや外反する口縁部を持つ。13～15は，外面に暗文を施さず，内面の暗文も省略化されている。口縁部がやや外反する。13・14は口径 13.6 cm を測り，15は，口径 14.2 cm を有する。5は，直立する口縁部を有し，口縁部外面に稜を持つ。口径 26.5 cm を測る。湯釜（6）は，平底の底部で球状の体部に直立する口縁部がつく。体部上半に篦磨きを施し，口縁部内外面は丁寧な横なでを行い，体部内面は，横方向の刷毛目を施す。内面の一部と体部外面下半に指頭痕を残す。瓦質ではあるが，炭素は吸着せず，灰白色を呈する。口径 15.6 cm 器高 16 cm を測る。

2は古墳時代のこね鉢の底部で，他は全体に13世紀末から14世紀末にかけての遺物である。

SD 10522 出土土器（第43図）　土師器の皿が出土している。皿Ⅰ（16）と皿Ⅱ（17）があり，口径は，16が 7.4 cm 17が 13.2 cm を測る。ともに大きく開く口縁部を持ち，口縁途中が若干肥厚し，端部はやや尖り気味に丸くおさめる。見込みの圏線は有していない。

Bトレンチ出土軒瓦（第43図）　Bトレンチの床土内から出土した軒平瓦（18）で，磨滅が激しい。2葉を一単位とし，上下の外区に連珠を配する。

SX 10529 出土土器（第44・45図）　多量の瓦器椀（15～32）土師器皿（1～11）瓦器皿（12～14）瓦器羽釜，鍋（34）鉢（33），陶磁器の壺，甕が出土した。

瓦器椀（15～32）は，外面に暗文を全く施さず，内面の暗文も省略化が進み渦巻状を呈する。見込みの暗文は鋸歯状やらせん状を呈する。器形は彎曲して立ち上がり口縁部は大きく外反しない。口縁端部は丸くおさめ，高台は，退化した断面三角形を呈し，粘土粒をこすりつけた様相を呈する。口縁部内面に沈線を有するものは，26等2個体のみである。口径は，13.5～14.5 cm を測る。器高は，27を除き 4.5 cm 前後を測り，やや扁平である。18等暗文のやや密なものも見られる。

土師器皿は，皿Ⅰ・皿Ⅱが出土している。皿Ⅰ（9～11）は，口径 12.3～12.9 cm を測り，口縁部はやや外反気味である。底部は平底であるが，9は，丸底に近い平底である。胎土は比較的密で淡褐色を呈する。土師皿Ⅱ（1～8）は胎土・色調・形態から4つに分かれ，A～Dに分類した。皿ⅡA（1～4）は，胎土はやや粗く，淡褐色の色調で全体に丸味を帯びている。皿ⅡB（5・6）は，口縁部がやや外反し，胎土は1～4と同様である。皿ⅡC（7）は，褐色で砂粒を含み，全体に器壁が厚い。皿ⅡD（8）は，淡橙白色を呈し，胎土も精良で口縁部途中に稜を有する。個体数は，上表にみるとおりA・Bタイプが圧倒的多数

をしめ，C・Dは，極くわずかしかない。口径は，いずれも8～8.6cmを測る。内面及び口縁外面に横なでを施し，底部外面は指押さえ未調整である。

34は，受口状を呈し，体部外面には指頭痕を残し，内面に横方向の細かい刷毛目を施している。口径 24cm を測る。33は，片口鉢で口径 26cm を測る。他に常滑の甕や東播系の鉢が出土している。

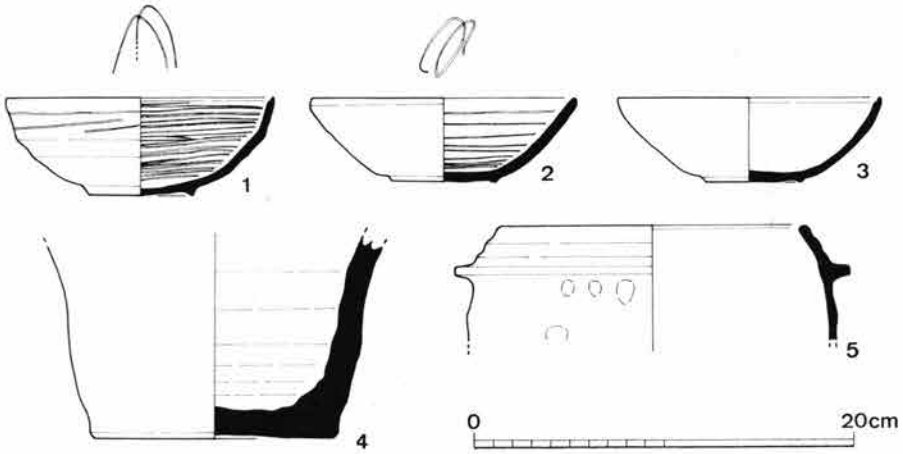
瓦器皿は，口径 8.4～8.8cm の皿Ⅱ（12・13）と 10.8cm を測る皿Ⅰ（14）がある。皿Ⅱの器形・調整は，土師皿ⅡのAタイプと同様で，鋸歯状の暗文を見込みに施す。

瓦器椀の中には，15，16のように小型で新しい様相のものや29のように大型で古い様相を示すものがあるが，おおむね13世紀後半の特徴を示している。

なお，この土坑の出土遺物は，瓦器椀と土師小皿が圧倒的多数を占め，供膳形態が98.5%を占める。また，椀と皿の比率は約1：2である。皿は，いずれもすすの附着は認められず灯明皿として使用されたものではない。調理形態のものがわずかであることから，日常生活とは異なった使用方法をとられたものの可能性がある。

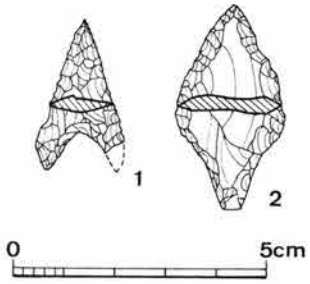
Dトレンチ柱穴出土土器（第46図）　Dトレンチの柱穴から出土した瓦器椀（1・2）である。1は，外面にわずかに暗文を施し，内面の暗文もやや密で，口径 14cm を測る。断面三角形の高台を有し，口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部内面に沈線を施す。13世紀前半まで逆上るものである。2は，外面に暗文を施さず，内面の暗文も省略化が進み，口径 13.4cm を測る。13世紀後半に位置づけられる。

SD 10541・SK 10534 出土土器（第46図）　瓦器椀（3）瓦器羽釜（5）陶器壺（4）が



第46図　SK10535 他出土土器実測図
1～3・5：瓦器，4：須恵器，1：P-5，2：P-4，3：SD10541，4・5：SK10535

出土している。3は，器表の荒れが激しく調整は観察不可能であるが，口径13.8cmを測り，口縁端部内面に沈線を施す。5は，口径15.8cmを測り，口縁部は内彎し，内傾する端面を有する。口縁内外面に横なでを施し，体部内面はなで上げている。4は，須恵質の壺である。3がSD 10541から，他がSK 10534から出土した。



第47図　西ノ口地区出土石器実測図

その他の遺物（第47図）　西ノ口地区では，83次調査のFトレンチから石鏃（1・2）が出土している。いずれも遺構検出作業中に包含層から出土した混入品である。1は，凹基無茎式で，長さ3cm 幅1.8cmをはかる。2は，凸基有茎式で長さ4cm 幅2.2cmをはかる。いずれもサヌカイト製で，1は表面の風化が著しい。

(4) 小　　結

この地区では，83次調査のHトレンチで検出したSD 8375を境に，北では，奈良・平安時代の集落を検出し，南では，鎌倉・室町時代の集落を検出した。

奈良・平安時代の集落は，SK 8361が7世紀前半の遺物を出土する他は，8世紀から9世紀の遺物が大半であり，集落の存続期間は，主としてこの時期にあったものと考えられる。特に8世紀後半から9世紀初頭にかけての特徴を示すものが多く，この時期にピークを迎えるものであろう。

この集落では，28棟の掘立柱建物跡と5条の柵列を検出している。多くは，北に対し西へ振っていて，また他に真南北を向くものと，東へ振れている建物がある。これら建物群を，柱穴内からの出土遺物で詳しく時期判定するには無理があるが，切り合い関係から見ると，SB 8330とSB 8339, SB 8329とSA 8345などのように西へ振れる角度の大きいものが先行する傾向にある。また遺物の出土した土坑や溝との関係では，長岡京期の土坑であるSK 8340にSB 8348は削られ，またSK 8340より先行するSK 8343にSB 8339の柱穴が削られている。またSA 8346に伴うと考えられるSE 8332は，長岡京期に廃絶されたものである。そこで，この傾向をもとに同一方位を同時期として時期区分すると，N45～30°W，N 25～15°W, N11～4°W, N0°前後, N5～7°Eの5期に分かれる。このうちN5～7°Eを測るグループの同一グループのSB 8373・8372が，同方位を示すSA 8393は9世紀の遺物が出土するSK 8370の近くで途切れ，SK 8370と同時期である可能性が強いことや，方位（N5～

7°E）が，後世の素掘り溝群と同方位であり，さらに現在長岡京跡の右京域に見られる条里地割の方位[注24]に近いこと等からこのグループは，長岡京廃都後の9世紀初頭から半ばにかけての時期に比定した。11～4°前後Wの建物群は，SE 8332 の廃絶時期から8世紀後半に比定される。N25～15°W の方位角を持つ建物群は，SB 8330 等の建物群より後出し，SB 8348等に伴うと考えられる SK 8338 等から8世紀中葉に位置づけられる。SB 8330 等の N45～30°W の方位角を測る一群は，SB 8339 等に先行し，8世紀前半まで逆上る可能性が強い。また，検出した建物群中最古の SB 8330 や 8345 等に削られて溝や柱穴が存在する。建物としては検出できなかったが，この時期から集落が営まれ出したものであろう。

付表 3　西ノ口地区検出遺構編年表

		遺構名
Ⅰ期	7世紀末～8世紀前半	SD 8333・8334
Ⅱ期	8世紀前半末	SB 8366　SD 8364 SB 8330・8345・8328・8329
Ⅲ期	8世紀中葉	SB 8339・8348 SK 8338(SB 8324) SA 8359　SD 8363　SK 8356 SB 8358・8357・8360 SK 8341
Ⅳ期	8世紀後半	SA 8327　SB 8321・8322・8326 SB 8325　SA 8345　SE 88332 SK 8343・8342　SB 8374 SB 8367・8371・8377・8323
Ⅴ期	8世紀末（長岡京期）	SD 8355・8365　SK 8340 SB 8335・8349・8377
Ⅵ期	9世紀	SB 8351・8352　SK 8355　SB 8353 SB 8372・8373　SA 8379　SK 8370

以上の結果からⅥ期に分け上表にした。Ⅰ期は，SD 8333 等の溝がEトレンチに築造される。SB 8345 に先行する柱穴もあり建物も存在していたであろう。Ⅱ期は，EトレンチからFトレンチ北半にかけて建物が建造される。本格的に集落として存在し始める。Ⅲ期は，Fトレンチ南半に SB 8358 等が営まれ始める。Eトレンチにおいても引き続き SB 8339 などが存在する。Ⅳ期は，Eトレンチ北半からDトレンチにかけてとG・Hトレンチに建物群が見られ，北と南へ宅地が移動している。ただDトレンチの建物群は南の建物群より形成がいくらか早いと思われる。この時期にもっとも建物が多く，この集落の中心的時期となるものであろう。時期幅も他の期と比べ長いと思われる。北の群では規則性が見られ，建て替えも同一方向に行っている。Ⅲ期からⅣ期にかけて一つの画期があったものであろう。Ⅴ期は長岡京期で，三条第2小路の側溝が存在し，道路からへだたったE・Hトレンチに建物が存在する。Dトレンチでは建物群はなくなる。京造営の影響を受け宅地の変更が行われた。Ⅵ期では，E・Gトレンチへと宅地が変更する。

しかし，以上の時期区分は方位を主としたものであり，多少の問題は残る。また，Ⅳ期と

した SB 8367・8377 やⅥ期とした SB 8351・8352 については，奈良時代の集落の区界を無視し，規則性を持ち，条坊側溝との関連から長岡京期にはいる可能性もある。今後の議論を待ちたい。

SD 8375 から南で検出した中世の集落は，SD 8375 を北の境界とし SD 10541 まで及ぶものである。SD 8375 から SD 10541 までは，約 90mを測る。SD 10506 が集落内の宅地割りの基準となっていたことは明らかであろう。SE 10521 は，周辺に遺構の存在がなく，広場としての機能を周囲が果していた可能性が強い。集落の存続時期は13～15世紀にかけてであるが，南側が古い遺物が出土し，早くから宅地となっていた。北の地区は，当初集落内の空間地となっており，集落の発展につれ宅地に変更したものであろう。SD 8375 から北は，素掘り溝群がみられるのみで，耕作地となっていた。

なお素掘り溝についてであるが，褐色粘質土で埋った溝と灰色粘土で埋った溝がある。前者が東西方向，後者が南北方向に走り，前者が古い。このことは，後述するようにこの溝が農耕に伴う溝であることから，耕作地の地割りが東西方向から南北方向へ鎌倉時代頃に変化したことを示すものであろう。また，この溝の振れ角と右京域の条里地割りの振れ角が等しいことは，条里地割りに規制されており，集中的に溝の存在するラインが条里地割りの基準線の１つであることを示すのではなかろうか。

この地区では他に，弥生時代の土坑や古墳時代の溝・土坑を検出している。弥生時代の土坑は，中期後葉のものであり，弥生時代の集落の一端がこの地区まで及んでいたことを示している。また，布留式の土器を出土した土坑の存在は，この地一帯に５世紀代の集落が存在したことを窺わせる。さらには，二次堆積ではあるが埴輪の出土は，周囲に古墳が存在していた可能性を考えさせる。

これらのことからこの地区では，弥生時代中期後半及び５世紀に集落の一端が及んでいたが，７世紀末から８世紀前半にかけて本格的に集落が営まれだす。その後９世紀中葉頃をもって衰退し，西ノ口地区北半部は，耕作地と化していく。また13世紀に南半部に集落が営まれ始め，14世紀頃まで続く。その後この集落も姿を消し，一帯は水田と竹林に変わっていった。

4.　藤ノ木地区の調査

この地区も昭和56・57年度の両年にわたり調査を実施した。近辺には，細塚・舞塚等の地名を残す地区がありそれらと関連した遺構の検出が期待された。

(1) 調査の経過

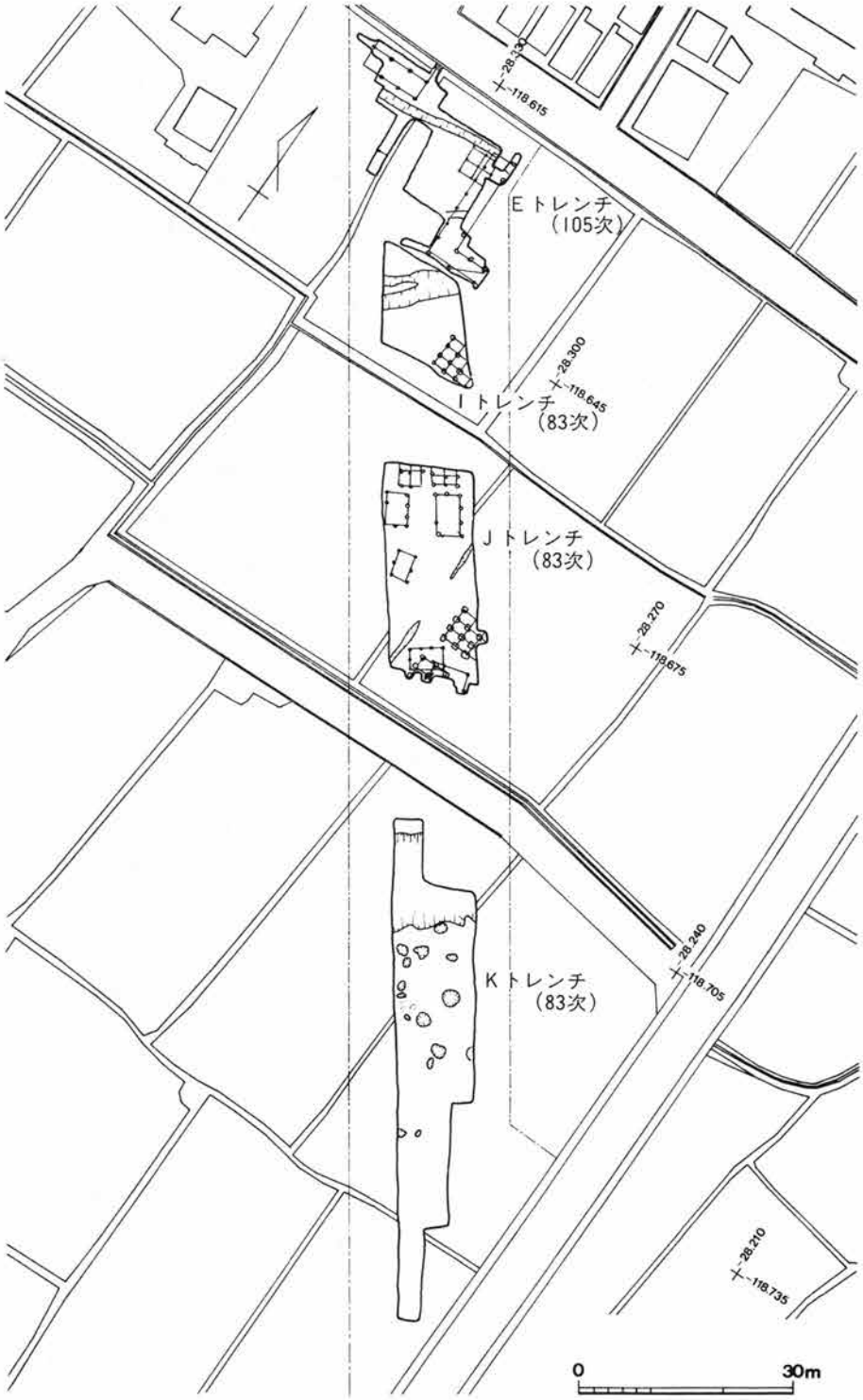
昭和56年度は，Ｉ・Ｊ・Ｋの３トレンチを入れた。調査は，昭和57年２月10日から重機を入れ，厚さ 0.4m～0.6mの耕作土・床土を除去し，以後人力で掘削に入った。Ｉトレンチは，床土直下で地山の黄色粘質土となり，この面で中世の溝や奈良・平安時代の柱穴を検出した。幅３m深さ0.2mの中世の溝がトレンチの中央を西から北東へ流れ，遺構面を削平している。東南部は，一段低くなり，中世の包含層がある。これを除去したところで奈良・平安時代の柱穴を検出した。中世の段階で削平を受けたものである。Ｉトレンチは東南部を除き遺構は希薄である。Ｊトレンチは，２枚の水田にわたり，東側が一段低い。床土の直下で黄色粘質土の地山となるが，低い部分には，中世の包含層である灰色粘質土層が堆積している。これらを除去して遺構検出作業を行った結果，中世の素掘り溝や，奈良・平安時代の建物跡，柱穴，溝，土坑等を検出した。Ｋトレンチでは，床土の下は黄色粘質土の地山となり，この面で古墳から奈良時代にかけての自然流路及びその南で多数の土坑を検出した。

これらの遺構を掘り下げ，写真撮影・図面作製をした後，３月17日に西ノ口地区と併わせ現地説明会を行い，３月26日から現地を埋め戻し３月27日に埋め戻しを終了した。その後現地の後かたづけを行い３月31日に現地を終了した。

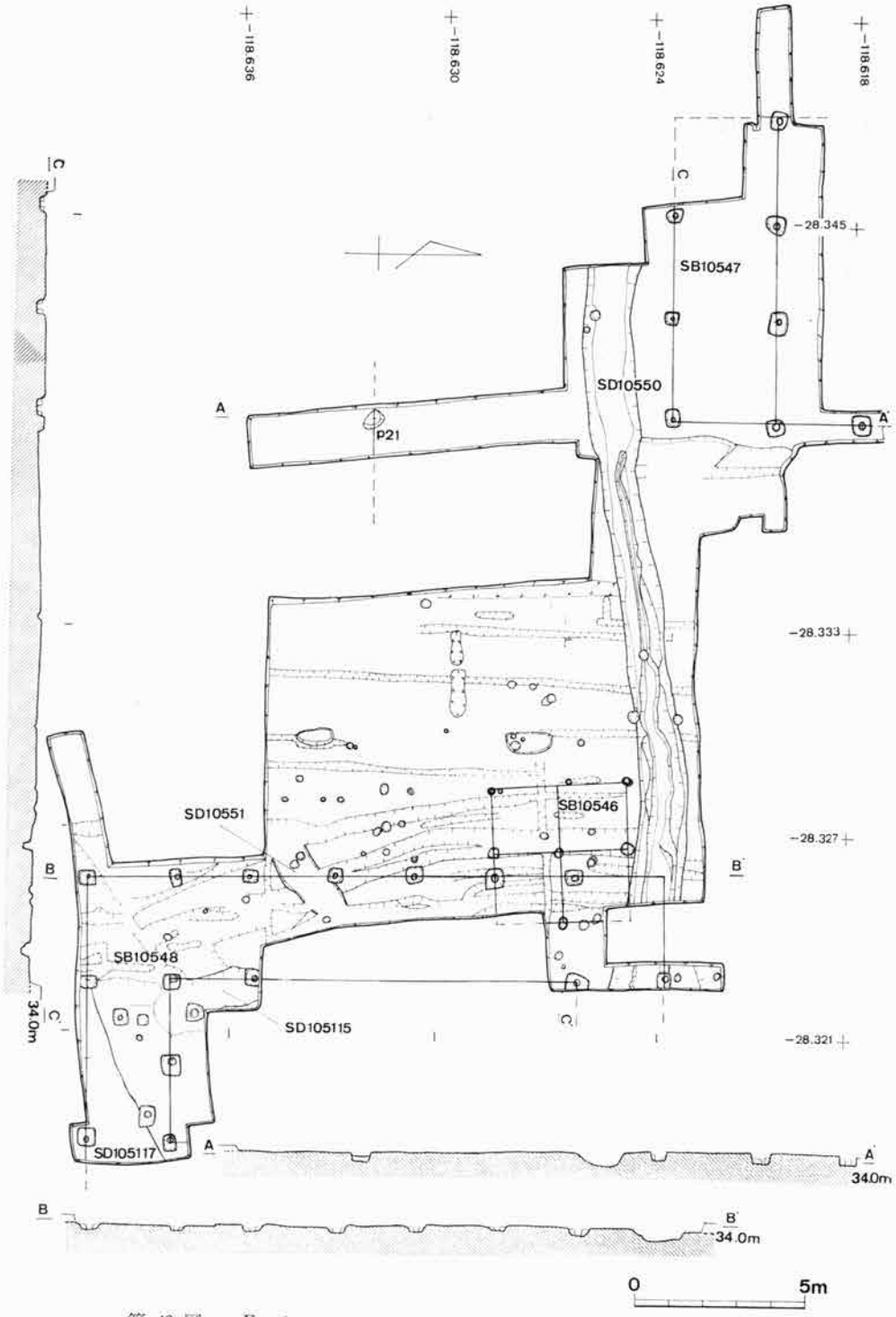
昭和57年度調査は，昭和57年７月11日から，Ｅトレンチを西ノ口地区のＡ～Ｄトレンチとともに入れ，重機にて厚さ約0.2～0.3mの耕作土を除去し，Ａ～Ｄトレンチの調査が一段落した８月23日から遺構精査に入った。このＥトレンチは，耕作土直下で地山の黄色粘質土となり，この面で遺構を検出した。このトレンチも２枚の水田にかかり，段差がある。東側が西側の水田に比べ約0.3m遺構面が低い。物置きが残存しており，変形のトレンチとなっている。トレンチの西半部と東端部で長岡京期の建物を検出し，この建物の規模を確認する為，長岡京市教育委員会及び長岡京市都市計画課と協議し，トレンチの一部を西方と北方に，そして東南方向に拡張した。その結果，３間×３間の南廂を有する建物と４間×７間の四面廂を持つ建物であることが判明した。他に奈良時代の東西方向の溝や中世の建物・溝等も検出した。９月15日に，西ノ口地区のＡ～Ｄトレンチとともに関係者説明会を実施し，その後，図面作製等を行い10月５日に調査を終え，６日に埋め戻しを行い現地を終了した。

(2) 検出遺構

この調査地区においても奈良・平安時代の建物跡や溝・土坑等を検出した。特にＥトレンチでは，奈良時代の土器がまとまって出土した溝や長岡京期の廂を持つ建物跡等を検出した。



第48図　藤ノ木地区調査図



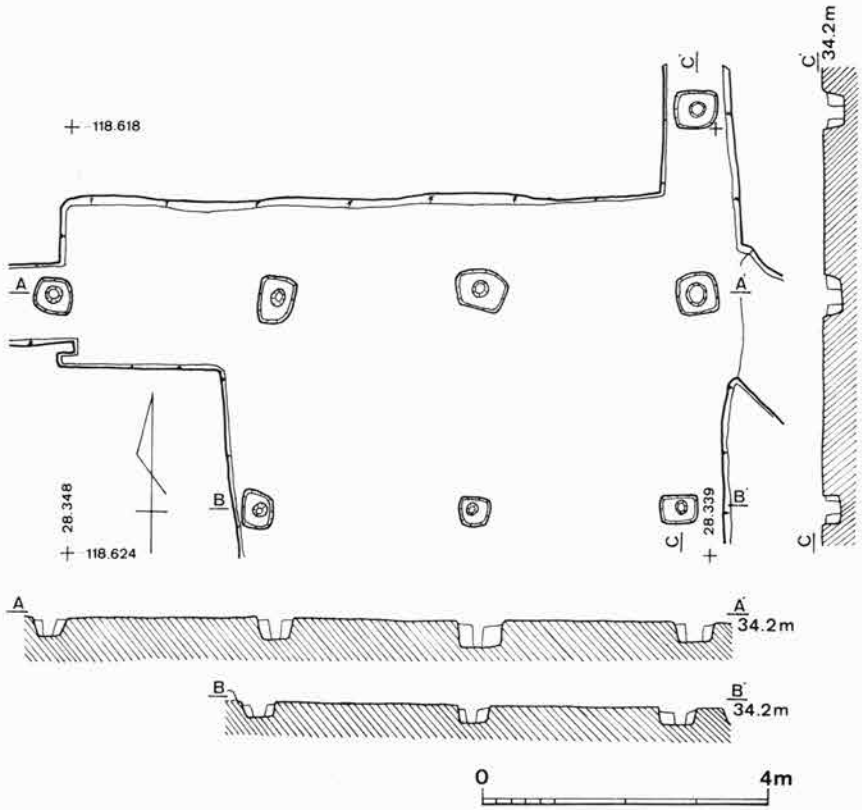
第49図　E トレンチ(105次)検出遺構実測図

Kトレンチでは古墳時代から奈良時代にかけて流れていた自然流路を検出し，その他各トレンチで中世の素掘り溝を多数検出した。以下各トレンチごとに主要遺構について記述する。

E トレンチ（105次調査）

昭和57年度に第105次調査として実施したトレンチで，奈良時代の溝1，長岡京期の掘立柱建物跡2棟，平安時代末期の掘立柱建物跡1棟，その他中世の素掘り溝等を検出した。

SD 10550　トレンチの北端部で検出した溝で，やや蛇行しながら西から東へ延びる。幅約0.8～1.1m深さ約0.3～0.6mを測る。埋土は，暗褐色粘質土層と灰色砂層に分かれ，水が流れていた形跡を示す。東半部では，肩の崩落により地山の土が下層の砂層の間に間層として入りこむ。この間層の下の砂層からの遺物出土は少なく溝が掘られてかなり早い時期に崩落がおこっている。遺物は，砂層の上半部とその上面に多く堆積している。長岡京期の建物がこの溝の上に建っており，長岡京期には廃絶している。奈良時代の遺物がまとまって出



第 50 図　SB10547 実 測 図

土した。

SB 10547　Eトレンチ西半部で検出した東西3間南北2間以上の東西棟（N0°）で，南に廂を有する。トレンチの北へ延びるが，北には三条大路の存在が推定され，南北3間の建物であったと思われる。柱間は，東西方向（桁行）約3m，南北方向（梁行）が身舎部分で約2.4m廂部分で約3.0mを測る。柱穴の掘形は方形で1辺0.4～0.5mとやや小さい。身舎の柱掘形に比べ廂の柱掘形が1廻り小さい。また廂の柱は，身舎の柱位置より中心がやや西へずれる。

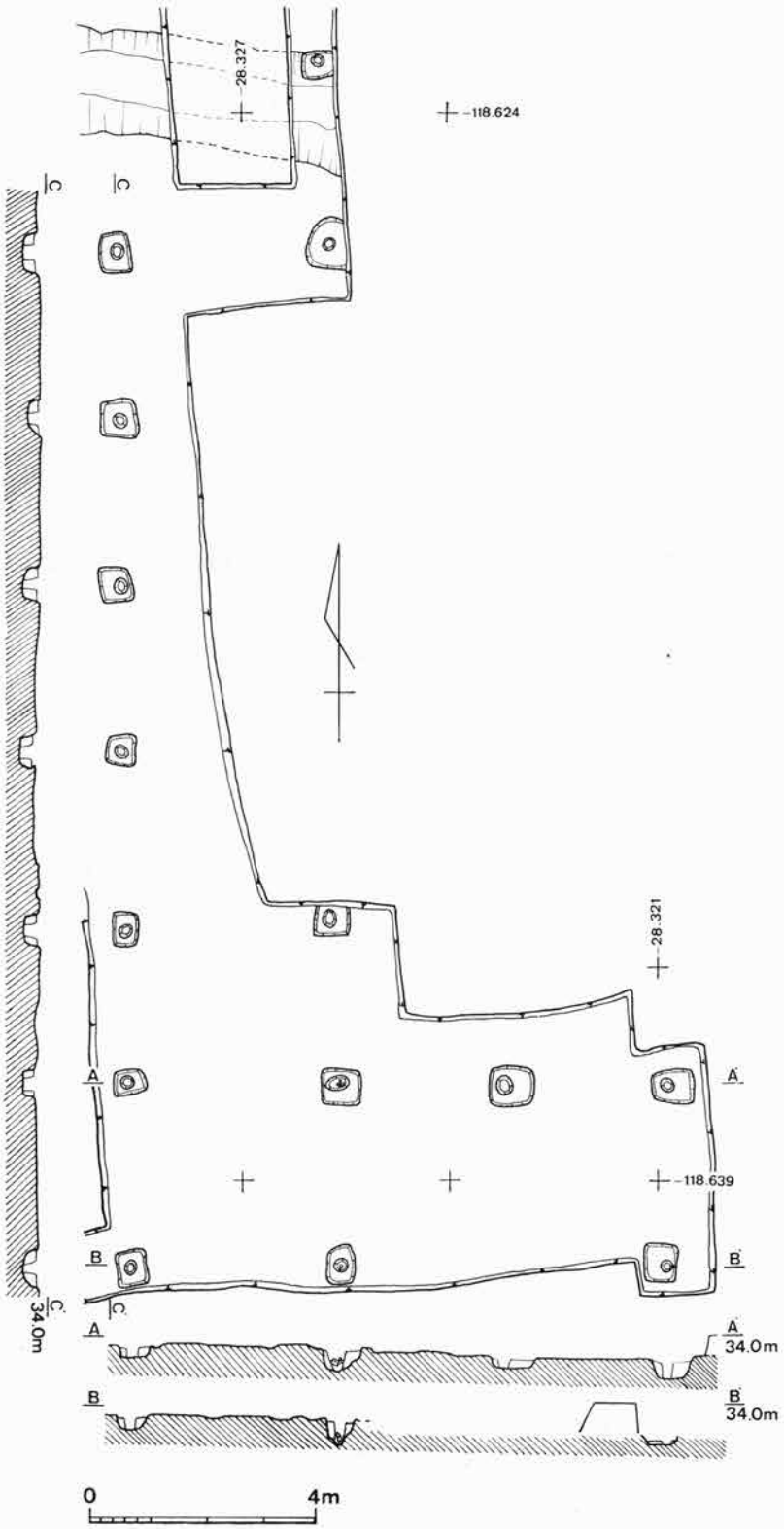
SB 10548　トレンチ東半部の東端部で検出した南北7間東西3間以上の南北棟（N0°）で，調査地の東へ延びる。西・北・南の3面に廂があり，おそらく4面に廂を有する南北7間東西4間の建物であろう。柱間は，南北方向（桁行）約2.4m，東西方向（梁行）が身舎部分で約2.4m庇部分で約3mを測る。軸線は真北方向を向き，SD 10550を削っている。柱掘形は，身舎が1辺約0.5～0.7m，廂が1辺0.4～0.6mを測り，廂の柱掘形が1廻り小さい。全体として，四面廂を有する建物としては規模が小さく感じられる。柱穴から軒丸瓦が出土した。柱穴の一部が中世の溝 SD 105117 や現代の攪乱の為，消滅している。棟方向・遺物から長岡京期のものである。

SB 10546　トレンチ東端で検出した，南北2間東西2間の総柱の建物である。方位はN3°Wで，柱穴は，径0.3～0.4mを測る円形のものである。柱間は，東西・南北方向とも約1.95mを測る。柱穴は一部中世素掘り溝に削られている。柱穴から平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物が出土した。

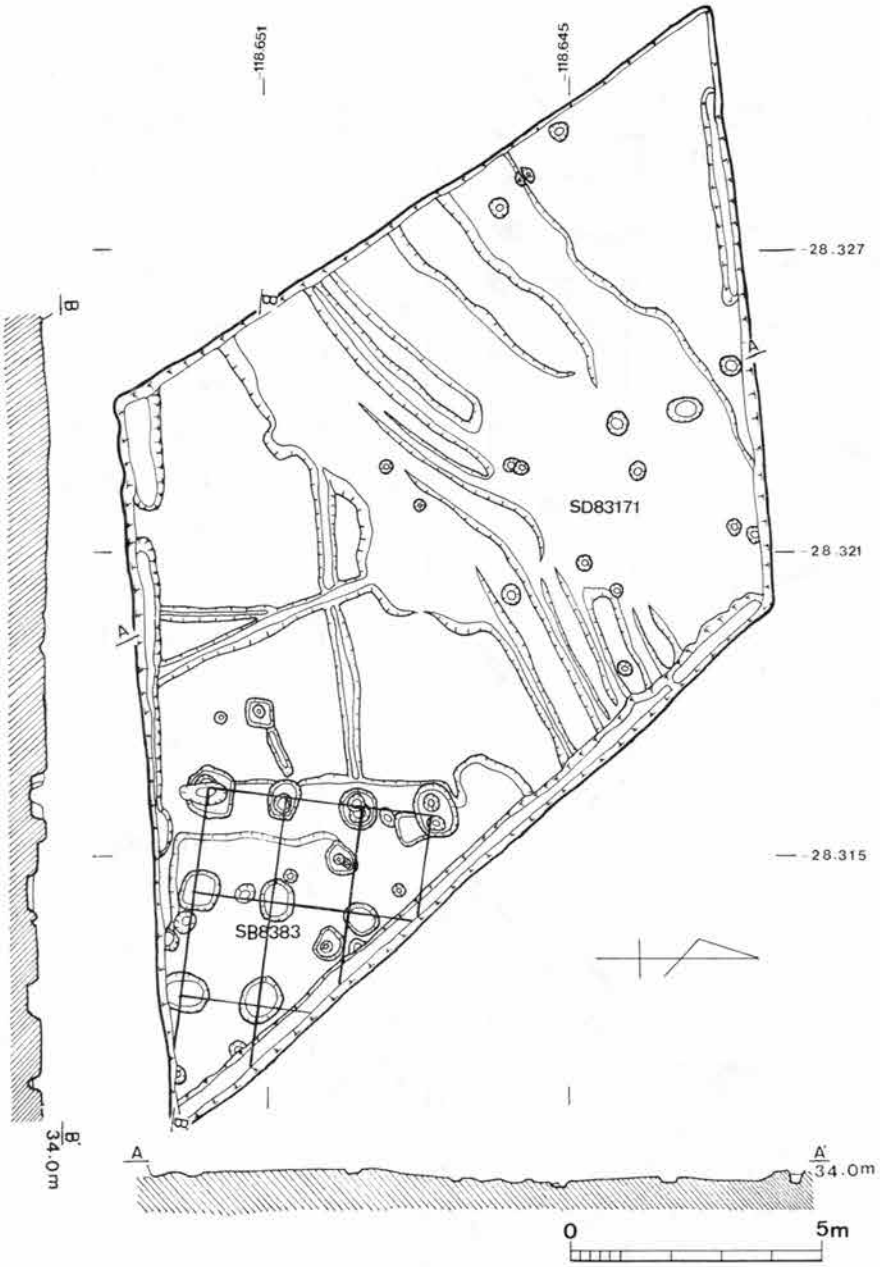
SD 10511　トレンチ南東部で検出した南東から北東へ延びる溝である。幅約1.1m深さ0.1mを測る。奈良時代の須恵器片が少量出土した。

その他の遺構　以上の他中世の溝や柱穴，長岡京期のものと思われる柱穴（**P 21**）等を検出している。

P 21 は，西半部の南へ延長したトレンチの中央で検出した1辺約0.5m深さ約0.2mを測る柱穴で，柱を抜きとった後に多数の瓦や凝灰岩片が放り込まれていた。SB 10547の東側の柱列の延長上に位置する。トレンチの南端はこの柱穴から約3.5mあるが，対応する柱穴は検出されなかった。柵列か建物の身舎部分である可能性が強い。東半部では，この柱穴の延長は検出されなかったので，東へは1間延びるのみであろう。柵列とするとSB 10547の前面を画する柵となるが，瓦が出土していることや，SB 10547と柱筋が揃うことから，建物で



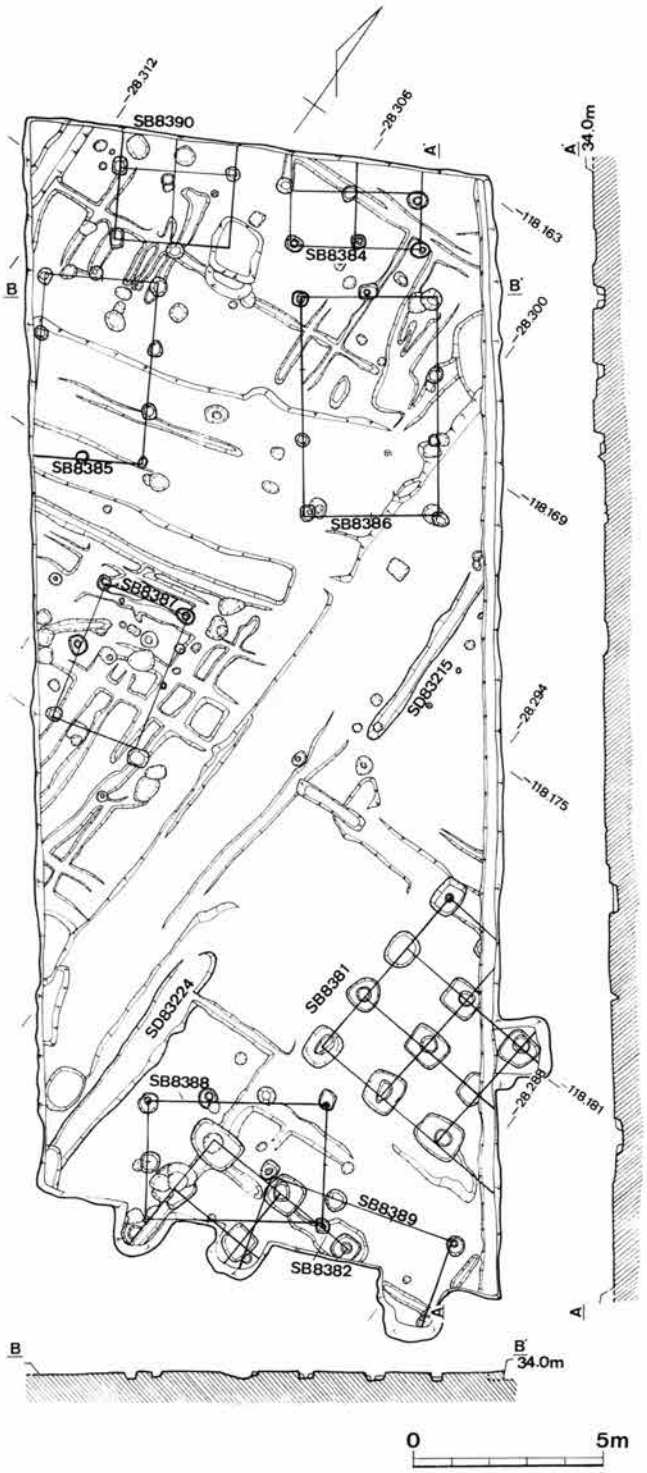
第 51 図　SB10548 実 測 図



第52図　Ⅰトレンチ(83次)検出遺構実測図

ある可能性が強く，SB 10547 と柱間の等しい東西5間，南北2間乃至3間の建物であったと思われる。

中世の溝は，大半幅0.3m前後を測る素掘り溝であるが，SD 105117 は，灰色細砂層で埋



第 53 図　Jトレンチ（83次）検出遺構実測図

った深さ 0.3m を測る浅い自然の流路である。前年度の83次調査Ｉトレンチで検出した SD 83171 の延長である。また，SD 105116からは，鎌倉時代初めの瓦器椀が出土している。これも砂質土で埋った深さ約0.15mを測る浅い溝である。

Ｉトレンチ（83次調査）

このトレンチでは，南東部で奈良・平安時代の掘立柱建物跡を１棟検出した。他にトレンチ中央で南西から北東へ延びる中世の溝を検出した。

SB 8383　トレンチ南東部で検出した南北３間東西２間以上の規模の総柱の建物 (N8°E) で，トレンチ東方に続く。柱間は，南北方向約 1.5m 東西方向約 1.8 m を測り，柱掘形は１辺 0.7～１m を測る隅丸方形のもので，かなり大型である。同様に大型の柱掘形を持つ総柱の建物を南のＪトレンチで検出している。

SD 83171　西から北東へ流れる灰色細砂で埋った

自然の浅い流路で，幅約4～4.5m深さ約0.3mを測る。瓦器片等が出土する。SD 105117に続く。

Jトレンチ(83次調査)

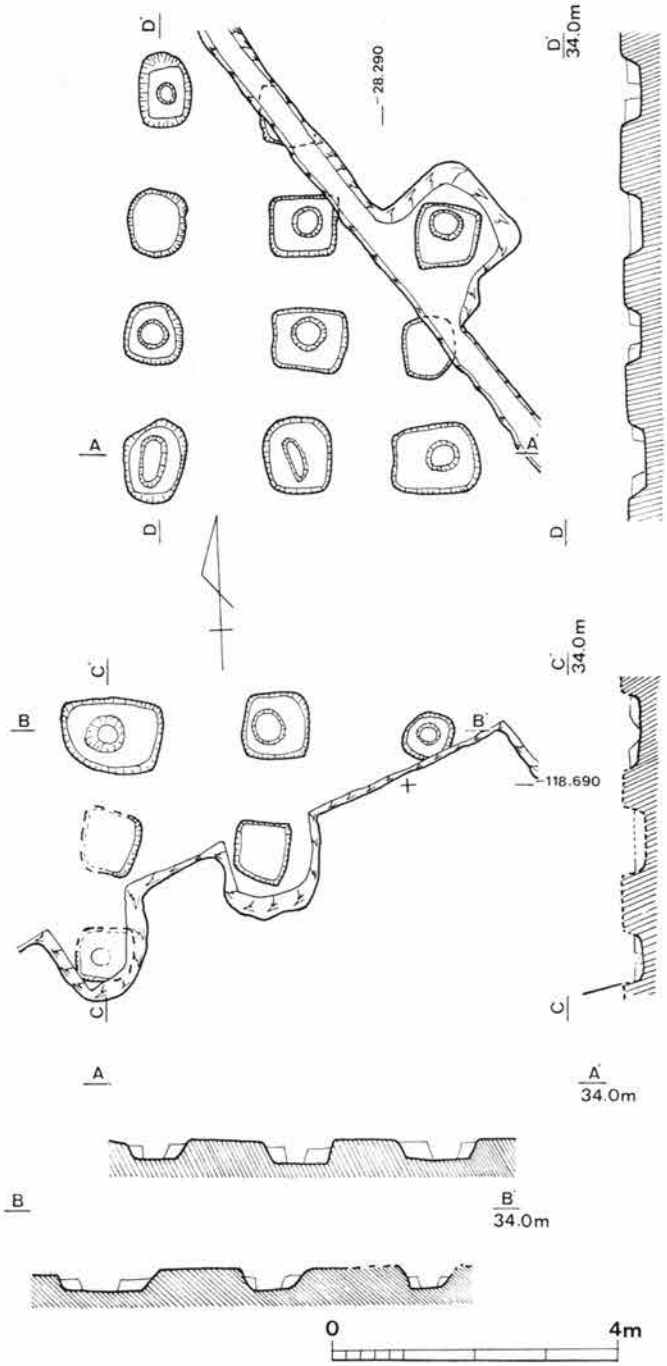
このトレンチでは，奈良平安時代の掘立柱建物跡9棟・溝・土坑を検出した。また他に中世及び平安時代の素掘り溝を，この地区ではもっとも顕著に検出した。

SB 8384・8390 トレンチ北端部で検出した東西2間の総柱の建物でトレンチの北へ続くと思われる。

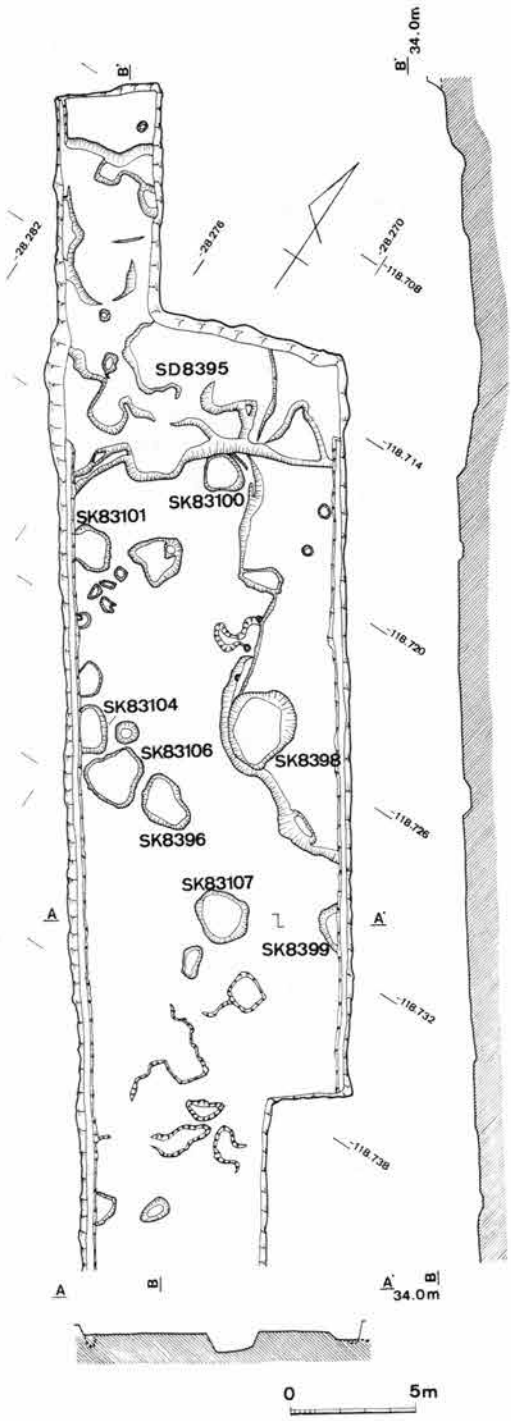
SB 8384は，柱間が東西方向約1.8m南北方向約1.5mを測る。柱掘形は隅丸方形で1辺約0.4～約0.5mを測る。一部の柱掘形に建物の軸方向に沿わないものがある。

SB 8390は，柱間が東西方向約1.5m南北方向約1.95mを測る。

いずれも北に対し35～



第54図　SB8381・8382 実測図



第 55 図　Kトレンチ（83次）検出遺構実測図

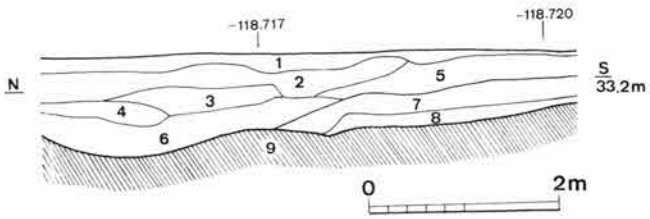
31°西に振れる。方位・遺物から奈良時代に属する。

SB 8385・8386　SB 8384 等の南で検出した。ともに東西2間南北3間の南北棟（N37～30°W）である。柱間は，SB 8386 が南北方向（桁行）約 1.95 m東西方向（梁行）約 1.8m，SB 8385 が南北方向（桁行）約 1.8m 東西方向（梁行）約 1.5mを測る。SB 8385 は規模が1廻り小さい。柱穴は1辺約 0.4～0.5mの掘形を有し，SB 8386 は西の側柱の1つを欠失している。

時期は，SB 8384 と同様奈良時代である。SB 8386 に削られた柱穴があり，さらに先行する建物も存在するようである。

それぞれ総柱建物である SB 8384・8390を附属させていたと考えられるが，SB 8384・8386 は近接しすぎており，SB 8385 と SB 8384，SB 8386 と SB 8390 が組み合う可能性が強い。両グループの前後関係については不明である。

SB 8388・8389　トレンチ南端で検出した南北2間東西3間の東西棟である。方位は，SB 8388 が N 20°W，SB 8389 が N 10°W を測る。柱間は，SB 8388 が東西方向（桁行）南北方向（梁行）約 1.6m，SB 8389 が東西方向（桁行）約 1.95m 南北方向（梁行）約2.35



第56図　SD8395 土層図

1. 橙褐色礫混じり粘質土層　2. 褐色混じり暗灰色砂質土層　3. 灰色砂層　4. 暗灰色砂層　5. 淡灰色砂質土層　6. 緑色石混じり暗灰色砂層　7. 淡緑灰色土層(礫を含む)　8. 橙褐色礫層　9. 白色粘土層

mを測る。SB 8382 に柱穴を削られている。柱掘形は，1辺約0.4～0.6mを測る。方位・出土遺物から奈良時代に属する。

SB 8387　トレンチ中央で検出した東西1間南北2間の南北棟（N8°W）である。柱間は，南北方向(桁行）約1.8m東西方向（梁行）約2.4mを測る。

SB 8381・8382　トレンチの南東部で検出した同一方向を向く1辺0.8m前後を測る大型の掘形を有した総柱の建物である。SB 8381 は，南北3間東西2間以上で，柱間が南北方向約1.95m東西方向約2.1mを測る。SB 8382 は，東西2間南北1間以上で，柱間が東西約2.25m南北約1.8mを測る。いずれもトレンチの東と南へ続くと思われ，SB 8381 が南北3間東西3間，SB 8382 が南北2間東西2間の建物であろう。方位はN7～9°Eを測る。

SD 83215・83224　ほぼ真南北方向に沿った溝で，SD 83215 が幅約0.5m深さ0.15m，SD 83224 が幅約0.9m深さ約0.2mを測る。途中切れているが，同一の溝である。土師器・須恵器の小片が少量出土したのみで時期決定は困難であるが，西三坊第2小路の推定地がこのトレンチを通ることから，西三坊第2小路の側溝乃至はそれを踏襲した溝の可能性がある。

国土座標値のY値は，－28,297.2 を測る。(注25)

Kトレンチ

このトレンチでは，北端部で，西から東へ流れる自然流路とその南で多数の土坑を検出した。

SD 8395　トレンチの北端部で検出した自然流路で幅約12m深さ約0.7mを測り，砂礫や粘土，砂質土で埋まっている。古墳時代中期から奈良時代の遺物が出土している。特に古墳時代後期の土器が多く出土し，溝底や北岸の肩で6世紀前半から後半の土器がかたまって出土した。流路は，8世紀には，ほぼ埋まりかけていた模様で，8世紀末の遺物を全く含んでいないことから長岡京期には完全に埋没しきっていた模様である。最下層の淡緑灰色砂層から布留式の高杯が出土し，緑色石混じり暗灰色砂層・灰色砂層・暗灰色砂層は6世紀の遺物を，淡灰色砂質土層・褐色混じり暗灰色砂質土層・橙褐色礫混じり粘質土層は7～8世紀の遺物を含んでいる。この流路から南では，奈良時代の集落は検出しておらず，この流路が集

落の南の限りをなしていたものと思われる。

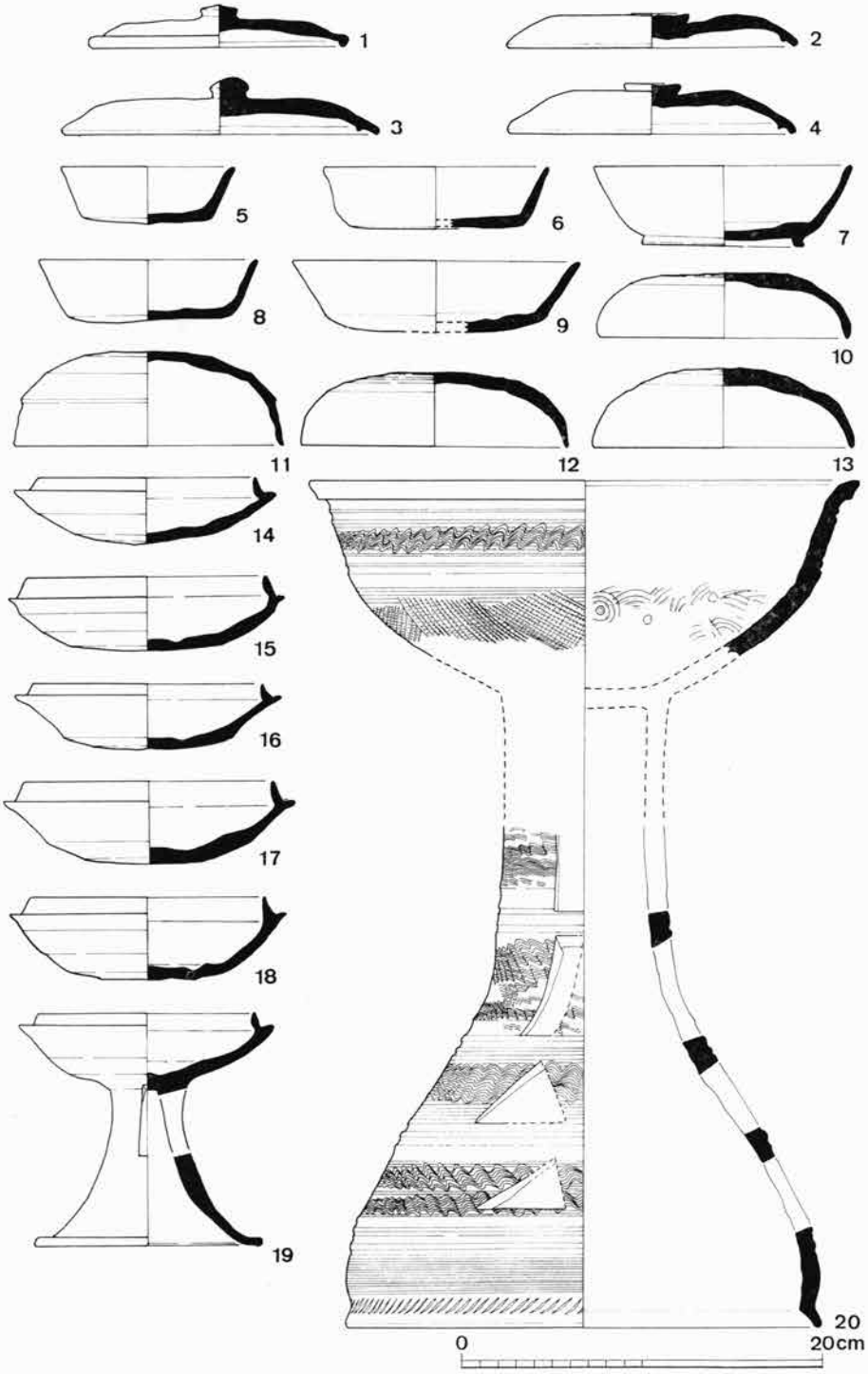
土坑群　このトレンチでは，ＳＤ8395から南で多数の土坑を検出したが，ＳＫ83107・8399・8398を除き遺物を出土していない。またＳＫ8398・8399・83107は黒色土で埋っていたが，他は黒色土と黄色土がブロック状にはいり込み，壁も直に落ちる。遺物が皆無であるので，時期は不明であるが，かなり時代の下がるものであろう。ＳＫ8398等は，古墳時代の須恵器や埴輪片を含んでいる。

(3) 出土遺物

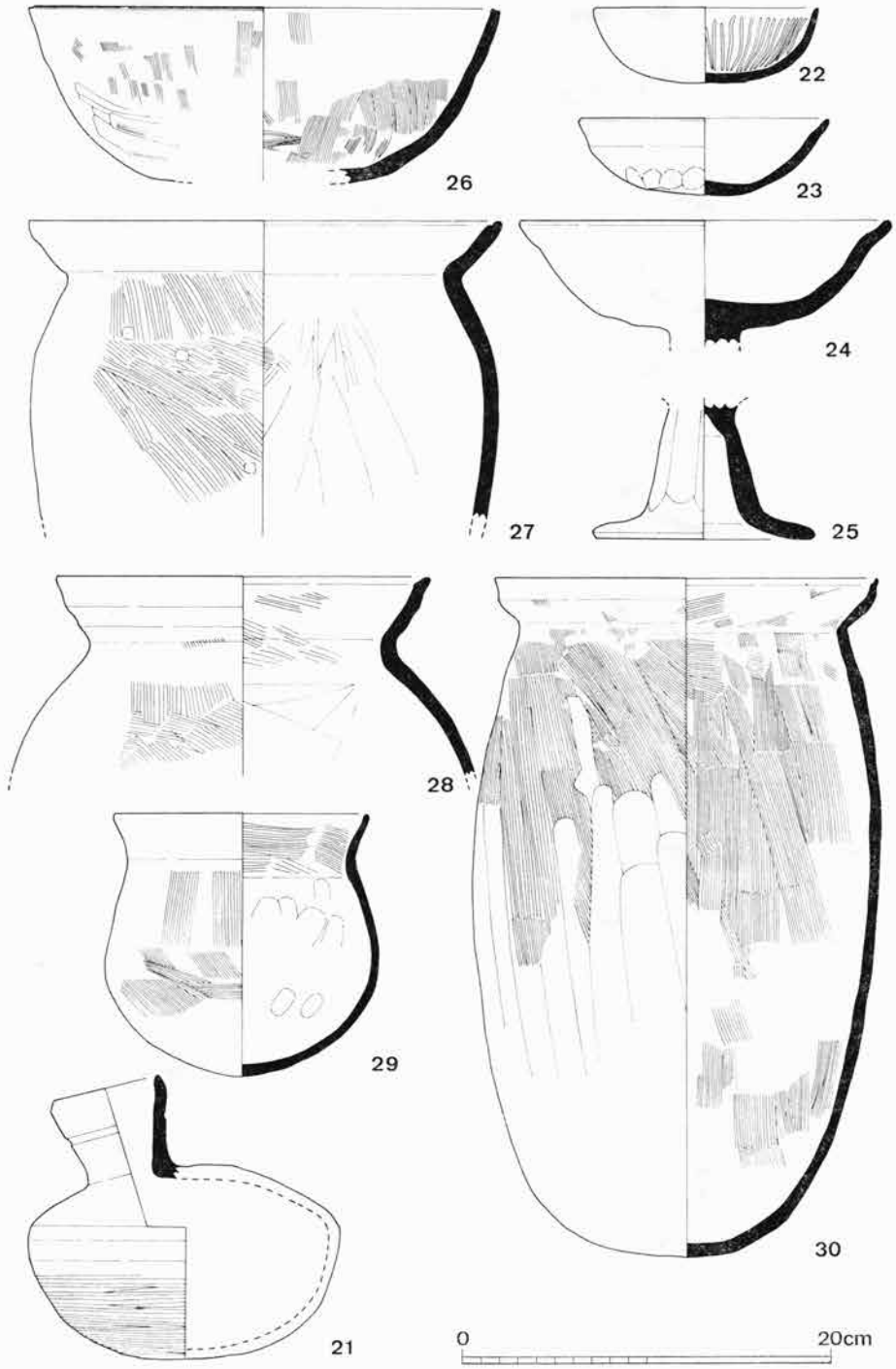
この地区では，古墳時代から中世にかけての須恵器・土師器・瓦器・土馬等を出土した。また混入品であるが，エンドスクレーパーや石鏃を採集した。以下遺構別に述べる。

SD 8375 出土土器（第57・58図）　古墳時代中期から奈良時代にかけての土師器高杯(24・25）椀（22・23）鉢（26）甕（27～29）や須恵器蓋（1～4）杯蓋（10～13）杯Ａ（５・６・８・９）杯Ｂ（７）杯身（14～18）高杯（19）器台（20）平瓶（21）等が出土した。

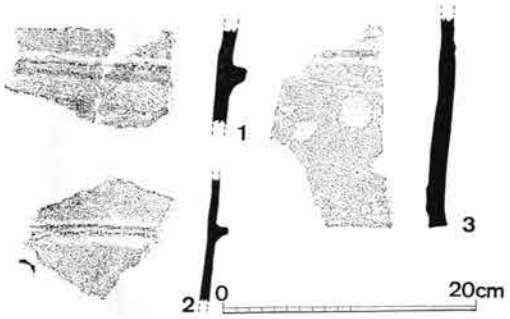
24は布留式の高杯で淡緑灰色砂層から出土した。口径 20 cm を測るもので，杯部の底部と体部の境に稜を持たずゆるやかに立ち上がり口縁端部近くで外反する。内外面に横なで調整を行う。10～13は，11を除き天井部と口縁部の境の稜を持たない。口径は，10が 13.6cm を測る他は，14.4～14.9 cm を測る。14～18は，口径 13 cm 前後を測り，口縁部の立ち上がりも短い。19は，短い立ち上がりを有する杯部にラッパ状に広がる脚部を持つ。脚部上半に１段透しを４方に配する。20は，杯部の底部及び脚の筒部上半を欠失しているが，脚部は細長い筒部からロート状に広がる裾部に続き，低い凸帯によって５段以上に区分する。下から２段目以上に透しを直列に配し，透しは，筒部は長方形に，裾部は三角形に三方向から入れている。各段はカキ目調整を施した後最下段を除き波状文を描いている。杯部は，口縁端部近くが外反し，外面上半にカキ目調整を行い，凸帯に挟れて一段波状文を描く。下半部内外面には，叩き目と同心円文が残る。口径・底径は，30.6 cm と 26.1 cm を測る。30は，長胴の甕で，口縁部は受け口状を呈し，凹み気味の端面を持つ。体部内外面にたて方向の刷毛目を施し，外面下半は縦方向に篦削りを行っている。口縁部は刷毛目を施した後横なでを行っている。口径 20.8 cm 器高 36.4 cm を測る。27・28は，口縁部が内彎気味に開き，体部外面は刷毛目を施し，内面は篦削りを行う。２～４は，内面に退化した返りを有し，口径 16 cm 前後を測る。21は，丸味を帯びた体部にロート状の口縁を附す。１は，口径 14 cm を測り，全体に扁平で天井部から口縁部に続く22は，丸底を呈し内面に正放射文の暗文を一段有する。１は，口径 9.3 cm を測る。23は，体部外面下半に指頭痕を残し口縁部外面に横なでを施す。26は，口径 25.2 cm を測り，内外面に刷毛目を施し，外面下半を横方向に篦削



第57図　SD8395 出土土器実測図 (1)
1～20：須恵器



第 58 図　SD8395 出 土 土 器 実 測 図 (2)
21：須恵器，22～30：土師器



第 59 図　SK8399・83107出土埴輪実測図
1・2：SK8399，3：SK83107

りしている。25は，裾部が扁平に大きく広がる。

SK 83107・8399 出土遺物（第59・60図）　SK 83107 からは，須恵器の壺（2）土師器の甕（6）埴輪（1・2）が出土している。2は，広口の壺で，外面下半に叩き目を残す。6は，口径 20.8 cm を測り，把手を有し，体部外面及び内面上面に縦方向の刷毛目を施し，内面下半に縦方向の篦削りを施す。1・2は，円筒埴輪片で断面台形のたがを有し，縦方向に細かい刷毛目を施す。胎土はやや粗く砂粒を含む。色調は淡褐色を呈し，黒斑を有している。SK 8399 からも埴輪片（3）が出土している。SK 83107 出土品と同様の胎土・色調・調整を示し，底部調整も見られない。

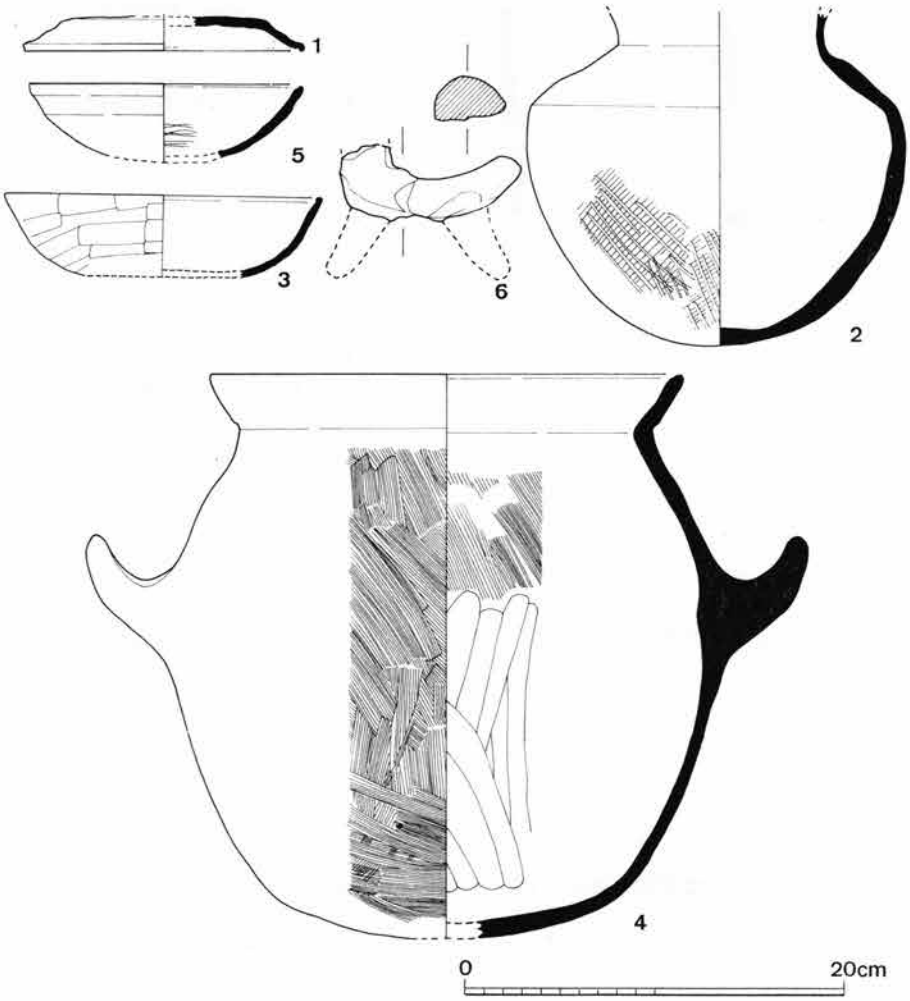
SB 8386 出土土器（第60図）　須恵器の蓋（1）が出土している。平坦な天井部からゆるやかに下がり口縁部へ続く。口径 14.6 cm を測る。

Jトレンチ柱穴出土土器（第49図）　Jトレンチの柱穴（P 88）から土師器の杯A（3）が出土している。口径 18.6 cm を測り，ゆるやかに彎曲して立ち上がり，口縁端部を内側に肥厚させる。外面に篦削りを施す。

I トレンチ包含層出土遺物（第60図）　瓦器（4）や土馬（6）が出土している。4は，口径 14.4 cm を測り，内面に省略された暗文を施す。口縁端部に沈線を有する。6は，足と頭部を失い，現存長 9.6 cm を測る。

SD 10550 出土土器（第61・62図）　この溝からは，須恵器の蓋（1～3）杯A（4）杯B（7～9）皿（4・5）盤（25）鉢F（22）甕A（23・24），土師器の杯A（10・11・14～20）椀A（12～13）皿A（21）高杯・壺A（27）鍋A（26）甕A（29・31～33）甕B（30）甕C（28），製塩土器（34～40）が出土している。

須恵器蓋は口径 11.8 cm と 15.6～16.2 cm を測る蓋Ⅰ（1）と蓋Ⅱ（2・3）がある。1・2は，平坦な天井部からなだらかに口縁部に続き，天井部・口縁部の境に甘い稜を持つ。3は，平坦な天井部から屈曲する口縁部へ続く。4・5は，口径 15.5 cm 前後，6～8は口径 13～13.7 cm を測る。8～9は，体・底部の境いより内側に高台を附す。外方へややふんばり気味の高台である。4～9いずれも回転なで調整を行う。23・24は，口縁部を肥厚させ肩部にカキ目を施す。22は，外方へ直線的に延びる体・口縁部と厚い円板状の底部か



第60図　SB83107 他 出 土 遺 物 実 測 図

1・2：須恵器，3・4：土師器，5：瓦器，6：土馬，3・6：Ⅰトレンチ包含層，1：SB8386，3：P-88，2・4：SK83107

らなる。体部中央に2条の沈線を有し，口縁端部はやや内傾した面をなす。須恵器は，焼成・胎土から，淡灰色を呈し軟質のもの（2・3・4・5・6）と青灰色を呈し硬質のもの（7～9・22～25）がある。

土師器の杯Aは，20を除き口径13.5～14.5cmを測る。法量からⅠ（10・11・14～19）とⅡ（20）に分かれる。杯AⅠは，口縁端部をやや外反させるもの（10・11）と口縁部が内彎気味のもの（14～19）がある。いずれも底部外面未調整で，口縁部に横なでを施している。14～19は特に顕著に指頭痕を残す。強い指押さえのため，14～16は体・底部の境に凹みを

生じている。20は，口径約18.2cmを測り，外面篦削りを施している。口縁端部内面に沈線を有する。21は，口径22.4cmを測り，底部外面篦削り，口縁部横なでを行っている。口縁部内面に放射状，底部内面にラセン状の暗文を有する。甕Aは，法量から口径15～18cmを測るⅠ（32・33）と口径24～28cmを測るⅡ（29・31）に分かれる。甕B・Cは甕AⅡと同じく口径 24～28cm を測る。いずれも体部に刷毛目を施し，口縁部は横なでを行うが，口縁部内面に刷毛目を有するもの（29・32・33）もある。また30は，体部内面に同心円文を有している。土師器は胎土から，10・11・20・21の様に明褐色を呈し，胎土の精良なものと，12～19の様に淡褐色で砂粒を含むものの2群に分かれる。後者は，作りも全体に粗雑である。

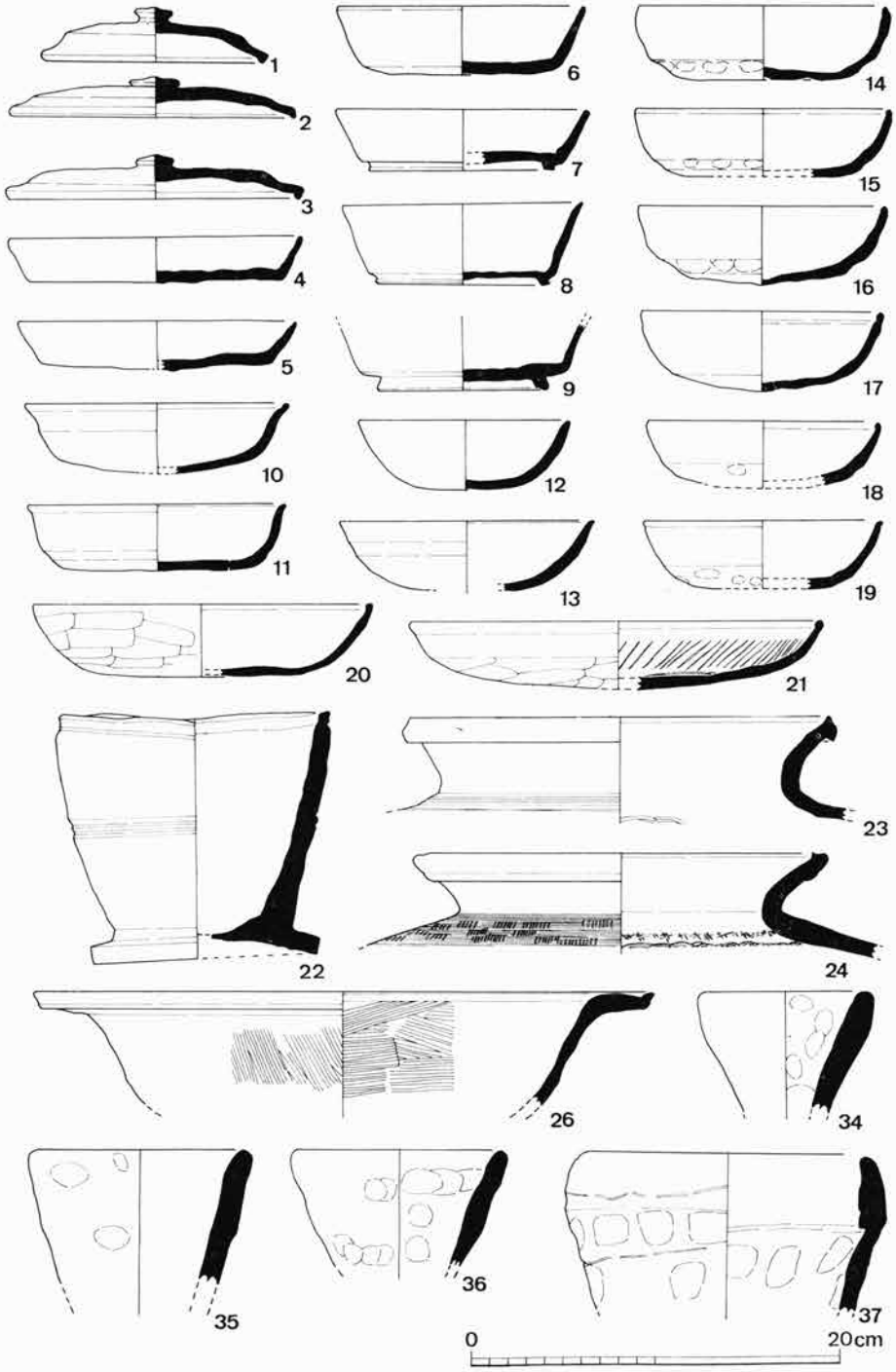
製塩土器は，いずれも砂質で粗い胎土をしており，大半は内外面とも指押さえ未調整乃至はなでるのみであるが，38は内外面刷毛目を施し，35は内面に布目を有する。

付表4　SD10550出土土器器種分類表

	土師器			個体数		比率%	
食器	杯	A	Ⅰ	27	38	45.5	65.5
	〃		Ⅱ	2		3.4	
	椀		A	5		8.6	
	皿		A	3		5.2	
	高杯			1		1.7	
貯蔵器	壺		B	1		1.7	
煮炊具	甕	A	Ⅰ	4	19	6.9	32.7
	〃		Ⅱ	9		15.5	
	〃		B	3		5.2	
	〃		C	2		3.4	
	鍋			1		1.7	
	計			58		99.9	

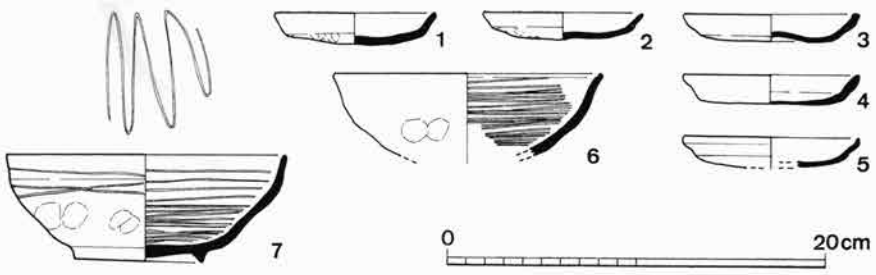
	須恵器		個体数		比率%	
食器	蓋	Ⅰ	4	26	11.8	76.4
	蓋	Ⅱ	6		17.6	
	皿	A	4		11.8	
	杯	A	3		8.8	
	杯	B	6		17.6	
	盤	A	2		5.9	
	鉢		1		2.9	
貯蔵器	甕	A	8		23.5	
	計		34		99.9	
その他	製塩土器		17			

	土師器	須恵器	計
食器	38 (41.3%) (59.3%)	26 (28.3%) (40.7%)	64 (69.6%) (100%)
貯蔵器	1 (1%) (11.1%)	8 (8.7%) (88.9%)	9 (9.7%) (100%)
煮炊具	19 (20.7%) (100%)	0 (0%) (0%)	19 (20.7%) (100%)
計	58 (63%)	34 (37%)	92 (100%)



第 61 図　SD10550 出 土 土 器 実 測 図 (1)
1～6・22～24：須恵器，7～21・26：土師器，34～37：製塩土釜

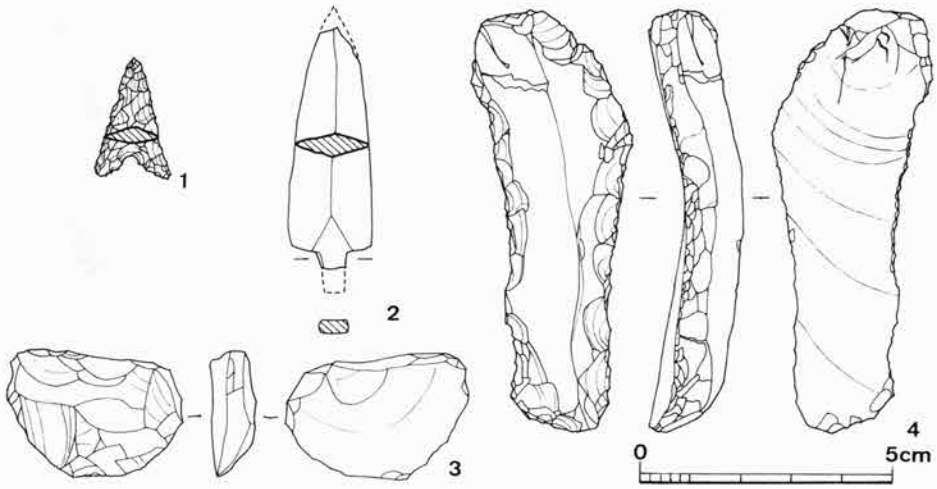
第62図　SD10550 出土土器実測図 (2)
25：須恵器，27～33：土師器，38～40：製塩土器



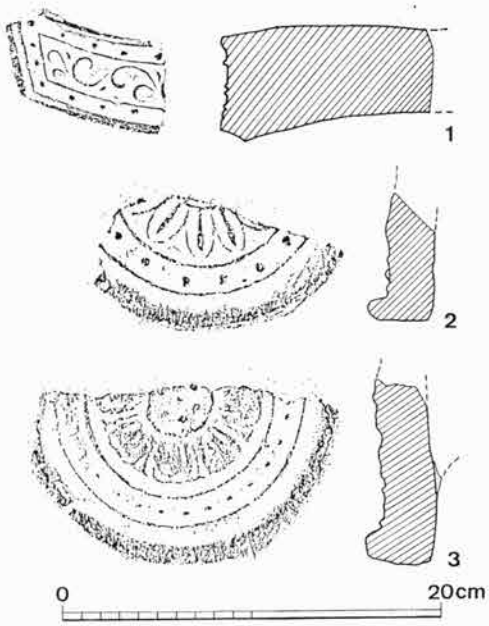
第63図　SD105115 他出土土器実測図
1～5：土師器，5・7：瓦器，1～3・7：SD105115，4：SD105117，5・6：SB10546

20や32の様に新しい様相の土器も認められるが杯Aがすべて暗文は持たないが，底部未調整であることや，皿が底部篦削りを行い暗文を有するものがあること，そして外傾指数等から8世紀中葉から後半にかけて位置づけられよう。

この土器群は，須恵器の量が少ないことや土師器の食器と煮炊具の割合が2：1であること，土師器の杯がほぼ法量的に1グループであることなどの特徴を示す。各器種の内わけは表のとおりであるが，杯AⅠの多さが目につく。皿も少なく，食器類の大半を杯でおぎなっている。器種の少なさも目につき，土師器では，杯B等有高台の土器や蓋等がなく，須恵器では，壺類が1点もない。食器・貯蔵器・煮炊具の割合は7：1：2を示し，貯蔵器が少ない。全体を通して食器類が大半を占めるが，煮炊具が土師器中30%を占め，西二坊大路側溝や右京六条一坊の宅地など長岡京期の京内での出土例(注26)と比較すると圧倒的に甕の多いことが目につく。



第64図　藤ノ木地区出土石器実測図



第65図　Eトレンチ（105次）出土軒瓦実測図
1：SD10550内攪乱　2・3：SB10548

SB 10546・SD 105115 出土土器（第63図）　瓦器椀（6・7）や土師器皿Ⅱ（1～5）が出土している。瓦器椀（6・7）は，口径 14.8 cm 14.4 cm を測る。外面に暗文を持ち，内面の暗文も密なものである。高台も退化した粘土粒をこすりつけたようなものではない。ただ6と7を比べると，7は内面の暗文にやや省略化が目立ち，6は外面暗文が下半部まで及んでいる。土師皿Ⅱは，丸味を帯びた平底で口縁部がやや外反する1・2と口縁部が内彎気味を呈する3，口縁途中が肥厚する4，一度外反したのち上方へつまみ上げる5がある。口径は8.2～8.8 cmを測る。6は，12世紀後半から末，7は13世紀前半から半ばに位置づけられる。5・6が SB 10546 から，4が SD 105117，他は SD 105115 から出土した。

その他の遺物（第64・65図）　この調査地区では，Eトレンチの SB 10548 の柱穴内から軒丸瓦（2・3），SD 10550 内の攪乱から軒平瓦（1）と，SD 10550 から磨製石鏃（2），SD 8395 から石鏃（1）エンドスクレーパー（4）加工痕のあるフレーク（3）等の瓦や石器が出土した。

磨製石鏃（2）は，先端が折れ現存長 4.9cm 幅 1.7 cmをはかる。サヌカイト製である。石鏃（1）もサヌカイト製で無茎凹基式のもので，長さ 2.4cm 幅 1.5cm をはかる。3・4は貢岩製で，石刃技法によって作られ，押圧剝離によって刃先をつくり出している。長さ8.4 cm 幅 3.1 cm を測る。

(4) 小　　結

この調査地区では，北方の西ノ口地区と同じく奈良・平安時代の建物群を検出した。これらの建物は，方位や遺物から SB 10547・10548 は長岡京期に比定され，他は SB 8381 等方位が N7～9°E をはかるものを除き奈良時代まで逆上るものであるが，N37～30°W のもの N14°W・N13°W のもの N7～9°E のものに分けられ，西ノ口地区と同様の方位角を持つとすれば，SB 8384 等（N37～30°W）が8世紀前半から中葉，SB 8389（N14° 前後 W）が8世

紀中葉から8世紀後半，SB 8381 (N7～9°E) 等が9世紀前半に比定される。そして自然流路である SD 8395 を利用して南の限りとしていたものであろう。

SD 8395 からは，6世紀・7世紀の遺物も出土しており，この地区では8世紀代～9世紀にかけての集落のみではなく，6・7世紀から引き続いて集落が SD 8395 の北側に営まれていた可能性が強い。特に6世紀代の遺物の出土量は多く，この時期の集落が近在にあったことは確実である。

また SK 8399 等から出土した埴輪片は，二次的に埋ったものであるが，近在には細塚・舞塚等の地名が残り，西方の細塚にも古墳の存在が言われている。この埴輪片は，南東に近接する舞塚古墳の埴輪とは，異なったもので時期も古い。黒斑を有することや調整から5世紀後半に位置づけられる。(注27) 考えられるものとしては，細塚古墳があり，細塚古墳の時期を推定する1資料になるかと思われる。しかし細塚古墳とは別の古墳が存在していた可能性もあり，今後の調査に期待したい。いずれにしても，5世紀後半の古墳が近在にあったことを窺わせる。

この他エンドスクレーパー等の出土は，SD 8395 からの混入品ではあるが，この流路の上流に縄文早期の遺跡があることを窺わせる。

5.　舞塚地区の調査

この地区は，地名や以前の立会調査(注28)から舞塚古墳の存在の言われていた地区である。また調査地の東端が西三坊坊間小路の，南端が四条条間小路の推定地でもある。

(1)　調査の経過

昭和57年10月2日から重機を入れ盛土等を除去し，以後人力で掘削に入った。F～Iトレンチとも，耕作土乃至床土直下で黄色粘土層の地山となり，この面で遺構を検出した。

FトレンチとGトレンチでは，古墳の周濠の1部を検出し，Hトレンチでは，円弧状を呈する古墳時代の溝を，Iトレンチでは，弥生時代の溝や長岡京の道路側溝等を検出した。Hトレンチで検出した古墳時代の溝は，出土遺物や電々公社の立会調査の結果から，やはり古墳の周濠である可能性が強い。これら各トレンチの図面作製・写真撮影を行いながら，舞塚古墳の周濠はその一端を検出したのみであるため，長岡京市都市計画課・長岡京市教育委員会と協議し，F・Gトレンチを一部拡張し，舞塚古墳の周濠の確認を行った。まずFトレンチの西半部を埋め，Fトレンチの北端部を北東へ拡張し，後円部周濠の幅等の確認をした。12月6日に舞塚地区の関係者説明会を行い，その後各トレンチの調査を終え埋め戻し，12月16日から追加調査としてGトレンチを東へ拡張した。その結果，舞塚古墳は，帆立貝式の古墳であることが判明し，多数の円筒埴輪とともに人物埴輪が出土した。拡張部分の図面作

第66図　舞　塚　地　区　調　査　図

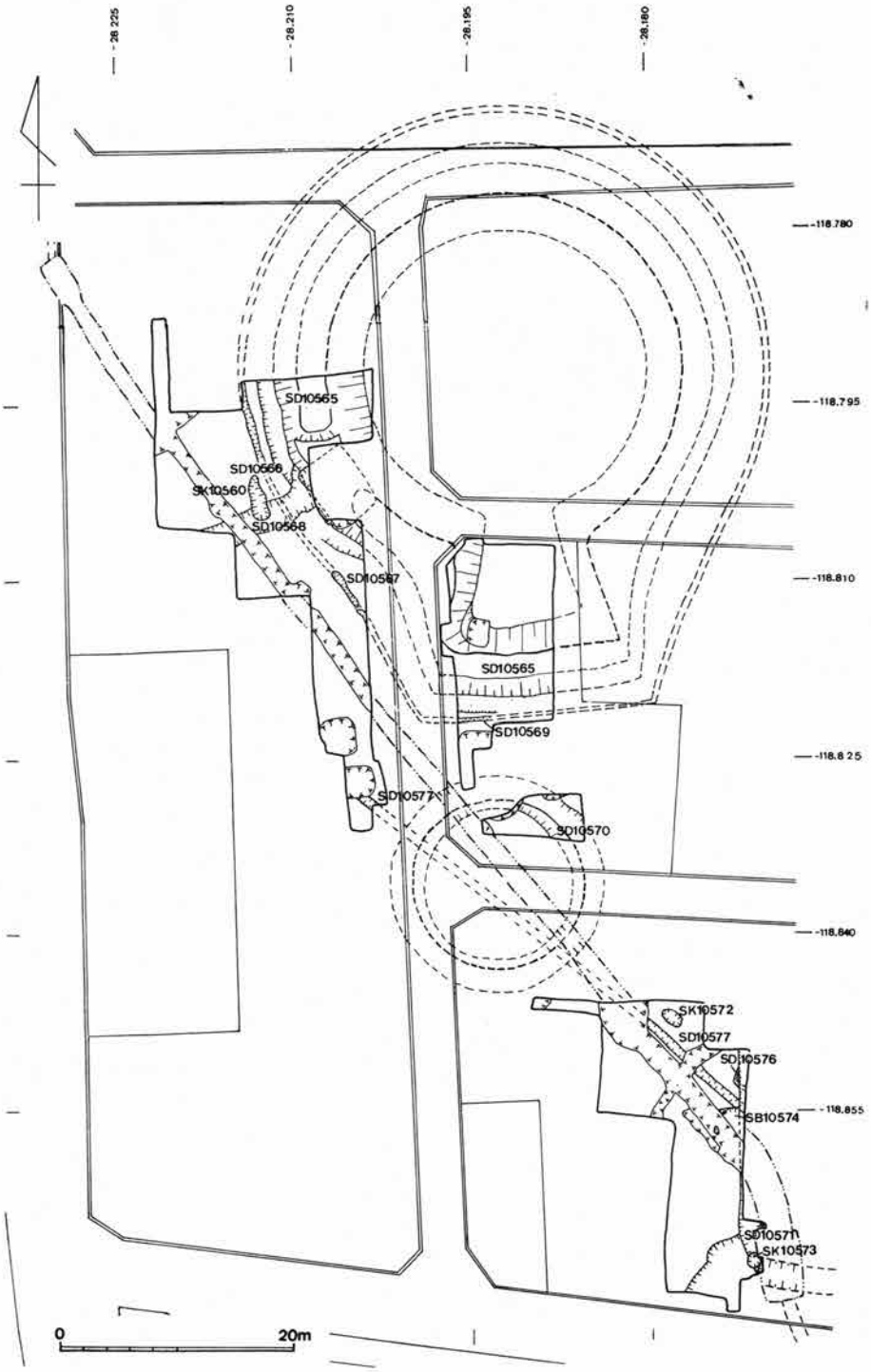
製・写真撮影等を終え，1月22日に舞塚古墳の関係者説明会を行い，1月26日から埋め戻しを始め，1月27日に現地を撤収し，現地調査を終了した。

(2) 検出遺構

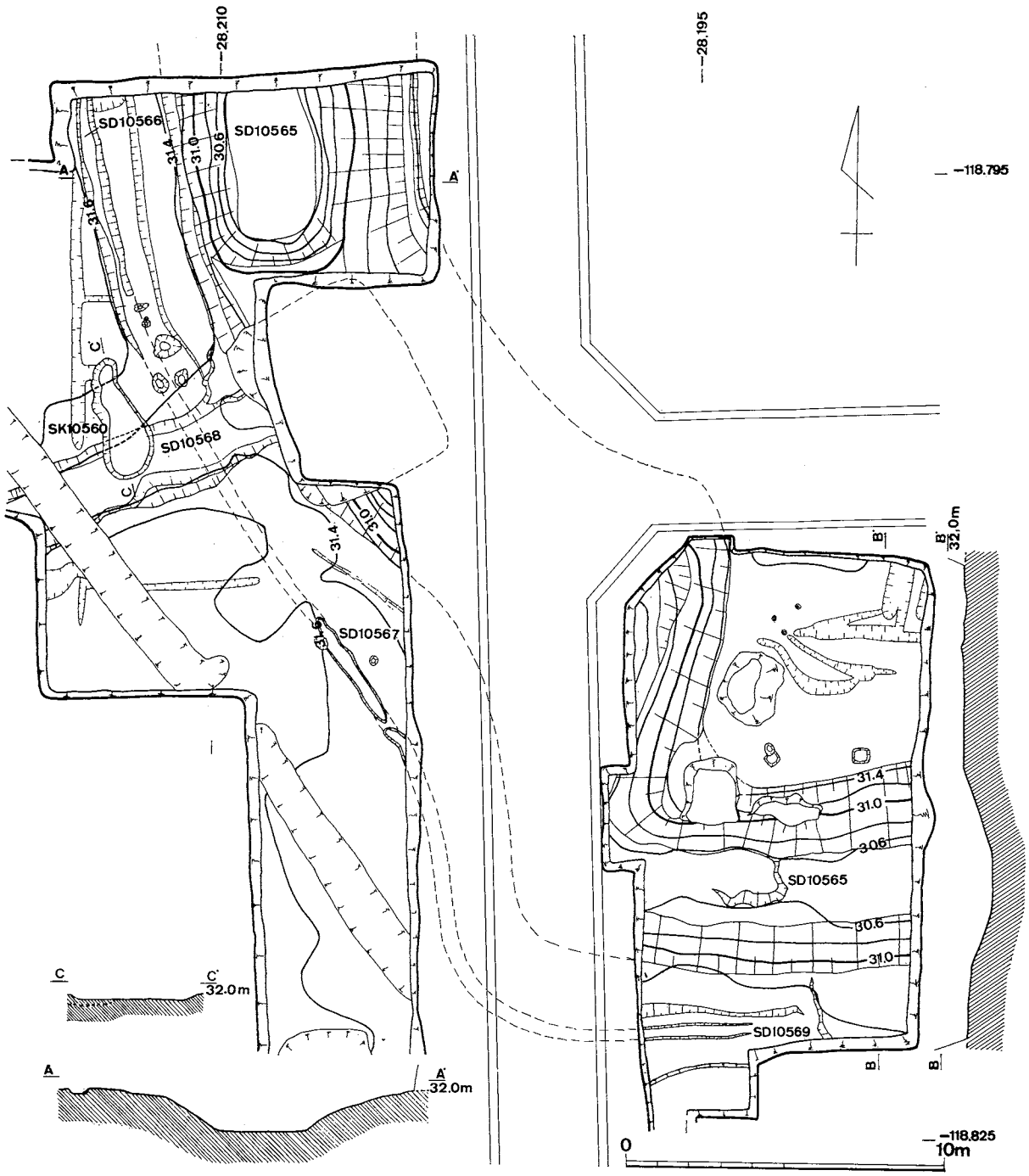
この地区では，舞塚古墳の周濠 (SD 10565) や舞塚2号墳の周濠と考えられる古墳時代の溝の他，弥生時代の溝，長岡京期の土坑や道路側溝，古墳時代のものと思われる竪穴住居等を検出した。以下舞塚古墳とその他の遺構ごとについて述べる。

舞塚古墳

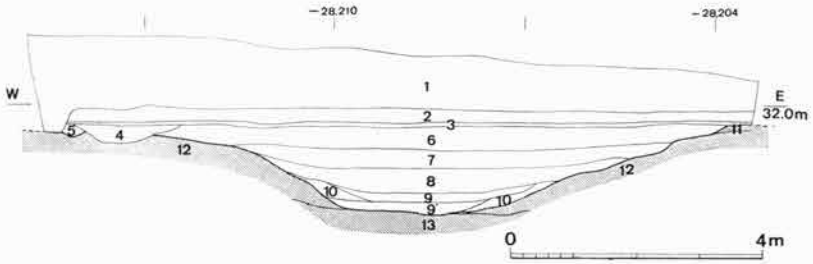
周濠の一部を検出し，埴輪を有した帆立貝式の古墳であることが判明した。ただ葺石等の



第67図　舞塚地区検出遺構図



第 68 図　SD10565（舞塚古墳周濠）等実測図



第 69 図　SD10565 土 層 図（Fトレンチ北壁）

1.盛土　2.耕作土　3.床土　4.灰色粘質土　5.暗褐色粘質土層(SD10566)　6.暗灰褐色粘質土層　7.褐色粘質土層（黄色土を含む）　8.黒灰色粘土層　9.灰色粘土層　9'.淡灰色粘土層　10.暗褐色砂質土層（崩落土）　11.濃褐色粘質土層（墳土盛土）　12.黄褐色粘質土層（地山）　13.灰色砂礫層（地山）

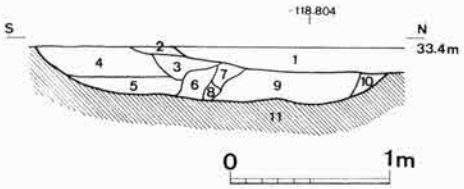
外表施設は有していない。古墳の規模は，周濠の極く一部を検出したのみであるが，昭和58年度に行われた立会調査の結果とあわせ(注29)，基底部で全長約39m，後円部径約30m，前方部幅約15mと推定される。また SD 10565 を取り囲むように SD 10566・10567・10569 が存在し，この溝からも埴輪片が出土する。両溝間の距離は，肩同士で約２mを測り，規模は小さいが周庭帯を成していたと考えられる。また後円部に陸橋を持つ。陸橋は南がすでに下水道のマンホールで破壊され幅は不明である。この陸橋は，周濠肩から１段低くに位置している。前方部は，やや前方で広がりを見せており，方形壇の造り出しとは異なる模様である。次に，この古墳に伴う遺構である SD 8365 等について個別に説明したい。

SD 8365　舞塚古墳の周濠で，Fトレンチでは，後円部周濠部分を，Gトレンチでは前方部周濠部分を検出した。

後円部周濠は，幅約７m深さ 1.1mを測る。黄色粘土層を切り込んで掘られており，濠底は砂礫層に達っしている。埋土は，大別して暗灰褐色粘質土・黄色土を含む褐色粘質土・黒灰色粘土・灰色及び淡灰色粘土層の４層に分かれ，灰色粘土や黒灰色粘土層の存在は水を湛えていたことを示す。最下層が淡灰色を呈していることから，有機質が含まれる間なく土が堆積しており，またその上に墳丘崩落土があることから，当初から水を湛えていたものであろう。周濠内からは多数の埴輪片が出土したが，黒色粘土層にもっとも多く含まれ，灰色粘土層の上面に沿うようにして，周濠の両岸途中からまとまって出土した。このことから墳丘のみでなく外堤上にも埴輪が存在していたことが判る。出土遺物は埴輪片以外には，６世紀代の長胴の土師器の甕腹が出土したのみであり，淡灰色粘土層の上に墳丘や周濠肩の崩落土があり，かなり早い段階で墳丘及び埴輪の崩落は始まっている。また暗灰褐色粘質土層からも埴輪片だけが出土し，最上層の暗灰褐色粘質土層には長岡京期の遺物が含まれる。このこ

とから周濠は築造後時間をさほど経ずして半ば以上が埋まり，長岡京造営時に大部分埋まっていた周濠を完全に埋められたのであろう。

前方部周濠は，幅約6m深さ約0.8mを測り，後円部側に比べやや浅い。埋土は後円部側と同様であるが，最下層は，黄色の砂質土が混じり黄灰色を呈する。この層上面から多くの埴輪が出土したが，周濠両岸ではなく中央にまとまっていた。またこの中央からやや墳丘よりで人物埴輪の頭部が出土した。その他の破片は周囲に散らばり，かなり広範囲に散在する。



第70図　SD 10568 土層図

1.暗褐色粘質土層(SK 10580)　2.濃褐色粘質土層　3.黄色土混じり暗褐色粘質土層　4.灰色砂質土層　5.灰色砂層　6.黒褐色粘土層　7.黄色砂質土層　8.暗灰褐色粘土層　9.明黄褐色粘質土層　10.灰色砂層　11.黄色粘土層(地山)

SD 10566・10567・10559　古墳周濠のまわりを囲み，途中途切れているが同一の溝である。SD 10566 は，幅約0.6m深さ約0.2mを測る。他は，幅約0.4m深さ約0.1mである。埴輪片が出土する。周庭帯を限る溝であろう。

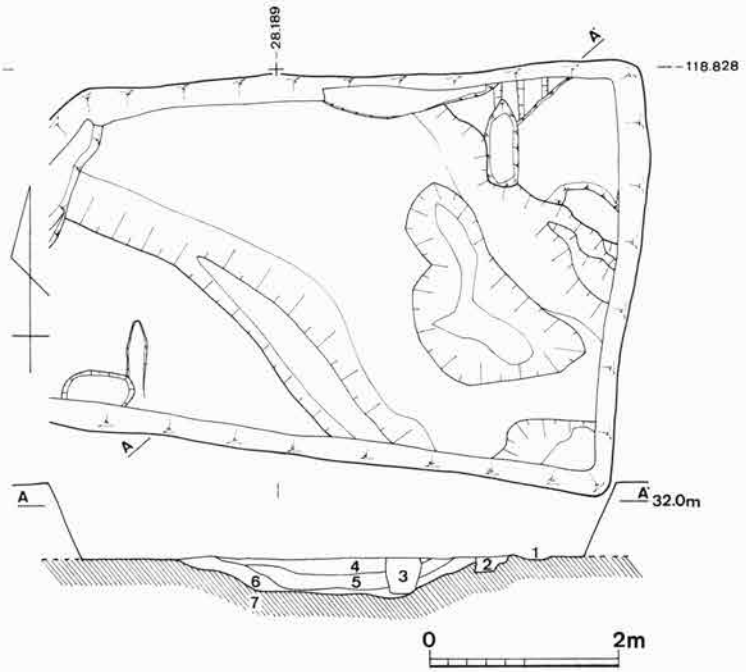
その他の遺構

SK 10580

Fトレンチ中央で検出した南北方向が長い不整形土坑である。長さ約3.9m幅約1.6m深さ約0.15mを測る。SD 10568 を一部削っている。長岡京期の遺物を出土する。

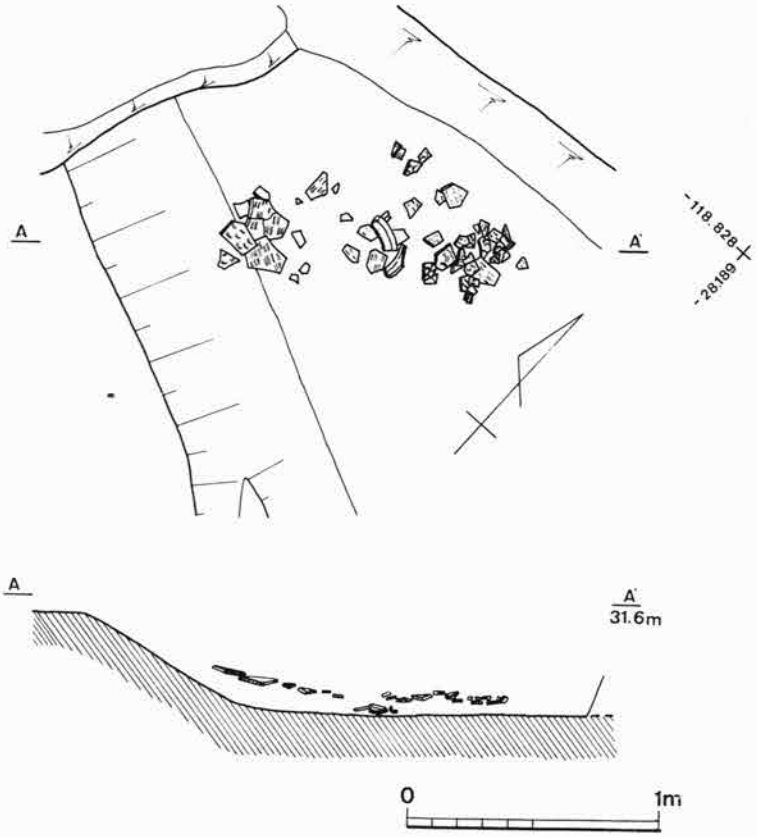
SD 10568

西南西から東北東へ流れる自然流路である。砂



第71図　SD10570（舞塚2号墳周濠）実測図

1.灰色粘質土　2.攪乱　3.灰褐色粘質土（柱穴）　4.褐色粘質土　5.濃褐灰色粘質土　6.暗褐色粘質土　7.黄褐色粘質土



第72図　SD10570 土器出土状況図

と粘土が互層で堆積し，北から南へ流路が変化していっている。幅約4.6m深さ0.3mを測る。埴輪片が混じっているので，古墳造営時より後出するものである。

SD 10570　Hトレンチで検出した円弧状を呈する溝である。幅約3m深さ0.4mを測る。埋土は3層に分かれ最上層からは，長岡京期の遺物が出土し，下層及び下層上面から古墳時代後期の遺物が出土する。また下層は黄色土のブロックを含み，崩落土が混じって堆積している。中層の埋土は，濃褐灰色粘土層で水が貯っていた形跡を示す。古墳時代の遺物として出土したものは，須恵器の大甕と高杯等で，甕には底部穿孔されていた形跡がある。この溝は，先に実施した立会調査で同様の堆積を示す溝を検出しており，これらの結果も併せて考えると，古墳の周濠であった可能性が強い。

また下層から出土した甕や高杯は，かなり破片にわれて，溝が一部埋もれた時点で墳丘側から崩落してきた状況を示し，溝構築時との時間差があることが判る。さらに遺物は，器表の荒れが著しく，風雨にさらされていた形跡があり，墳丘上に供献されていたものかと考えられる。時期は遺物からみて6世紀前半のものである。

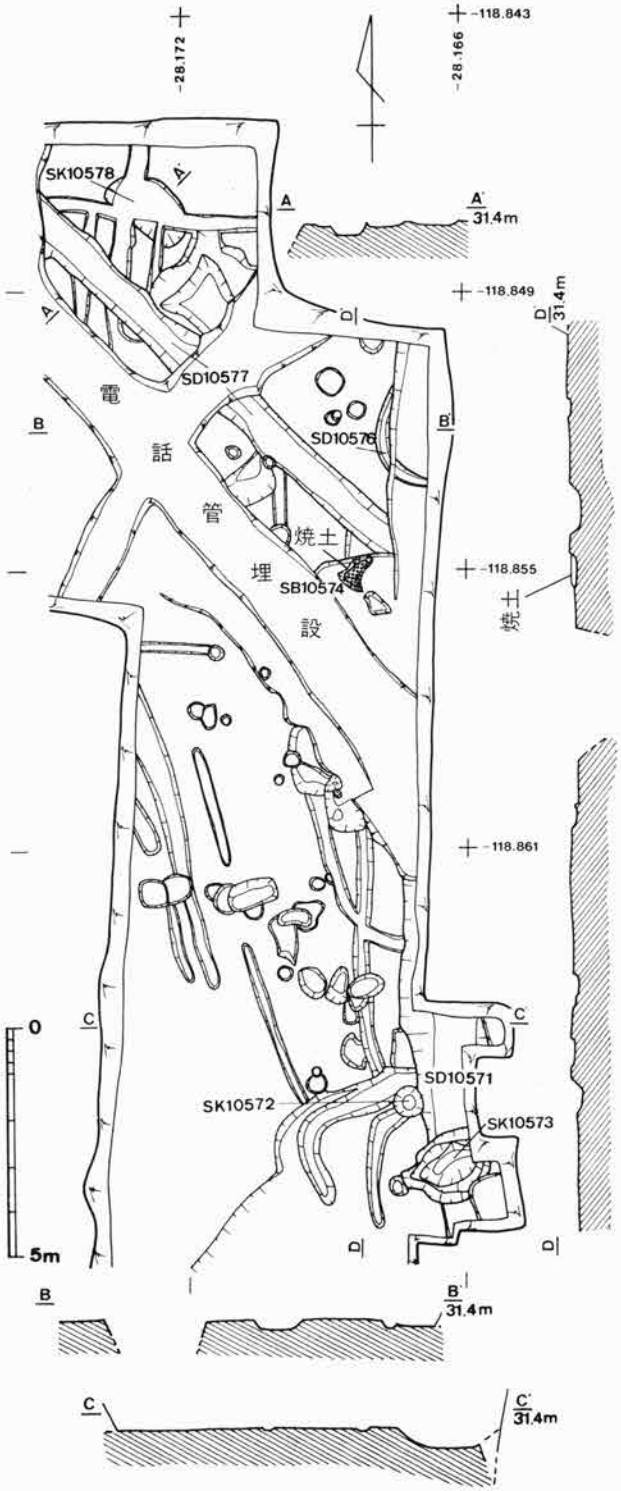
SD 10577　Fトレンチ南端及びIトレンチ北半部で検出した北西から南東へ延びる弥生時代の溝である。幅約0.8m深さ約0.3～0.4mを測り，弥生時代後期後半の遺物を出土する。水が流れていた形跡はなく，集落を囲む溝かと思われる。

SK 10578　Ⅰトレンチの SD 10577 の北で検出した長軸が, SD 10577 と平行する長円形の土坑である。長さ約 2.1m 幅約 0.8m 深さ約 0.15 mを測る。遺物の出土はないが，埋土が SD 10577 と同じであり，また長軸が平行することから，SD 10577 と同時期と考えられ，形状から土坑墓の可能性がある。

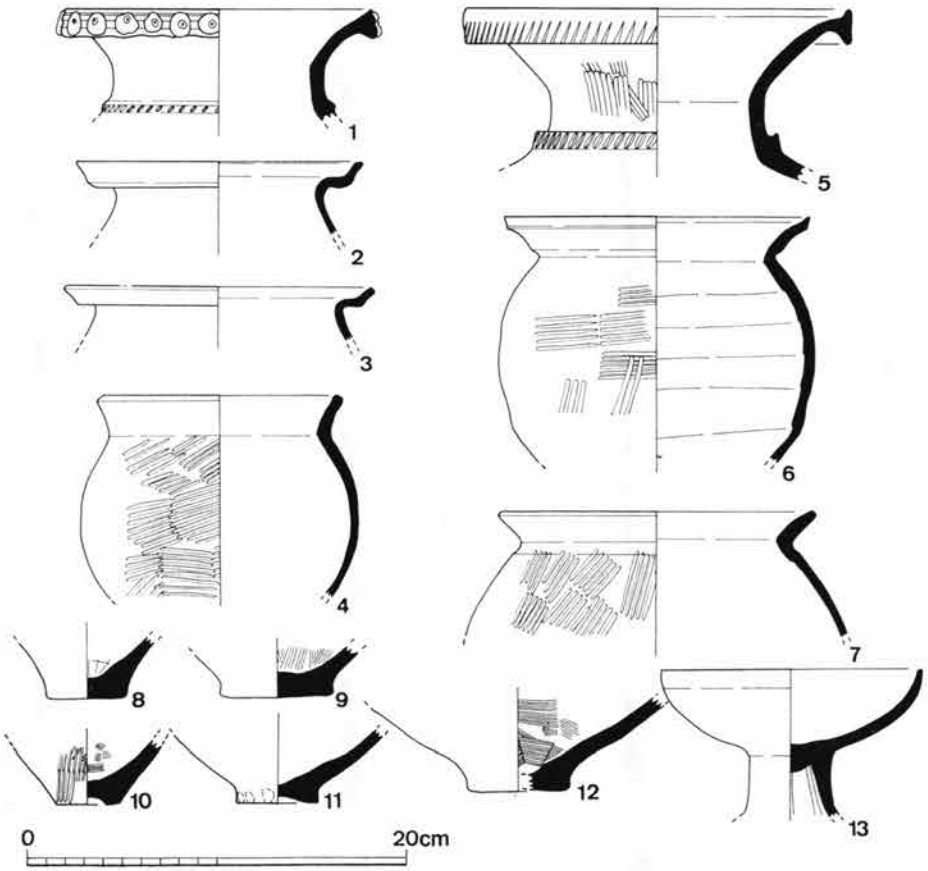
SB 10574　Ⅰトレンチで検出した竪穴住居で，SD 10571 や電話管埋設工事の為，削平を受けている。西北部のコーナーを検出したのみである。深さは約 0.1m を測る。コーナー近くの北壁に焼土があり，竈を持っている。遺物は皆無に近いが竈の位置から古墳時代後期のものであろう。

SD 10576　SD 10571 に削られた幅約 0.4m を測る北から東へゆるやかにL字状に曲がる溝である。竪穴住居跡の壁溝である可能性が高い。

SD 10571　Ⅰトレンチ東端で検出した南北溝で，長岡京期の遺物を出土する。幅約 2.1m，深さ約0.4mを測る。



第 73 図　Ⅰトレンチ（105次）検出遺構実測図



第74図　SD10577 出土弥生土器実測図

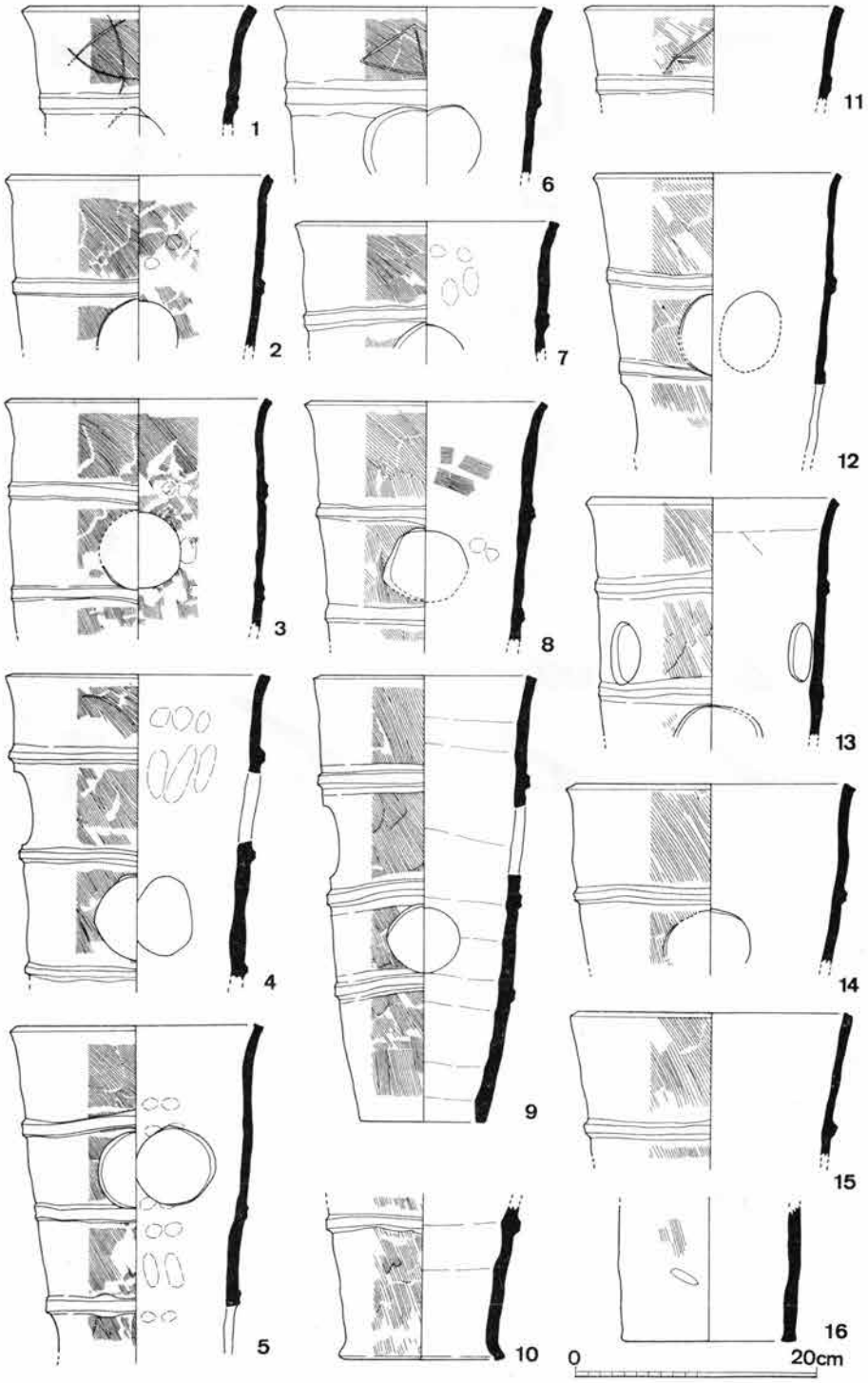
SK 10573 に削られている。位置から西三坊坊間小路の西側溝と思われる。国土座標のY値は，－28,171.4を測る。(注30)

SK 10573　SD 10571 を削って存在する。南北長約2m 東西長2.6m 深さ0.2m を測る。

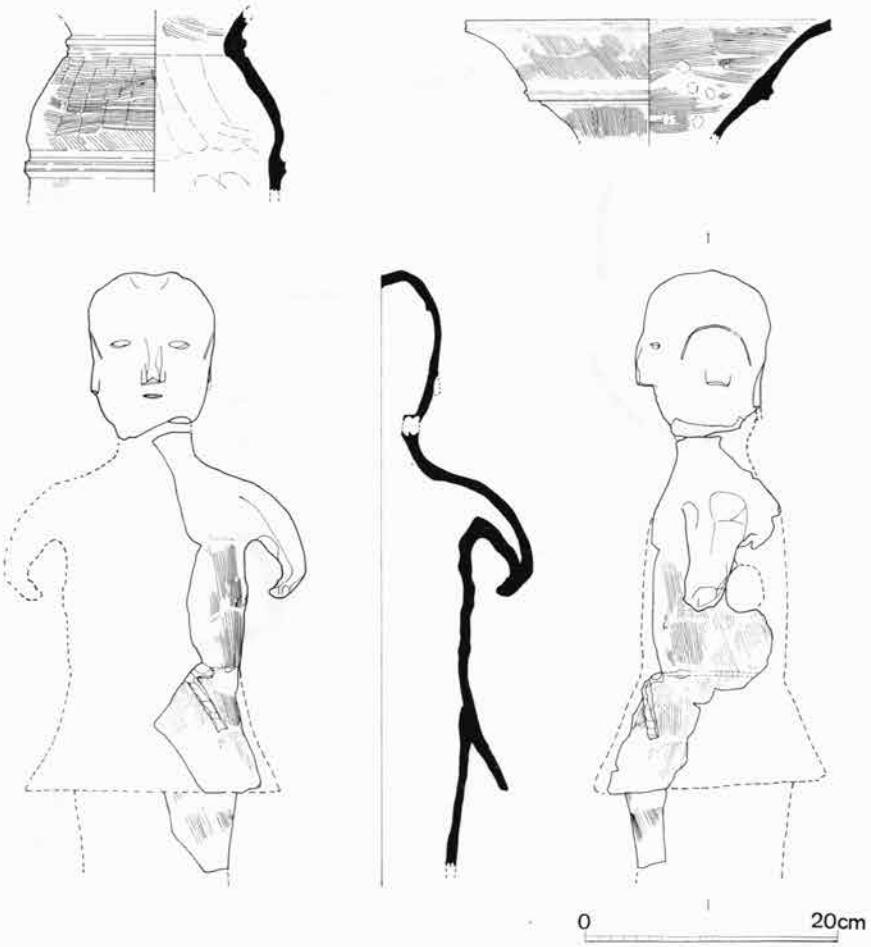
(3) 出土遺物

埴輪，須恵器，土師器，弥生土器等が出土した。以下に遺構別に述べる。

SD 10577 出土土器（第74図）　壺（1～3・5）甕（4～12）高杯（13）等が出土した。壺は，頸部に刻目を入れた突帯を有し，口縁端部を上下に肥厚させるもの（1・5）と口縁部が受口状を呈するもの（2・3）がある。1は口径16cmを測り，口縁端部に凹線を2条有し，円形浮文を貼りつける。5は，頸部に篦磨きを施している。口径20.3cm を測る。2・3は口径15.1cm 16.2cm を測る。甕は，外面に叩きを行い，底部内面に刷毛目を施している。弥生時代後期後半に位置づけられる。4～7は，球形の胴部に「く」の字状に外反



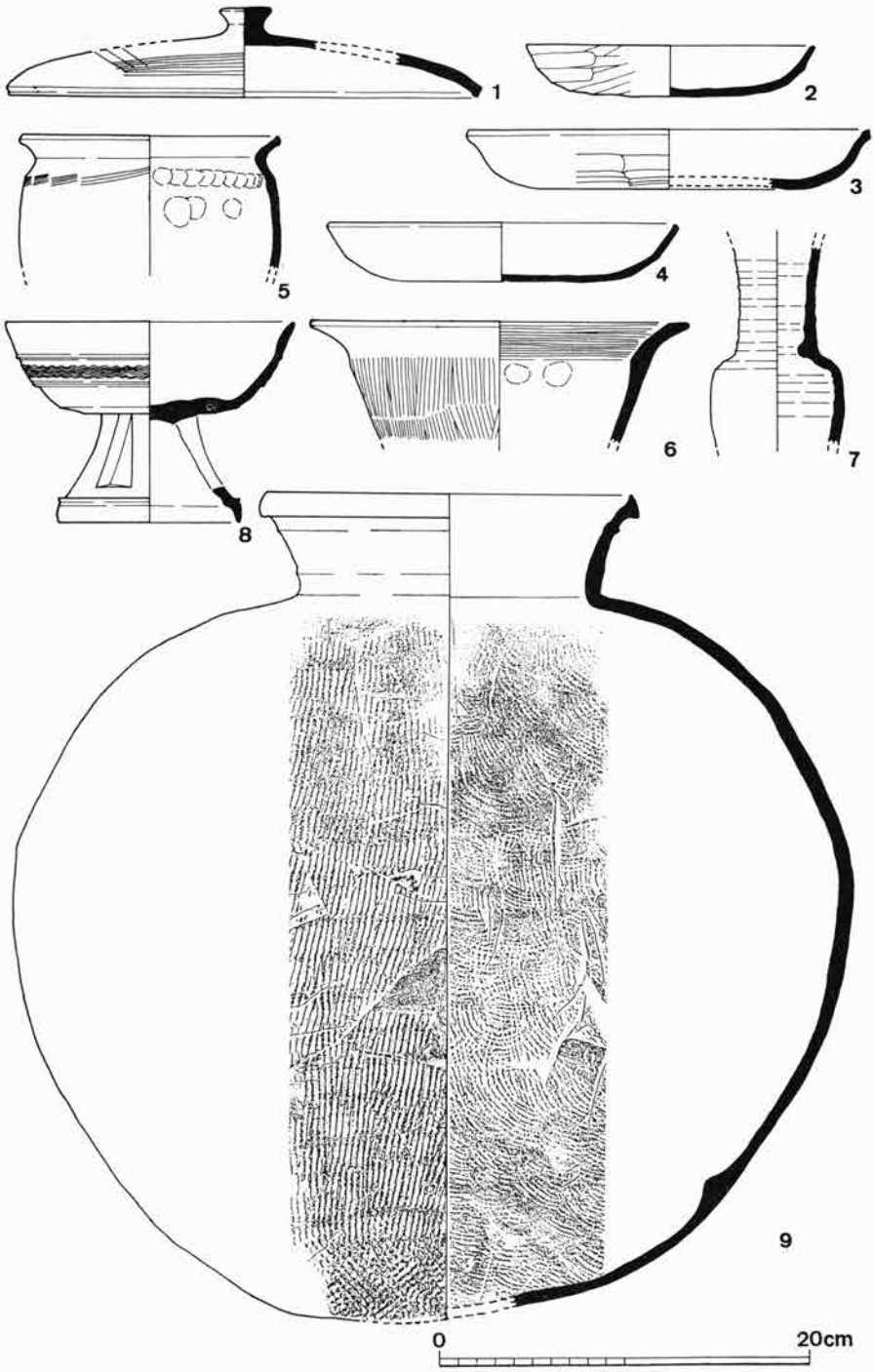
第75図　SD10565 出土埴輪実測図 (1)
1・2・4〜7・10・12〜16：Gトレンチ　3・8・9・11：Fトレンチ



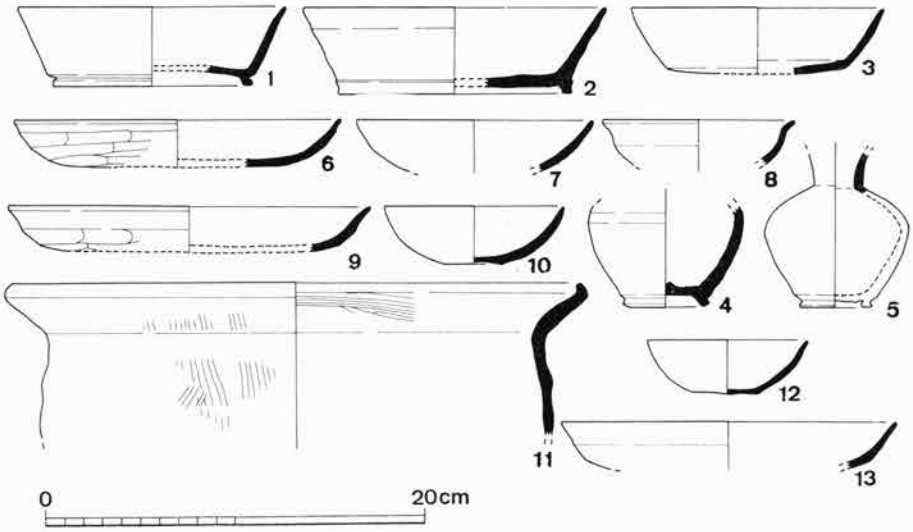
第76図　SD10565 出土埴輪実測図 (2)

する口縁部を持ち，7は，口縁端部を上方につまみ上げている。口径は4が12.3cm 6が16.6cmを測る。胎土はやや粗く，赤褐色を呈する。2・3は淡褐色を呈している。13は，丸底の杯部に筒形の脚部を持ち，裾が大きく広がる。口径13.8cmを測る。

SD 10565 出土埴輪（第75・76図）　円筒埴輪（1～15）朝顔形埴輪（17・18）人物埴輪（19）及び像形埴輪の脚台（16）が出土している。円筒埴輪は，上方に向って開き，端部近くでやや外反し端部に外傾する面を有する。たがは扁平で，かなりいびつにつけられ，側面はたがをはりつけ横なでした際の凹圧のため，やや凹んでいる。2段目及び3段目に円形の透しを2個ずつ有する。5は，2段目と4段目に透しを有する。また1・4・11のように透しの上に「△」の篦描きを行っているものが見られる。口径は大半21cm前後を測るが，1・9のように18cm前後の1廻り小さいものもある。全体を復元できるものは9のみで，9は4段



第77図　SK10560・SD10570 出土土器実測図
1～6 土師器，7～9 須恵器，1・2・4・7：SK10560　3・5・6・8・9：SK10570



第78図　SD10571・SK10572 出土土器実測図
1～5：須恵器，6～13：土師器，1～11：SD10571，12・13：SK10572

を数えるが，口径 21cm 前後を測るものは，5が4段目にも透しを持つことから5段であったと思われる。

9は器高約30cmを測る。調整は左上がりの縦刷毛を施し，内面は，押さえ及びなでを行う。2・3のように内面に刷毛目の施すものもある。口縁端部内外面は横なでを施すものが多い。9は底部調整を行っている。刷毛目の単位は細かいもの（1～9）と荒いもの（10～15）が見られる。単位は，11条/cmと5条/cmを数える。色調は明褐色を呈するものと淡白褐色を呈するものがある。後者は9・10など量的には比較的少ない。数点ではあるが，内外面に朱の塗布されているものがある。後円部周濠から出土している。

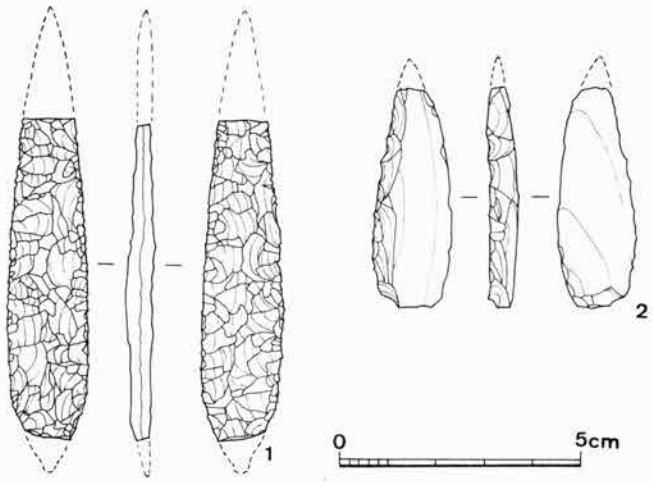
朝顔形埴輪（17・18）は，頸部にB種横刷毛を施している。口縁は屈曲せずに広がり，途中にたがを貼り付けるのみである。内面にも横方向の刷毛目を施している。外面は縦刷毛を施す。

人物埴輪（19）は，残存長47cmを測り，目は細い木葉形で，頭部中央を凹ませ，後頭部で結髪させている。側頭部から後頭部にかけて線刻を入れている。腰にはひも状のものをつけており，体部は縦方向の刷毛目の痕跡がある。また腕は下を向くが，下方に何かを貼りつけていた跡がある。

時期は，川西編年のV期に比定される。(注31)

SK 10570 出土土器（第77図）　須恵器の杯・高杯（8）甕（9）が出土している。8は短脚一段透しのもので，杯部に波状文を描く。透しは3方向に入れ，口径15.6cm 器高10.9cm

を測る。9は，球状の体部に上方に外反する口縁部を持ち，端部を上下に肥厚する。口径19.6 cm 高44.5 cm を測る。底部にせん孔がある。8は杯部内面等が，9は口縁部及び肩部の器表の荒れが著しく，出土状況を併わせ墳丘上に供献されていた土器である可能性が高い。時期は6世紀前半のものである。他には，上層から土師器皿（3）杯・甕（5・6）須恵器の杯・壺などが出土した。3は口径 21.7 cm を測り，体部及び底部外面に篦削りを施し，口縁部外面は横なでを行っている。5は，頸部に甘い稜を持ち，体部外面に斜め方向の刷毛目を施し，内面に連続する指押さえがみられる。6は，外上方に開く体部からさらに大きく外反する口縁部を持つ。口縁部外面は横なでを行い，口縁部内面及び体部外面に刷毛目を施す。



第79図　舞塚地区出土石器実測図

SK 10560 出土土器（第77図）　須恵器壺G（7）土師器蓋（1）皿A（2・4）が出土した。7は，筒形の体部に長頸がつく。2・4は，外面篦削りを行い，口径は2が15.4cm，4が18.7 cm を測る。1は，口径25.3 cm を測り外面に粗い篦磨きを加える。

SD 10571 出土土器（第78図）　須恵器の杯A（3）杯B（1・2）壺L（4・5）土師器の皿A（6・9）椀A（7・8・10）椀（8）甕（11）が出土している。口径は6が17.2 cm，9が19.1 cm を測る。いずれも長岡京期の特徴を有している。8は，口縁部を外反させ，口縁部に横なでを施す。口径は，7が12.3 cm 8・10が10 cm 前後を測る。4・5は倒卵形の体部に外反する口縁を持つ。11は口径 30 cm を測り，端部を内面に肥厚させ体部外面に刷毛目を施す。

SK 10573 出土土器（第78図）　土師器の椀（12）皿A（13）が出土した。12は，口径10.2 cm と SD 10571 のものに比べ小型である。底部は，平底を呈する。13は，口縁部外面を横なでし，口縁部の外傾度もやや大きい。口径30.1 cm を測る。

舞塚地区出土石器（第79図）　混入品ではあるが縄文時代以前の遺物として国府型ナイフ

（2），有舌尖頭器（1）が出土している。2は，舞塚古墳周濠内から出土したもので，先端部が一部欠損しており，現存長 4.5 cm・幅 1.6 cm・厚さ 0.8 cm を測るサヌカイト製のものである。国府型ナイフは近辺では大山崎町東山崎遺跡・向日市北山遺跡等で確認されている。1は中世包含層から出土したもので，先端部と舌部を一部欠損しており，現存長6.7 cm，最大幅1.5 cm，厚さ0.6 cmを測るチャート製のものである。丁寧な押圧剝離で調整されており，明瞭な舌部をもたないもので，舌部によって形態分類(注32)された増田分類のA形態に属するものである。

現在京都府下出土の有舌尖頭器は24例を数え，乙訓地域では長岡京市下海印寺方丸・同伊賀寺・向日市殿長・京都市西京区大原馬繋場(注33)に続く5例目である。いずれも今回出土のものを除くと復原長 6 cm 以内の小型で明瞭な舌部をもつものであるのに対し，今回出土のものは復原長が 10 cm 程の大型のものになると思われ，また舌部が明瞭でなく他の四例と異なった珍しいものである。

(5) 小　　結

今回の調査地では，舞塚古墳の周濠を検出し，墳形が帆立貝式であることが明らかとなった。規模も全長約39mと推定され，周庭帯を持ち，周庭帯を入れると50m近くになる。この舞塚古墳は，墳形は帆立貝式の古墳であるが，5世紀代に多く見られる方形の造り出しを附した通有の帆立貝式古墳ではなく，前方部が，左右に張り出すことや前方部長約 10 m と大きいことから，むしろ群馬県の赤堀茶臼山古墳や塚廻り古墳等(34注)と同じく，前方部の極端に短い前方後円墳と考えるのが妥当であろう。また時期は，埴輪が川西編年のV期に層することから6世紀前半に比定されるが，V期でも新しい段階の埴輪を持つ物集女車塚(注35)に比べれば，時期的に先行する。また(財)長岡京市埋蔵文化財センターの行った立会調査で，6世紀前半でも古い段階の須恵器杯が墳丘裾から出土しており(注36)，6世紀前半でも古い段階に属する可能性が高い。また人物埴輪は前方部周濠から出土しており，前方部に並べられていたものである。人物埴輪の配置例は，造り出し等の方形壇上に配するものから横穴式石室の前庭部へと時期的に移行し，この古墳は古い配置例をとっている。ただ，同じくV期の埴輪を持つ長岡京市の塚本古墳(注37)と比較すると，盾形埴輪や衣笠埴輪を含むなどやや古い様相を示し，塚本古墳よりは後出するものかと思われる。

この古墳は，後円部側に陸橋を有するが，このような後期古墳における例は，京都府の大覚寺古墳群(注83)などに例がみられ，横穴石室の前面に有している。畿内における人物埴輪の出土例は，大半が横穴石室墳に伴うものであり，山城地域においても明確に主体部の判明している胄山古墳(注39)や堀切古墳(注40)は，横穴式石室を有している。あるいはこの舞塚古墳も，横穴式石室

墳であった可能性がある。もし横穴石室であれば，乙訓地域の横穴式石室墳でも最古の段階に属するものであろう。

この古墳から出土した人物埴輪については，山城や北摂地域のものとはやや趣きを異にし，奈良県の石見遺跡の出土例[注41]に頭部の凹みや形状等また前述した埴輪の配置位置から見て，横穴石室の前庭部から出土した胄山古墳の例より先行すると思われる。

以上舞塚古墳について述べて来たが，他にも古墳の周濠と思われる溝(SD10570)を検出している。電々公社の立会調査結果とあわせ，基底部で直径15mを測る円墳（舞塚2号墳）と推定される。時期も舞塚古墳と同時期の6世紀前半である。この古墳は，墳丘上での墓上祭祀が行われていた可能性があり，それからすると木棺直葬墳であったと考えられる。

この他この地区では，長岡京期の土坑や西三坊坊間小路側溝と考えられる溝や弥生時代の溝，土坑，古墳時代後期の竪穴住居跡を検出している。

西三坊坊間小路の道路側溝と考えられるSD 10571は，国土座標値を介して大極殿心から模式的に割り付けた割り付け心近くに位置し，最近の調査例[注42]や，西側で側溝を検出していないことから，SD 10571は，西三坊坊間小路の西側溝と推定した。舞塚古墳等の周濠は，この西三坊坊間小路の構築に際し埋められたものであろう。

弥生時代後期後半の溝や古墳時代の竪穴住居跡の検出は，弥生時代や古墳時代の集落がこの地にあったことを明らかとした。弥生時代の溝は，集落を画していたものと思われ，古墳周濠内から弥生土器が出土しており，集落は北方に広がっていたのであろう。また古墳時代の集落は，古墳時代後期後半と推定され，古墳時代後期前半に墓域であった地に後期後半には集落が広がってくることは，興味深い事実である。

最後に有舌ポイントや国府型ナイフの出土は，近辺に旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡の存在を窺わせよう。

6. 花粉分析

(1) はじめに

長岡京跡右京域に分布する段丘地は，これまでの花粉分析による調査から農耕地としての開発が，左京域の沖積地に比べ遅れた地域であることが示されている。また，これらの段丘地の農耕作物の栽培形態は，稲作とソバ作が並行しておこなわれていたことも確認されている。今回の調査は，古墳時代から中世の自然流路や人為的遺構の堆積物を中心におこない，調査地周辺で実際に農耕がおこなわれていたかどうか，および，人里植物の検出により付近に集落が存在していたかどうかを推定しようとしたものである。

付表5　花粉分析表(1)

TAXON	数値処理	Fトレンチ 小溝灰褐色粘質土層(上層) 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ 小溝褐色粘質土層(下層) 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ SD 8355(溝) 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ 灰褐色粘質土層 検出数	AP %	全体 %
AP (樹木)													
Abies (モミ属)		1	2.2	1.3	2	2.8	1.8						
Tsuga (ツガ属)		4	8.7	5.1	2	2.8	1.8	9	15.3	6.3			
Pinus Oiploxylon (二葉マツ亜属)		11	23.9	13.9	9	12.7	8.1	13	22.0	9.2	5	33.3	13.5
Sciadopitys (コウヤマキ属)		10	21.7	12.7	15	21.2	13.5	11	18.6	7.7	2	13.3	5.4
Cryptomeria (スギ属)		4	8.7	5.1	15	21.2	13.5	1	1.7	0.7	2	13.3	5.4
Salix (ヤナギ属)								1	1.7	0.7			
Myrica (ヤマモモ属)											1	6.7	2.7
Juglans (オニグルミ属)					1	1.4	0.9						
Carpinus (クマシデ属)		1	2.2	1.3									
Corylus (ハシバミ属)								1	1.7	0.7			
Alnus (ハンノキ属)		1	2.2	1.3	3	4.2	2.7	2	3.4	1.4			
Fagus (ブナ属)		1	2.2	1.3				1	1.7	0.7			
Lepidobalanus (コナラ亜層)		7	15.2	8.9	10	14.1	9.0	10	16.9	7.0	2	13.3	5.4
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)		5	10.9	6.3	7	9.9	6.3	7	11.9	4.9	3	20.0	8.1
Dastanopsis (シイノキ属)								1	1.7	0.7			
Celtis (エノキ属)								1	1.7	0.7			
Prunus (サクラ属)								1	1.7	0.7			
Ilex (モチノキ属)					4	5.6	3.6						
Acer (カエデ属)					1	1.4	0.9						
Fraxinus (トネリコ属)					1	1.4	0.9						
Celastraceae (ニシキギ科)		1	2.2	1.3									
Ericaceae (ツツジ科)					1	1.4	0.9						
AP Total		46	100.1	58.5	71	100.1	63.9	59	100.0	41.4	15	99.9	40.5
NAP (草本)													
Fagopyrum (ソバ)		4	12.1	5.1	5	12.5	4.5	4	4.8	2.8	2	9.1	5.4
Artemisia (ヨモギ属)		2	6.1	2.5	5	12.5	4.5	7	8.4	4.9			
Nuphar (コオホネ属)					2	5.0	1.8						
Rumex (ギシギシ属)		1	3.0	1.3									
Persicaria (タデ属)		2	6.1	2.5	4	10.0	3.6	13	15.7	9.2	1	4.5	2.7

TAXON ＼ 数値処理	Fトレンチ 小溝灰褐色粘質土層(上層) 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ 小溝褐色粘質土層（下層） 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ SD 8355（溝） 検出数	AP %	全体 %	Fトレンチ 灰褐色粘質土層 検出数	AP %	全体 %
Humulus（カラハナソウ属）	1	3.0	1.3				1	1.2	0.7			
Sagittaria（オモダカ属）							2	2.4	1.4			
Typha（ガマ属）							1	1.2	0.7			
Cichorioideae（タンポポ亜科）				1	2.5	0.9	1	1.2	0.7			
Carduoideae（キク亜科）				2	5.0	1.8	4	4.8	2.8	1	4.5	2.7
Umbelliferae（セリ科）							1	1.2	0.7			
Cruciferae（アブラナ科）	3	9.1	3.8	1	2.5	0.9	2	2.4	1.4			
Caryophyllaceae（ナデシコ科）	1	3.0	1.3	1	2.5	0.9	11	13.3	7.7			
Chenopodiaceae（アカザ科）	3	9.1	3.8	2	5.0	1.8	9	10.8	6.3			
Cyperaceae（カヤツリグサ科）	1	3.0	1.3									
Gramineae 45 μ 以上（イネ科）	9	27.3	11.4	6	15.0	5.4	18	21.7	12.7	16	72.7	43.2
Gramineae 45 μ 以下（イネ科）	6	18.2	7.6	11	27.5	9.9	9	10.8	6.3	2	9.1	5.4
NAP TOtal	33	100.0	41.9	43	100.0	36.0	83	99.9	58.3	22	99.9	59.4
AP＋NAP TOtal	79		100.4	111		99.9	142		99.7	37		99.9
Plant opals Oryza sativa L（イネ）	10			6			107			4		

花粉分析表 (2)

TAXON ＼ 数値処理	Hトレンチ SD 8375 下層 検出数	AP %	全体 %	Hトレンチ SD 8375 中層 101 検出数	AP %	全体 %	Hトレンチ SD 8375 上層 検出数	AP %	全体 %
AP（樹木）									
Padocarpus（マキ属）	1	0.1	0.1						
Abies（モミ属）	7	0.7	0.7	2	2.0	1.0	2	8.7	4.3
Tsuga（ツガ属）	13	1.4	1.2	12	11.9	6.3	2	8.7	4.3
Pinus Dialoxylon（二葉マツ亜属）	336	35.6	32.1	52	51.5	27.1	2	8.7	4.3
Pinus Haploxylon（二葉マツ亜属）	1	0.1	0.1						
Sciadopitys（コウヤマキ属）	4	0.4	0.4	2	2.0	1.0			
Cryptomeria（スギ属）	10	1.1	1.0	1	1.0	0.5	5	21.7	10.9
Chamaecyparis（ヒノキ属）	1	0.1	0.1	1	1.0	0.5			
Salix（ヤナギ属）				2	2.0	1.0			
Carpinus（クマシデ属）	1	0.1	0.1						

TAXON 数値処理	Hトレンチ SD 8375 下層 検出数	AP %	全体 %	Hトレンチ SD 8375 中層 検出数	AP %	全体 %	Hトレンチ SD 8375 上層 検出数	AP %	全体 %
Corylus (ハシバミ属)							1	4.3	2.2
Alnus (ハンノキ属)				1	1.0	0.5	2	8.7	4.3
Fagus (ブナ属)	2	0.2	0.2						
Lepidobalanus (コナラ亜属)	9	1.0	0.9	8	7.9	4.2	1	4.3	2.2
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)	13	1.4	1.2	5	5.0	2.6	4	17.4	8.7
Castanea (クリ属)	3	0.3	0.3	1	1.0	0.5			
Castanopsis (シイノキ属)	1	0.1	0.1						
Zelkova (ケヤキ属)	4	0.4	0.4						
Celtis (エノキ属)	1	0.1	0.1						
Aphananthe (ムクノキ属)	1	0.1	0.1	1	1.0	0.5			
Magnolia (モクレン属)				2	2.0	1.0			
Prunus (サクラ属)	1	0.1	0.1						
Skimmia (ミヤマシキミア属)	15	1.6	1.4	1	1.0	0.5			
Rhus (ウルシ属)							1	4.3	2.2
Ilex (モチノキ属)	417	44.1	39.9	7	6.9	3.6	2	8.7	4.3
Acea (カエデ属)	3	0.3	0.3						
Elaeagnus (グミ属)	10	1.1	1.0						
Diaspyros (カキ属)	28	3.0	2.7						
Ligastrum (イボタノキ属)	59	6.2	5.6	1	1.0	0.5	1	4.3	2.2
Thaceae (ツバキ科)	2	0.2	0.2						
Ericaceae (ツツジ科)	2	0.2	0.2	2	2.0	1.0			
AP Total	945	100.0	90.5	101	100.2	52.3	23	99.8	49.9
NAP (草本)									
Fagopyrum (ソバ)	12	11.9	1.1	18	19.8	9.4	3	13.0	6.5
Artemisia (ヨモギ属)	1	1.0	0.1	3	3.3	1.6	1	4.3	2.2
Patrinia (オミナエシ属)							1	4.3	2.2
Nuphar (コオホネ属)	10	9.9	1.0				7	30.4	15.2
Rumex (ギシギシ属)	3	3.0	0.3	12	13.2	6.3			
Persicaria (タデ属)	3	3.0	0.3						
Humulus (カラハナソウ属)	1	1.0	0.1	8	8.8	4.2			
Monochoria (ミズアオイ属)	3	3.0	0.3						

TAXON ＼ 数値処理	Hトレンチ SD 8375 下層			Hトレンチ SD 8375 中層			Hトレンチ SD 8375 上層				
	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %		
Sagittaria (オモダナ属)	1	1.0	0.1	1	1.1	0.5					
Typha (ガマ属)	3	3.0	0.3	1	1.1	0.5					
Cichorioideae (タンポポ亜科)	1	1.0	0.1	2	2.2	1.0					
Carduoideae (キク亜科)				2	2.2	1.0					
Cucurbitaceae (ウリ科)	12	11.9	1.1								
Labiatae (シソ科)	1	1.0	0.1	2	2.2	1.0					
Umbelliferae (セリ科)				1	1.1	0.5					
Malvaceae (アオイ科)				1	1.1	0.5					
Cruciferae (アブラナ科)	4	4.0	0.4	3	3.3	1.6					
Ranunculaceae (キンポウゲ科)	1	1.0	0.1	2	2.2	1.0					
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	1	1.0	0.1	4	4.4	2.1					
Chenopodiaceae (アカザ科)				1	1.1	0.5					
Cyperaceae (カヤツリグサ科)				2	2.2	1.0					
Gramineae 45μ 以上 (イネ科)	36	35.6	3.4	23	25.3	12.0	8	34.8	17.4		
Gramineae 45μ 以下 (イネ科)	8	7.9	0.8	5	5.5	2.6	3	13.0	6.5		
NAP Total	101	100.2	9.7	91	100.1	47.3	23	99.8	50.0		
AP+NAP Total	1046		100.2	192		99.6	46		99.9		
Plant opals Oryza sativa L (イネ)	1			218			42				

花粉分析表 (3)

TAXON ＼ 数値処理	Kトレンチ SD 8395 上層			Kトレンチ SD 8395 下層			Kトレンチ SK 8399 灰黒色粘土層（埴輪包含）（上層）			Kトレンチ SK 8399 黄色粘土混り黒褐色粘質土層（下層）			Kトレンチ SK 83107 黄色粘土混り灰黒色粘土		
	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %
AP（樹木）															
Podocarpus (マキ属)	3	0.4	0.3	6	0.8	0.6	1	0.2	0.1						
Abies (モミ属)	319	40.8	30.9	71	9.6	6.9	82	13.7	8.8	1	3.6	2.9	102	32.0	24.3
Tsuga (ツガ属)	80	10.2	7.8	33	4.5	3.2	28	4.7	3.0	4	14.3	11.4	16	5.0	3.8
Picea (トウヒ属)				2	0.3	0.2	2	0.3	0.2						
Pinus Diploxylon (二葉マツ亜属)	153	19.6	14.8	96	13.0	9.3	104	17.3	11.2	5	17.9	14.3	86	27.0	20.5
Pinus Haploxylon (五葉マツ亜属)	2	0.3	0.2				2	0.3	0.2						
Sciadopitys (コウヤマキ属)	15	1.9	1.5	7	0.9	0.7	12	2.0	1.3	4	14.3	11.4	25	7.8	6.01

TAXON 数値処理	Kトレンチ SD 8395 上層			Kトレンチ SD 8395 下層			Kトレンチ SK 8399 灰黒色粘土層（埴輪包含）（上層）			Kトレンチ SK 8399 黄色粘土混り黒褐色粘質土層（下層）			Kトレンチ SK 83107 黄色粘土混り灰黒色粘土		
	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %
Cryptomeria（スギ属）	110	14.1	10.7	20	2.7	1.9	154	25.7	16.6	10	35.7	28.6	60	18.8	14.3
Chamaecyparis（ヒノキ属）	1	0.1	0.1	4	0.5	0.4	4	0.7	0.4						
Salix（ヤナギ属）	0.2	0.3	0.2	5	0.7	0.5									
Myrica（ヤマモモ属）				7	0.9	0.7									
Juglans（オニグルミ属）	1	0.1	0.1	1	0.1	0.1									
Carpinus（クマシデ属）				7	0.9	0.7									
Coralus（ハシバミ属）				10	1.3	1.0	1	0.2	0.1				2	0.6	0.5
Betula（シラカンバ属）				1	0.1	0.1									
Alnus（ハンノキ属）	2	0.3	0.2	3	0.4	0.3	2	0.3	0.2						
Fagus（ブナ属）	5	0.6	0.5	14	1.9	1.4	9	1.5	1.0						
Lepidobalanus（コナラ亜属）	14	1.8	1.4	157	21.2	15.2	23	3.8	2.5	1	3.6	2.9	5	1.6	1.2
Cyclobalanopsis（アカガシ亜属）	37	4.7	3.6	186	25.1	18.0	64	10.9	6.9	2	7.1	5.7	17	5.3	4.0
Castanea（クリ属）	3	0.4	0.3	2	0.3	0.2	2	0.3	0.2				1	0.3	0.2
Castanopsis（シイノキ属）	1	0.1	0.1	56	7.6	5.4	2	0.3	0.2				1	0.3	0.2
Ulmus（ニレ属）	3	0.4	0.3	3	0.4	0.3			—						
Zelkora（ケヤキ属）	6	0.8	0.6	12	1.6	1.2	5	0.8	0.5				1	0.3	0.2
Celtis（エノキ属）	2	0.3	0.2	5	0.7	0.5									
Aphananthe（ムクノキ属）	2	0.3	0.2												
AKebia（アケビ属）				1	0.1	0.1									
Magnolia（モクレン属）				2	0.3	0.2	87	14.5	9.4				1	0.3	0.2
Prunus（サクラ属）	1	0.1	0.1	3	0.4	0.3	4	0.7	0.4				1	0.3	0.2
Skinnia（ミヤマシキミ属）				4	0.5	0.4									
Rhus（ウルシ属）	1	0.3	0.1												
Ilex（モチノキ属）	5	0.6	0.5	4	0.5	0.4	3	0.5	0.3						
Acer（カエデ属）	2	0.3	0.2	10	1.3	1.0	1	0.2	0.1						
Aesculus（トチノキ属）							1	0.2	0.1						
Elaeagnus（グミ属）							2	0.3	0.2						
Diospyros（カキ属）				2	0.3	0.2									
Symplocas（ハイノキ属）				2	0.3	0.2									
Ligastrum（イボタノキ属）	3	0.4	0.3	4	0.5	0.4				1	3.6	2.9			
Fraximus（トネリコ属）	4	0.5	0.4										1	0.3	0.2

TAXON ＼ 数値処理	Kトレンチ SD 8395 上層			Kトレンチ SD 8395 下層			Kトレンチ SK 8399 灰黒色粘土層（埴輪包含）（上層）			Kトレンチ SK 8399 黄色粘土混り黒褐色粘質土層（下層）			Kトレンチ SK 83107 黄色粘土混り灰黒色粘土		
	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %
Lonicera（スイカズラ属）	4	0.5	0.4				1	0.2	0.1						
Saxifragaceae（ユキノシタ科）							1	0.2	0.1						
Ericaceae（ツツジ科）				1	0.1	0.1	3	0.5	0.3						
AP Total	781	100.0	76.0	741	99.8	72.1	600	100.1	64.4	28	100.1	80.1	319	99.9	75.8
NAP（草本）															
Pertya（コウヤボウキ属）							2	0.6	0.2						
Artemisia（ヨモギ属）	34	13.6	3.3	131	45.2	12.7	32	9.8	3.4	1	14.3	2.9	4	4.0	1.0
Petasites（フキ属）							1	0.3	0.1						
Patrinia（オミナエシ属）	6	2.4	0.6	3	1.0	0.3	3	0.9	0.3						
Trapa（ヒシ属）							1	0.3	0.1						
Geranium（フウロウソウ属）				1	0.3	0.1									
Pueraria（クズ属）	1	0.4	0.1				2	0.6	0.2						
Thalictrum（カラマツソウ属）				1	0.3	0.1									
Nuphar（コオホネ属）				7	2.4	0.7	203	61.9	21.9				1	1.0	0.2
Rumex（ギシギシ属）				1	0.3	0.1	2	0.2	0.2						
Persicaria（タデ属）	4	1.6	0.4	12	4.1	1.2	6	1.8	0.6				4	4.0	1.0
Humulus（カラハナソウ属）	3	1.2	0.3	1	0.3	0.1	1	0.3	0.1						
Sagittaria（オモダカ属）	14	5.6	1.4	1	0.3	0.1				1	14.3	2.9	1	1.0	0.2
Sparganium（ミクリ属）	2	0.8	0.2										3	3.0	0.7
Potamogeton（ヒルムシロ属）				3	1.0	0.3									
Typha（ガマ属）	10	4.0	1.0	12	4.1	1.2	1	0.3	0.1						
Cichorioideae（タンポポ亜科）	8	3.2	0.8	2	0.7	0.2	1	0.3	0.1				2	2.0	0.5
Carduoideae（キク亜科）	8	3.2	0.8	1	0.3	0.1	4	1.2	0.4				1	1.0	0.2
Cucurbitaceae（ウリ科）							32	9.8	3.4				1	4.0	0.2
Labiatae（シソ科）				3	1.0	0.3									
Umbelliferae（セリ科）	6	2.4	0.6	22	7.6	2.1	8	2.4	0.9	1	14.3	2.9			
Rosaceae（バラ科）	1	0.4	0.1	1	0.3	0.1	4	1.2	0.4						
Cruciferae（アブラナ科）				5	1.7	0.5									
Ranuhculaceae（キンポウゲ科）	2	0.8	0.2	7	2.4	0.7	1	0.3	0.1						
Caryophyllaceae（ナデシコ科）	7	2.8	0.7	3	1.0	0.3							4	4.0	1.0
Chenopodiaceae（アカザ科）				5	1.7	0.5									

TAXON ＼ 数値処理	Kトレンチ SD 8395 上層			Kトレンチ SD 8395 下層			Kトレンチ SK 8399 灰黒色粘土層（埴輪包含）（上層）			Kトレンチ SK 8399 黄色粘土混り黒褐色粘質土層（下層）			Kトレンチ SK 83107 黄色粘土混り灰黒色粘土		
	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %	検出数	AP %	全体 %
Araceae（サトイモ科）				1	0.3	0.1	1	0.3	0.1						
Cyperaceae（カヤツリグサ科）	3	1.2	0.3	1	0.3	0.1	1	0.3	0.1				1	1.0	0.2
Gramineae 45μ以上（イネ科）	85	34.0	8.2	28	9.7	2.7	4	1.2	0.4	2	28.6	5.7	59	58.4	14.4
Gramineae 45μ以下（イネ科）	56	22.4	5.4	38	13.1	3.7	18	5.0	1.9	2	28.6	5.7	20	19.8	0.8
NAP Total	250	100.0	24.4	290	99.4	28.3	328	99.9	350	7	100.1	20.1	101	100.2	24.0
AP＋NAP Total	1031		100.4	1031		100.4	928		99.4	35		100.2	420		99.8
Plant opals Oryza satira L（イネ）										3			17		

(2) 結果および考察

① Fトレンチの堆積物について

試料は，人工的に掘削された小溝の堆積物である。土壌の酸化が著しいために花粉の残留は，少なかった。各堆積物の堆積時期は，SD8355 が長岡京期頃・小溝の暗褐色粘質土層（下層）が平安時代・小溝の灰色褐粘質土層（上層）および灰褐色粘質土層で中世である。各試料で栽培植物に関係するものとしては，大型イネ科とソバの花粉，それに加えイネのプラント・オパールも検出された。

② Hトレンチの堆積物について

中世の自然流路と思われる大溝 (SD 8375) の試料である。花粉の残留状態は，上層から下層へ移行するに従い多くなる。栽培植物としては，大型イネ科・ソバ・ウリ科（キュウリ属を含む）がみられる。人里植物としては，モチノキ属（葯ごと検出された花粉を付表から除妙してあるため実際の検出数は，はるかに多い。）・カキ属・イボタノキ属の検出率が高い。

③ Kトレンチの堆積物について

SD 8395 の試料は，古墳時代中期から後期頃にかけての自然流路の堆積物である。栽培植物に関して大型イネ科は，下層から上層に向って増加をみる。ソバの花粉は，全く検出されなかった。樹木では，モミ属・二葉マツ亜属・ツガ属・スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが比較的多くみられた。

SK 8399 の試料は，埴輪を包含した土坑から採取したものであり，古墳時代の堆積物と考えられる。この試料では，大型イネ科がほとんどみられず，雑草のウリ科が多かった。

SK 83107 の試料は，出土遺物から8世紀以降の堆積物と推定されている。栽培植物とし

ては，大型イネ科が多い。また，針葉樹花粉の出現傾向は，SD 8395 上層に以る。

(3) 考　　察

① Fトレンチ

大型イネ科花粉の検出率から当地が米田であったとは，言い難い。しかし，試料の残留物中にイネのプラント・オパールが含まれていた。特に，三条第2小路（溝）では，検出数が多い。プラント・オパールは，花粉のように風で遠くへ飛ばされることも少なく，植物体直下の現地へ落下する。このことを合わせ考えると，当地が水田として利用されていた可能性は，強くなる。また，ソバは，全試料でみられることや，長岡京跡右京域の段丘地で長岡京期頃さかんに栽培されていたことから考えて，当地でも栽培されていたと推定される。

② Hトレンチ

モチノキ属（イヌツゲ・モチノキ）・イボタノキ属（ネズミモチ）・カキ属（カキ）など人里の近くや生垣として利用される樹木の花粉が多い。これは，中世の自然な状態の植生と異なり，調査地周辺に集落が存在していたからであろうと想像される。栽培植物に関しては，Fトレンチの試料以上に，大型イネ科・ソバ・イネのプラント・オパールが検出されており，栽培されていたと推定できる。

③ Kトレンチ

二葉マツ亜属以外の針葉樹が多く，周辺の山野は，人為的影響をそれほど強く受けてない自然に近い景観が想像される。栽培植物としては，SD 8395 上層，SK 83107 の堆積物からイネの栽培が推定される。ただし，ここで検出された大型イネ科花粉は，SD 8395 の上流に当たる西方からの流入の可能性が考えられ今後の検討を要する。

7. お わ り に

長岡京跡右京第83次調査・右京第105次調査として，2か年にわたり発掘調査を実施した。その結果，長岡京の道路側溝や建物跡の他，奈良・平安時代の集落や人物埴輪を出土した舞塚古墳，そして中世の集落を検出した。この他近辺に旧石器時代から縄文早期の遺跡の存在を窺わせる有舌ポイントや国府型ナイフ，エンドスクレーパー等の出土がある。概略は，各調査地区の小結で述べてきたが，調査地区がまたがるものや，また花粉分析の結果をふまえて主要なものについて簡単に述べたい。

奈良・平安時代の集落について

この集落は西ノ口地区の北半部と藤ノ木地区で検出した。両者の間に中世集落が存在するが，遺物の出土から考えて，かつては存在したものであろう。西ノ口地区のDトレンチから

藤ノ木地区の SD 8395 にかけて集落が広がっていたことは明らかである。西ノ口地区集落内の時期区分は先に述べたが，藤ノ木地区の集落についても同様なことから，4章の小結で述べた時期区分となろう。ただ，SD 8395 から7世紀代の遺物が比較的多く出土し，7世紀代の遺物の希薄な西ノ口地区よりはやや早く形成されだすのであろう。さて今回検出した集落の性格であるが，郡寺とも言うべき郡名寺院の乙訓寺があり，乙訓郡の中央に位置し郡衙などが所在してもおかしくない場所である。しかし墨書土器や硯類，銭貨等は一切出土せず，施釉陶器の出土も皆無に近い。SD 10550 の遺物も，器種の少なさ，甕の多さ，土師器の杯1種類で食器を代表するなど農村的要素が濃い。建物配置も官衙的要素はみられない。やはり一般集落であったと言えよう。乙訓郡衙については長岡宮下層で検出された建物群(注43)の可能性は強い。

これらの集落は，9世紀代には衰退し，他所へ移っていく。そして建物群に変ってこの地に現われるのは，素掘り溝群である。この素掘り溝群は，花粉分析の結果，水田耕作等に関って形成されたことは確実であり，以降生産場所として変化する。当初の東西方向から中世には南北方向の水田地割りに移行し，現在に至る。

また花粉分析の結果，伊辻氏の御教示によれば，この今里地区は，同じ段丘上にありながら，開田地区に比べ約200年開発が遅れるという。今里は昔，水が不便であったと聞くが，このことが今里地区において，段丘下の低湿地帯に弥生から古墳時代末期にかけて集落の存続する理由の1つとなろうか。その後段丘上の開発が進み集落の中心が西へ移ってくるのであろうか。

中世集落について

付表6　瓦器椀比較表

	器高指数の平均値	口縁端部内面に沈線を有する割合	泉産の搬入	備考
SX 10529	31	4.4%	なし	本遺跡
SX 5802	32.7	31.6%	あり	大山崎町3集による
高槻	32～33	34%	あり	高槻市「上牧」による

右京83次・105次の調査を通じて，今里西ノ口地区から藤ノ木地区にかけて中世鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての遺構及びそれに伴う遺物を検出できた。代表的な遺構としてはFトレンチ(83次) の素掘り溝群，大溝 SD 8375, SE 10521 及びその近辺の住居群 (SB 10515 等)，SX 10529 及びそれに隣接する住居群 (SB 10536 等) があげられる。極めて断片的にではあるが中世今里の様子を知ることができる。この調査地域内での中世集落の初現は12世期末後半～末葉である。SB 10546 から少量ではあるがこの時期の遺物が出土している。13世期中頃まで遺構・遺物の検出量も少ないが，SD 10541 から南は素掘

り溝のみになり，SX 10529 や SE 10521 があらわれ，SD 10541 から北に居住空間が広がっていたと考える。ところが，14世紀初頭をすぎるとAトレンチ近辺では，SK 10511 や SD8375，SK 10508 等の出土遺物から存続していることが判るが，SX 10529 付近は居住空間でなくなる。南から北へと居住空間の中心が移行していくことがうかがえる。また SD 8375 以北では，Fトレンチ（83次）において中世の農耕に関係する素掘り溝が多数検出されていて，あたかも SD 8375 を境にして居住空間と生産空間とが区切られていたかと思わせる。

遺物は瓦器椀を中心に多数出土したが，瓦器椀は全て楠葉産のものであった。また，輸入陶磁器の搬入が少なく，きわめて農村的な様相を示している。

SX 10529 出土の瓦器椀に関して，SX 10529 と同時期の遺構と考えられる SX 5802[注44]（大山崎町）出土瓦器椀と高槻における同時期の瓦器椀[注45]と比較してみると表3のとおりである。SX 5802 出土瓦器椀と高槻の瓦器椀はきわめて似かよった様相を示しているが，SX 10529 出土の瓦器椀は器高が浅く，口縁端部内面に沈線をもつ割合がきわめて低いという異なった様相を示している。この差異は同じ楠葉産でもいくつかの工房集団がありその工房集団間の差異によるものではないかと思われる。このことは高槻・大山崎という楠葉の対岸へ瓦器椀を供給していた工房集団と淀川及び街道からやや離れたこの地域に瓦器椀を供給していた工房集団とが異なっていたことを示すと同時に供給地と工房集団の密接な関係を示すものであるかと思われる。

（山口　博・伊辻 忠司・肥後 弘幸）

注1　高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会）1979
高橋美久二ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会）1980

注2　木村泰彦「長岡京跡右京第112次調査概要」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報　第1冊』（財）長岡京市埋蔵文化財センター）1981

注3　高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会　1979）

注4　岩崎誠「長岡京跡右京第76次調査現地説明会資料」（長岡京市教育委員会）1981

注5　梅原末治「乙訓寺礎石及古瓦」（『京都府史跡勝地調査会報告』第1冊　京都府）1919
吉本堯俊「乙訓寺発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会）1967

注6　注3と同じ

注7　この調査に調査補助員・整理員として参加いただいた方は下記の通りである。
昭和56年度　調査補助員　石原徳行・岩間信哉・岡井　透・岡崎文和・小野康裕・川端慶司・五勝　勝・坂本　守・篠原俊一・秀野恒弘・岡山隆輔・高鳥利洋・竹田　満・田村　泰造・中尾雅之・中村洋平・畑　哲史・肥後弘幸・福富　仁・森村　敦・世続武彦・赤司　紫・和泉まゆみ・臼井千映子・岡田裕子・小倉美奈子・甲斐富美

子・木戸裕美・木村美智代・小浦千歳・小塩礼子・榊原弘美・砂山ちさと・竹原京子・田村昌子・出口ひとみ・中西　恵・中村美也・伴　圭子・藤井純子・藤野雅世・藤原千草・村崎夏美子・吉沢素子

整理員　川上淑子・木倉千恵子・古住和子・山本ヒナ子

昭和57年度　調査補助員　肥後弘幸・園山隆輔・立川正明・城田正博・小住寛二・浜口和宏・西村豊和

整理員　臼井千映子・小塩礼子・木村美智代・竹原京子・山本ゆかり

昭和58年度　整理員　肥後弘幸・川田美由紀・山本ゆかり・竹原京子

注8　この調査に作業員として従事していただいた方は下記の通りである。(順不同)

昭和56年度　井上千代治・高橋治一・吉田武三・西村定太郎・渡辺常次・岡田明彦・田中虎吉・岩崎又男・木下栄太郎・山内芳治・五十棲春一・大根清一・吉田保定・橋本建一・中小路徳造・角倉光雄・木村芳久・古谷幸一・生島幸雄・村上藤一・吉田藤三郎・桝田キミエ・前川秀子・今井幸子

注9　土器の器種名におけるアルファベットによる分類は椀Cを除き下記文献によった。

奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅶ」(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊) 1978

注10　注3と同じ

注11　注3と同じ

注12　注4と同じ

注13　SD 8315の国土座標値は下記のとおりである。

X＝－118,092.0　Y＝－28,434.0　標高　38.398 m

注14　山本輝雄ほか「長岡京跡右京第77次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊　長岡京市教育委員会) 1982

注15　注3と同じ

注16　長谷川達ほか「長岡京跡第143次調査中間報告資料」((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注17　注1と同じ

注18　両溝 (SD 8355・8365) の国土座標値は下記の通りである。

SD 8355　W　X＝－118,466.1　Y＝－28,423　標高　35.68 m

E　X＝－118,466.2　Y＝－28,403　標高　35.56 m

SD 8365　X＝－118,472.0　Y＝－28,414　標高　35.65 m

注19　高橋美久二ほか「長岡京跡昭和49年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975

長岡京跡条坊シンポジウム資料 (長岡京跡発掘調査研究所) 1980

注20　百瀬ちどり氏の御教示による。

注21　中世の土師器皿及び瓦器皿については，口径 10 cm 以上をⅠ，10 cm 未満のものをⅡと分類した。

注22　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒―木簡―』(「草戸千軒町遺跡研究資料―」)1982

注23　松下正司ほか「草戸千軒町遺跡―第11～14次発掘調査概要―」(『草戸千軒町遺跡調査研究所年報(1974)』広島県教育委員会) 1974

注24　注20と同じ

注25　SD 83215・83224の国土座標値は下記のとおりである。

SD 83215　X＝－118,174　Y＝－28,297.1　標高　34.05 m

付表7　掘立柱建物跡・柵列一覧表

遺構名	規模		柱間		棟方向		備考
	南北方向	東西方向	南北方向	東西方向	方向	方位	
	約 m	約 m	m	m			
SB 8319	1.8	2以上	1.8	1.2	東西	N26°E	
SB 8392	2.4	3.0以上	1.2	1.5	東西	N35°E	
SB 8321	7.8	2.4以上	1.95	2.1	南北	N7°W	
SB 8322	4.2	3.6	2.1	1.5 1.8	南北	N8°W	
SB 8323	1.35	1.95以上	1.35	1.95	東西	N4°W	
SB 8324	4.2以上	1.95以上	2.1	1.95	東西	N33°E	
SB 8325	7.8以上	7.8以上	1.8	1.95	東西	N10°W	
SB 8326	3.6	3.9以上	1.8	1.95	東西	N11°W	
SB 8328	1.5以上	2.1以上	1.5	2.1	南北	N42°W	
SB 8329	3.9以上	4.2以上	1.95	2.1	南北	N42°W	
SB 8330	6.3	5.85以上	2.1	1.95	東西	N42°W	北廂
SB 8339	5.1	4.8以上	2.55	2.4	東西	N29°W	
SB 8335	4.2	2.4	2.1	2.4	南北	0°	
SB 8345	4.8以上	2.4以上	2.4	2.4	南北	N42°	
SB 8348	4.2	4.95	2.1	1.65	東西	N24°W	
SB 8349	4.95	—	1.65		南北？	N2°W	
SB 8351	5.85	7.5	1.95	身舎2.25 廂 3.0	南北	N5°E	東廂
SB 8352	5.85	4.5	1.95	2.25	南北	N5°E	
SB 8353	2.7	3.3	1.35	1.65	東西	N10°E	総柱
SB 8357	5.4	3.6	1.8	1.8	南北	N22°W	
SB 8358	3.6	3.0	1.8	1.5	南北	N28°W	総柱
SB 8360	5.4以上	3.6	1.8	1.8	南北	N16°W	
SB 8366	4.2	3.3	2.1	1.65	南北	N45°W	
SB 8367	3.0	2.41	1.5	1.2	東西？	N6°W	
SB 8371	3.0	3.6	1.5	1.8	東西	N4°W	
SB 8372	4.8	2.4以上	2.4	2.4	東西	N5°E	
SB 8373	3.6	1.8以上	2.1 1.5	1.8	東西	N10°E	
SB 8374	3.9	4.2	1.95	1.95 2.25	東西	N7°W	総柱
SB 8376	7.2	5.4以上	2.4	1.8	東西	N0°	北廂
SB 8377	3.6以上	5.4以上	1.8	1.8	東西？	N9°W	
SB 10547	7.8以上	9.0	廂 2.4 身舎3.0	3.0	東西	N0°	南庇
SB 10548	16.8	7.8以上	2.4	庇 3.0 身舎2.4	南北	N1°W	四面庇

遺構名	規模		柱間		棟方向		備考
	南北方向	東西方向	南北方向	東西方向	方向	方位	
	約 m	約 m	m	m			
SB 8383	4.5	3.6以上	1.5	1.8	東西？	N8°E	総柱
SB 8381	4.95	3.6以上	1.65	1.8	東西？	N9°E	総柱
SB 8382	1.8以上	4.5	1.8	2.25	東西？	N7°E	総柱
SB 8384	1.5以上	3.6	1.5	1.8	東西？	N35°W	総柱
SB 8385	4.8	3.0	1.6	1.5	南北	N30°W	
SB 8386	5.85	3.6	1.95	1.8	南北	N37°W	
SB 8387	3.6	2.4	1.8	2.4	南北	N14°W	
SB 8388	3.2	5.4	1.6	1.8	東西	N32°W	
SB 8389	2.1以上	4.95	2.1	1.65	東西	N13°W	
SB 8390	1.8以上	3.0	1.8	1.5	東西？	N31°W	総柱
SA 8327	8.4	3.6以上	2.1	1.8			
SA 8346	6.6	4.2以上	3.3	2.1		N9°W	
SA 8359		12.9以上		2.1 1.8		N57°E	
SA 8393		6.0以上		1.5		N8°E	
SA 8397	2.4以上	1.5以上	1.2	0.75		N15°W	
SB 10514	2.4以上	2.1	1.2	1.15	南北？	N3°W	
SB 10515	2.1	3.6以上	2.1	1.8	東西	N5°W	
SB 10536	4.5	2.1	2.25	2.1	南北	N6°W	
SB 10539	3.6	1.5以上	1.8	1.5	南北？	N5°W	総柱
SB 10546	3.9	3.9	1.95	1.95		N4°W	総柱
SA 10540	13.5		1.5			N2°W	

SD 83224　X＝－118,187　Y＝－28,297.2　標高　34.03 m

注26　山本輝雄ほか「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊　長岡京市教育委員会）1980，注14と同じ

注27　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第60巻2号）1979

注28　注3と同じ

注29　(財)長岡京市埋蔵文化財センター　調査員小田桐淳氏の御教示による。

注30　SD 10571　の国土座標値は下記の通りである。

X＝－118,865　Y＝－28,171.4　標高　30.54 m

注31　注19と同じ

注32　増田一裕「有舌尖頭器の再検討―本州・四国の出土例を中心として―」(『旧石器考古学』 22）1981

注33　「京都府下有舌尖頭器出土遺跡地名表」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊　1982）他の19例に正道遺跡（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集　1982）・向日市寺戸町殿長（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集1982・『向日市史』上巻　1982）・京都市西ノ京朱雀第7小学校出土の4例を加えた。

注34　石塚久則他『塚廻り古墳群』郡馬県教育委員会1980

注35　注27と同じ

注36　注29と同じ

注37　木村泰彦「右京第106次（7ANKHT　地区）調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(昭和57年度）(財)長岡京市埋蔵文化財センター）1982

注38　安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1976)』京都府教員委員会）1976

注39　堤圭三郎「胄山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1967)』京都府教育委員会）1967

注40　調査担当者の御教示による。

注41　末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』 第13冊　奈良県教育委員会）1935

注42　注14と同じ

注43　丸嘉樹・山本輝雄「乙訓中学校周辺の長岡宮下層遺構について」及び「7AN14H 地区 推定豊楽院　発掘調査概報」(『長岡京』第7号　長岡京跡発掘調査研究所）1978

注44　林　亨「長岡京跡右京第58次（7ANSSG 地区）発掘調査・遺物整理概要」(『大山崎埋蔵文化財調査報告書』第3集　大山崎町教育委員会）1982

注45　橋本久和「上枚遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第13冊　高槻市教育委員会）1980

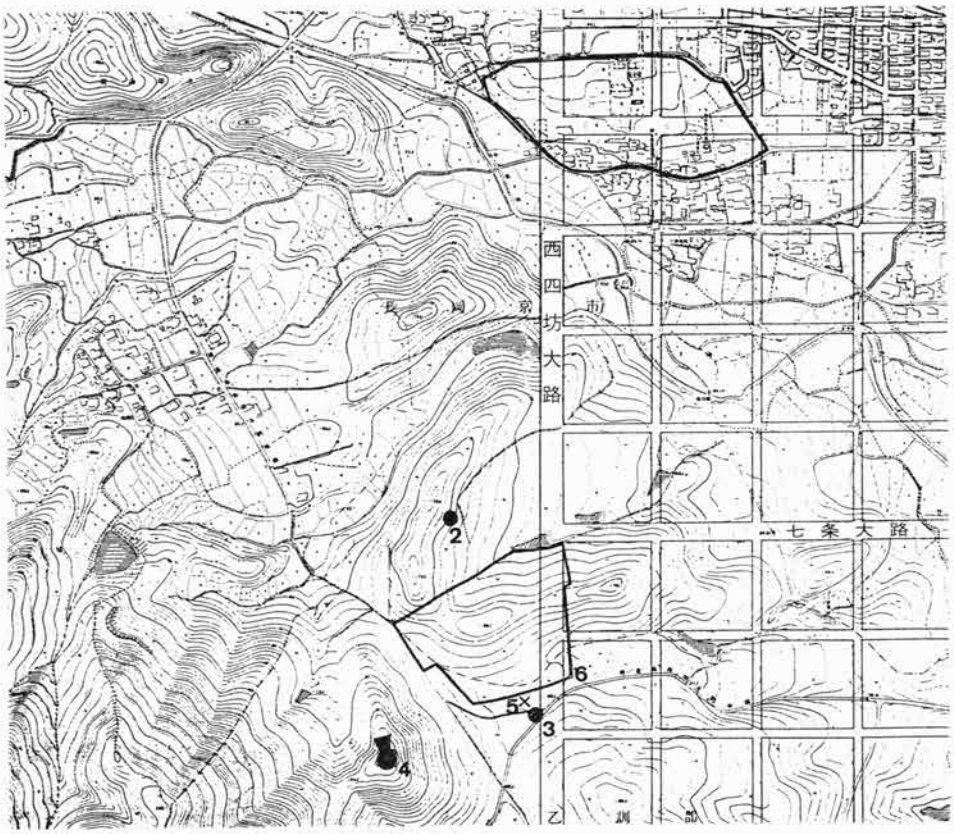
4. 長岡京跡右京第 127 次発掘調査概要

（7AN0SZ-1 地区，7ANSTE-4 地区）

1. はじめに

この調査は，長岡京市と大山崎町の丘陵地に府立高校の建設が計画されたため，工事に先立って実施したものである。

調査地は，長岡京市下海印寺西明寺・乙訓郡大山崎町円明寺鳥居前にあり，西山山地から東に向って派生する丘陵上に位置する。周辺には竹やぶが広がり，竹を伐採すれば山城盆地が一望できた。長岡京の条坊では，調査地の一画が推定京域の南西部にあたり，京内の西辺を画する西四坊大路が想定される位置にある。調査地の北方を流れる小泉川周辺の低位段丘



第 80 図　調　査　地　位　置　図（1/10,000）

1. 下海印寺遺跡　2. 西明寺古墳　3. 石倉古墳　4. 鳥居前古墳　5. 蔵骨器出土地　6. 調査地

上には，旧石器・縄文時代の遺跡である下海印寺遺跡や最近の調査で長岡京期の祭祀遺物が多量に出土した西山田遺跡等(注1)が存在する。一方，調査地周辺の丘陵上の遺跡としては，4世紀末の前方後円墳である鳥居前古墳，横穴式石室を持つ西明寺古墳等が知られ，また平安時代の蔵骨器も発見されている。こうしたことから今回の調査では，長岡京の西辺部の様相を明らかにすることに主眼を置いたが，調査地の位置・立地から考えて，古墳等の遺跡の発見も期待された。

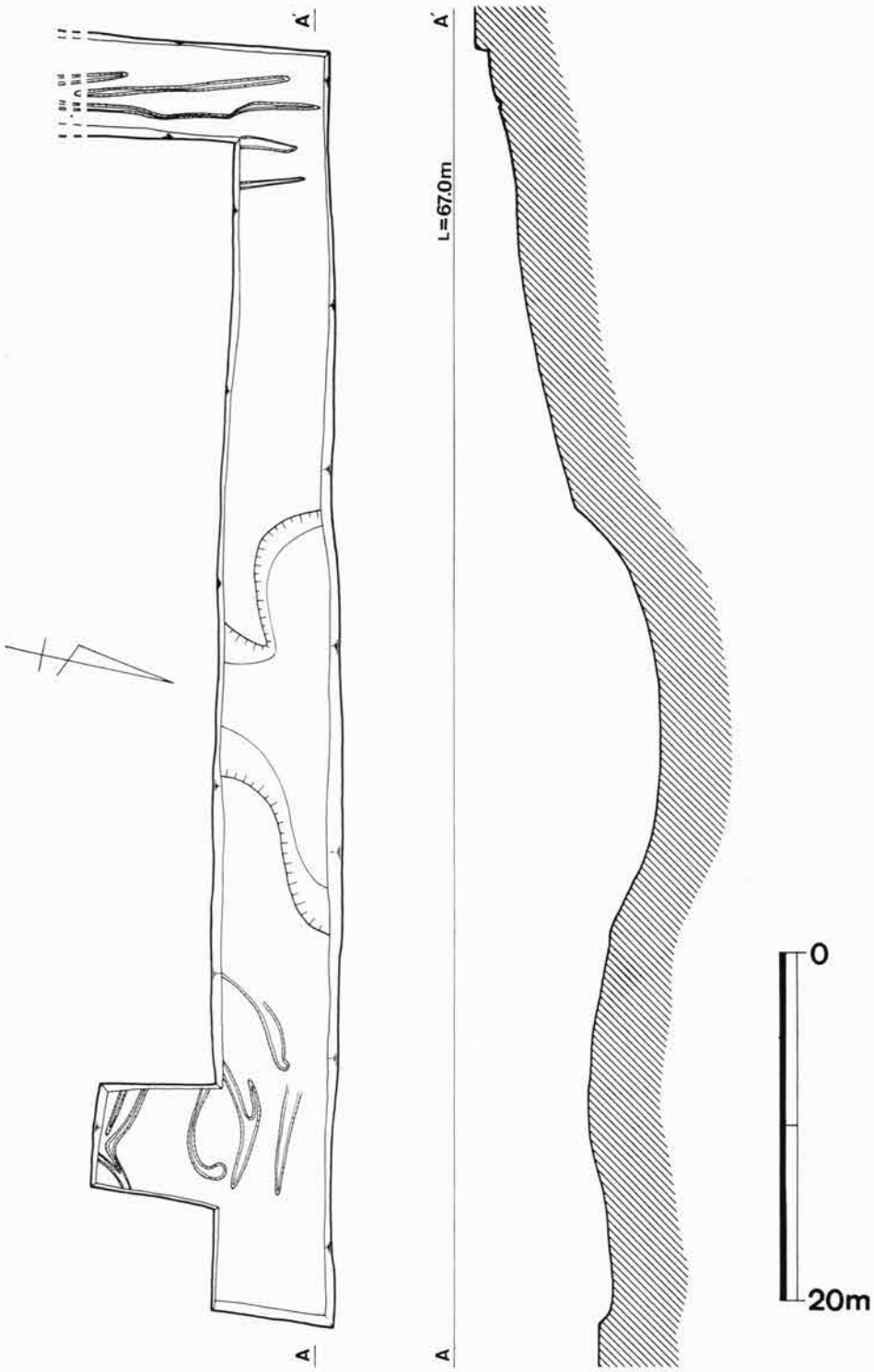
調査は，昭和58年3月4日～3月31日，同年4月4日～8月22日の2次にわけて実施し当調査研究センター調査課 主任調査員の長谷川 達，調査員 山口 博・山下 正 が調査を担当した。その際，京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所等の諸機関の御協力と御指導を賜わった。また竹の伐採作業に関しては，京都森林組合の方々に労を取っていただいた。さらに調査補助員・整理員として有志学生の参加・協力があった(注2)。記して謝意を述べたい。

2. 調 査 経 過

調査地は，西から東にゆるやかな傾斜をもつ丘陵上にあり，標高は55mから65m付近に位置する。この丘陵は，谷によって北と南の二つの丘陵に大きく分けられていたため，便宜上，北側の丘陵をA地区，南側の丘陵をB地区と呼び，トレンチの頭に冠することとした。トレンチは，この丘陵の尾根筋に平行，あるいは直交するかたちで設定し，両地区合わせて計24本入れた。

調査は，まず重機によって表土剝ぎを行った後，人力によって掘り下げていった。A-1トレンチは，A地区の丘陵の頂部にあたる部分に設定したが，表面の腐植土を除くと3～5cm程の厚さの土が幾重にも堆積した土層が認められた。これらは，竹やぶの土入れ作業に伴う客土であり，この客土の下において粘土・砂・礫からなる「地山」(大阪層群）が現われた。他のトレンチにおいてもA-1トレンチと同様の層序が認められ，所によって客土が2mを越す箇所も見られた。いくつかのトレンチにおいて，粘土・砂・礫の地山の面で溝・土坑・落ち込みを検出することができたものの，それらは出土遺物や埋土等から判断して，近・現代の筍栽培に関わる痕跡と考えられるものが大半を占めた。他に旧地形を確認したトレンチも数か所あり，第82図にのせたA-7トレンチの谷は，深さ5mを越えるものであった。遺物は，主に客土中から須恵器・土師器・石器・陶器が出土したが，その大半は近・現代の陶器であった。以上調査の概略を述べてきたが，各トレンチ毎については,「付表8　各トレンチの概要」にゆずりたい。

第81図　トレンチ配置図



第82図　A-7トレンチ平面図

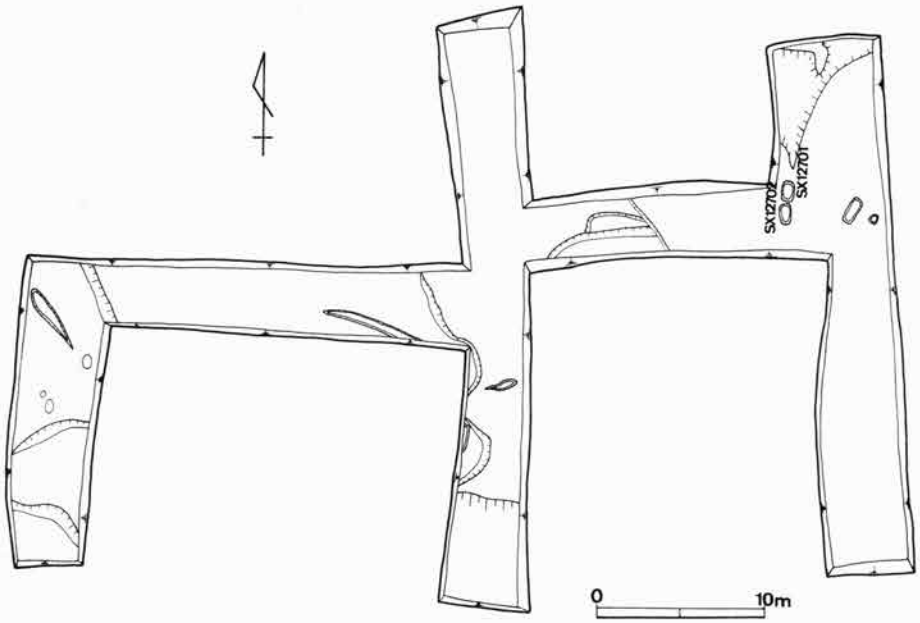
3. 検 出 遺 構

先に述べたようにこの調査では，顕著な遺構を検出することができずに終わり，数か所検出した溝や土坑等の遺構もほとんどが，竹やぶの開発等に関わるものと思われる。ここでは，A-21トレンチで検出した集石遺構 (SX 12701・SX 12702) についてその概略を述べたい。

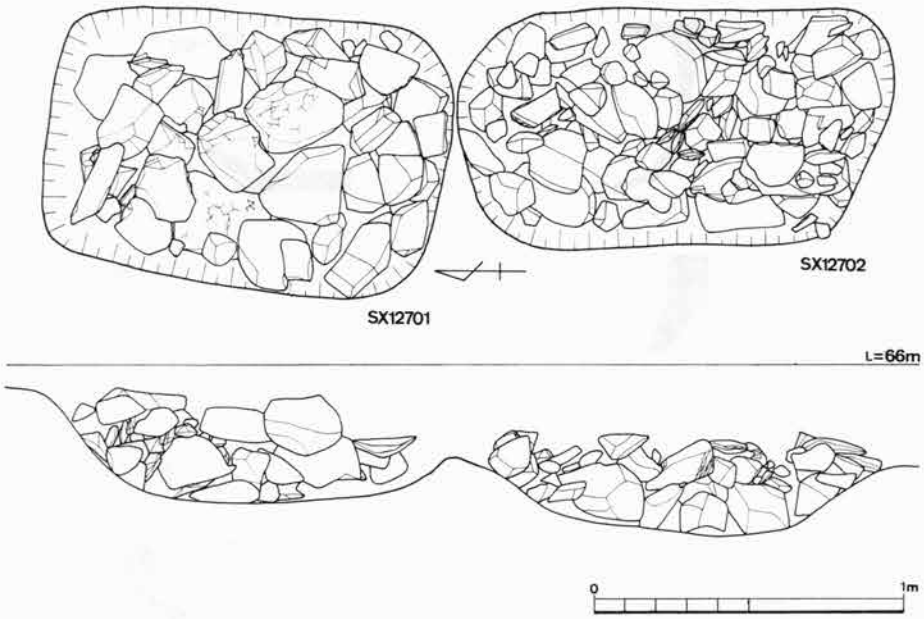
集石遺構は，丘陵の頂部から斜面にかけて設定したトレンチの東側で検出したもので，ともに丘陵の斜面を掘りくぼめた船底の土坑である。掘形は，SX 12701 が1.3m×0.9m，深さ0.3m，SX 12702 が1.4m×0.8m，深さ0.3mの規模をもち，ともに長楕円形を呈する。土坑内には安山岩と思われる自然石が，10数個重なって検出された。石は，拳大程のものも含まれるが，人頭大程の大きさのものが主体を占め，SX 12701 の方が幾分大きいものが多い。石の重なり方は安定しているとは言えず，所々にすき間をもっており乱雑な重なり方という印象をもつ。土坑は，ともに南北方向に主軸をもち，接して並ぶ。石とともに出土した遺物もなく，また周囲にもこの土坑との関係が窺えるような明確な遺構もないため，その性格・時期は不明である。あるいは墓等の施設が考えられるが，明言できない。

4. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は，細片が主で，また確実に遺構に伴って出土したものは皆無



第 83 図　A-21 ト レ ン チ 平 面 図



第84図　集石遺構（A-21トレンチ）実測図

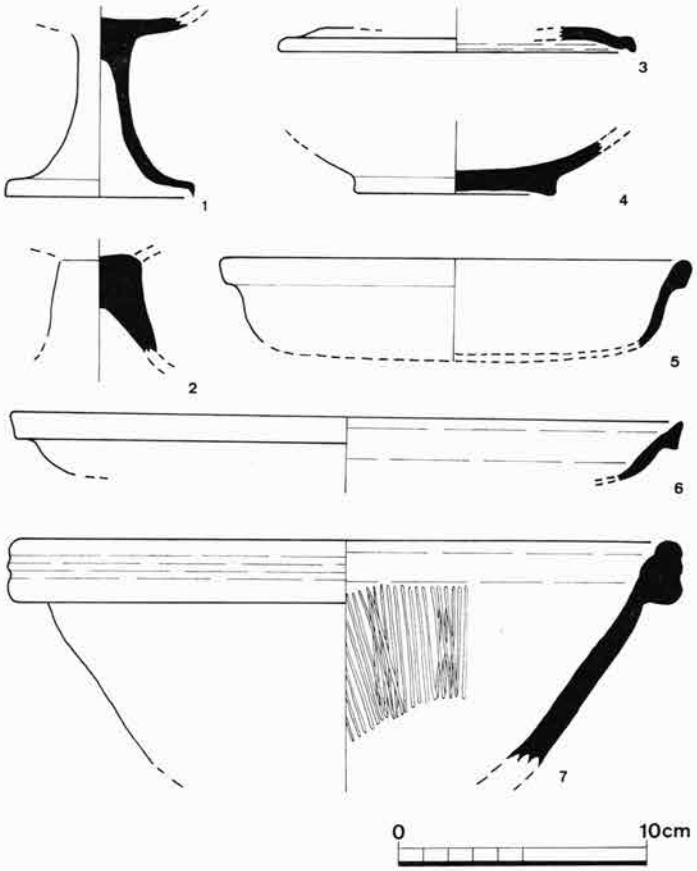
である。ここでは，実測が可能なものだけを取りあげた。これら7点の遺物は，古墳時代から江戸時代に属するものである。

(1) は須恵器の高杯であり，脚部にスカシ孔を持たない。口縁部は欠損しているためその形態は不明で，また全体に幾分歪みをもつ。(2) は土師器で内面が筒状を呈することから高杯と考えた。全体に磨滅が著しい。(3) は宝珠つまみを持つ須恵器の蓋で，端部を屈曲させた後内側に曲げる形態をとる。(4) は須恵器の椀で，円盤状の平坦な削り出しの高台を持つ。施釉は認められない。(5・6) は土師器の鍋で，いわゆる焙烙鍋である。(7) は擂鉢で，内面には12本を単位とする櫛状工具で沈線を描く。備前焼と思われる。

5. ま　と　め

今回の調査は，①長岡京の条坊遺構の検出，②古墳等の新たな遺跡の発見，の2点に主眼を置いたが，それらのことについて積極的な成果は見出せなかった。このことは，調査地が竹林の育成・整備で著しく原地形が失われていることと無関係ではないが，とりわけ長岡京の条坊に関して言えば，従来から京内の西辺部が丘陵地に位置することから，条坊の施行の否定的な地域とされており，今回の資料はそれを一定傍証する資料であるという点に一つの意義が見出されよう。

なお少量とは言え，石器・須恵器・土師器等の遺物の存在があり，今後とも周辺の開発に



第85図　出土遺物実測図

際しては埋蔵文化財に対する充分な注意が必要であろう。　（山下　正）

付表8　各トレンチの概要

トレンチ名	概　　要	出土遺物
A-1	丘陵の頂部に設定（標高70m）。 遺構なし	なし
A-2	丘陵の頂部に設定（標高69m）。 石溜り，土坑を検出したが，筍栽培に関わる土地の改変と思われる。	なし
A-3	丘陵の頂部に設定（標高65m～68m）。A-2と同様の石溜り，土坑とともにトレンチの東に向かって地山が徐々に落ち込むことを確認。	なし
A-4	丘陵の斜面に設定（標高64m～66m）。 近現代の野つぼの検出。	なし
A-5	丘陵の頂部に設定（標高66m～67m）。トレンチの東側で，地境溝と思われる南北溝を数条検出。	須恵器，土師器（高杯第85図2）

トレンチ名	概　　要	出　土　遺　物
A-6	丘陵の斜面に設定（標高63m～66m）。トレンチの西側で，竹やぶの地境溝を検出。	な　し
A-7	丘陵の斜面に設定（標高60m～65m）。トレンチ中央部で深さ5m，幅24mの谷を検出（旧地形の確認）。	陶　器
A-8	丘陵の斜面に設定（標高61m～62m）。幅0.3m，深さ0.1m程の数条の溝を検出。	土師器，須恵器，陶器
A-9	丘陵の頂部に設定（標高66m～65m）。幅0.2m，深さ0.1m程の南北溝を検出。	な　し
A-10	丘陵の頂部に設定（標高68m～69m）。遺構なし。	な　し
A-11	丘陵の斜面に設定（標高68m～69m）。A-2と同様の石溜りの検出。	な　し
A-12	丘陵の斜面に設定（標高67m～73m）。A-2と同様の石溜りの検出。	な　し
A-13	丘陵の斜面に設定（標高71m～73m）。近現代の野つぼの検出。	な　し
A-14	丘陵の頂部に設定（標高70m）。遺構なし。	な　し
A-15	丘陵の斜面に設定（標高56m～59m）。旧地形の検出。	な　し
A-16	丘陵の斜面に設定（標高52m～60m）。A-8と同様の溝と旧地形の確認。	須恵器（第85図4），陶器
A-17	丘陵の斜面に設定（標高61m～65m）。旧地形の確認。	石器剥片（サヌカイト）
A-18	丘陵の斜面に設定（標高60m～66m）。土坑状の落ち込みの検出。	な　し
A-19	丘陵の斜面に設定（標高59m～64m）。遺構なし。	陶　器
A-20	谷部に設定（標高54m～60m）。遺構なし。	な　し
A-21	丘陵の頂部の設定（標高65m～68m）。集石遺構（SX12701,02）の検出。他にA-2と同様の石溜り，数条の溝あり。	陶器（擂鉢第85図7）須恵器，土師器
B-1,2,3	丘陵の斜面に設定（標高57m～64m）。数条の溝，土坑状の落ち込みを検出。	石器剥片（サヌカイト），須恵器，土師器，陶器

注1　山本輝雄「右京第104次（7ANOND地区）調査略報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和57年度』財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター）1983

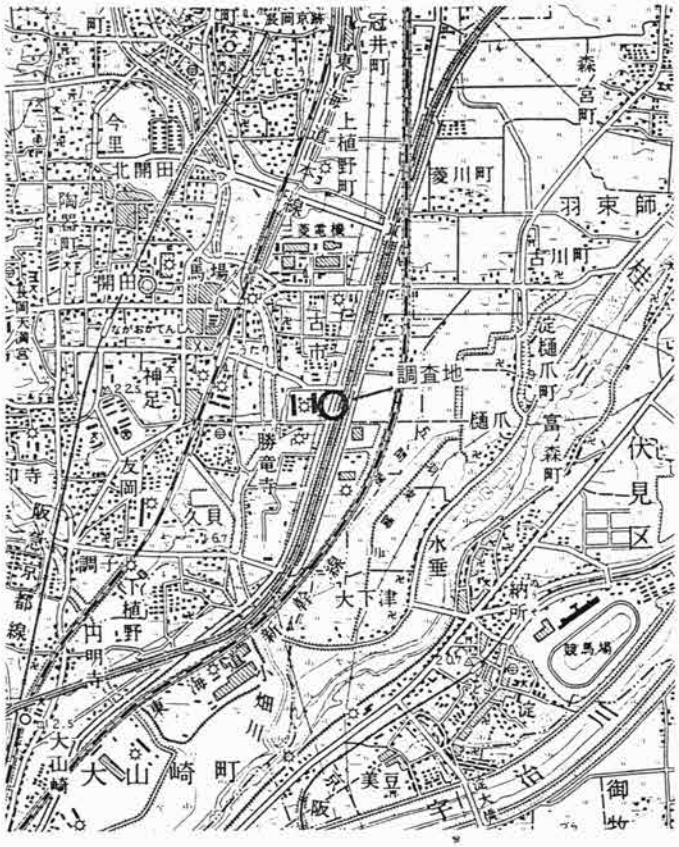
注2　福富　仁・立川　正明・西村　和広・坂下　雅朗・肥後　弘幸・園山　隆輔・篠原　俊一・浜口　和宏・田村　泰造・西岸　秀文・藤沢　達也・木ノ下治男・城田　正博・久山　晃・小滝　初代・宮本佐和子・谷地　明子・吉沢　素子・中川　理華・杉本　和子・神山　久子・戸波みどり・臼井千映子・竹原　京子・赤司　紫（敬称略）

5. 長岡京跡左京第103次発掘調査概要

（7ANMYD 地区）

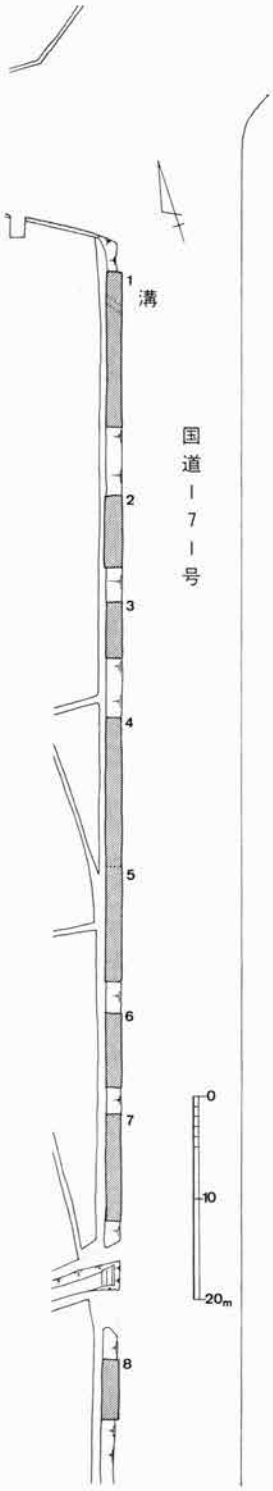
1. はじめに

この調査は，昭和58年度，一般国道171号の歩道設置工事に伴い，近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて行ったものである。工事対象地は，京都府長岡京市神足小字柳田から大田に及ぶ延長約460mを測るが，調査対象としたのは，工事部分が畑地・水田に接し擁壁工事が行われる部分，約160mの間であり，残りの部分は立会調査とした。発掘調査は，昭和58年8月3日に開始し，8月20日に終了したが，その前後には，工事の進行に応じて部分的に立会調査を行った。なお，現地調査は，調査課主任調査員 長谷川 達が担当した。

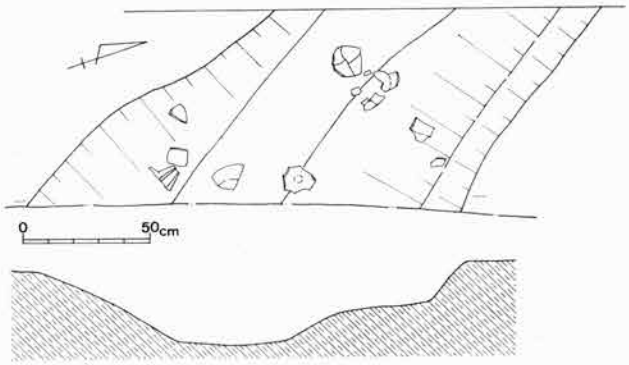


第86図　調査地位置図（1/50,000）

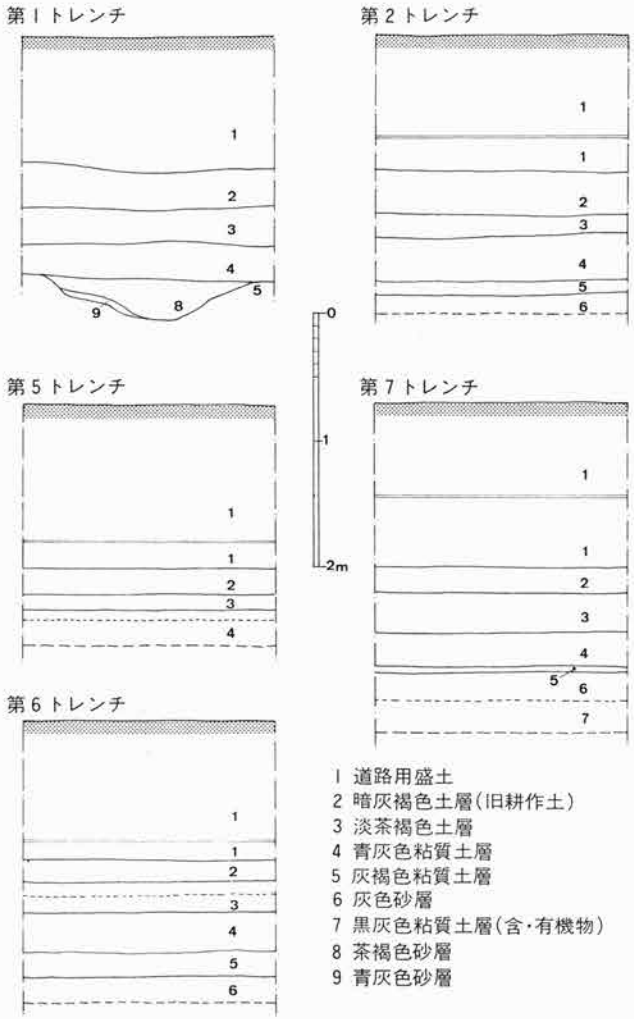
調査地は，国鉄東海道本線「神足」駅東方，約800mに位置し，標高は道路面で約13m，水田面で約12mを測る。西山山地に源をもつ小畑川東岸にあたり，右岸が洪積世段丘になっているのに対し，調査地付近は沖積地となっている。歴史的には，長岡京跡左京六条一坊にあたり，付近に長岡京跡の南北幹線道の一つである，東一坊大路が設定されていた可能性の高い場所である。また，そのほかの遺跡としては，山城地方の弥生時代の代表遺跡である雲の宮



第87図　トレンチ配置図



第88図　第1トレンチ検出溝平面図



第89図　土層断面概略図

遺跡[注1]が北東側に広がり，周辺には古市森本遺跡[注2]・下八ノ坪遺跡・芝本遺跡など，縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が数多く，当調査地をとり囲むように存在している。

2. 調 査 概 要

調査は，国道171号上り車線の道路脇，約160m の間に断続的に８本のトレンチを入れた。トレンチの形状は，歩道設置という工事の性格上，狭小なものとなり，また，国道下の埋設管，あるいは電柱・標式・バス停などによって制約を受けるため，幅約２mとなり，トレンチ壁面に傾斜をつける関係上，底面での観察可能面積は，さらに狭小なものとなった。表土および旧擁壁用の切石は，重機によって除去し，旧耕作土以下を人力にて掘削した。

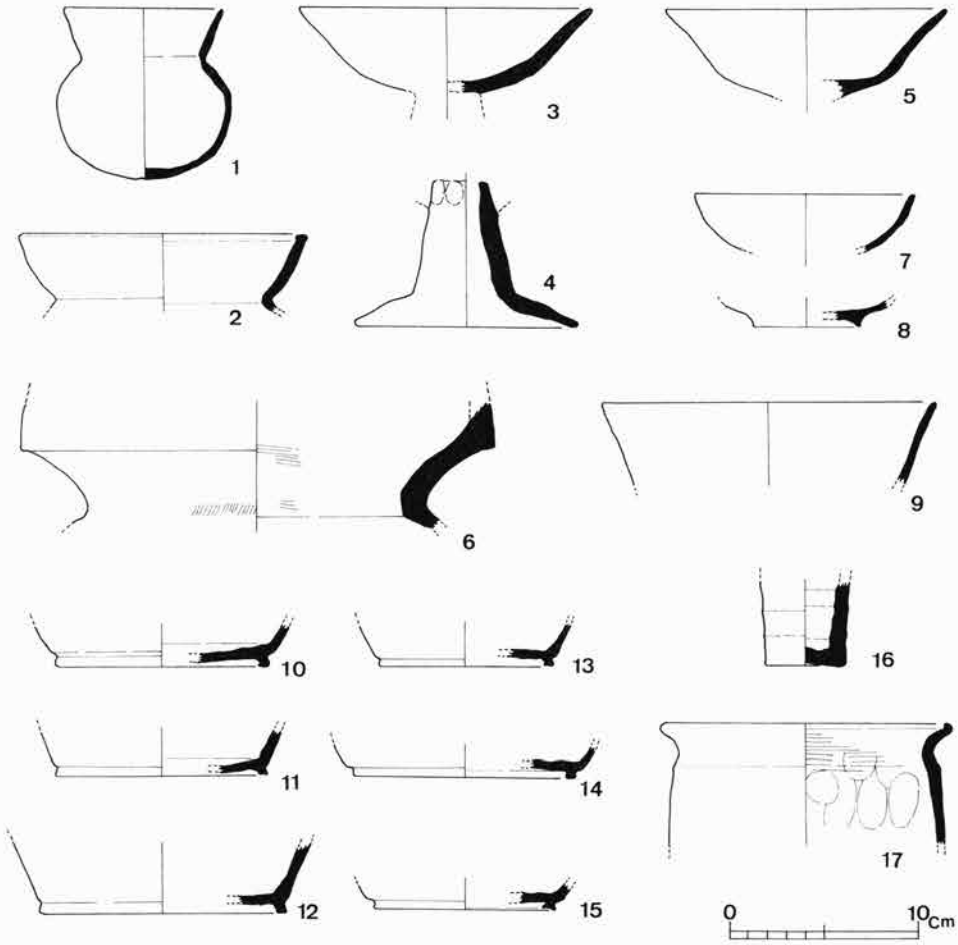
トレンチ全体を通して検出した遺構は，第１トレンチ北側で，北西一南東方向の溝である。溝は幅1～1.1m・深さ約30cm で，検出できた長さは1.4mである。灰褐色粘質土層から落ち込み，溝内には茶褐色砂層と青灰色砂層が堆積していた。溝内からは古墳時代の土師器（第90図１～５　図版48の(1)）の壺・甕・高杯が出土している。溝内の遺物の出土状況には高低差があるが，時期差はなく，溝内の堆積土の状態からも比較的短期間に埋没したものと考えられる。この溝が人為的なものか自然流路であるか，確定し難い。

各トレンチの土層は，トレンチによってやや変化するが，基本的には道路面下に１m前後の盛土があり，それ以下に暗灰褐色土（旧耕作工），淡茶褐色土（床土）を経て，青灰色粘質土層となり，この層に各時期の遺物が包含されている。その下に灰褐色粘質土層がある。すべてのトレンチでは確認できなかったが，それ以下に灰色砂層があり，さらに，第６トレンチで深く掘り下げた結果，下層にはやや細砂分を含む黒灰色粘質土層が存在している。この層には植物遺体が多く，形状をとどめて包含されているが，部分的に観察した結果では人工遺物はふくまれていなかった。

3. 出 土 遺 物

（1～5）は第１トレンチの溝内からの出土遺物である。全体に磨滅が激しく，調整等の識別は困難な部分が多い。その他は各トレンチ包含層から出土したものである。

(1) は小型丸底壺で，口径 8.4cm・器高9.2cm を測る。内外面とも剥離が著しく，全体の調整は不明であるが，内面底部付近に一部なで調整の痕跡が残る。(2) は甕の口縁部破片で，外反し，口縁端部をやや肥厚させている。(3･5) は高杯の杯部である。(3) は器壁がやや厚く，杯底部から明瞭な稜を持たずになだらかに口縁部へ移行し，端部は丸くおさめられている。内外面ともに赤褐色を呈し，内面に細い刷毛目の痕跡が残る。(5) も (3) と同様の



第 90 図　出　土　遺　物　実　測　図
1～6・17. 土師器　7・8. 瓦器　9～16. 須恵器（1～5：第1トレンチ溝内出土）

形態を持つが，口縁部がかすかに外反し，(3) よりも薄く仕上げられている。(4) は高杯脚部で，左右が非対称に仕上がっている。柱状部・裾部ともに直線的で，その境は屈折している。裾部はなでて仕上げられているが，柱状部内面は削りが施され，杯部との接合部には指による押圧痕が残る。(6) は第1トレンチの包含層から出土した大型の壺である。頸部で大きく外反し，さらに上方に屈折する二重口縁を持つものと考えられる。(7・8) は瓦器の椀と底部である。第1トレンチから出土した (8) は，断面三角形の高台を持ち，表面の一部に漆状の皮膜が付着している。(10～15) は須恵器の高台付杯(杯B)であり，(9)もその口縁部と考えられる。(10) は第2トレンチ出土で，底部に粘土紐の痕跡が明瞭に残る。(16) は須恵器壺Gであり，内外面ともにロクロ挽きによる凹凸がはっきりと残り，底部に糸切り痕があ

る。(17) は土師器の甕で，口径 16.6cm。「く」字形に外反する口縁部を持ち，その端部は内側に折り曲げられている。体部外面および口縁部内面に刷毛目が部分的に残り，体部内面に指による押圧痕が多数残る。そのほかの遺物として，輸入磁器(青磁)破片，磨滅が激しいが弥生土器と考えられるものも一片出土している。時期は(1～6)が古墳時代，(7・8)が鎌倉時代，(9～17)が長岡京期の遺物である。

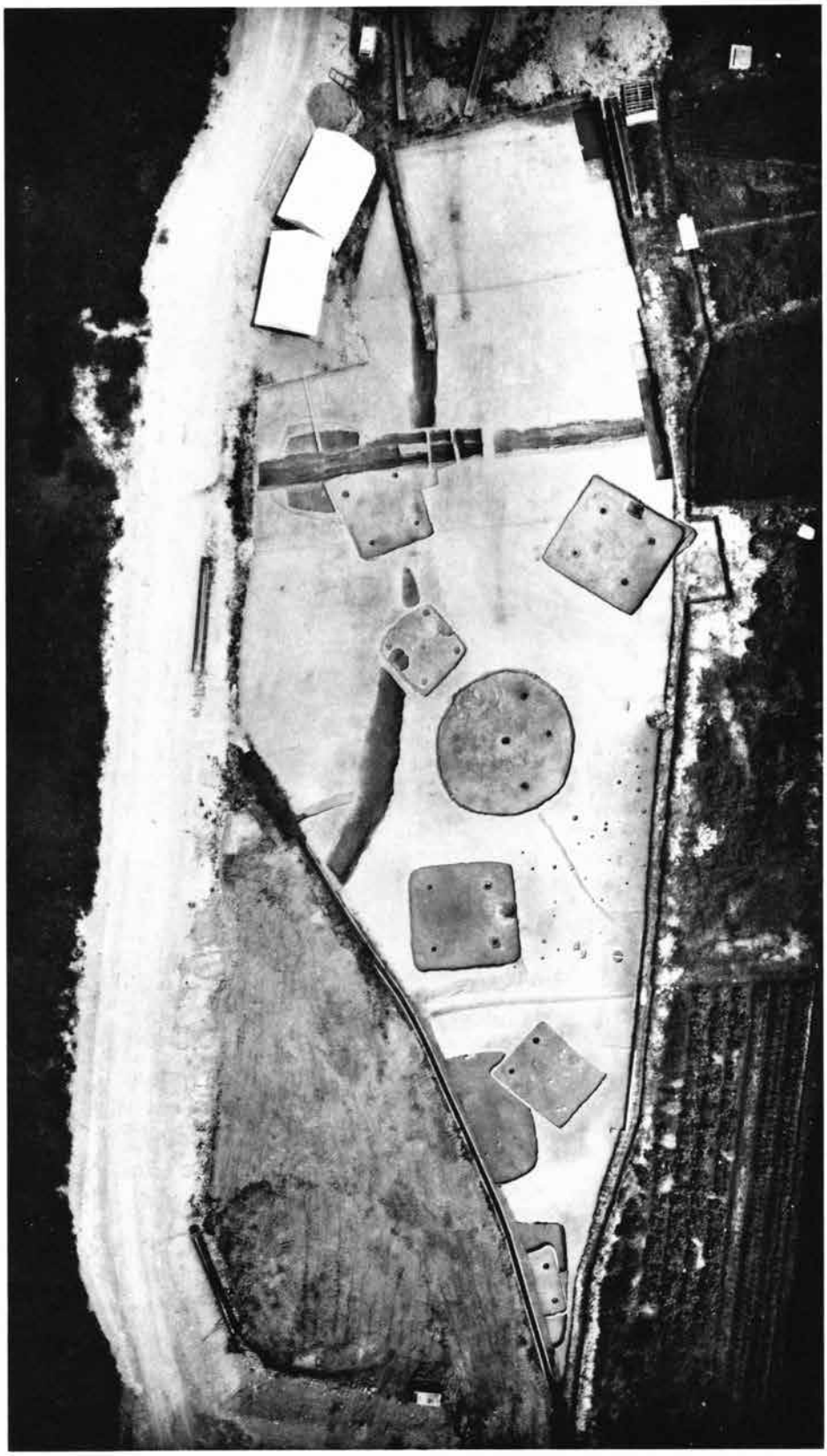
調査の結果，長岡京跡に関連する遺構は確認できなかったが，小規模とはいえ，古墳時代の溝が検出できたことから，この付近まで古墳時代の集落に関連する遺構の及んでいることが判明した。同時期の遺跡としては，近傍に古市森本遺跡，やや離れて鴨田遺跡等があり，この付近の古墳時代前期の集落を考える上での一資料になるものと考えられる。また，遺物に弥生時代から中世まで，広い時代幅があり，長く人々に利用された土地であったことがわかる。また，掘削した最下層で確認した黒灰色粘土層からは，この付近が沼状の湿地であったことが類推可能であり，溝との関係から，あるいは古墳時代よりも以前，雲の宮遺跡の集落部分に接する低湿地であったことも考えられる。　(長谷川　達)

注1　佐原　真「山城における弥生文化の成立――畿内第Ⅰ様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』50-5　1967

注2　岩崎　誠「(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要――左京第17次 7ANMMT 地区」(『長岡京市文化財調査報告書』 第5冊　長岡京市教育委員会) 1980

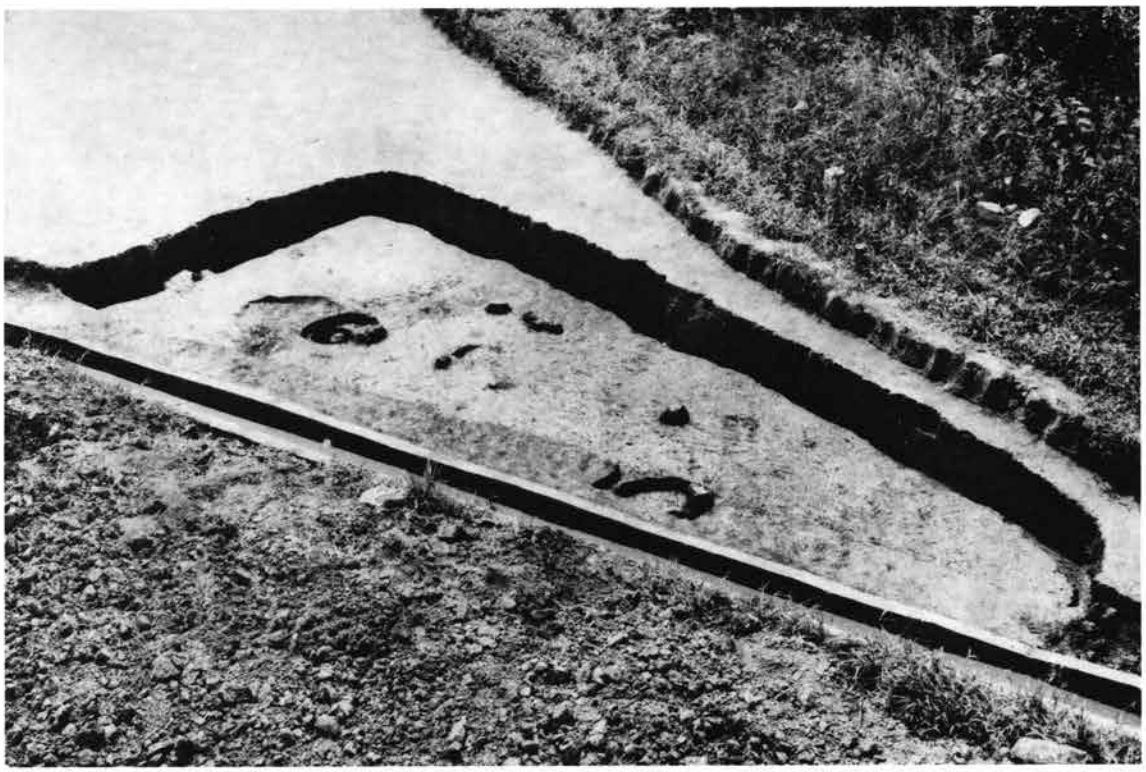
図　　版

図版第1　青野西遺跡

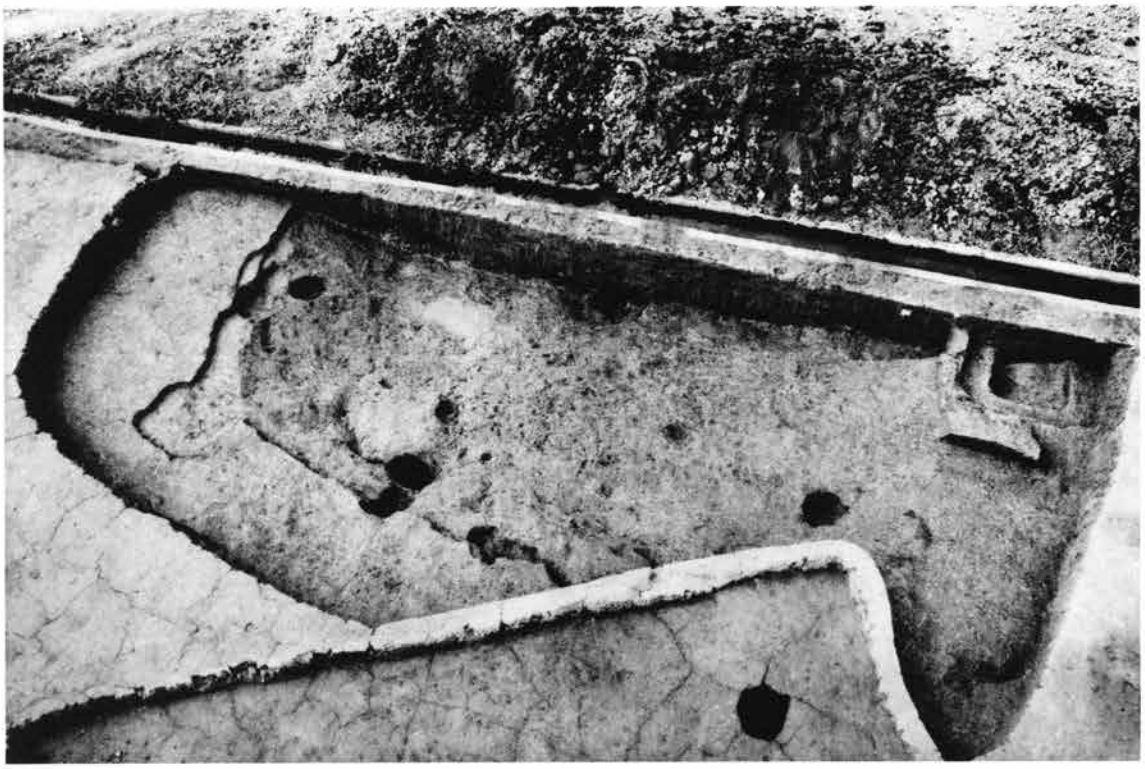


青野西遺跡全景（航空写真）

図版第2　青野西遺跡

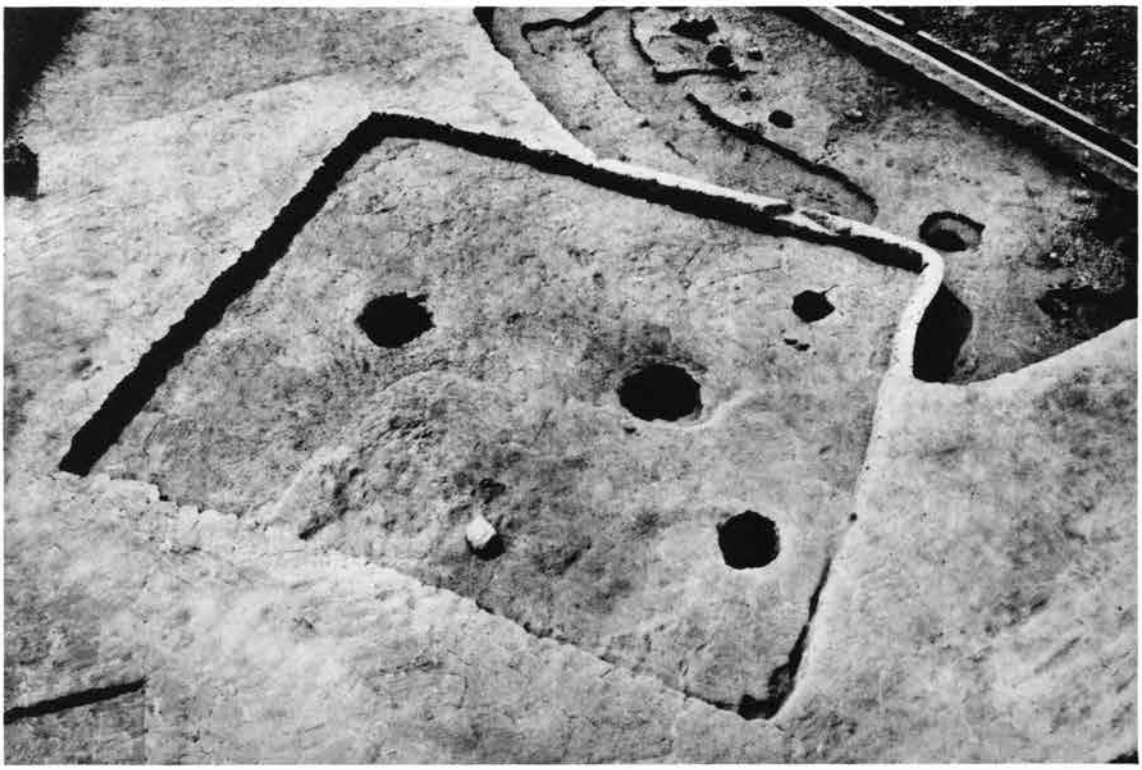


(1)　1号住居跡（北西から）



(2)　3号住居跡（南東から）

図版第3　青野西遺跡



(1)　4号住居跡（南東から）

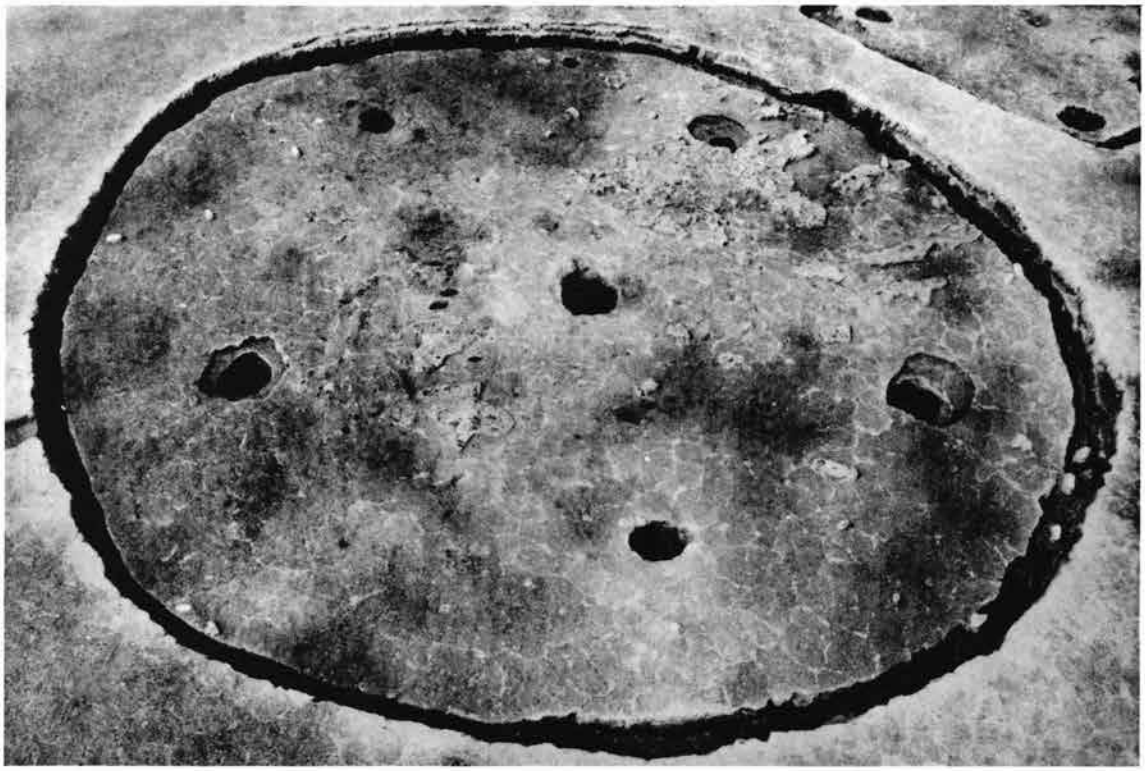
(2)　13・14・15号住居跡（北西から）

図版第4　青野西遺跡

(1)　5号住居跡（南から）

(2)　5号住居跡　特殊ピット（南から）

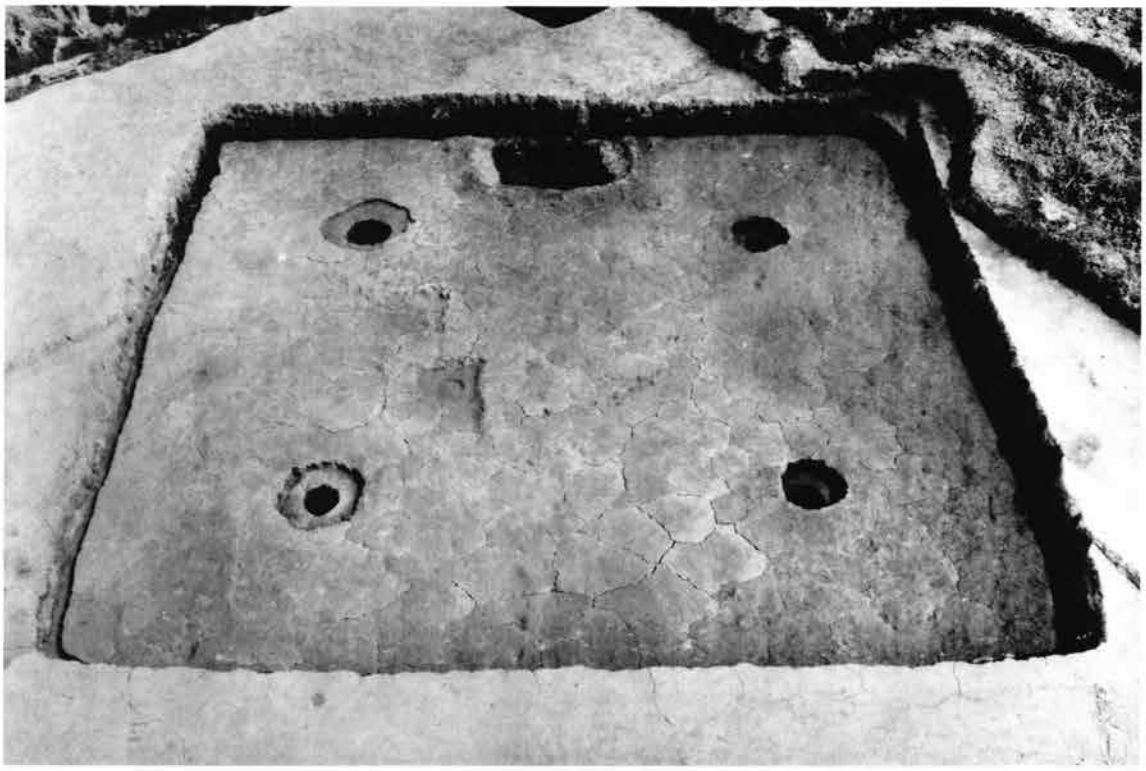
図版第5　青野西遺跡



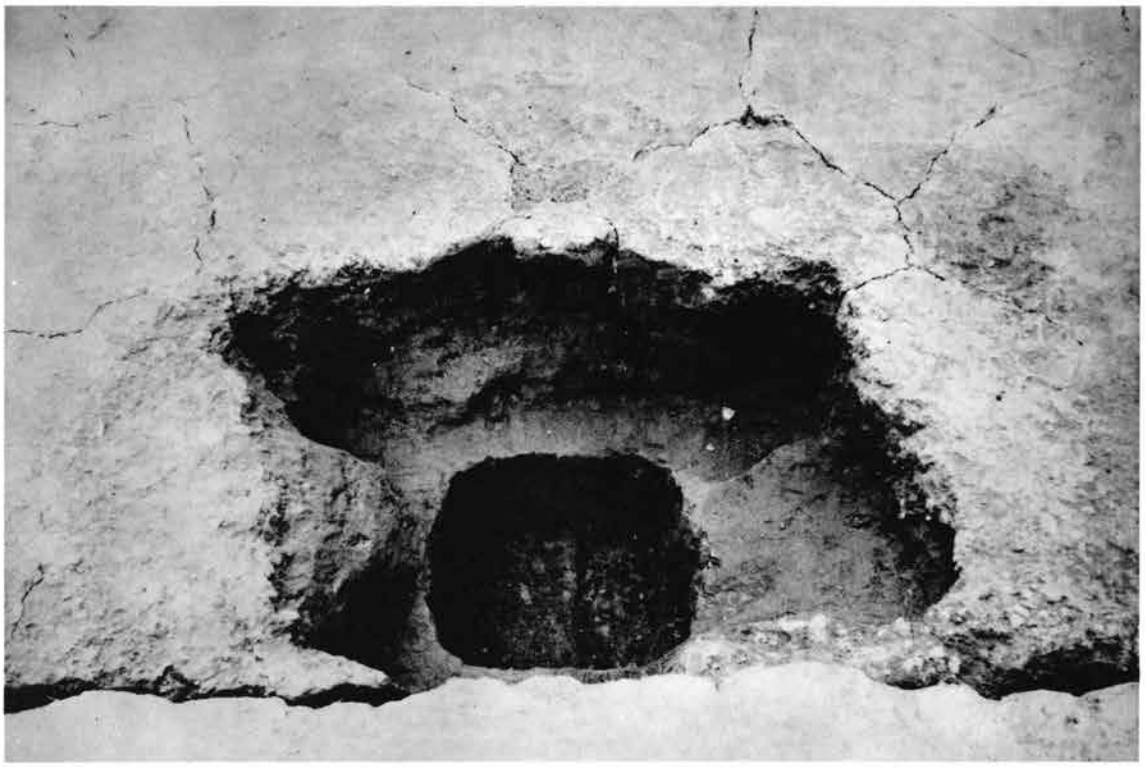
(1)　6号住居跡（南から）

(2)　6号住居跡　北東柱穴付近（東から）

図版第6　青野西遺跡

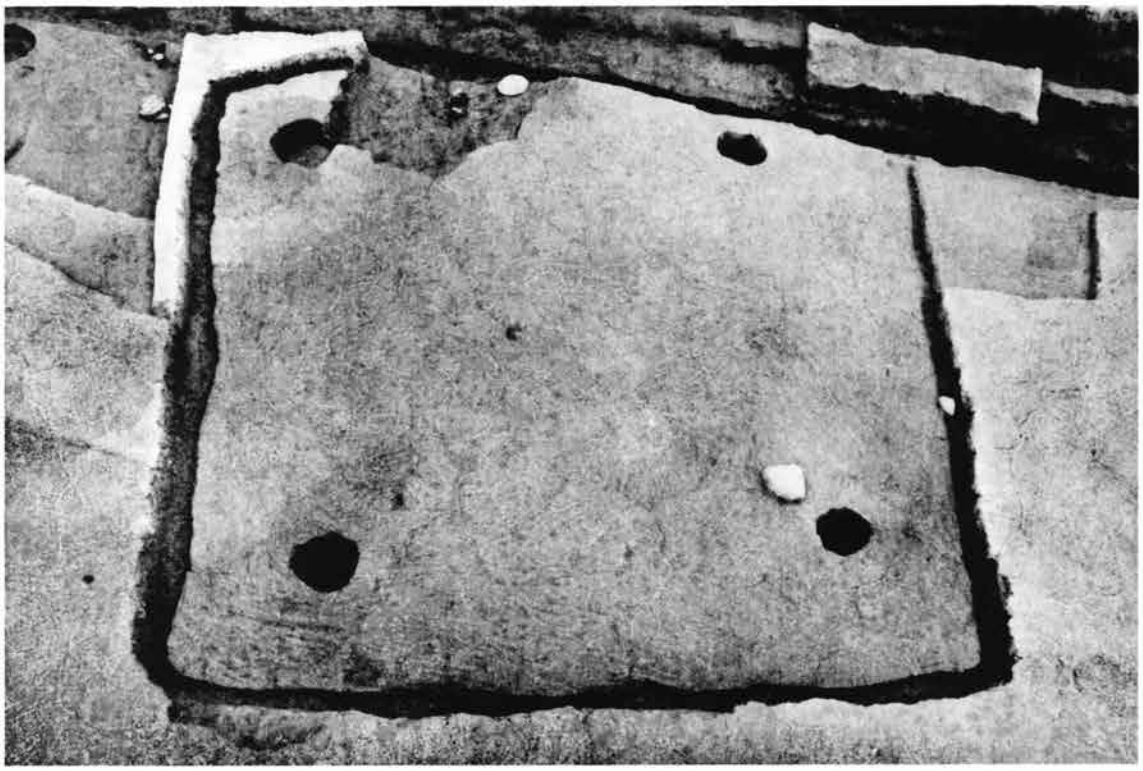


(1)　7号住居跡（北西から）

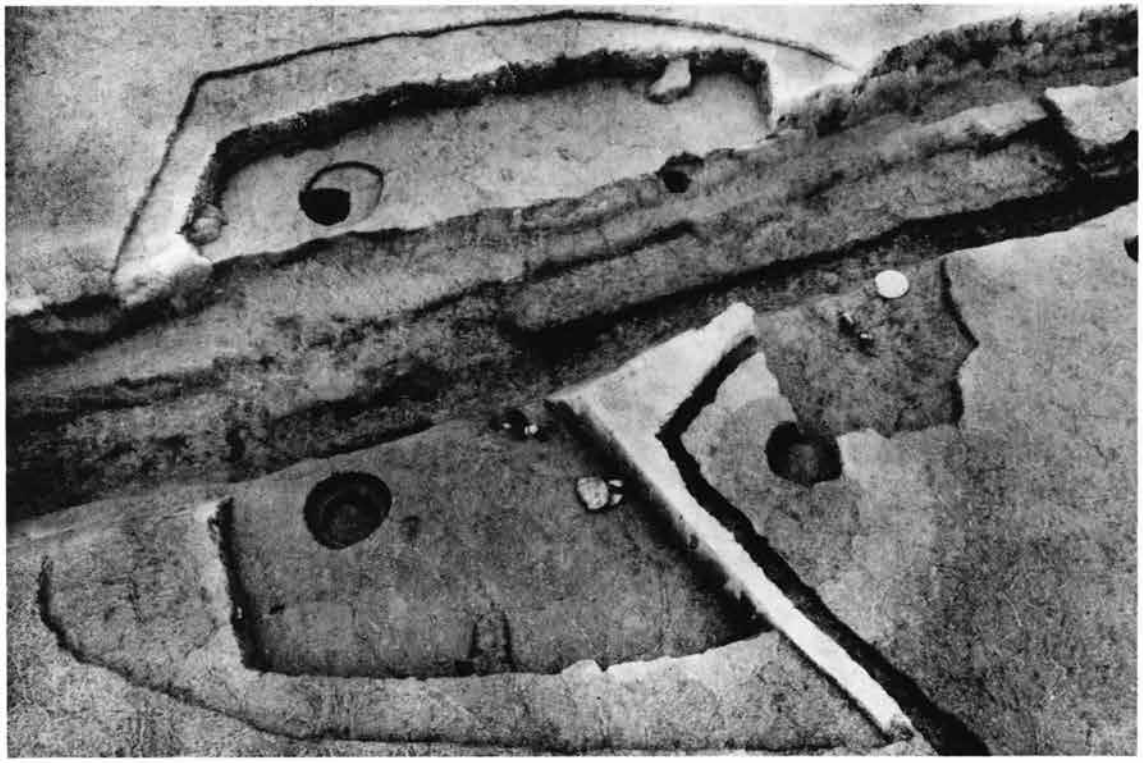


(2)　7号住居跡　特殊ピット（南東から）

図版第7　青野西遺跡

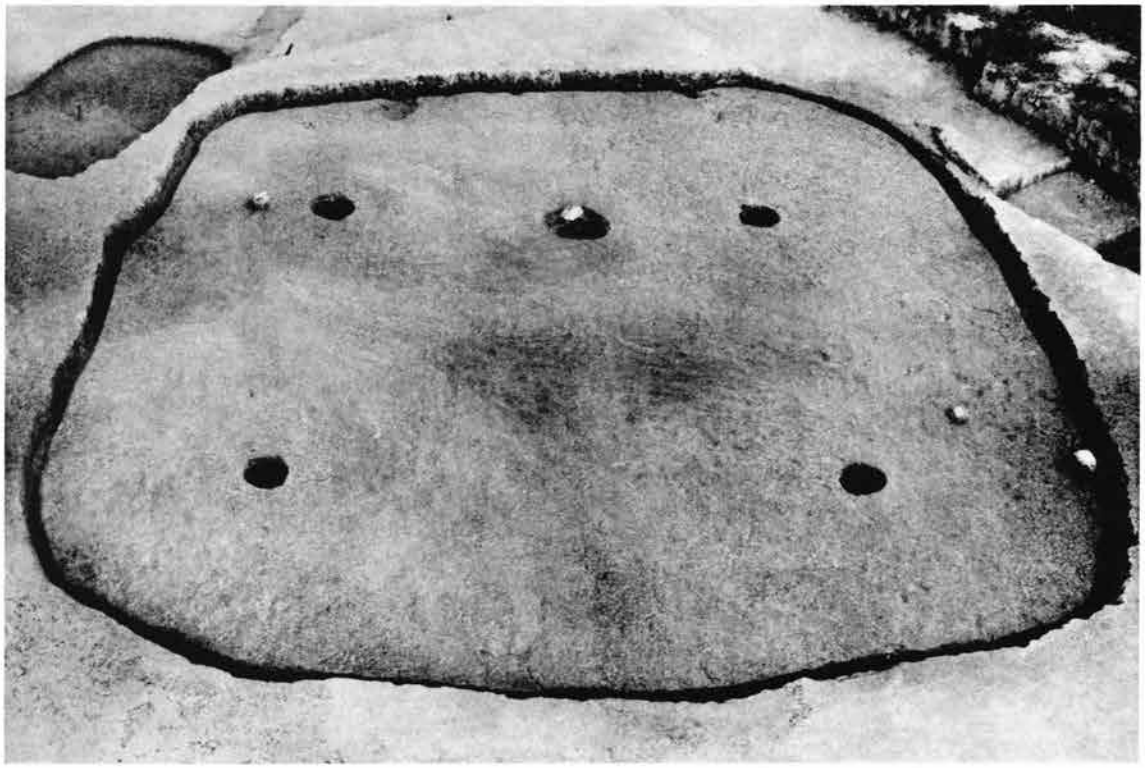


(1)　9号住居跡（南西から）



(2)　10・11号住居跡（西から）

図版第8　青野西遺跡



(1) 12号住居跡（北西から）

(2) 溝3（SD 8302）（北から）

23

22

40

45

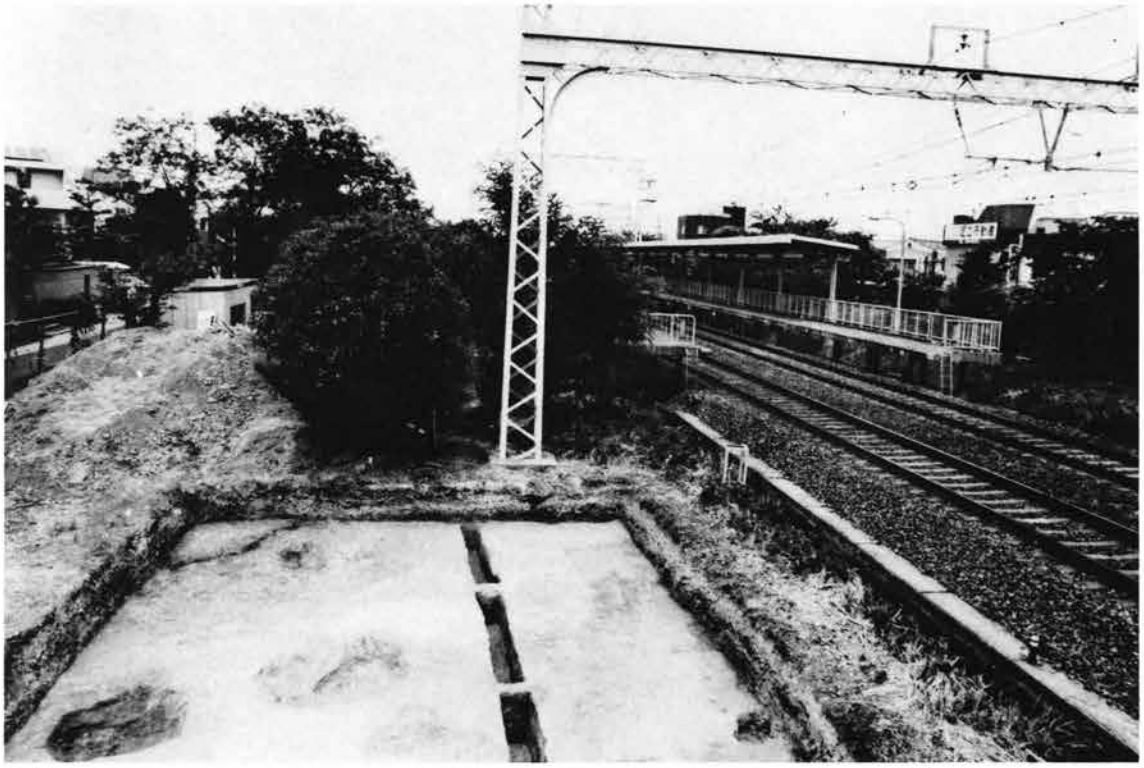
41

46

出土土器(1)〔数字は実測図と共通〕

出土土器(2)〔数字は実測図と共通〕

図版第11　　長岡宮跡第134次



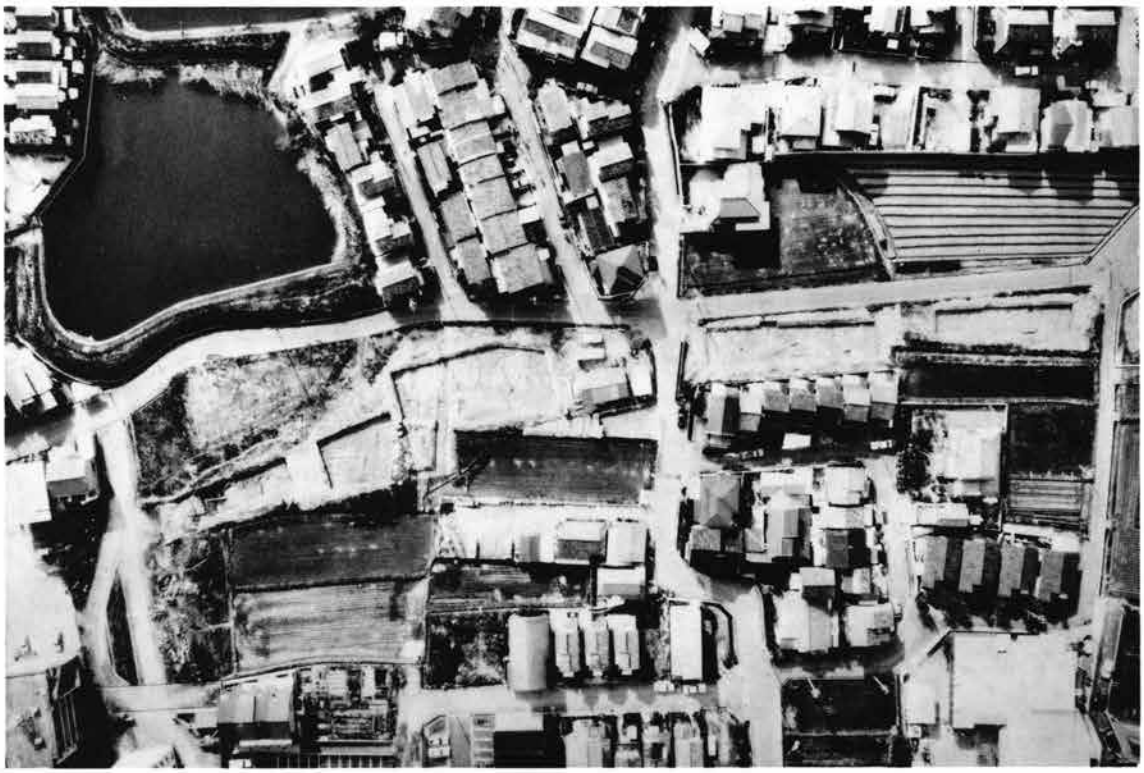
(1)　調査地および周辺（南から）

(2)　調査地全景（北から）

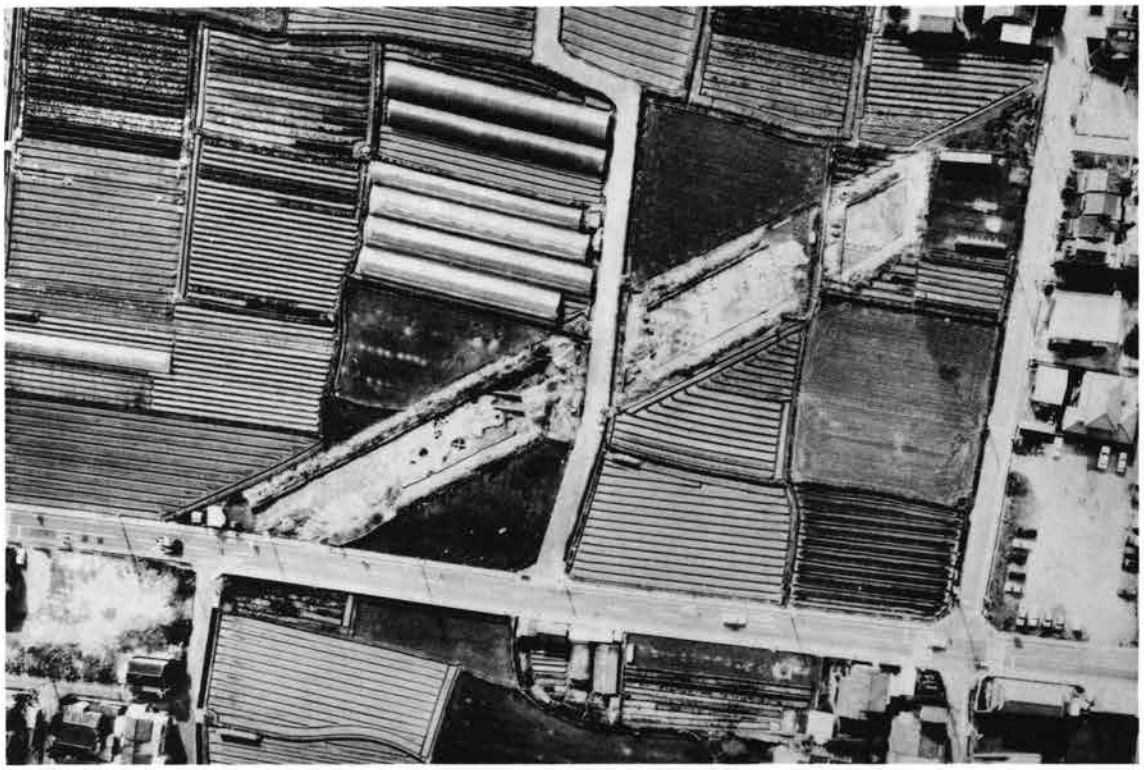
(1) 西壁土層断面（北側部分）

(2) 西壁土層断面（南側部分）

図版第13　長岡京跡右京第83・105次



(1) 西ノ口地区調査地



(2) 藤ノ木地区調査地

(1) 調査地近景（北西から）

(2) Aトレンチ(83次)全景（北から）

(3) Bトレンチ(83次)全景（北から）

図版第15　長岡京跡右京第83・105次

(1) 拡張後Bトレンチ(83次)全景（北から）

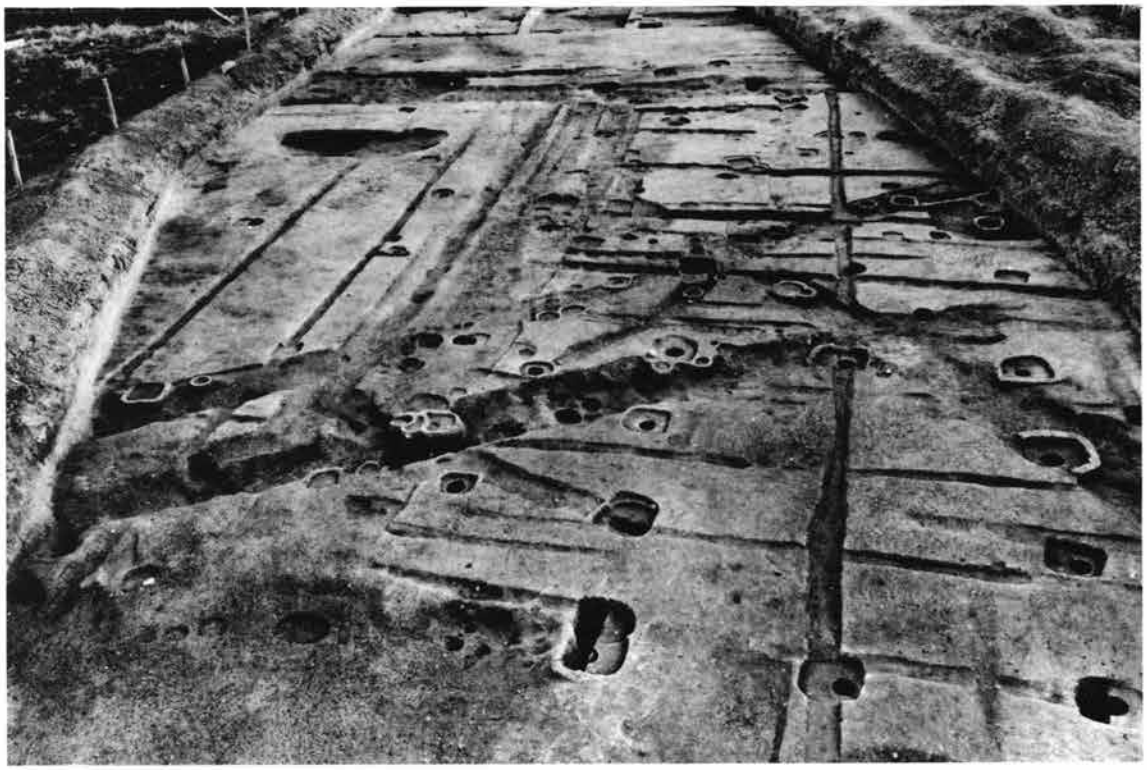
(2) Cトレンチ(83次)全景（南から）

(3) SD8315（南から）

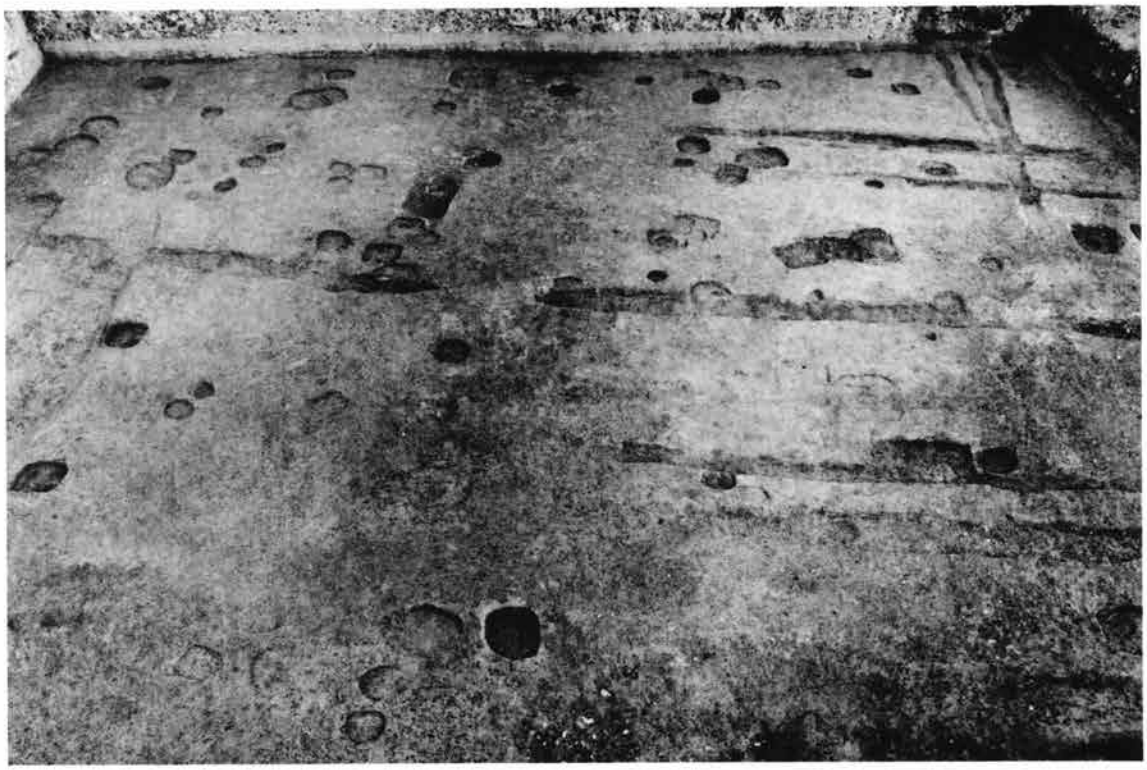
図版第16　長岡京跡右京第83・105次

(1)　Dトレンチ(83次)全景（北から）

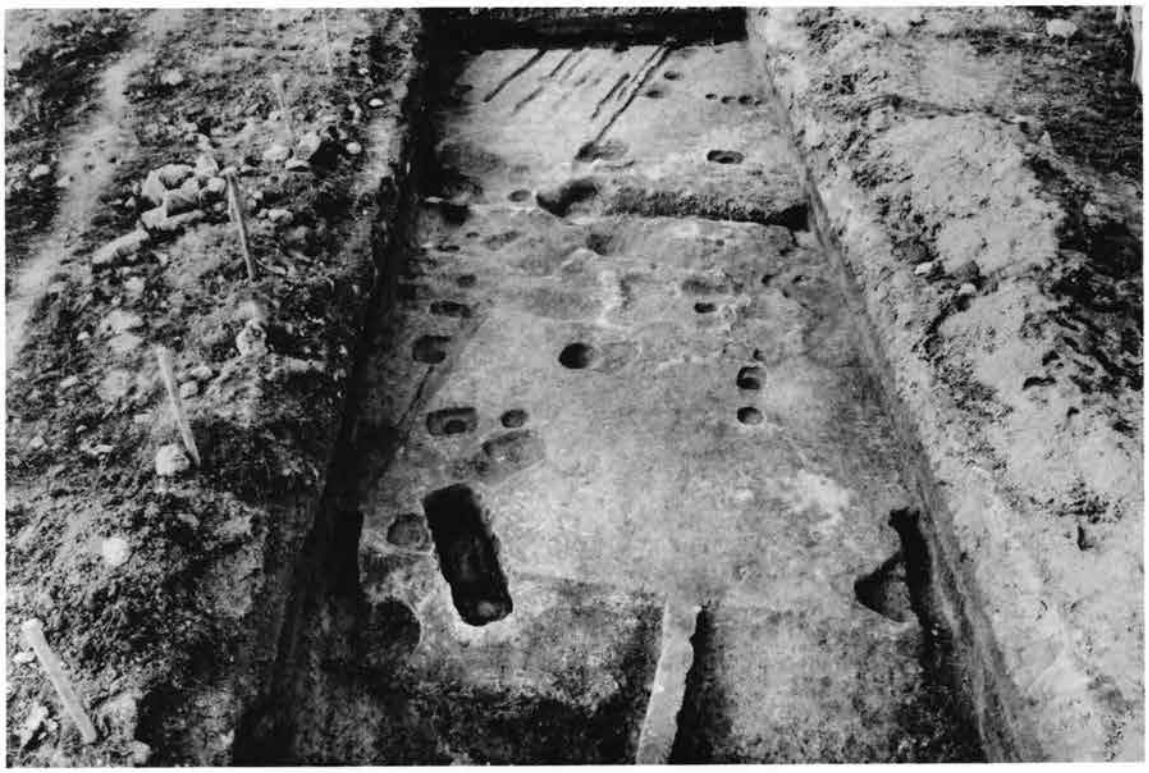
(2)　Eトレンチ(83次)全景（南から）



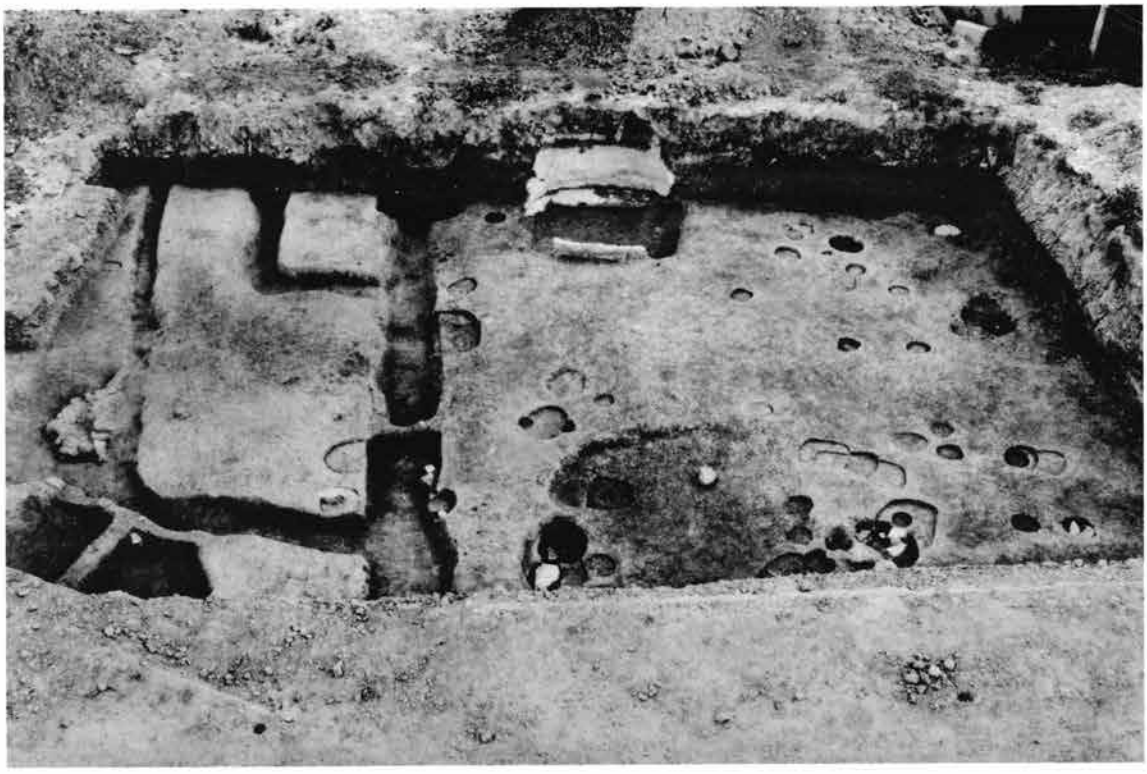
(1)　Fトレンチ(83次)全景（北から）



(2)　Gトレンチ(83次)全景（西から）

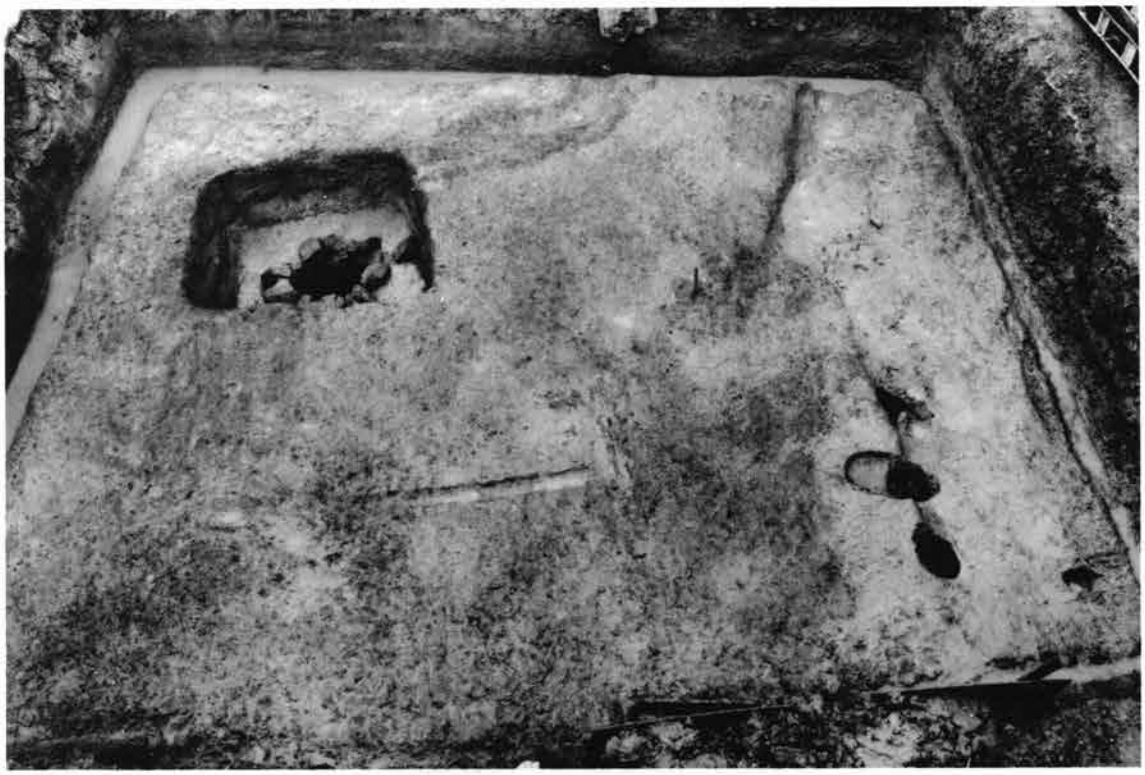


(1)　Hトレンチ(83次)全景（南から）

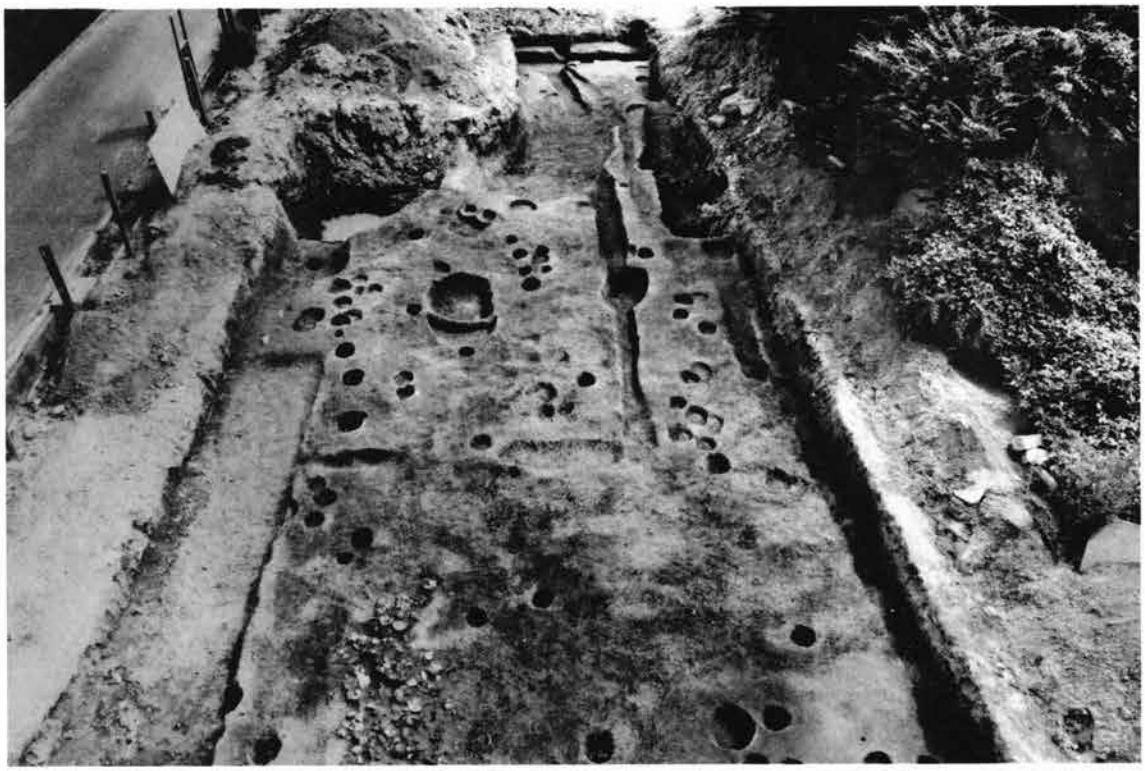


(2)　Aトレンチ(105次)全景（北から）

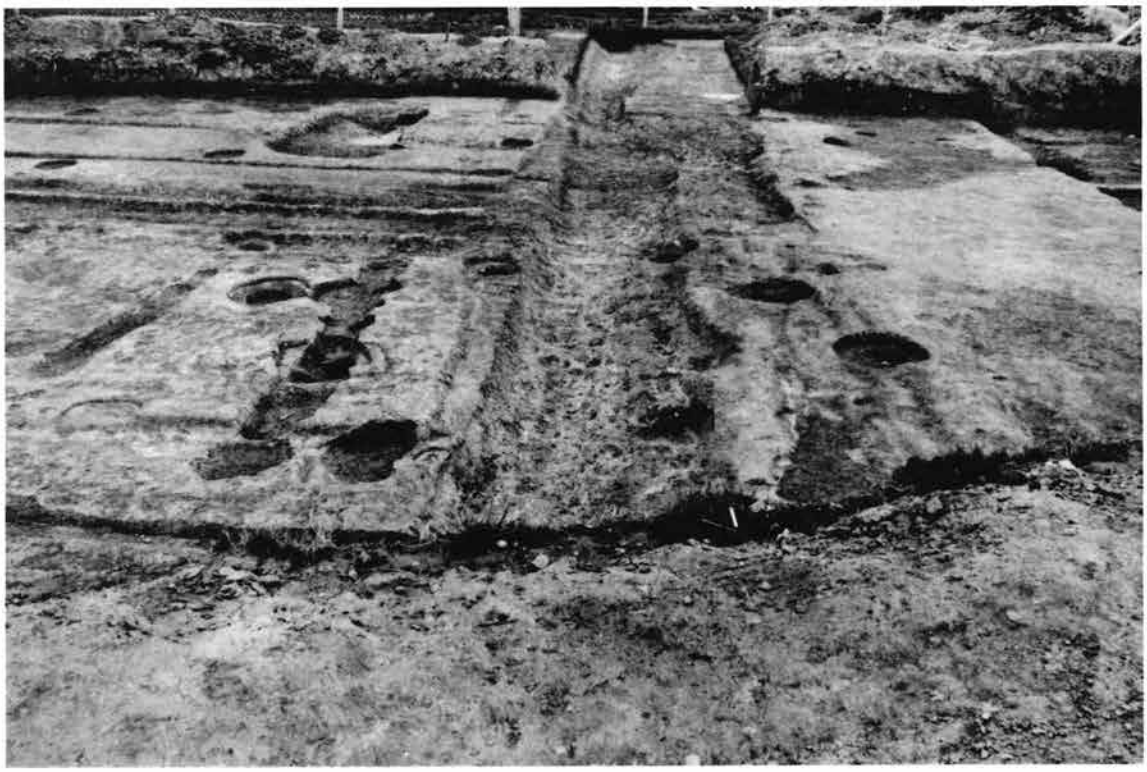
図版第19　長岡京跡右京第83・105次



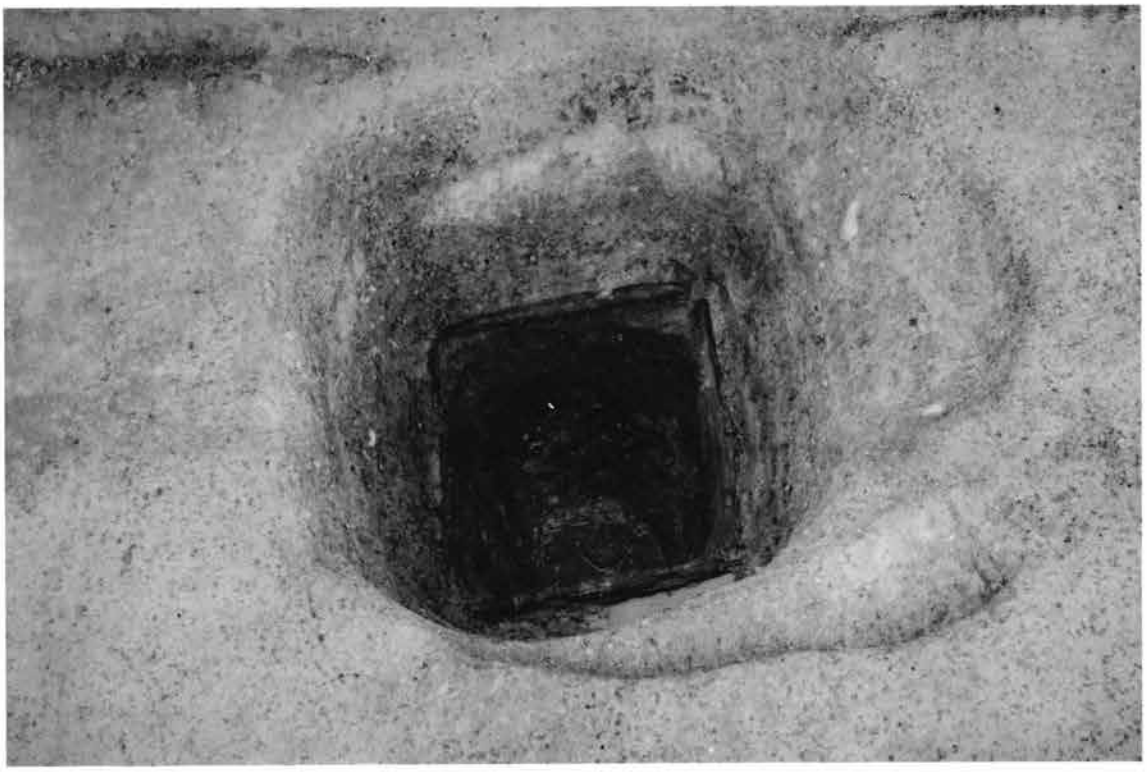
(1)　Bトレンチ(105)全景（北から）



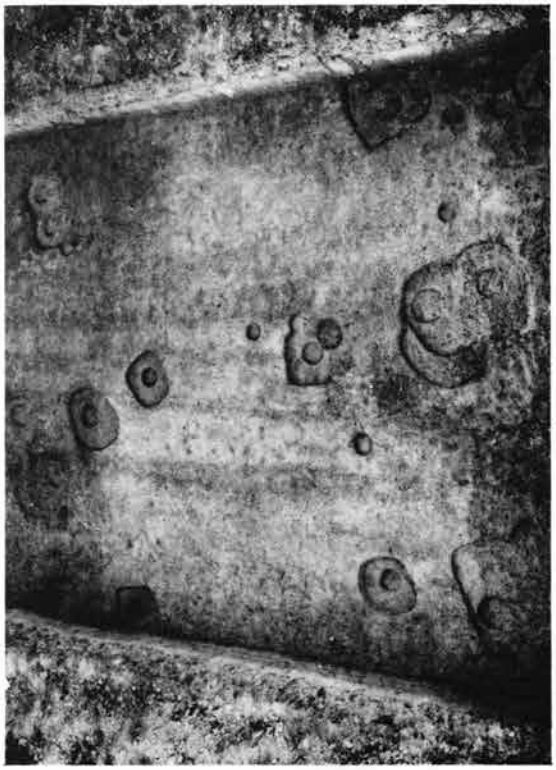
(2)　Dトレンチ(105次)全景（北から）



(1)　ＳＢ8358・ＳＤ8355等（東から）



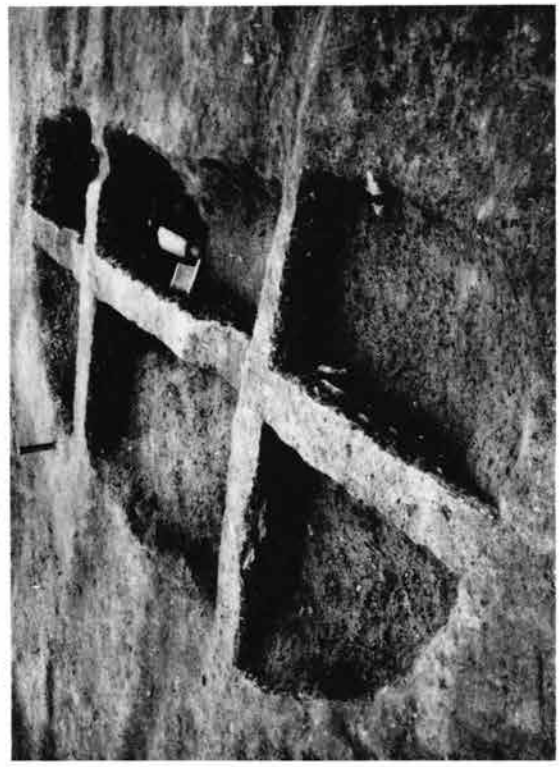
(2)　ＳＥ8332（西から）



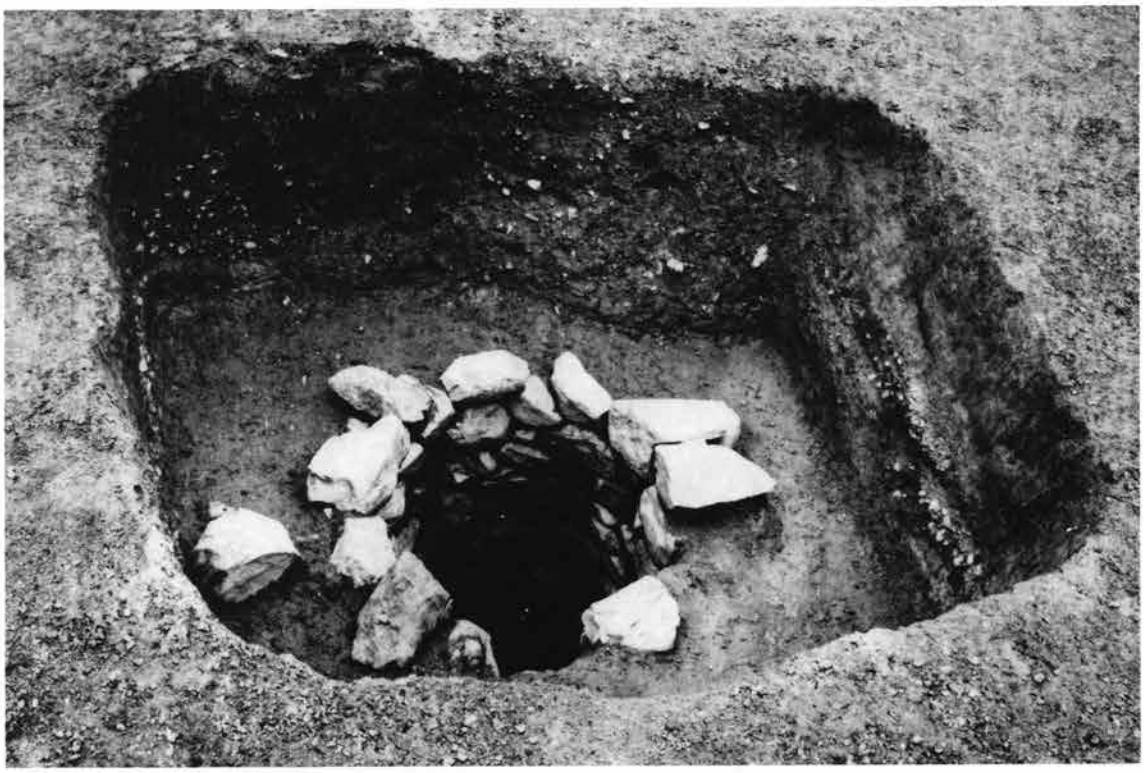
(1)　ＳＥ8332井戸枠細部（南から）

(2)　ＳＢ8325・8326（南から）

(3)　ＳＫ8354（西から）



(4)　ＳＫ8379土器出土状況（北東から）

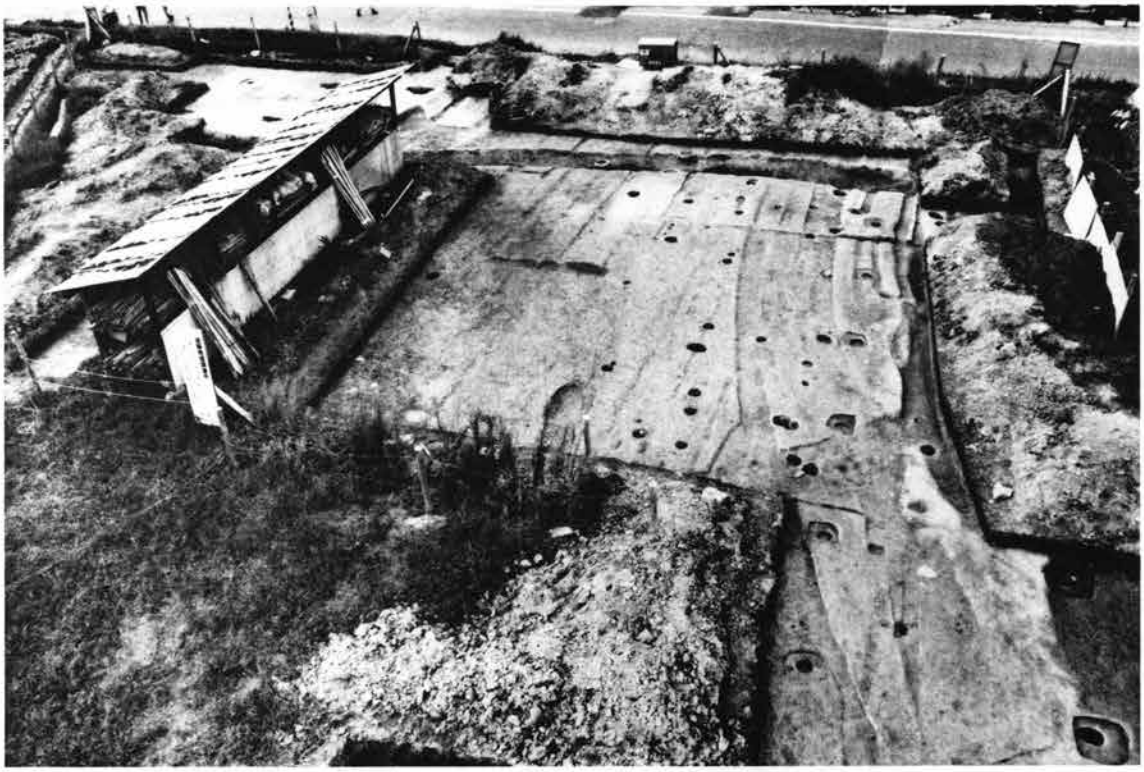


(1)　ＳＥ10521（南から）

(2)　ＳＥ10521石積み（西から）

(3)　ＳＸ10529（北から）

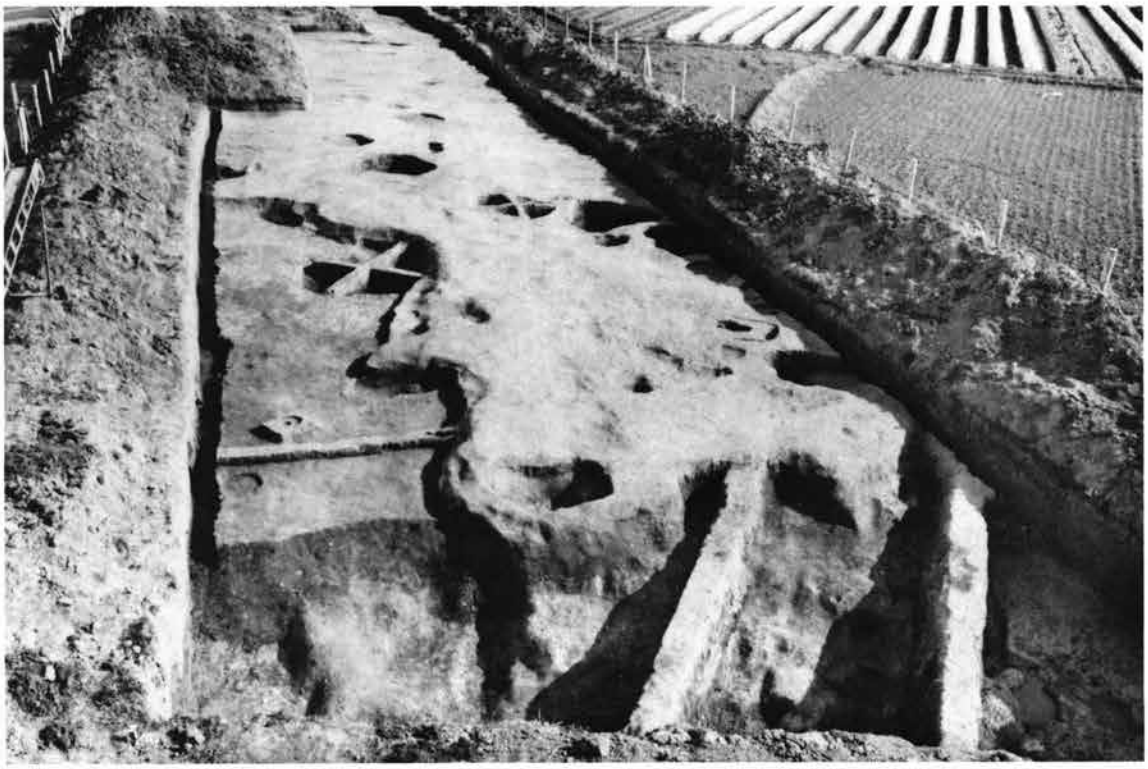
図版第23　長岡京跡右京第83・105次



(1)　Eトレンチ(105次)全景（南から）

(2)　Iトレンチ(83次)全景（北から）

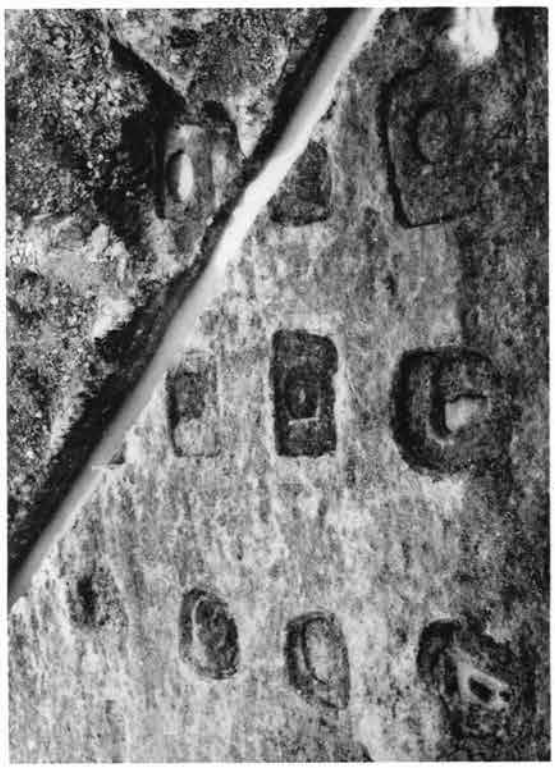
(1)　Jトレンチ(83次)全景（北から）



(2)　Kトレンチ(83次)全景（北から）

(2)　ＳＢ10547（南から）

(4)　ＳＤ8395遺物出土状況



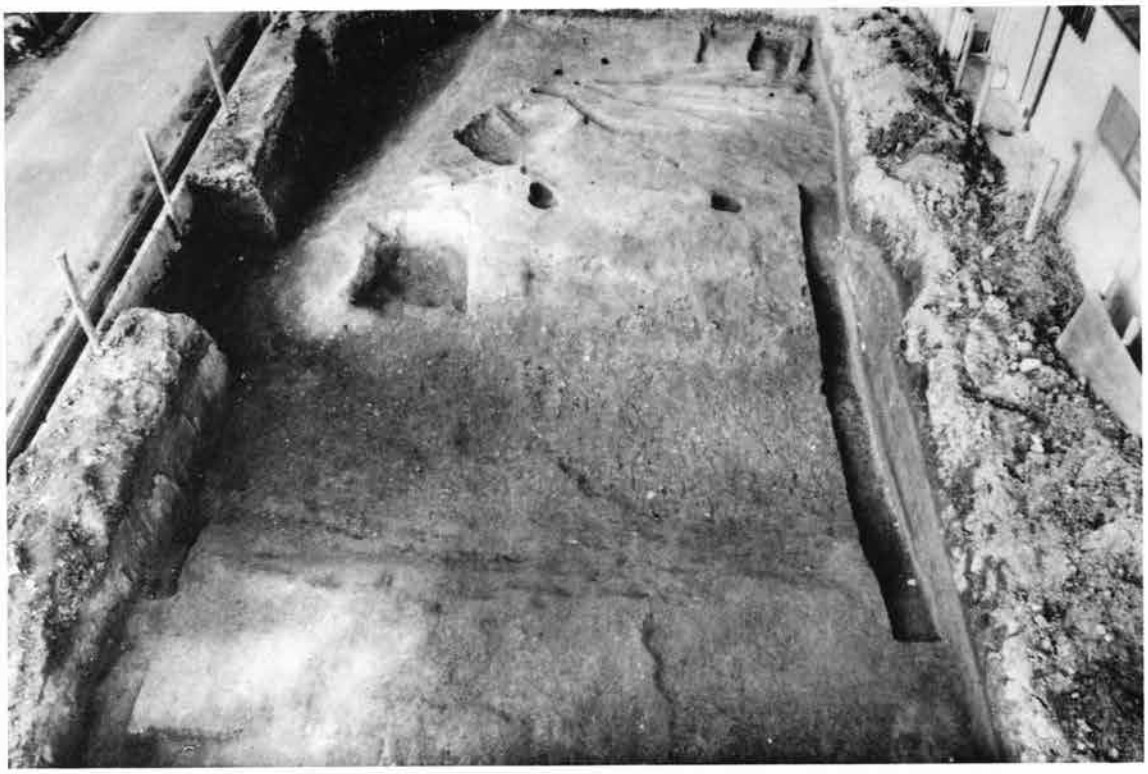
(1)　ＳＤ10550（東から）

(3)　ＳＢ8381（南から）

(1) Fトレンチ(105次)全景（南から）

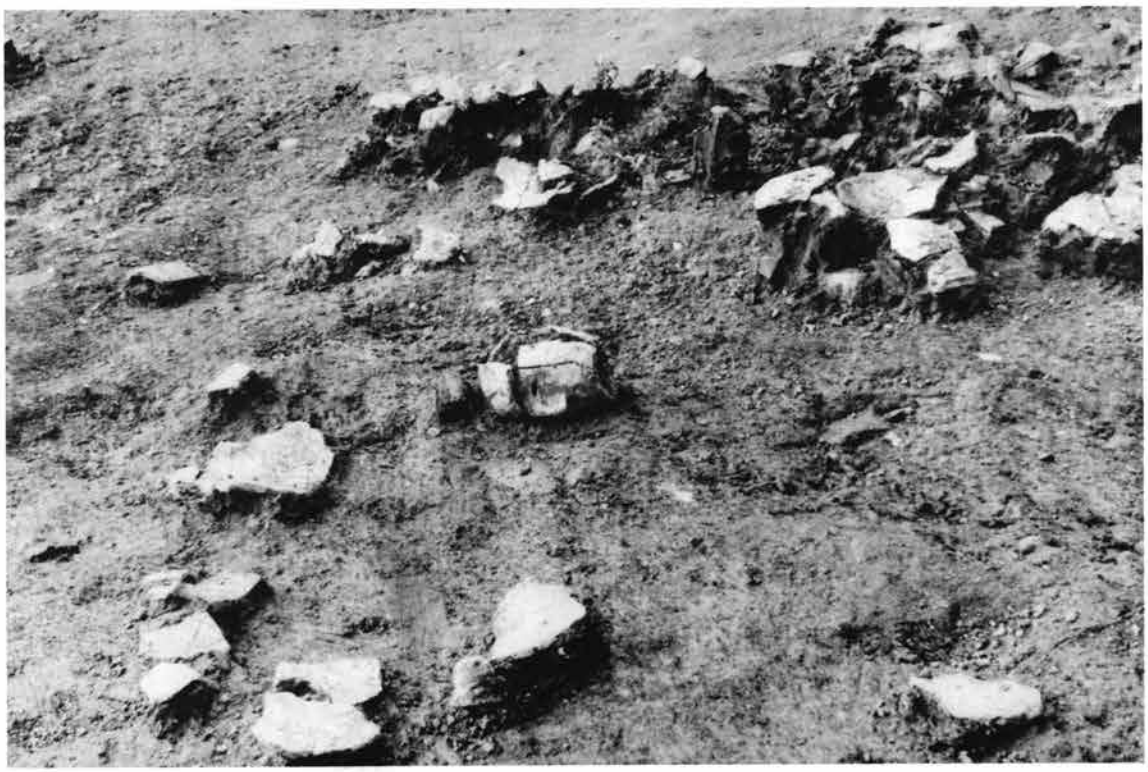
(2) Fトレンチ(105次)全景（北から）

(1)　ＳＤ10565後円部側（西から）



(2)　ＳＤ10565前方部側（南から）

(1)　ＳＤ10565前方部周濠埴輪出土状況（西から）



(2)　人物埴輪出土状況（南東から）

(1)　Hトレンチ(105次)全景（西から）

(2)　Iトレンチ(105次)全景（南から）

1

7

2

8

3

9

4

10

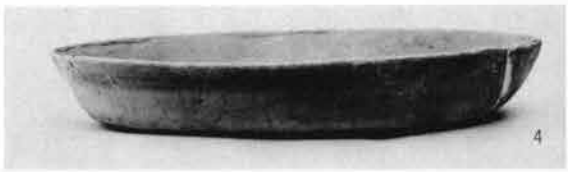
5

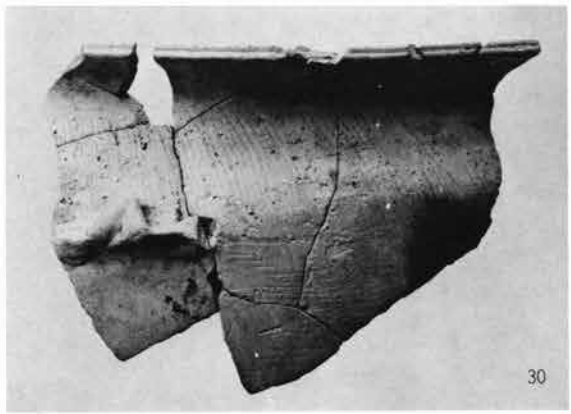
11

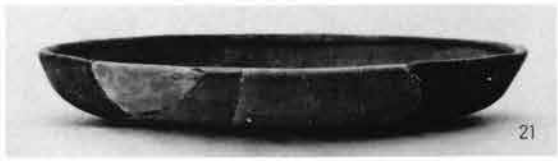
6

西ノ口・蓮ケ糸地区出土遺物(1)
1・7．ＳＫ8340，2．ＳＫ8344，3～5・9・10．ＳＫ8318，
6．ＳＫ8354，11．ＳＥ8332

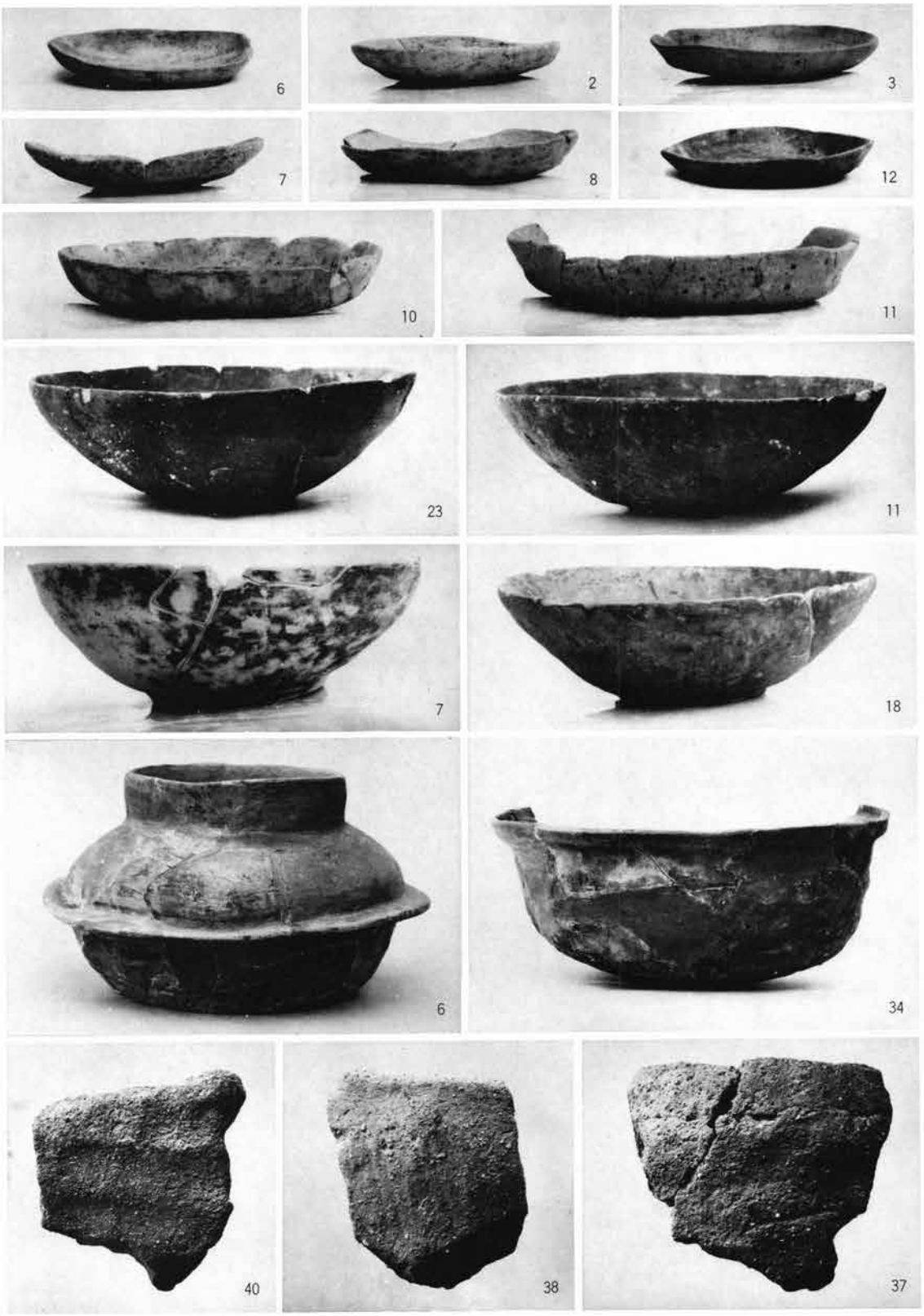
西ノ口・蓮ケ糸地区出土遺物(2)
1・4・10．ＳＥ8332，8．ＳＫ8318，3．ＳＫ8338，5．ＳＤ8315，
6．ＳＫ8340，9．ＳＤ8363





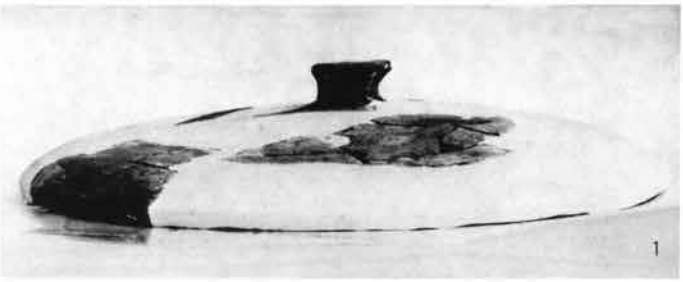


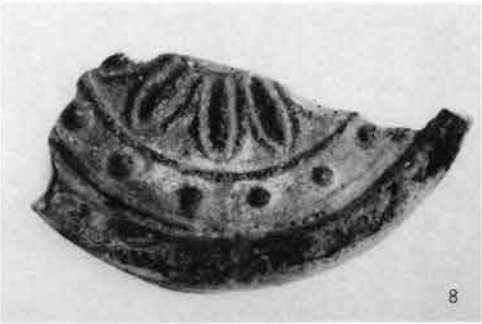
ＳＤ10550出土遺物
（第50・51図番号に照応）



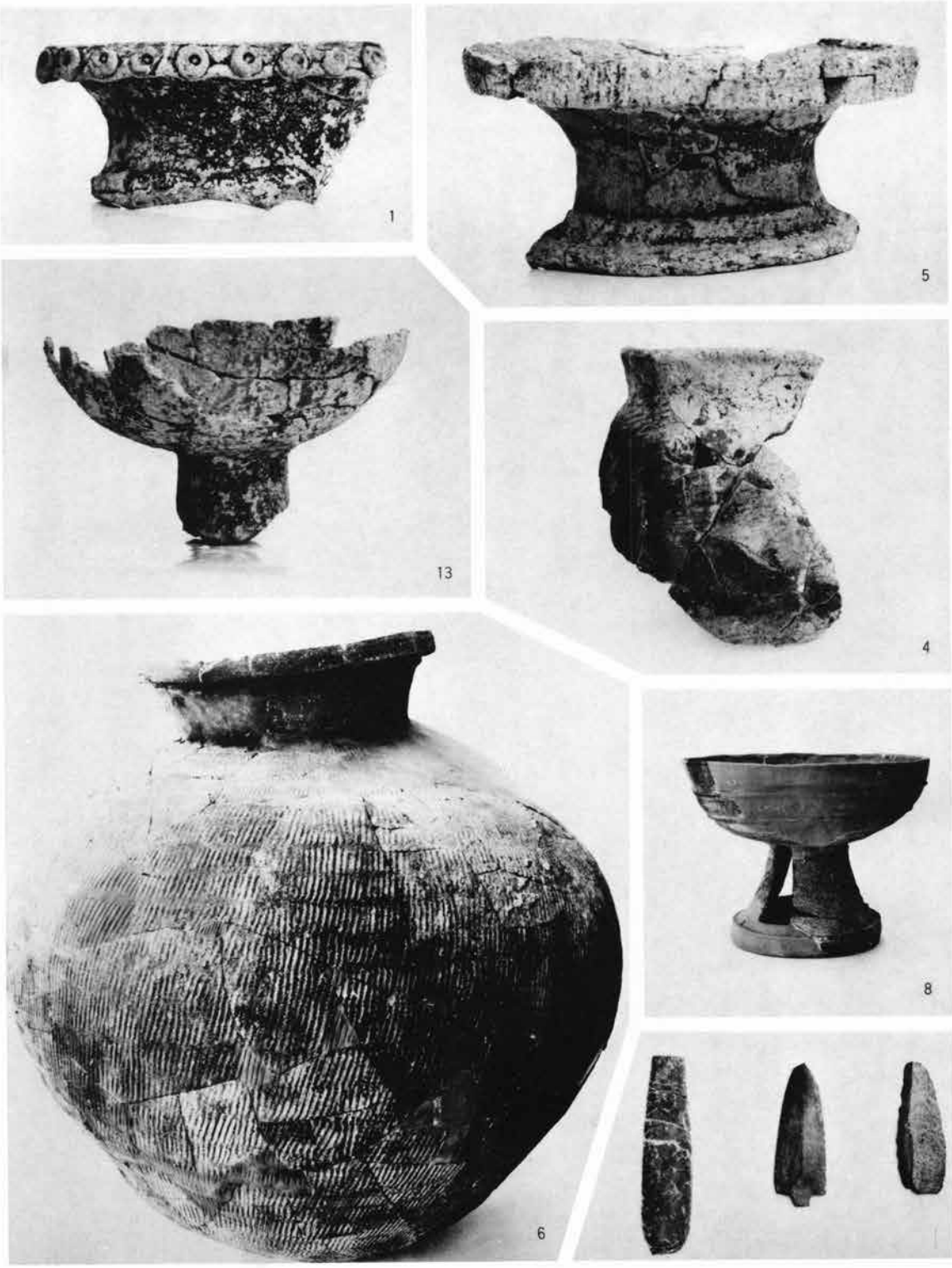
ＳＸ10529等出土遺物
7．ＳＢ10546，6．ＳＫ10509，11．ＳＥ8332，37・38・40．ＳＤ10550，他はＳＸ10529
（実測図番号に照応）

ＳＤ8395出土遺物
（実測図番号に照応）

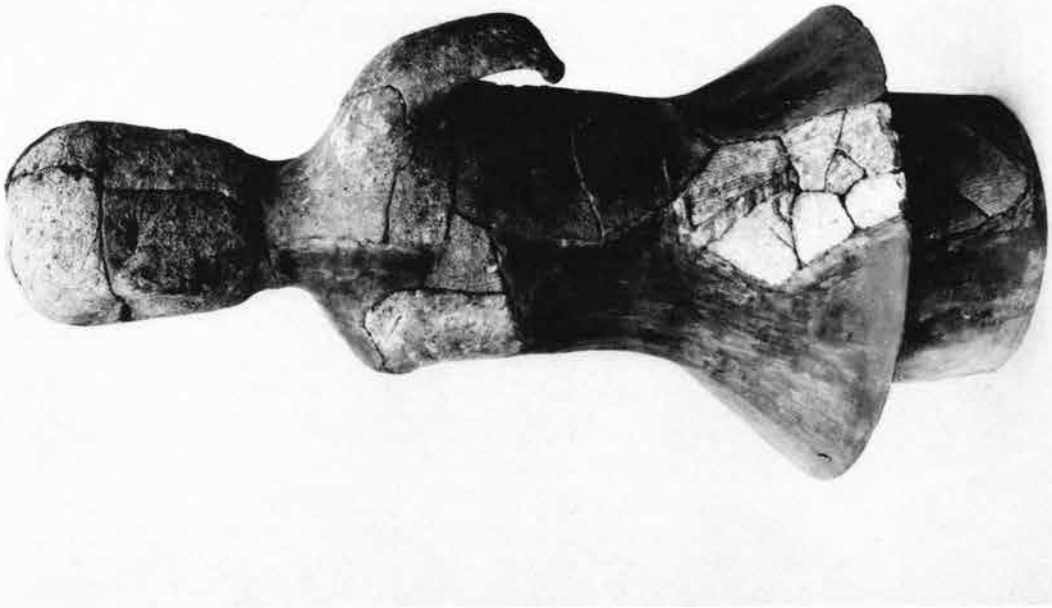




ＳＫ10560等出土遺物
1・2・7．ＳＫ10560，3・5．ＳＫ83107，4．ＳＫ10573，7・8．ＳＢ10548



ＳＤ10577等出土遺物
1・5・4・13．ＳＤ10577，8・9．ＳＤ10570（実測図番号に照応）

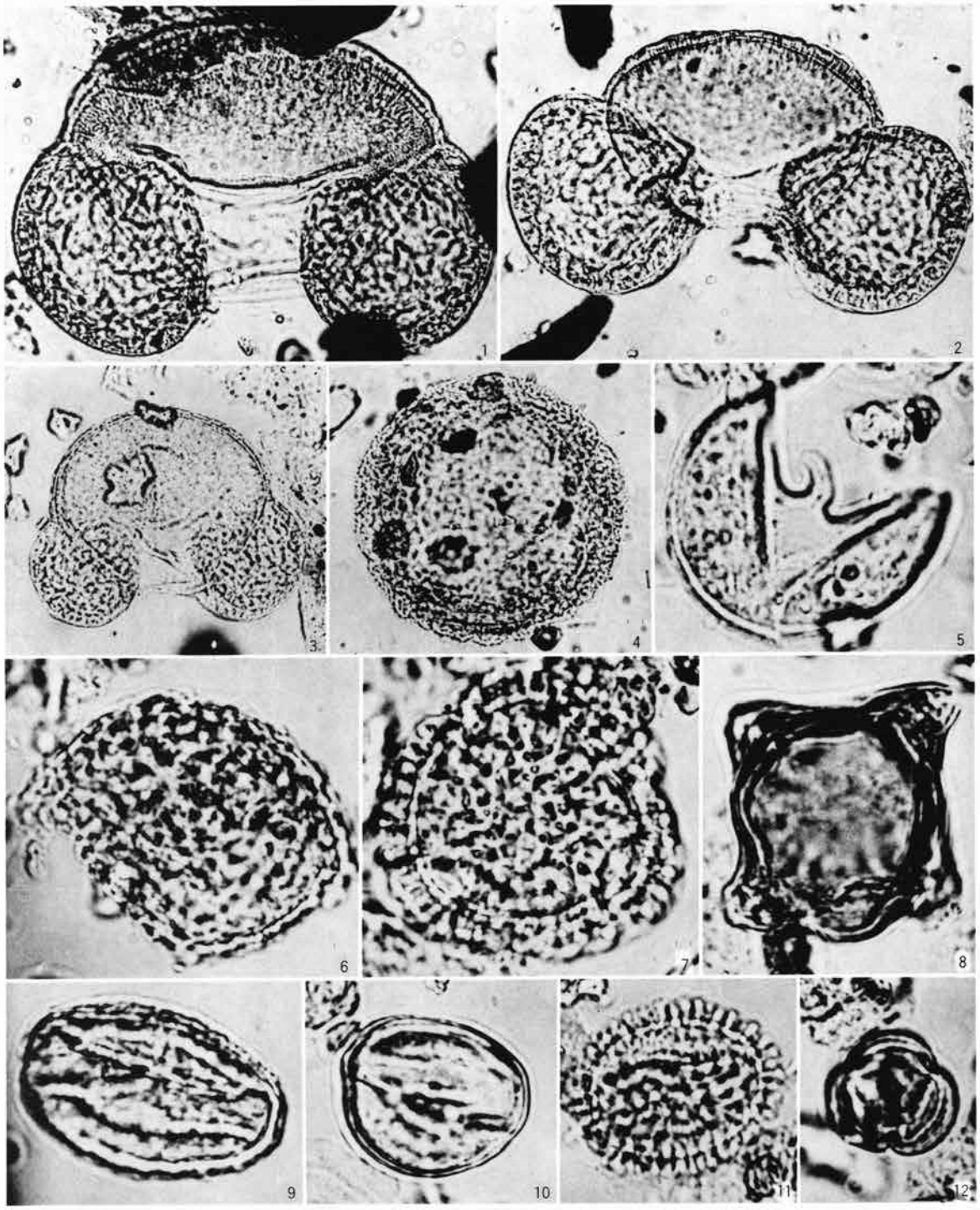


(2) 舞塚古墳出土人物埴輪

5

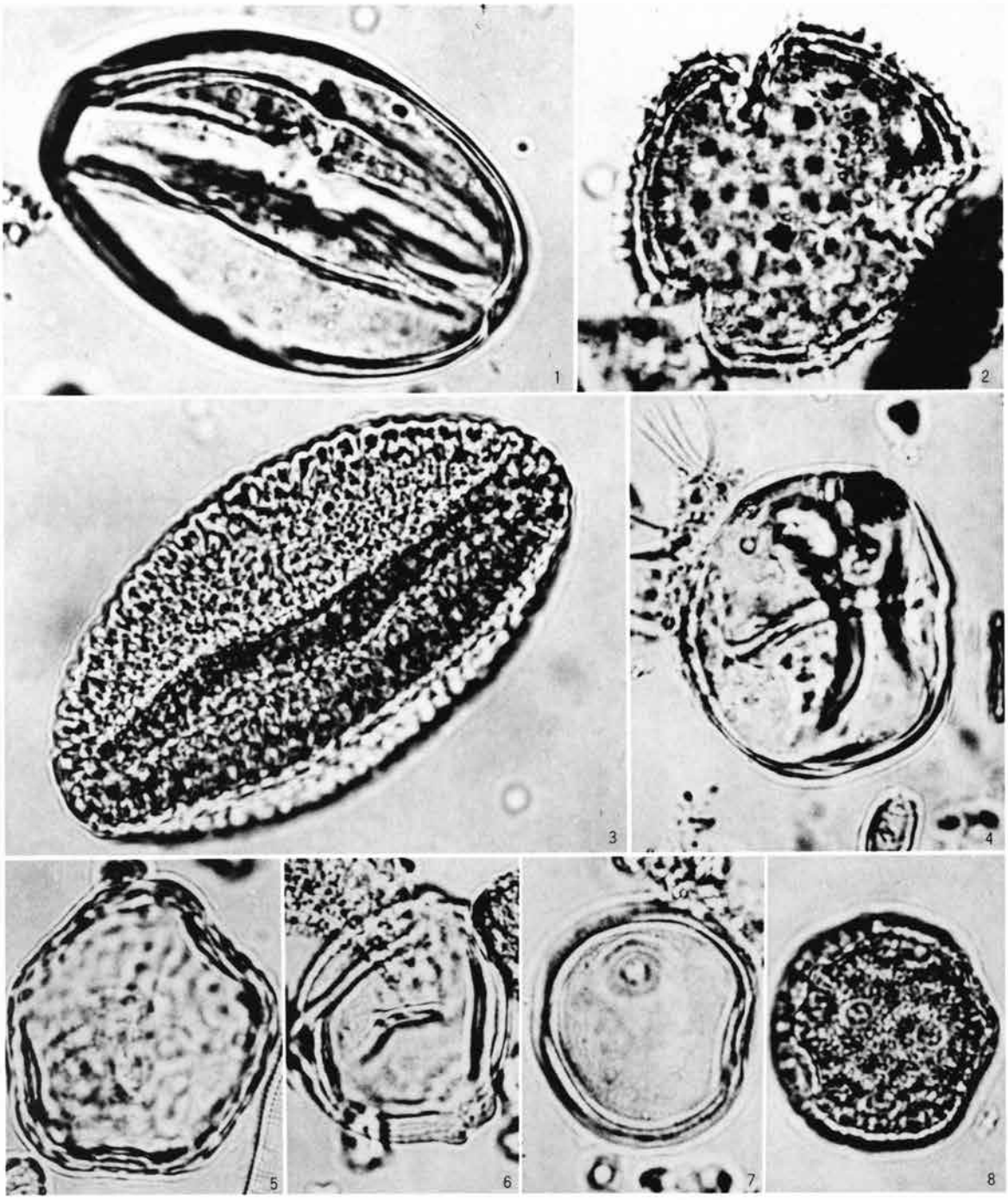
(1) 舞塚古墳出土円筒埴輪
(実測図番号に照応)

舞塚古墳出土円筒埴輪
（実測図番号に照応）



花粉の顕微鏡写真(1)　(×1,000)　(1～4まで　×500)

1. Abies(モミ属), 2. Picea(トウヒ属), 3. Pinus Diploxylon(二葉マツ亜属),
4. Tsuga Sieboldii(ツガ), 5. Cryptomeria(スギ属), 6. Sciadopitys(コウヤマキ属)
7. Ligastrum(イボタノキ属), 8. Elaeagnus(グミ属), 9. Lepidoblanus(コナラ亜属),
10. Cyclobalanopsis(アカガシ亜属), 11. Ilex(モチノキ属), 12. Artemisia(ヨモギ属)



花粉の顕微鏡写真(2)　(×1,000)

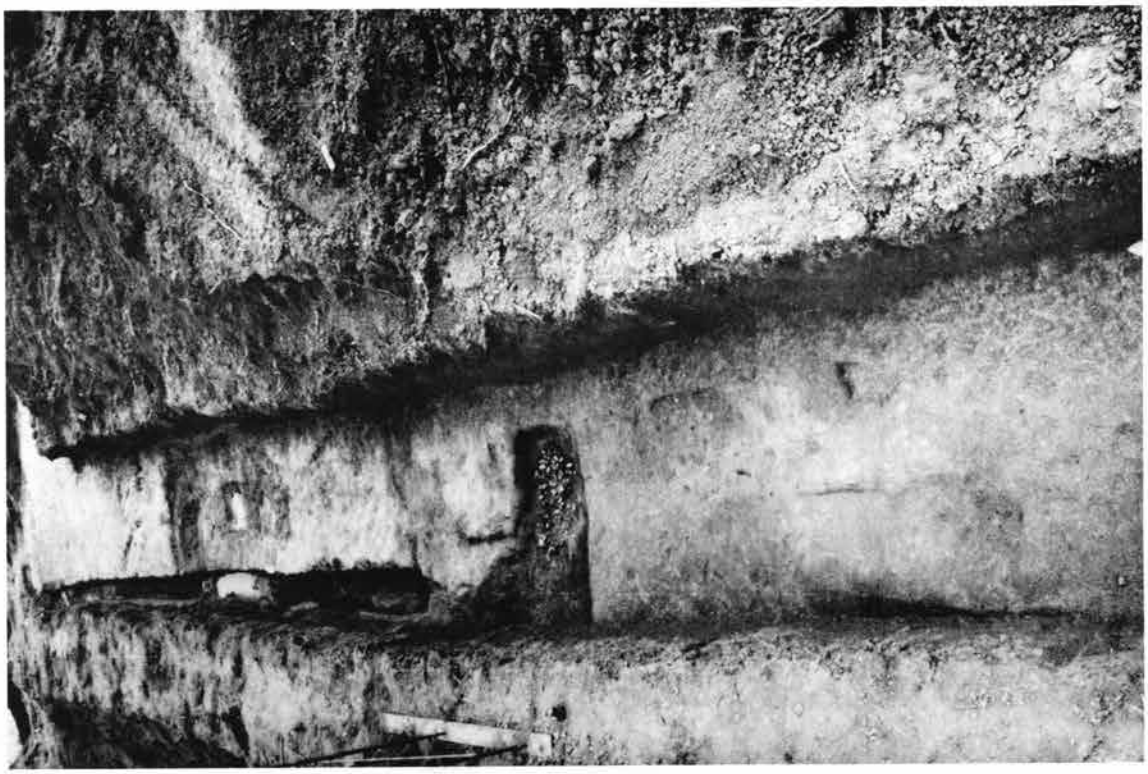
1. Diospyros(カキ属), 2. Patrinia(オミナエシ属), 3. Fagopyrum(ソバ),
4. Gramineae(イネ科), 5. Zelkova(ケヤキ属), 6. Corylus(ハシバミ属),
7. Gramineae(イネ科), 8. Caryophyllaceae(ナデシコ科)

図版第41　長岡京跡右京第127次

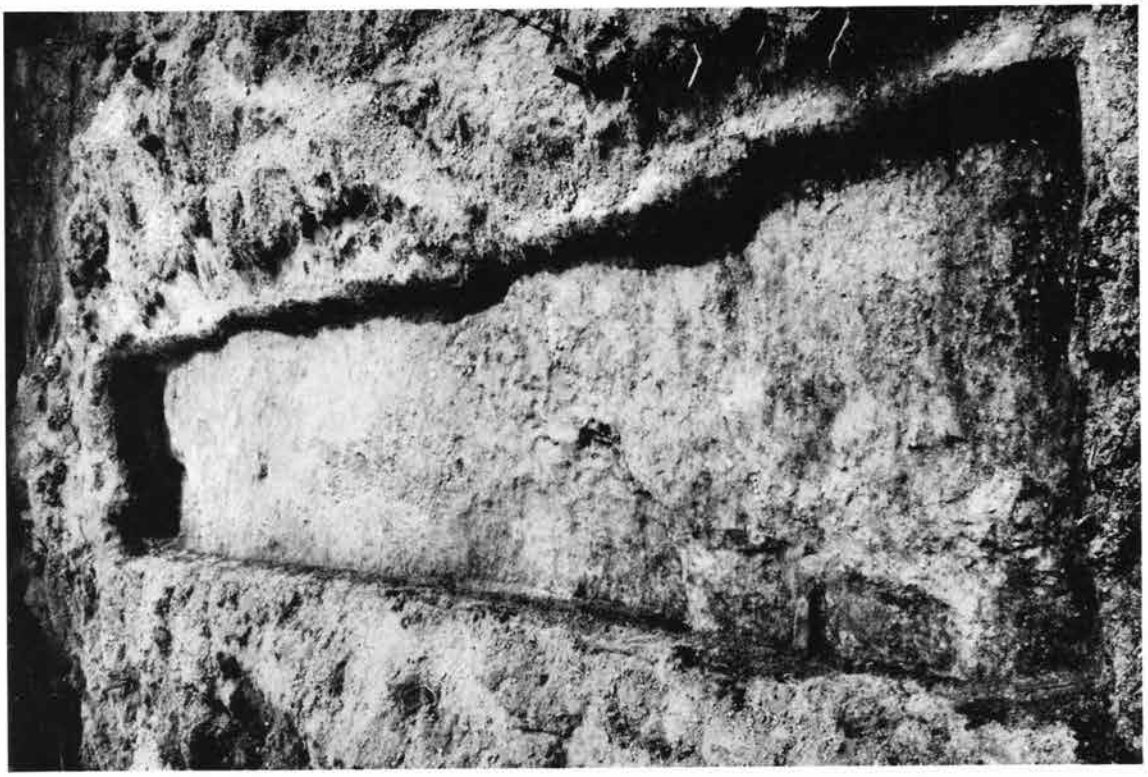
(1) 調査地遠景（西から）

(2) 調査地近景（西から）

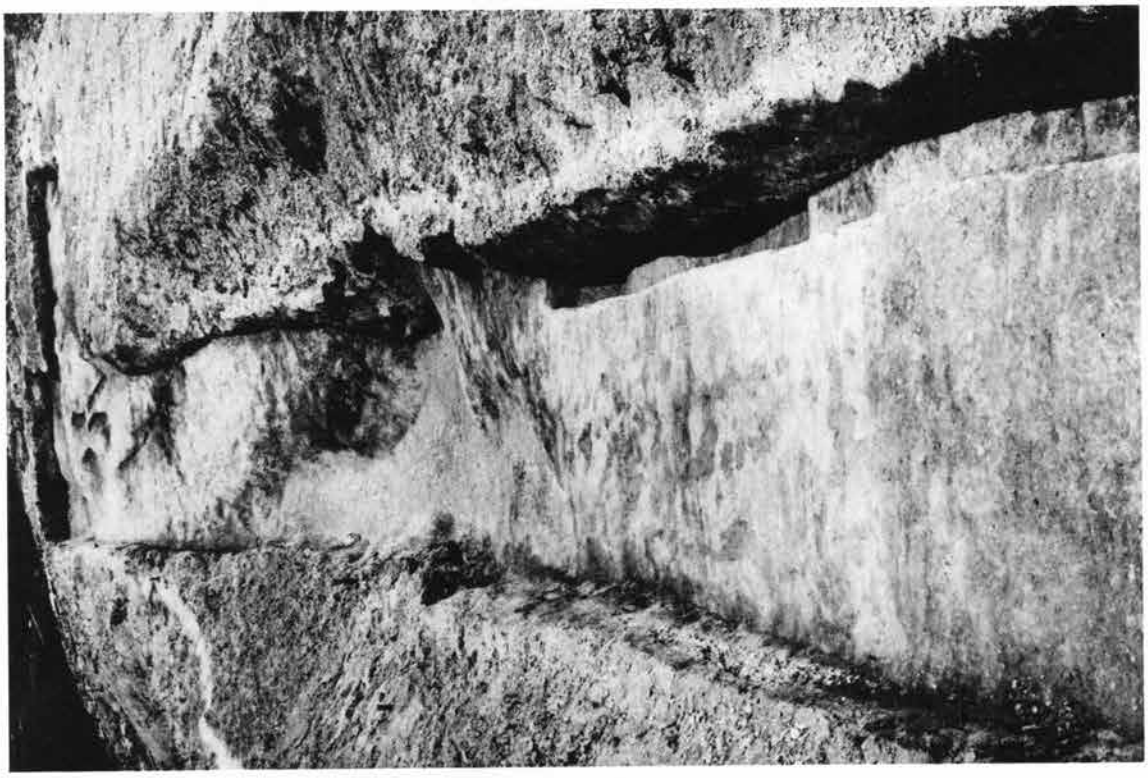
(2) A－5トレンチ（西から）



(1) A－2トレンチ（北から）



(2) A—18トレンチ（北から）

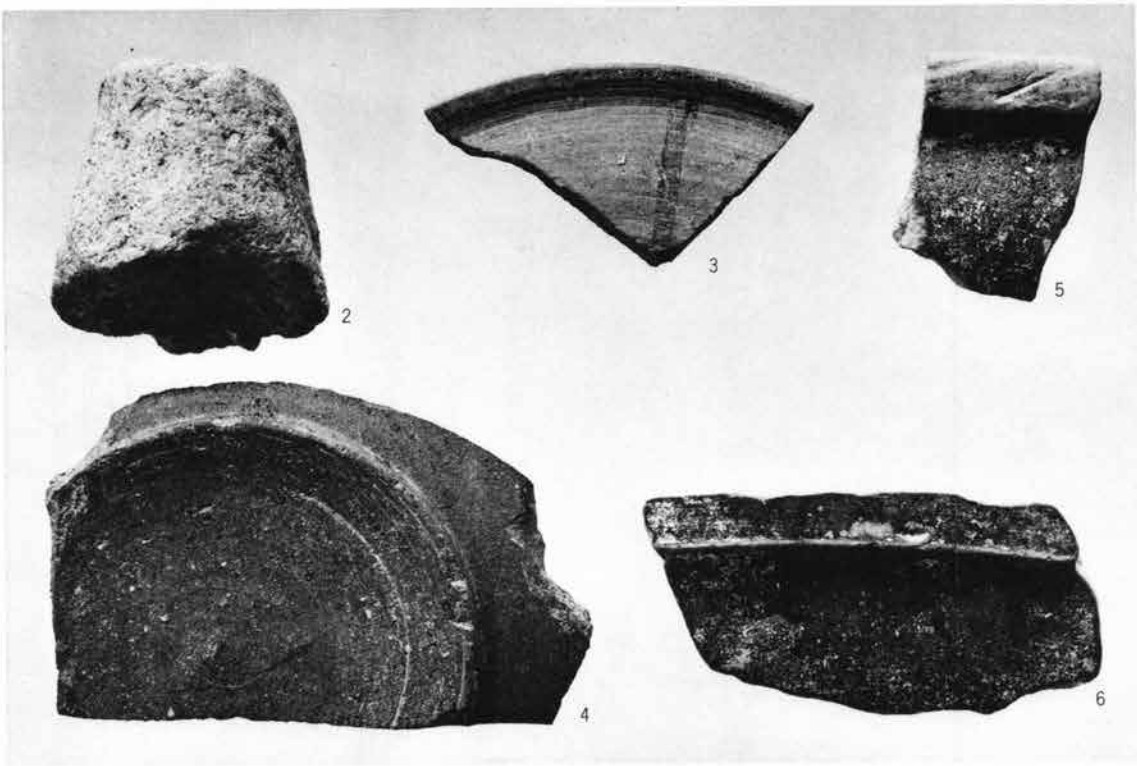


(1) A—7トレンチ（西から）

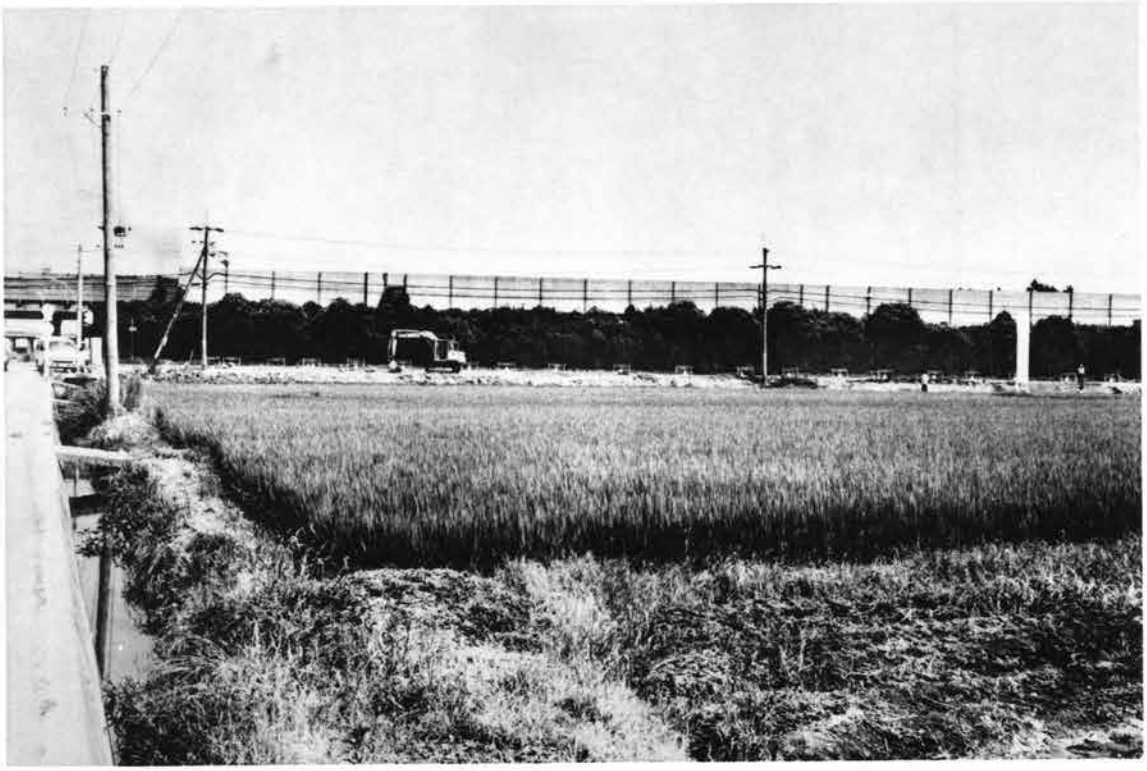
(2) 集石遺構(A—21トレンチ)(南から)

(1) A—21トレンチ(北から)

(1) 出土遺物



(2) 出土遺物

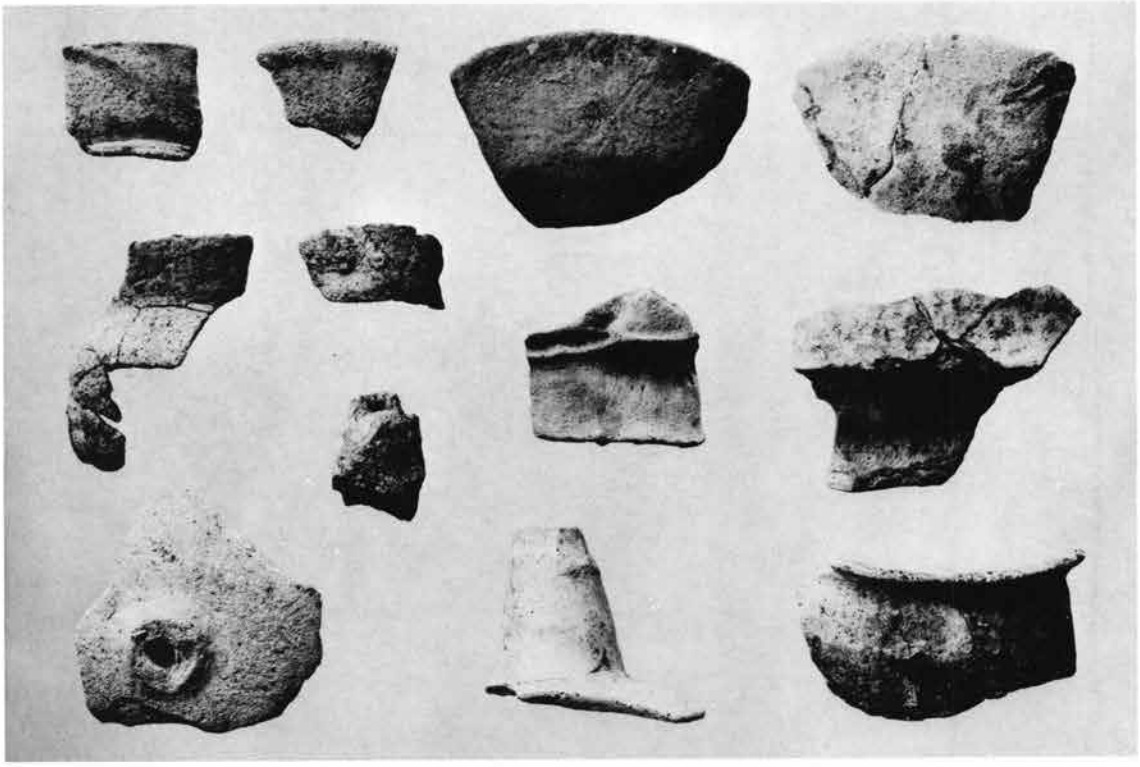


(1) 調査地遠景（西から）

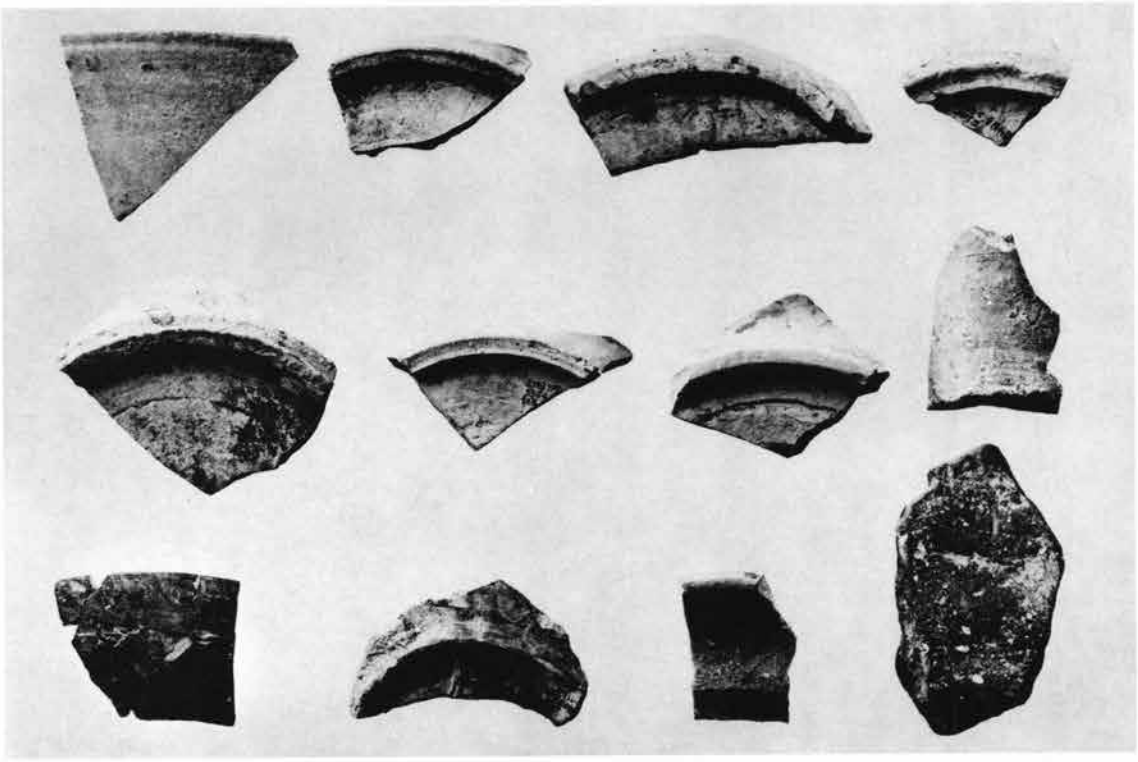
(2) 第4・5トレンチ全景

(1) 第1トレンチ全景

(2) 第1トレンチ　溝検出状況



(1) 出土遺物（第１トレンチ溝内）



(2) 出土遺物（各トレンチ）

京都府遺跡調査概報 第9冊

昭和59年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）